

第3章 検出された遺構と遺物

出土遺物 (E<sub>3</sub>-92A号住居跡)

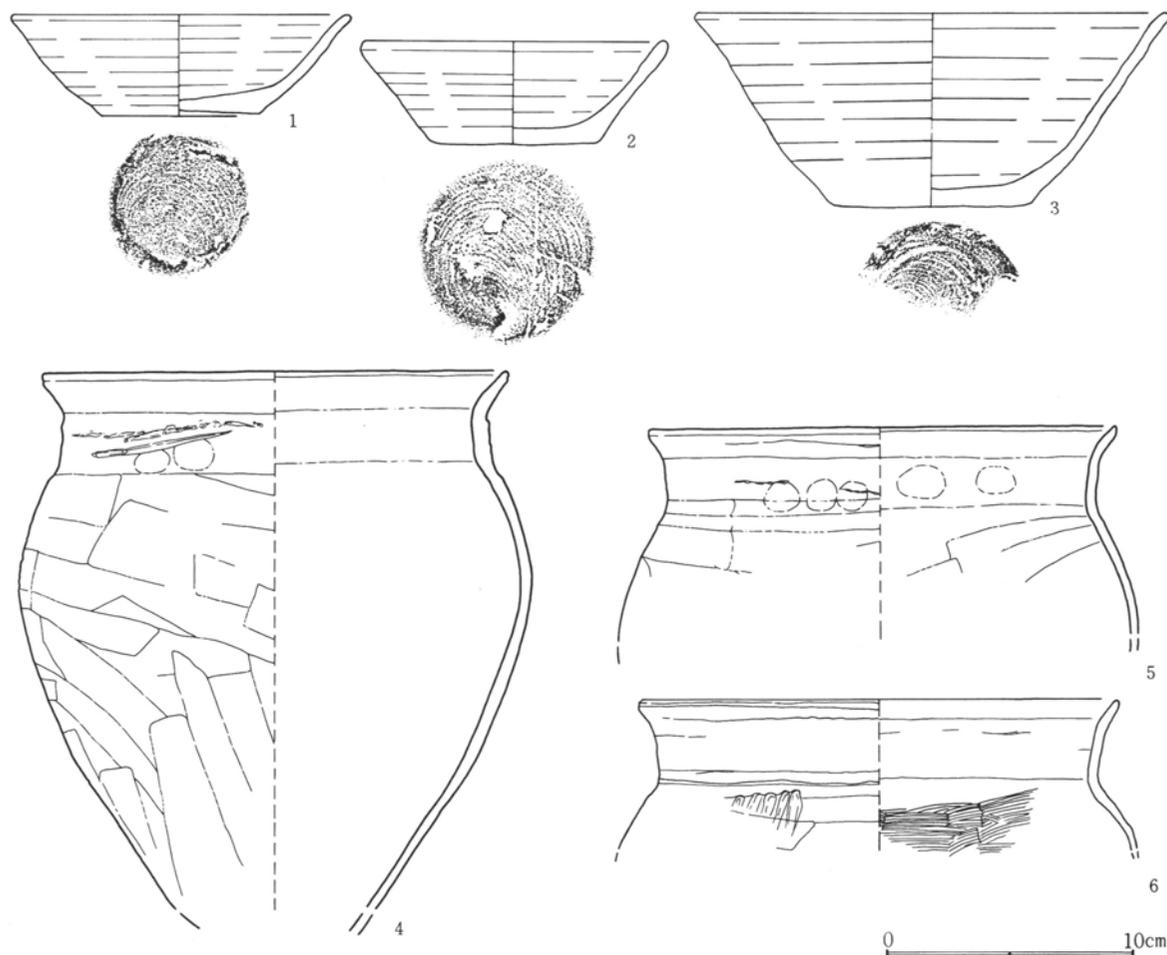
1・2は須恵器坏。1は2/3。底径小さく、丸みのある体部は大きく開く。2は1/3。器肉厚く直線的な体部は外傾度が少ない。右回転糸切り無調整。1の胎土は細土で、2は粗砂粒多い。両者とも焼成は甘く、鈍黄橙色を呈す。口径13.5・12.2cm。

3は1/3。小型鉢になろうか。深く直線的な体部で、底径は小さい。回転糸きり無調整。轆轤は右回転。胎土は砂粒多い。焼成甘く鈍い橙色を呈す。

4～6は土師器甕でコの字口縁である。口縁部横位撫で、肩部は横位篋削り、内面撫で。4は底部欠損で1/3。胴部下半は縦位篋削り、頸部に紐作り痕が残る。胎土は砂粒多く鈍い橙色。5は口縁～肩部で1/3、6は口縁の小片。細土で橙色を呈す。口径18.4～19cm。

E<sub>3</sub>-92a 号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	13.5	6.0	4.0	右回転糸切り	4	土師器甕	18.4			コの字口縁
2	須恵器坏	12.2	6.8	4.0	右回転糸切り	5	土師器甕	18.6			コの字口縁
3	須恵器鉢	18.6	8.0	7.5	右回転糸切り	6	土師器甕	19.0			コの字口縁



第143図 E<sub>3</sub>-92a 号住居跡出土遺物

E<sub>3</sub>-97号住居跡 (第144・145図 P L.71・81)

座標値39092~39096・-54771~54776の範囲にある。一帯は畑耕作による著しい条数の細溝が走り、深さは床面下に達する。このため、134号住居跡と重複しこれより新しい時期に属するが、重複部分の南~東壁線の検出は不明瞭である。

平面形態は東西に長軸をもつ略隅丸方形を呈する。規模は、長軸4.3m・短軸3.5m、壁高は約25cmで傾斜して立ち上がる。主軸方位はN-98°-Eを示す。

竈は長軸方向の東壁中央にあり、先端は壁線を約20cmほど突出させる。袖部にかかわるような部材はなく、

火床部は住居床面から僅かに窪む程度である。明瞭な焼土面は残されず、灰色粘土の小塊・焼土粒・灰などの混在する層で埋まる。掘形は長さ90cm・最大幅60cmの楕円形を呈する。

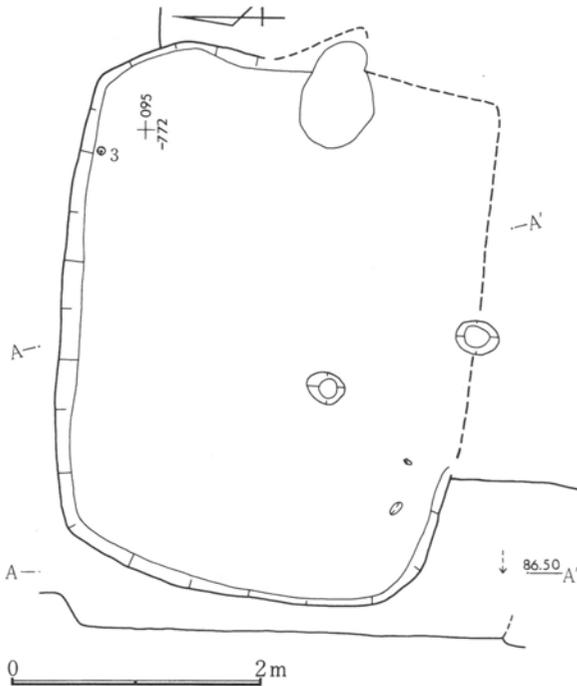
床面は平坦をなすが硬化の度合は弱く、柱穴・貯蔵穴・壁下溝等の施設は検出されていない。

遺物は埋土からの出土で、土器類は少量の土師器甕などで、他に石製紡錘輪がある。9世紀中~後半になろう。

出土遺物

1・2は土師器甕口縁部小片である。コの字口縁。口縁部に紐作り痕・指頭痕著しい。口縁部横位撫で、肩部横・胴部斜位篋削り、内面横位篋撫で。細土で鈍橙色を呈す。

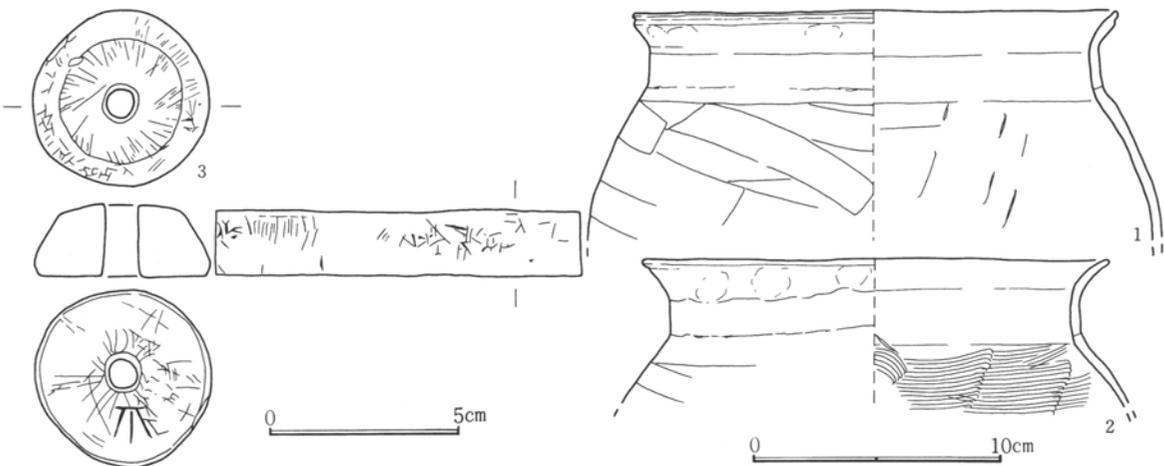
3は蛇紋岩製紡錘輪で完形である。北壁際床面出土。上・下・側面に不明刻文がある。



第144図 E<sub>3</sub>-97号住居跡

E<sub>3</sub>-97号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器甕	19.0			コの字口縁	3	石製紡錘輪	3.2	4.5	2.0	66g 滑石製 刻文字か
2	土師器甕	18.6			コの字口縁						



第145図 E<sub>3</sub>-97号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

E<sub>3</sub>-103号住居跡 (第146・147図 P L. 71・81)

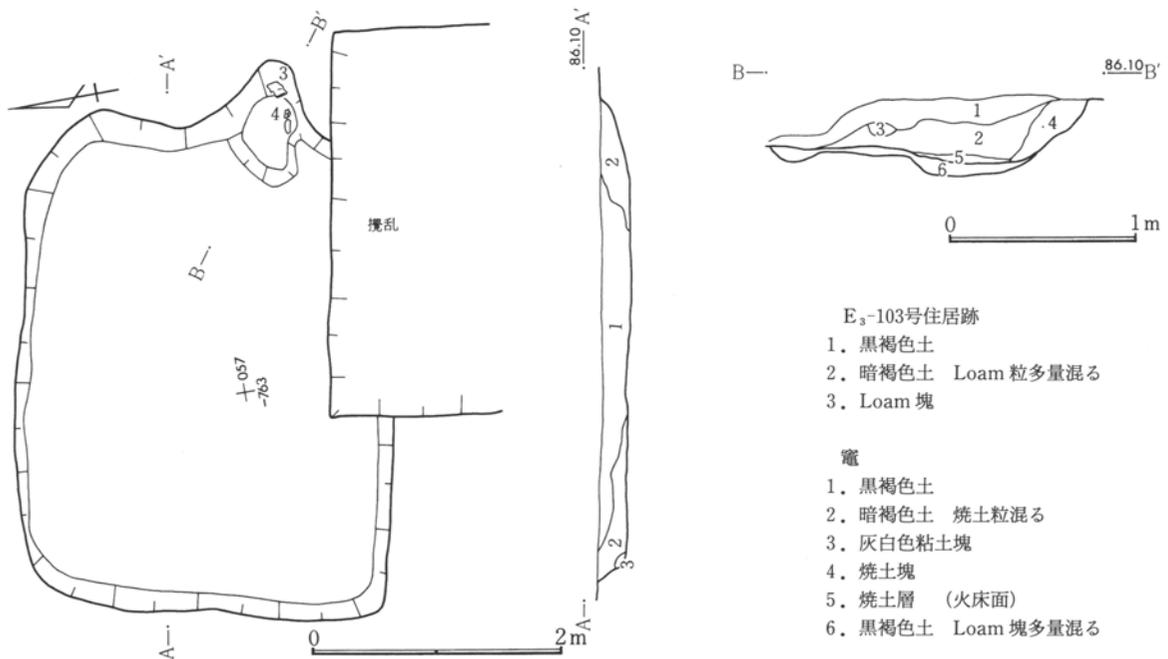
座標値39055~39059・-54760~54765の範囲にある。南東の一部は攪乱により壁線が消失する。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈するが、北東・北西の壁線は隅丸となる。規模は東西3.85m・南北3.0m、壁高は20cm前後である。主軸方位はN-104°-Eを示す。

竈は東壁にあり僅かに南に偏って付設されるが、袖部の痕跡はない。東壁線から約70cm突出し、楕円状に掘り込まれる。火床には焼土面が形成され、灰・炭化粒などの混じる薄層が残る。

床は平坦面をなすが、東壁沿いは僅かに高まりながら緩やかな壁の立ち上がりが続く。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

遺物は少量で、須恵器蓋・土師器甕、多量のスサを混入した半月状の土製品がある。9世紀中頃にならう。



第146図 E<sub>3</sub>-103号住居跡

出土遺物

1は須恵器椀。体部欠損し底部1/2である。回転糸切り粗略な付け高台。胎土細かく、焼成の甘い灰白色を呈す。

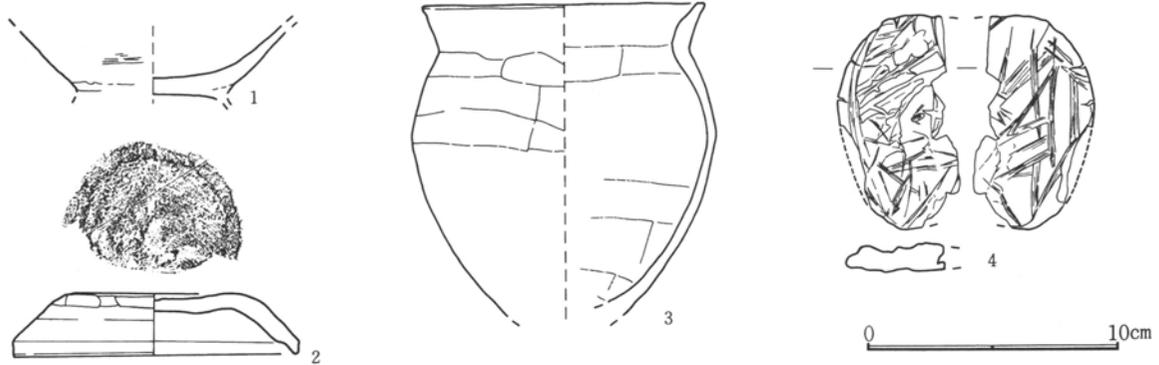
2は須恵器蓋であろう。ほぼ完形。摘み貼付なく器形的には皿に似るが、口唇の形状より蓋とした。器肉は厚く、作りは稚拙である。天井部の径は大きく平らで、体部が短い。口唇は角をなして直屈し、端部は細まる。内側に受け状の緩い稜をなす。天井部回転糸切り、周辺手持ち篋削り。轆轤回転右。胎土は砂粒多く焼成甘い。鈍い黄橙色を呈す。二次被熱。口径11.0cm。

3は土師器小型甕1/3。台付きにならうか、欠損する。口縁部・内面横位撫で。肩部横位・胴部縦位篋削り。二次被熱で器面の剥落著しい。細土で赤橙色を呈す。口径11.0cm。

4はスサの混入著しい不明土製品である。厚さ1cm程度の薄い半月状か円盤状の完結品、あるいは壁材などの部分とも考えられる。明黄橙色を呈す。長径8.5cm。

E<sub>3</sub>-103号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器碗				回転糸切り付け高台	3	土師器甕	11.2		13.0	くの字状口縁 台付き
2	須恵器蓋	11.2	6.0	2.4	摘の添付なし	4	土製品	厚1.0			寸沙混入 壁材か



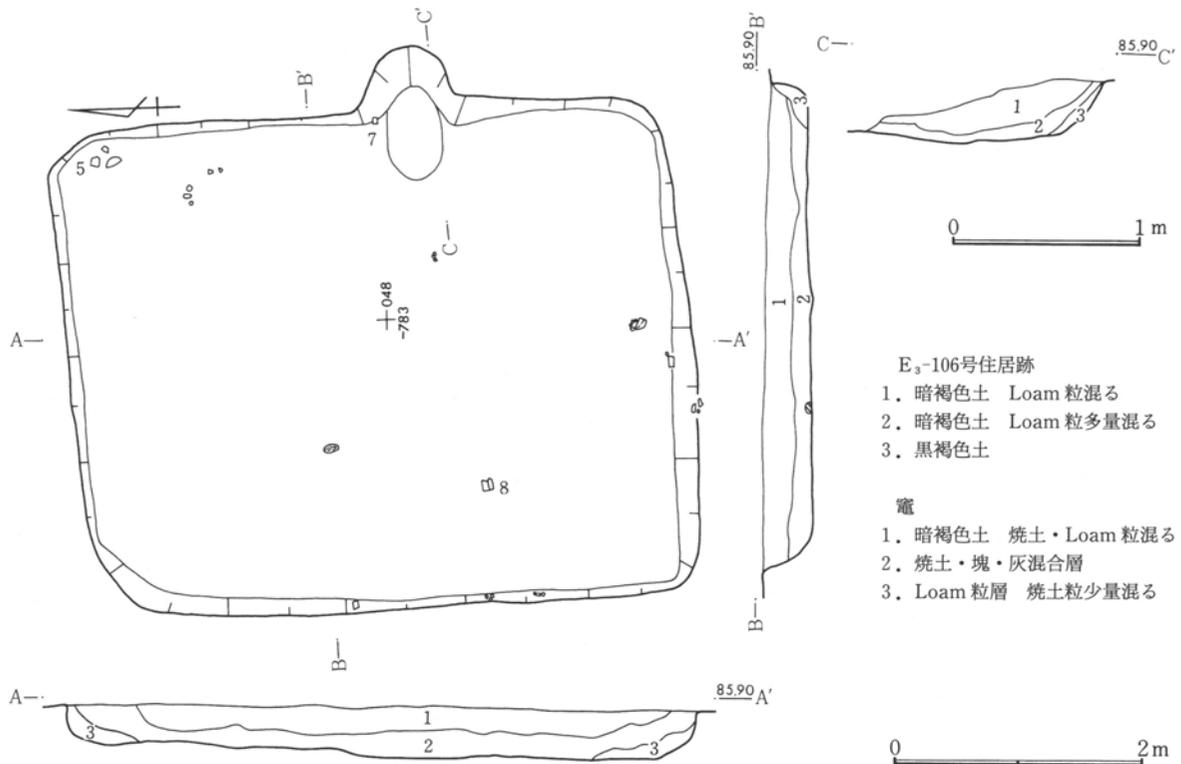
第147図 E<sub>3</sub>-103号住居跡出土遺物

E<sub>3</sub>-106号住居跡 (第148~150図 P L. 71・81・82)

座標値39045~39051・-54780~-54786の範囲にある。105・108号住居跡と重複し、両者より新しい時代の所産である。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は南北4.95m・東西3.9m、壁高30cmを測る。主軸方位はN-89°-Eを示す。床面積17.5㎡。

竈は東壁にあり南に偏って付設され、袖部の痕跡はない。全体形状は1.1×0.7mの楕円形を呈し、火床部



第148図 E<sub>3</sub>-106号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

は10cm程度の深さで皿状に窪む。煙道部は東壁線を約35cm突出する。埋土の下位には、焼土粒・塊・灰の混在する層が堆積する。

床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。住居跡掘形は床面より僅かに低く、Loam 塊混じりの暗褐色土が床土として施される。

遺物は散在的で小片が多い。土師器坏、須恵器皿・蓋などで墨書文字の多さが目立つ。墨書土器は4点あり、須恵器皿には内外面に「耳」字が記される。9世紀前半から中頃になろう。

出土遺物

1～3は土師器坏で器肉は薄い。3は細片で内面に解説不明の墨書文字がある。2は2/3。3は1/3。平底で偏平な器形である。体部で大きくくびれ、口唇部は細まって小さく直立ないしは内屈する。底・腰部は篋削り、口縁部横位撫で。指頭痕が著しい。細土で赤橙色を呈す。口径11.8～12.2cm。

4は内黒の小碗細片。内面は丁寧な横位篋磨きで光沢がある。細土で淡黄色を呈す。

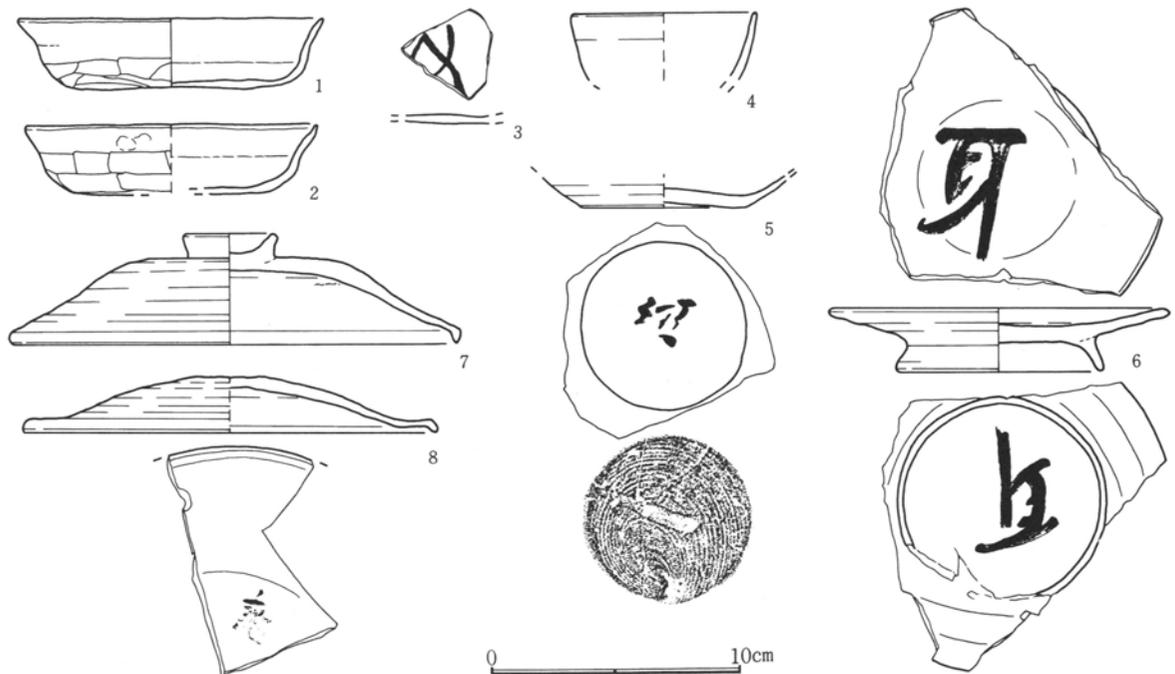
5は須恵器坏底部で。右回転糸切り無調整。胎土砂粒多く焼成やや甘く、白灰色を呈す。底部に解説不明の墨書文字。

6は須恵器皿。体部の大半は欠損。高めの付け高台に身部は平坦に開く。轆轤右回転。細土で焼成やや甘く、白灰色を呈す。口径13.6cm。見込み部・底部の2ヶ所に「耳」墨書文字を記す。

7・8は須恵器蓋。天井回転糸切り後、回転篋削り。7は環状摘み、口唇は丸く、小さく直屈する。胎土粗砂粒多く、焼成甘い。黄橙色を呈す。口径17.6cm。8は摘み部を欠き小片。口唇部丸く緩やかに屈す。砂

E<sub>3</sub>-106号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.2	8.5	2.7	底部偏平	6	須恵器皿	13.6	8.3	2.5	内外面「耳」墨書文字
2	土師器坏	11.8	8.3	2.7	底部偏平	7	須恵器蓋	17.6		4.3	環状摘
3	土師器坏	小片			見込みに墨書文字痕	8	須恵器蓋	16.4		2.3	内に「甕」か墨書文字
4	内黒小碗	7.4			内面細横位磨	9	土師器甕	22.8			この字口縁
5	須恵器坏		6.6		底部に墨書文字痕	10	須恵器甕	小片		18.0	大径の平底

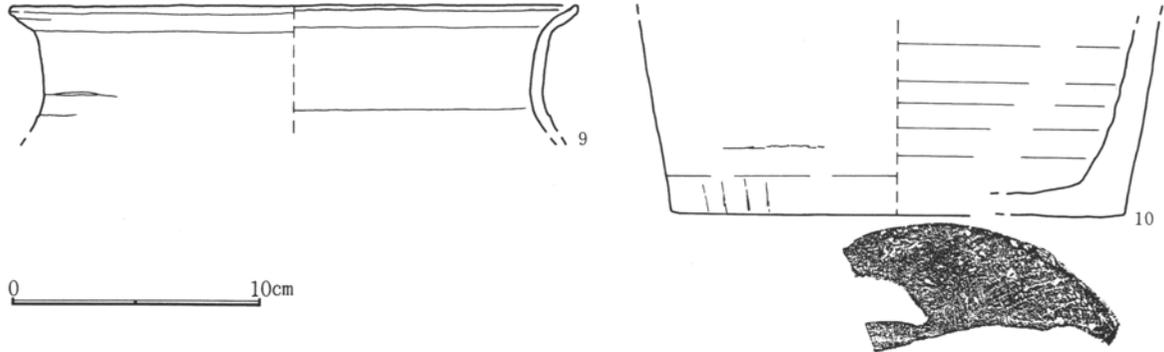


第149図 E<sub>3</sub>-106号住居跡出土遺物(1)

粒多く焼成甘い。灰白色を呈す。内面に解説不明の墨書文字。

9は土師器コの字口縁の甕。口縁部の細片。細土で鈍橙色を呈す。

10は須恵器甕底部片。平底で直線的な腰部。胎土細かく、焼成やや甘い。灰白色を呈す。



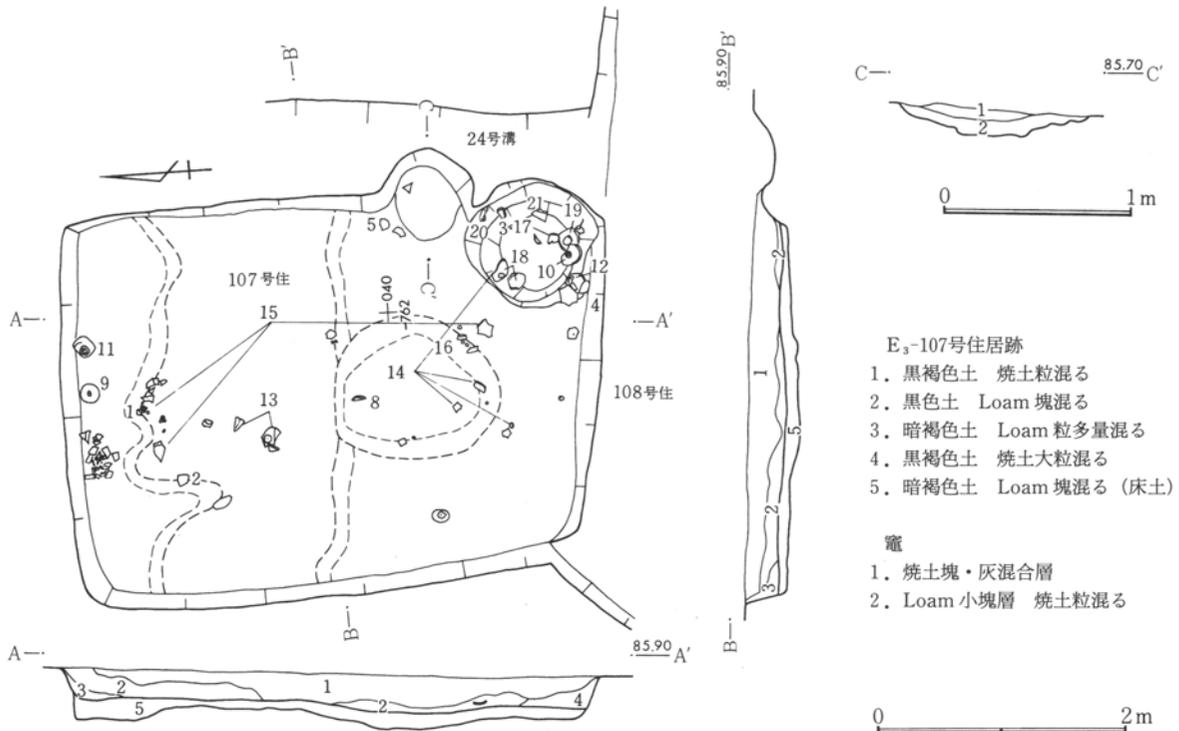
第150図 E<sub>3</sub>-106号住居跡出土遺物(2)

E<sub>3</sub>-107号住居跡 (第151~153図 P L.71・82)

座標値39038~39043・-54760~54765の範囲にある。E<sub>3</sub>-108号住居跡と重複するが、これより新しい時期の所産である。住居東縁を南北走る24号溝によって竈上面は消失し、西壁線はE<sub>3</sub>-108号住居との切り合い確認が徹底されず検出状況が不鮮明である。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈するが、南東隅の壁線は丸みが強い。規模は、長軸4.3m・短軸3.2m、壁高は約23cmを測る。主軸方位はN-90°-Eを示す。床面積11.7m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、南に大きく偏って付設される。明瞭な袖部を示すような部材はないが、右側に小さく突



第151図 E<sub>3</sub>-107号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

出するような状況が見られる。竈全体の形状は円形に近く、東壁線からは20~30cm突出する。火床は硬質な焼土面はなく、焼土塊と灰の混合層で埋もれる。

床面は平坦をなすが、南寄りE<sub>3</sub>-108号住居跡との重複範囲では、僅かながら窪む気配がある。貯蔵穴は竈脇南東の隅にあり、径80cm・深さ30cmの比較的整った円形である。柱穴などは検出されない。住居掘形は、中央やや北よりに幅1.3mの低い高まりを東西方向に残す。また、竈前には1.1×1.3m・深さ40cmの楕円形の土坑を穿ってある。埋土は、Loam 塊混じりの暗褐色土を用いて床土とする。

遺物は貯蔵穴内やその周辺と、北壁沿いに多く出土している。須恵器とくに蓋が多く、また須恵器窯での焼成時に用いたと思われる坏底部転用焼台の7点もの存在が特徴的である。これらは、舞台遺跡・光仙房遺跡・三和工業団地遺跡の窯跡操業と同時に極めて近い時期の遺物群と考えられる。窯跡群との空間位置では、三和工業団地遺跡のものと最も近い距離にある。当住居が工人に関わる遺構の可能性もあるが、上記遺物のほかにはこれを示す事物は検出されていない。9世紀前半から中頃になろう。

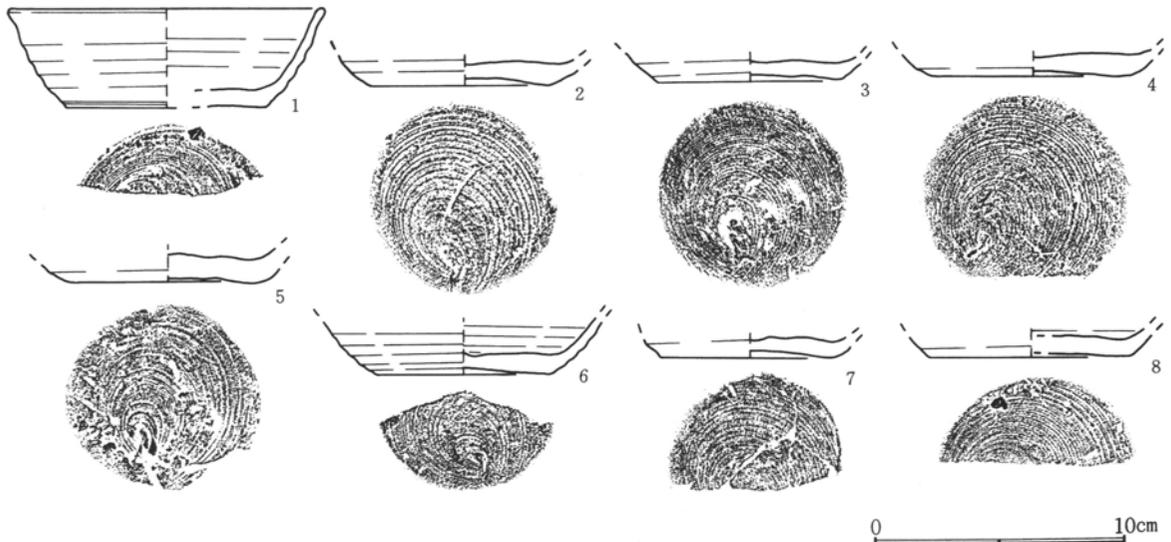
出土遺物

1~8は須恵器坏。1の他は底部で、舞台遺跡窯跡内で用いられている転用焼台に酷似する。底部には焼台の痕跡を残す2~5がある。1は1/3。体部外傾度の小さい深目の器形である。口径12.7cm。坏類はいずれも回転糸切り無調整で、轆轤右回転である。胎土は、8が細土の他砂粒が多い。1~3・5は焼成堅緻で灰色黒褐色。4は甘く灰黄褐、6~8はやや甘く灰白色を呈す。

9~16は須恵器蓋。16は摘み欠損で1/3。他は完形度が高い。環状摘み。天井部右回転篋削り。10・11・15には糸切り痕が残る。計測値では、口径16cm前後の9~11と、18cm以上の12~16に分類される。また、摘みの形状や口唇部などの細部からは数種の作り癖が窺われる。胎土は粗砂粒が多く混じり、10・11・13は灰

E<sub>3</sub>-107号住居跡出土遺物計測表(1)

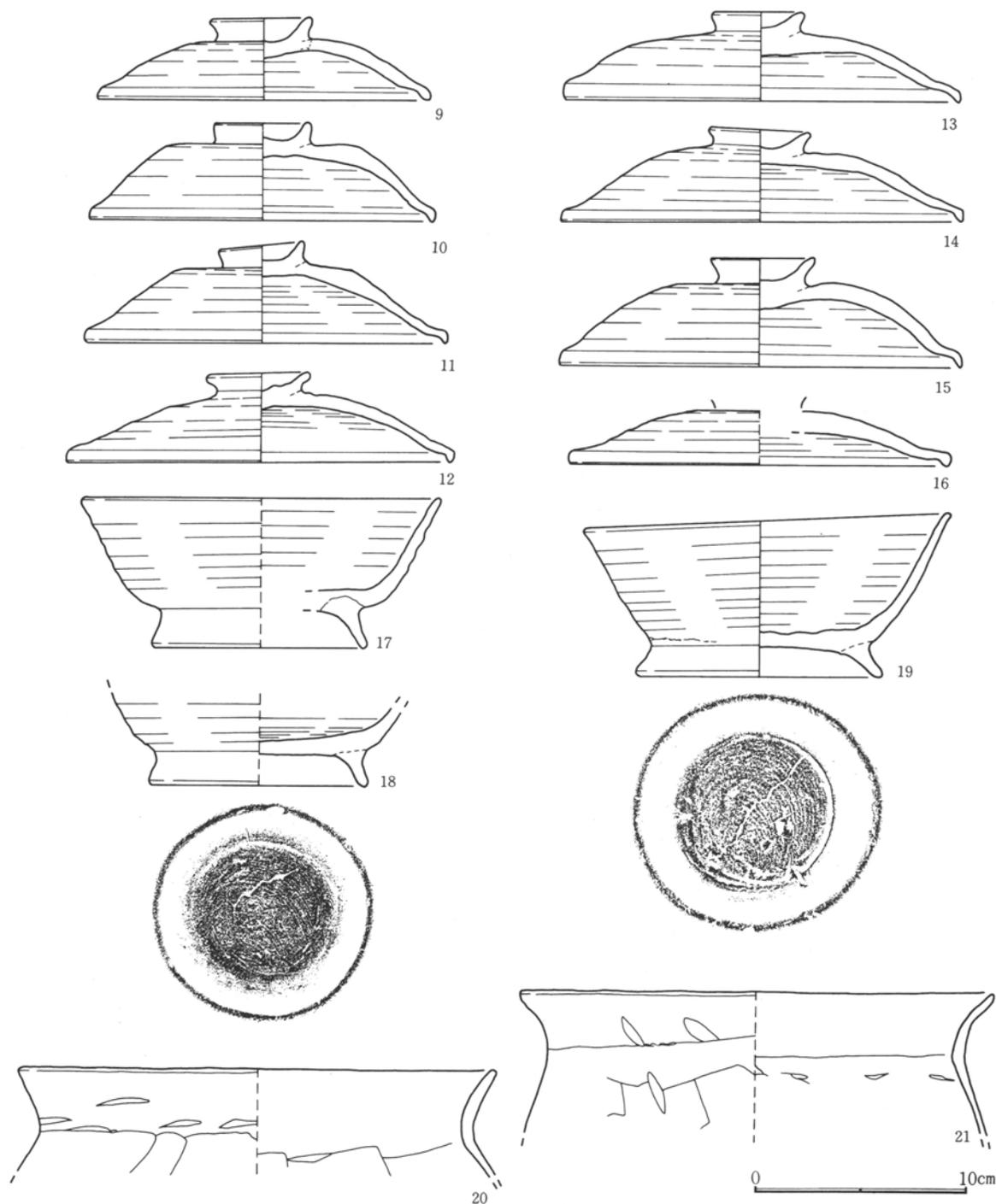
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	12.7	8.0	3.9	回転糸切り	12	須恵器蓋	18.0		4.2	環状摘 径4.9
2	須恵器坏		7.2		右回転糸切り焼台転用	13	須恵器蓋	18.4		4.2	環状摘 径4.3
3	須恵器坏		7.3		右回転糸切り焼台転用	14	須恵器蓋	18.7		4.3	環状摘 径4.7
4	須恵器坏		8.0		右回転糸切り焼台転用	15	須恵器蓋	18.7		5.0	環状摘 径4.9
5	須恵器坏		8.0		右回転糸切り焼台転用	16	須恵器蓋	19.8			
6	須恵器坏		7.0		右回転糸切り焼台転用	17	須恵器碗	16.8	10.0	6.9	回転糸切り付け高台



第152図 E<sub>3</sub>-107号住居跡出土遺物(1)

E<sub>3</sub>-107号住居跡出土遺物計測表 2

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
7	須恵器坏		7.0		右回転糸切り焼台転用	18	須恵器碗		10.2		回転糸切り付け高台
8	須恵器坏		8.0		右回転糸切り焼台転用	19	須恵器碗	17.0	11.4	7.2	回転糸切り付け高台
9	須恵器蓋	15.5		3.9	環状摘 径4.8	20	土師器甕	22.3			緩いくの字口縁
10	須恵器蓋	16.1		4.5	環状摘 径4.6	21	土師器甕	22.0			コの字口縁
11	須恵器蓋	16.9		4.5	環状摘 径4.1						



第153図 E<sub>3</sub>-107号住居跡出土遺物(2)

### 第3章 検出された遺構と遺物

色、9・12・14・15は灰白色で焼成は堅緻。10は焼成甘く赤橙色を呈す。

17・19は須恵器碗。17は1/4、18は体部欠損、19はほぼ完形である。回転糸切り高めの付け高台は、端部丸くハの字状に開く。17・18は底部内側に高台が付く腰張り形態。19は底部の縁に付き、腰部を作らない。両形態とも体部は直線的である。粗砂粒多く混じり、17は堅緻で灰色。18・19は焼成やや甘く、浅い黄橙色を呈す。17は口径16.8cm、19は17cm。蓋9～11に組むであろう。

20・21は土師器甕。口縁部小片。20は緩いくの字に、21はコの字口縁である。細砂粒多く橙色を呈す。

#### E<sub>3</sub>-111号住居跡 (第154図 P L. 71・83)

座標値39018～39023・-54778～54782の範囲にある。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.5m・短軸2.5m、壁高10cm前後で浅い。主軸方位はN-105°-Eを示す。床面積7.31m<sup>2</sup>。

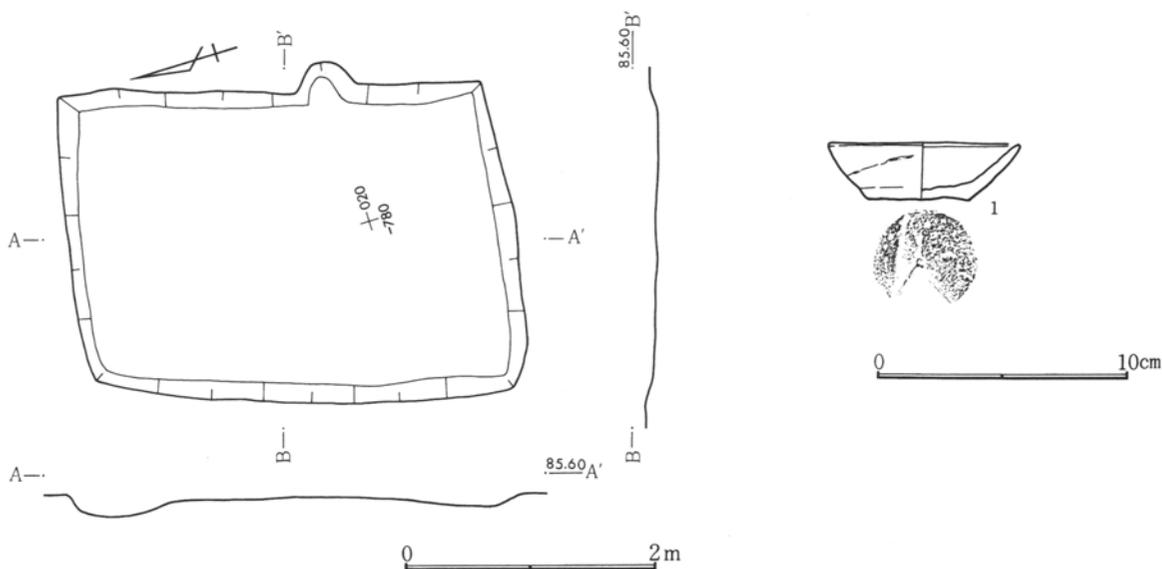
竈は東壁にあり南に偏って付設されるが遺構全体の削平が深く及んでいるためか竈の存在を知る程度の遺存状況である。東壁を約25cm突出するが袖部の痕跡はない。

床面の踏み締まりは弱く柱穴等の施設はない見られない。竈の遺存状況などから当住居跡が長期にわたっては使用されていない。

遺物は少なく埋め土中よりの土器様の小坏1点がある。この遺物からは11世紀後半代が考えられる。

#### 出土遺物

1は小型に属する。右回転糸切り。内面及び底部に油煙状の付着物があり灯明皿の使用であろう。細土灰白色を呈す。口径7.5cm、底径4.0cm、器高2.2cm。



第154図 E<sub>3</sub>-111号住居跡・出土遺物

#### E<sub>2</sub>-113号住居跡 (第155・156図 P L. 71・83)

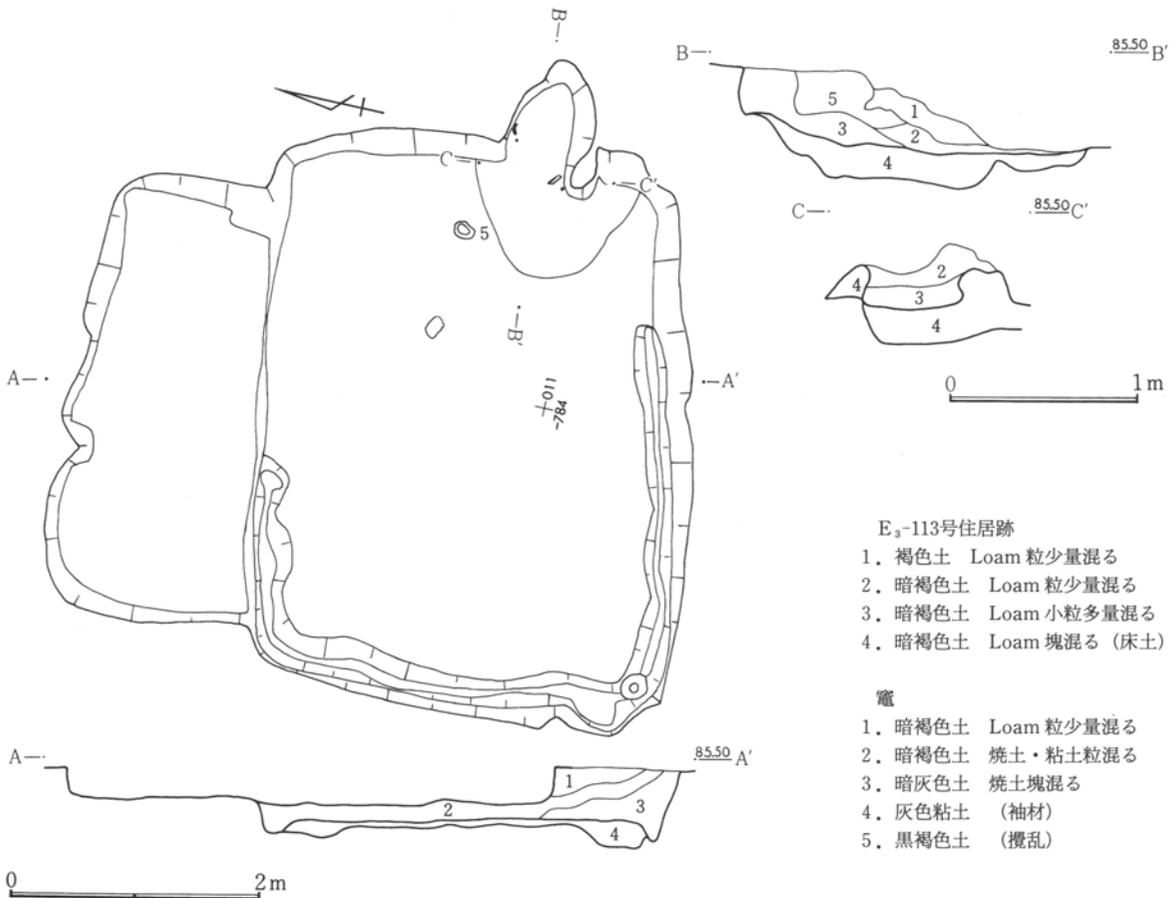
座標値39009～39014・-54781～54787の範囲にある。北側で性格の不明な遺構と重複するがこれよりも古い時期である。不明遺構は方形と考えられる。土層観察から東西長3.5m・南北長43.8m、深さ30cmを測る。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.5m・短軸3.5m、壁高40cmを測る。主軸方位はN-84°-Eを示す。床面積13.5m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。東壁を大きく抉り、突出部は約80cmを測る。袖部は小さく張り出すが右袖は不明瞭である。袖部の構築は基層の Loam を掘り残して、灰色粘土を用いてある。火床は焼土面は残さず塊状の焼土が堆積する。

床面は平坦で、踏み締まりは良好である。柱穴・貯蔵穴は検出されないが、西壁から南・北壁の一部にかけて壁下溝が巡る。幅15cm・深さ10cm程度である。床下の掘形は住居中央部を一変約2mの広さで方形に残し、周辺は深さ10~20cmのやや不規則な面で掘り窪めてある。埋土には暗褐色土と Loam 塊の混土を施し床土とする。

遺物は少なく、須恵器杯・蓋小片と椀がある。やや時間差があり、遺物からは8世紀後半から9世紀前半が考えられる。



第155図 E<sub>2</sub>-113号住居跡

### 出土遺物

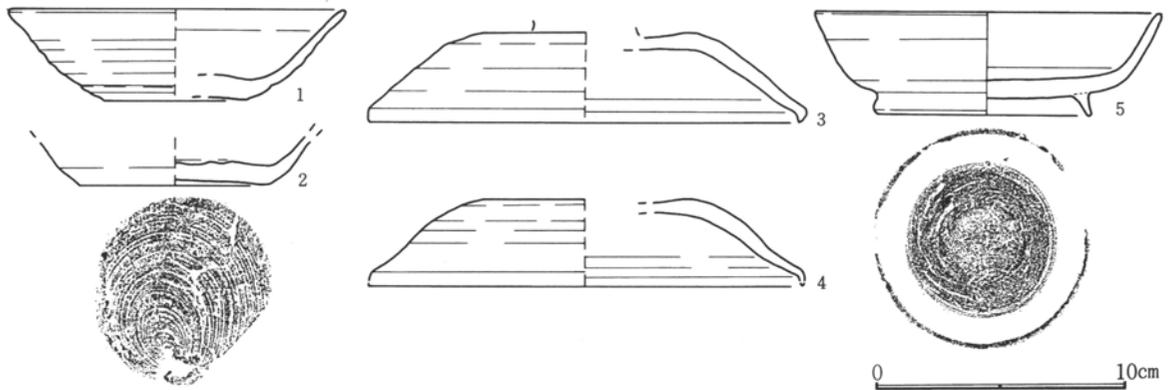
1・2は須恵器杯。1は1/3。丸みの強い腰部から、体部は外反気味に開く。底径小さく、回転糸切り後周辺手持ち篋削り。轆轤右回転。砂粒多く焼成やや甘い。灰白色を呈す。口径13.4cm。2は底部。右回転糸切り無調整。砂粒多く焼成良好。灰白色を呈す。

3・4は須恵器蓋。摘みを欠き、1/3・1/4。天井部右回転篋削り。粗砂粒混じり焼成良好。灰白色を呈す。5は須恵器椀で完形。腰が強く張り浅い体部。回転糸切り付け高台。作りは丁寧。内外面とも使用摩滅が著しく油煙状付着物あり。轆轤右回転。細砂で均一。焼成は甘い。外面吸炭し黒灰色、内面灰黄色を呈す。口径13.8cm。

第3章 検出された遺構と遺物

E<sub>3</sub>-113号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	13.4	5.8	3.6	回転糸切り	4	須恵器蓋	17.4			摘欠損
2	須恵器坏		7.6		右回転糸切り	5	須恵器椀	13.8	8.7	4.1	回転糸切り付け高台
3	須恵器蓋	17.2			摘欠損						



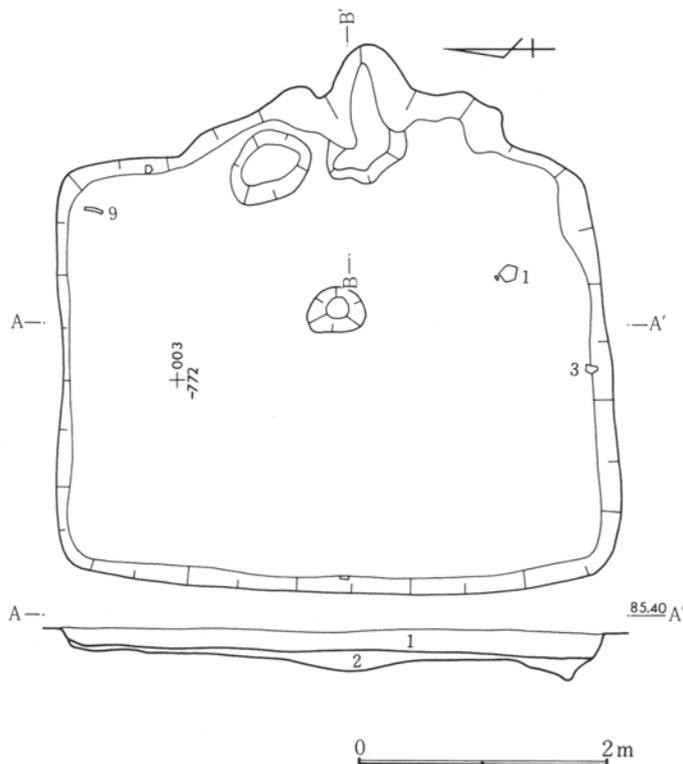
第156図 E<sub>2</sub>-113号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-117号住居跡 (第157・158図 PL.71・83)

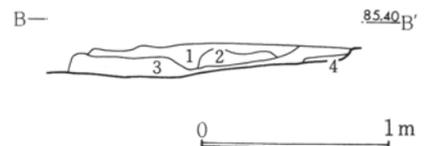
座標値38999~39004・-54769~54774の範囲にある。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈するが東壁線はやや膨らむ。規模は長軸4.4m・短軸3.3mから東壁線の膨らむ部分では3.9mを測る。壁高は15cmである。主軸方位はN-89°-Eを示す。床面積13.9m<sup>2</sup>。

竈は東壁のやや南よりに付設されるが、竈を中心とした2.5mの範囲の壁線が膨らんでいる。東壁線より30cm突出する。袖部は検出されないが壁の下場線に小さく張る様相が見られる。火床には焼土面は残されず、焼土大塊が埋まる。



床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。住居中央部に径35cm深さ20cmの小穴が穿たれるが、柱穴に類するかは不明である。竈左脇には貯蔵穴様の小土坑がある。径55×70cm・深さ20cmで楕円形を呈す。本遺跡での当該期住居跡の貯蔵穴は大方は竈右脇に設けられるを通例とする。この小土坑が貯蔵穴とすれば、位置的には特異例となる。



E<sub>2</sub>-117号住居跡

- 1. 暗褐色土 Loam粒混る
- 2. 暗褐色土 Loam粒多量混る

竈

- 1. 暗褐色土 焼土小塊混る
- 2. 焼土塊
- 3. 褐色土 Loam粒多量混る
- 4. 暗灰色粘土塊

第157図 E<sub>2</sub>-117号住居跡

る。床下の掘形はほぼ平坦で、5～10cmのLoam塊混じりの褐色土を埋めて床土とする。

遺物は少量散在して出土した。須恵器碗・灰釉陶器皿の他、用途不明の鼓型土製品2個体がある。10世紀後半になろう。

出土遺物

1・2は須恵器碗。1は2/3。体部直線的。回転糸切り付け高台、轆轤右回転。2は2/3。腰部に丸みをもち口縁部下位に強い轆轤目でくびれ、口唇部は肥厚し外反する。回転糸切り付け高台。器面の荒れ著しい。1・2は細土で焼成は甘い。灰白色を呈す。口径13.8cm・14.4cm。

3は灰釉陶器皿1/3。器肉薄く、口唇部は細まる。底部の撫では丁寧。高台は低く台形を呈す。漬け掛け施釉。見込み・高台に重ね焼き痕。虎溪山1～2号窯期になろう。

4は土師器坏細片。内面に解説不明墨書文字。

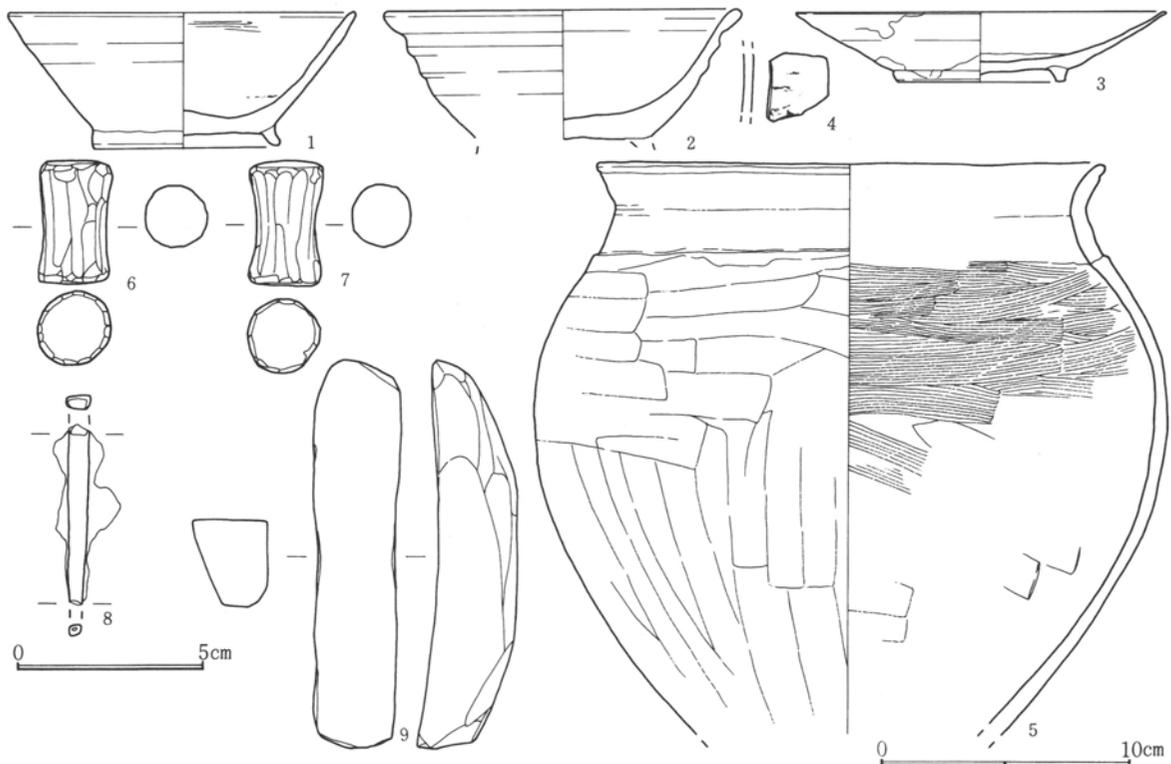
5は土師器甕で底部欠損。口縁部短く、下位は内傾し中位でくの字状に外傾。最大径は25cmで胴上位にあり丸く張る。口縁部横位撫で、胴上位横位・下位は縦位篋削り。内面横位の小口篋撫で。細砂多く鈍い黄橙色を呈す。口径20.2cm。

6・7は鼓型の土製品。丁寧な面取り調整。燻し焼成で黒色を呈す。長さ4.8・4.9cm、中央部径2.5cm、端部径2.9cm、重さ40.9・41.4g。

8は鉄製角釘で両端は欠損。現長4.9cm・最大厚0.6×0.4cm。9は砥石で流紋岩。

E<sub>2</sub>-117号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器碗	13.8	7.5	5.4	回転糸切り付け高台	5	土師器甕	20.2			粗口の字口縁
2	須恵器碗	14.4			回転糸切り付け高台	6	土製品	長4.8 径2.5～2.9			40.9g 鼓型 黒色処理
3	灰釉陶器皿	14.6	6.6	2.3	漬け掛け施釉	7	土製品	長4.9 径2.5～2.9			41.4g 鼓型 黒色処理
4	土師器坏	細片			内面墨書文字痕	8	鉄釘	長4.9 厚0.4×0.6			両端欠損



第158図 E<sub>2</sub>-117号住居跡出土遺物

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### E<sub>2</sub>-118号住居跡 (第159・160図 P L.72・84)

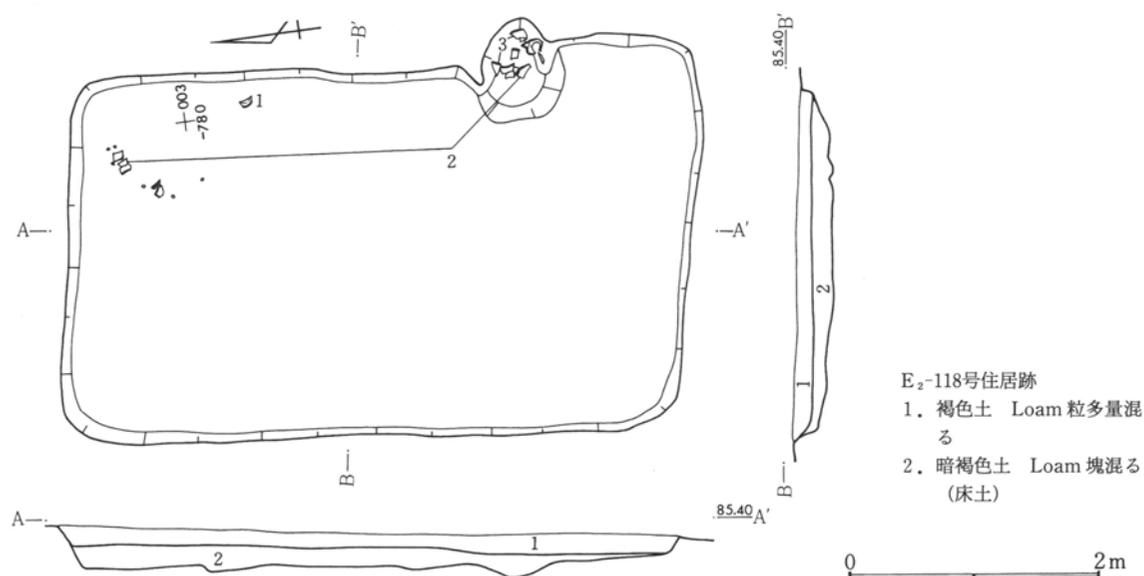
座標値38999~39005・-54779~54783の範囲にある。

平面形態は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.0m・短軸2.9m、壁高は約20cmを測る。主軸方位はN-98°-Eを示す。床面積13.7㎡。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。東壁線を20~30cm突出して掘り込まれるが、全体形は60×80cmの楕円形で皿状に窪む。明瞭な袖部の形成はなく、壁の下場線が僅かにそれらしき曲線を描く程度である。目だつた竈構築材は検出されない。

床面は平坦をなすが踏み締まりにさほどの堅牢さはない。柱穴・貯蔵穴などの施設は検出されていない。床下の掘形は平均しており、約15cmの深さである。埋土は、Loam 塊を混じるえる暗褐色土を用いて床土とする。

遺物は竈内に出土しているが須恵器椀・土師器小型甕など少量である。10世紀前半にならう。



第159図 E<sub>2</sub>-118号住居跡

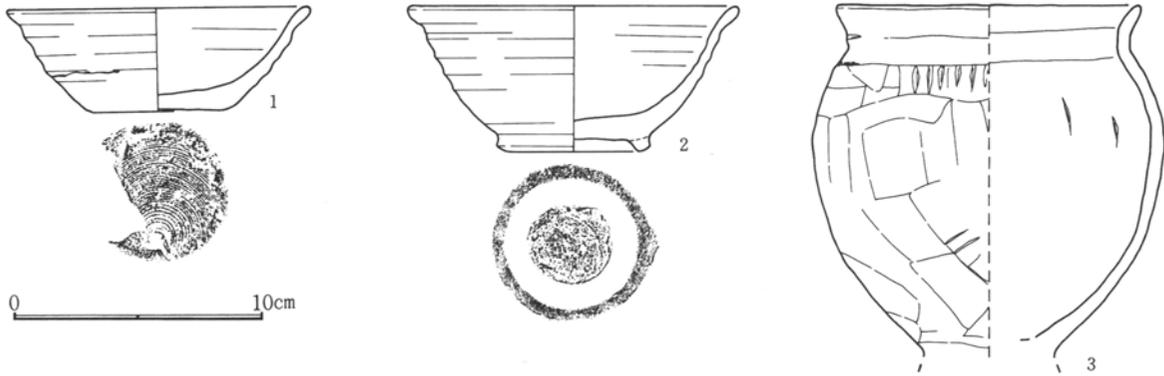
#### 出土遺物

1・2は須恵器・椀である。1は2/3。体部に丸みをもち口縁部下位でくびれ、口唇肥厚し丸まって外反。右回転糸切り無調整。2は2/3。体部の丸み強く、口縁下位の強い轆轤目でくびれる。口唇丸く肥厚し外反。回転糸切り。低く矩形の付け高台。1・2は細土で焼成甘く白灰色を呈す。二次被熱。1は口径12.1cm・2は13.2cm。

3は土師器小型甕。底部欠損するが台付きにならう。2/3。口縁部小さな略コの字。最大径は胴部中位にある。腰部に横位の撫でがあり台付き甕である。口縁部横位撫で、肩部横位・胴部斜~縦位篋削り。内面横位篋撫でによる止め痕がある。細土で橙色を呈す。二次被熱。口径12.1cm。

#### E<sub>2</sub>-118号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器椀	12.1	5.1	4.1	右回転糸切り	3	土師器甕	21.1		13.0	小型台付き甕
2	須恵器椀	13.2	5.3	5.7	回転糸きり付け高台						



第160図 E<sub>2</sub>-118号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-119号住居跡 (第161図 P L. 72・84)

座標値38997~39001・-54789~54793の範囲にある。竈先端部がE<sub>2</sub>-120号住居にかかるがこれより新しい所産である。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈するが、北東隅の壁線は丸みが強い。規模は本遺跡の当該期の住居としては小型で、長軸3.1m・短軸2.2m。壁高は削平が著しく、住居形態が辛うじて判別できる程度である。主軸方位はN-96°-Eを示す。床面積6.0m<sup>2</sup>。

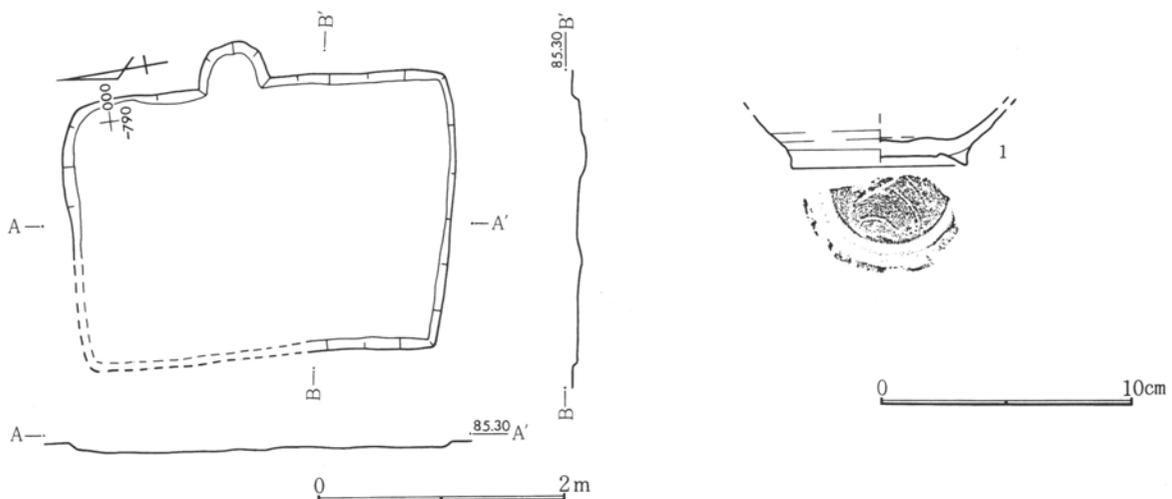
竈は東壁僅かに北へ偏って付設される。東壁線を半円形に掘り込んだ形状をなすが、住居全体の削平の深さは、竈にあっても焼土の集中分布でかろうじてその存在を知る程度である。

床面は平坦をなすが、僅かな硬化面は竈前に限られ踏み締まりは極めて弱い。柱穴・貯蔵穴などの施設は検出されない。

遺物は極めて少なく、図化できるものは竈内出土の須恵器碗の小片である。10世紀代になろう。

出土遺物

須恵器碗底部1/2である。回転糸切り、略三角形の低い付け高台。轆轤右回転。胎土細かく、焼成甘く灰白色を呈す。底径3.5cm。



第161図 E<sub>2</sub>-119号住居跡・出土遺物

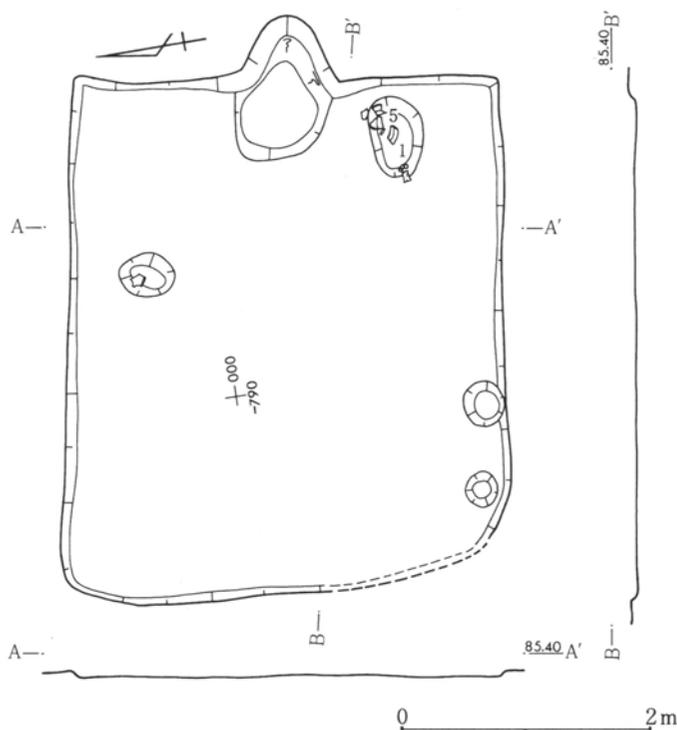
### 第3章 検出された遺構と遺物

#### E<sub>2</sub>-120号住居跡 (第162・163図 P L. 72・84)

座標値38997~39002・-54785~54790の範囲にある。E<sub>2</sub>-119号住居跡の竈先端部が西壁にかかりこれより古い時期の所産である。E<sub>2</sub>-119号住居と同じく、本跡においても削平が著しく遺存状況は頗る悪い。

平面形態は東西方向に長軸をもつ方形を呈するが、南西隅の壁線は丸みが強い。規模は長軸4.1m・短軸3.4m、壁高3~5cmを測る。主軸方位はN-97°-Eを示す。床面積13.3m<sup>2</sup>。

竈は東壁ほぼ中央に付設される。東壁線を約40cm突出させ半円形に掘り込んで構築される。全体形は1.1×0.7mの楕円形で皿状に窪む。袖部の形跡はなく、火床には黒色灰の薄層と硬化の弱い焼土面が見られた。



第162図 E<sub>2</sub>-120号住居跡

床面は平坦をなすが踏み締まりは弱く、竈前面が比較的堅い床面になっていた。貯蔵穴と考えられる土坑は竈の右脇にあり当遺跡では通例的な位置であるが、住居隅からはやや間をおいてある。径40×65cm・深さ20cm余りの楕円形を呈す。小穴は3ヶ所に検出されているが、配置からは柱穴には比定し難い。なお、南壁の西寄り壁際の2穴は深さ20~35cmで、出入り口に拘わる施設の可能性はあるが、他にそれを示す根拠はない。

遺物は主に貯蔵穴から出土するが、須恵器・土師器の坏と土師器甕類で少量である。土師器坏3個体にはその内外面に「十」の墨書文字が記される。10世紀中頃にならう。

#### 出土遺物

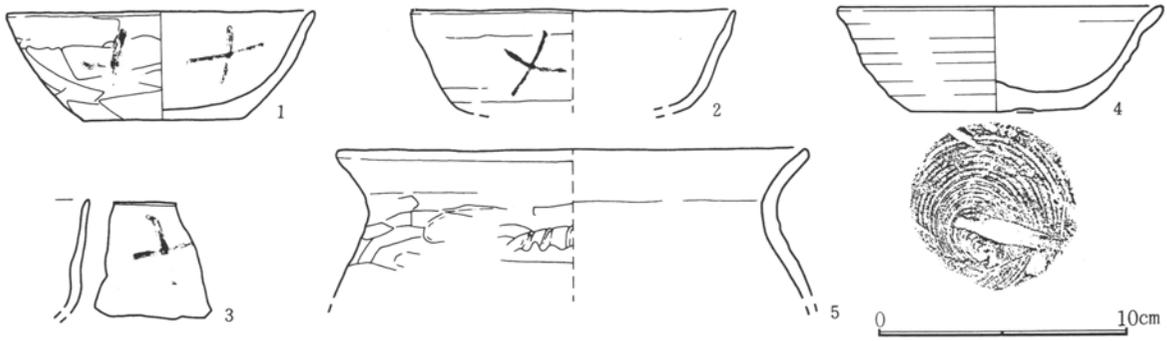
1~3は土師器坏。1は1/2。平底である。底体部は篋削り、口縁内面は横位撫で。内外面に「十」の墨書文字。砂粒多く橙色を呈す。口径12.2cm。2・3は小片。同一個体の可能性がある。丸みのある腰部から体部は緩く湾曲し、口唇は細まる。外面には指頭痕が著しい。2・3とも外面に「十」の墨書文字を記す。細土で淡橙色を呈す。

3は須恵器坏2/3。体部丸み強く、口縁部強くくびれて開く。口唇は肥厚して丸まる。右回転糸切り無調整。胎土細かく焼成甘い。白灰色を呈す。口径12.9cm。

4は土師器甕。口縁部1/3。短か目の緩いくの字状口縁で横位撫で。やや肥厚し口唇丸い。肩部横位篋削り。胎土細かく、橙色を呈す。

#### E<sub>2</sub>-120号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.3	6.4	4.2	内外面「十」墨書文字	4	須恵器坏	12.9	6.7	4.0	右回転糸切り
2	土師器坏	13.0	8.5	4.4	外面「十」墨書文字	5	土師器甕	19.0			
3	土師器坏	小片			内面「十」墨書文字						



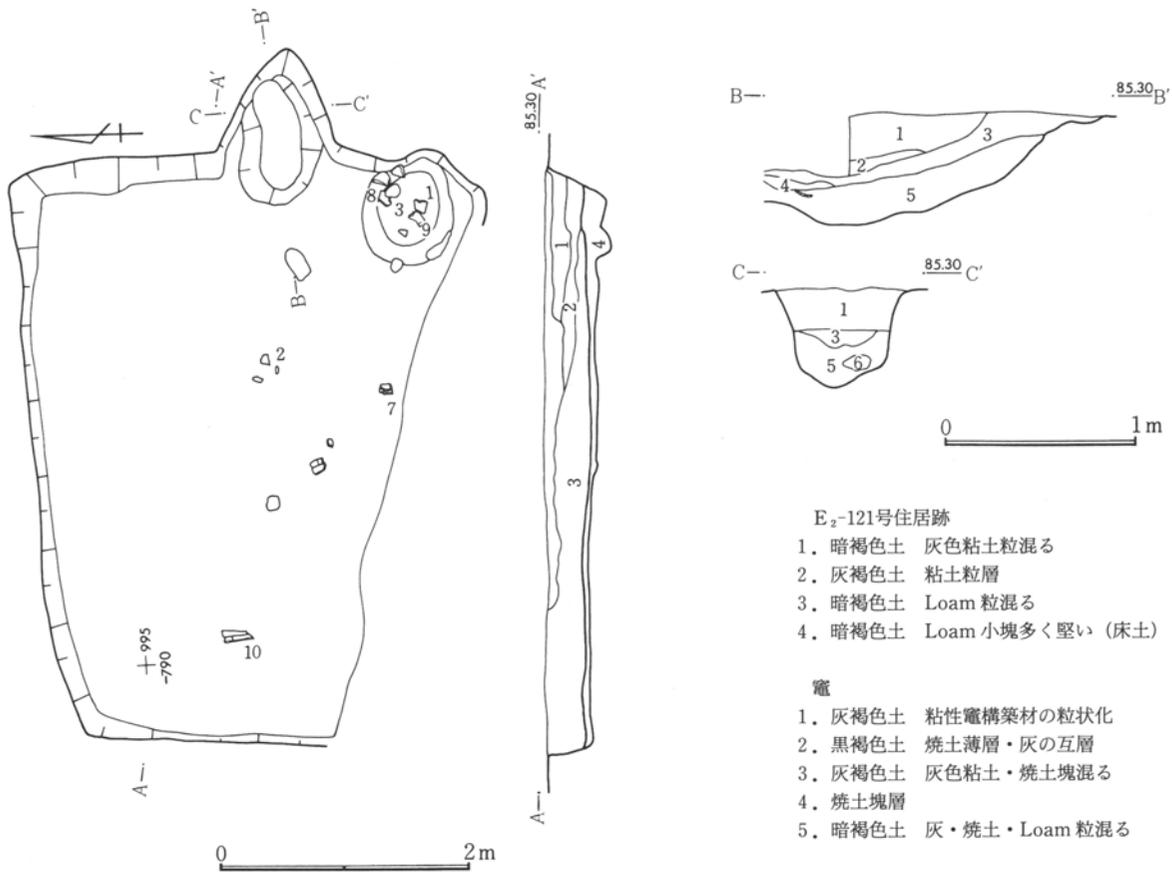
第163図 E<sub>2</sub>-120号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-121号住居跡 (第164~166図 P L. 72・84)

座標値3992~3996・-54785~54791の範囲にある。E<sub>2</sub>-122号・203号住居跡と重複するが両者より新しい時期の所産である。また、南に沿って26号溝が、さらにこれに重なって攪乱土坑があり南壁線は消失している。

平面形態は東西方向に長軸をもつ方形を呈すると考えられる。規模は貯蔵穴の位置から、長軸4.6m・短軸3.6mになろう。壁高は30cmを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。床面積12.5m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり南に偏って付設される。東壁線を70cmほど突出させ、全体形は1.2×0.7mの楕円形で緩く皿状に窪む。袖部の痕跡は残されていないが周辺には灰白色粘土塊が見られ、竈構築材とも考えられる。火床の焼土面硬化はさほどに強くない。



- E<sub>2</sub>-121号住居跡
1. 暗褐色土 灰色粘土粒混る
  2. 灰褐色土 粘土粒層
  3. 暗褐色土 Loam 粒混る
  4. 暗褐色土 Loam 小塊多く堅い (床土)
- 竈
1. 灰褐色土 粘性竈構築材の粒状化
  2. 黒褐色土 焼土薄層・灰の互層
  3. 灰褐色土 灰色粘土・焼土塊混る
  4. 焼土塊層
  5. 暗褐色土 灰・焼土・Loam 粒混る

第164図 E<sub>2</sub>-121号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

床面はほぼ平坦をなし踏み締まりは良好である。貯蔵穴は竈の右にあり、おそらくは南東隅壁線に接するかと思われる。径75×85cm・深さ40cmの楕円形を呈する。柱穴は検出されない。床下の掘形は東～北壁に沿って幅50×60cm・深さ20cmに掘り窪めてある。埋土は、Loam塊混じりの暗褐色土で床土としている。

遺物は貯蔵穴内に多く出土する。土師器坏・甕、須恵器坏、灰釉陶器、石製紡錘輪のほか、小片ではあるが小型轆轤甕、須恵器瓶・広口瓶などがある。9世紀後半になろう。

#### 出土遺物

1～4は土師器坏。1・2は丸底、3・4は平底である。1は1/2。口縁部に強い横撫で、口唇は丸まって内屈する。見込み部と外面体部に「十」の墨書文字を記す。赤褐色粒多く、細土。黄橙色を呈す。2は1/4。口縁部は緩く外反して開く。体部外面に「十」の墨書文字を記す。細土で明赤褐色を呈す。3はほぼ完形で砂底である。口縁部下位に強い撫で調整で陵をなす。体～底部篋削り、内面横撫で。細土で橙色を呈す。口径12.5cm。4は2/3。口縁部下位に強い撫で、緩く外反して開く。体～底部篋削り、内面横撫で。細土で淡い黄橙色を呈す。口径10.9cm。

5～7は須恵器碗・皿である。5は底部片で外面に、6は体部片外面に墨書文字痕がある。7は皿で外反気味に大きく開き、口唇は丸まる。回転糸切り付け高台。畳み付けは棒状痕で凹凸が著しい。轆轤右回転。砂粒多く、焼成甘い。白灰色を呈す。口径14.2cm。

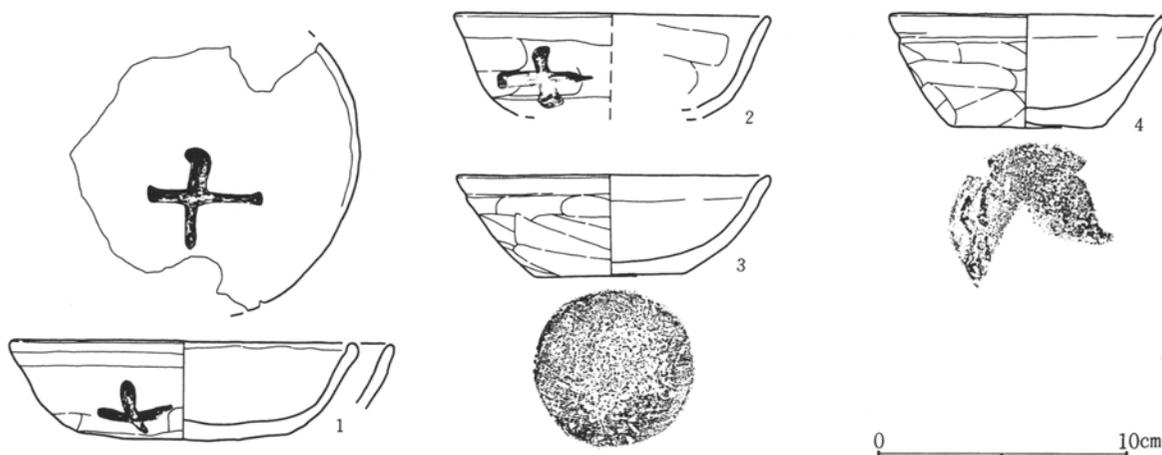
8は灰釉陶器皿で完形。口唇は水平に折れて、端部は尖る。底部は丁寧な篋削り調整で、高台は三日月形をなす。漬け掛け施釉。光ヶ丘窯式期になろうか。口径16.0cm。

9・10は土師器甕。9は口縁1/3。小型台付きになろう。コの字口縁で、口唇部は細まって直立する。口縁部横位撫で、肩部横位篋削り、内面横位篋撫で。細土で、鈍い橙色を呈す。10は口縁1/3。コの字口縁。口縁部は横位撫で、肩部横位篋削り、内面横位篋撫で。細土で橙色を呈す。

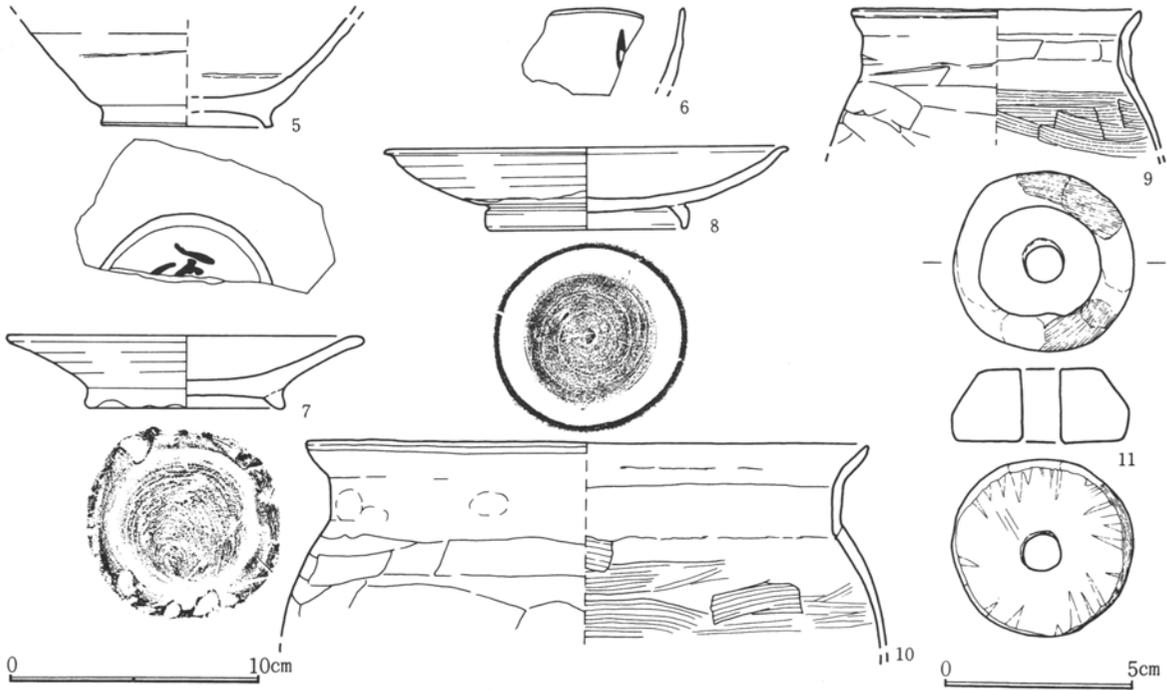
11は完形で砥沢石製の紡錘輪。側面は面取り状の調整痕。上径3cm・下径4.5cm・高さ2cm。

E<sub>2</sub>-121号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	13.5	8.2	3.9	内外面「十」墨書文字	7	須恵器皿	14.2	7.8	2.8	回転糸切り付け高台
2	土師器坏	12.6	7.5	4.2	外面「十」墨書文字	8	灰釉陶器皿	16.0	8.0	3.2	三日月高台漬け掛施釉
3	土師器坏	12.5	6.1	4.0	砂底	9	土師器甕	11.4			小型台付きコの字口縁
4	土師器坏	10.9	6.1	4.4	底部篋削り	10	土師器甕	22.4			コの字口縁
5	須恵器碗		7.6		底部墨書不明文字	11	石製紡錘輪	3.0	4.7	2.0	流紋岩57.3g
6	須恵器碗	小片			内面墨書文字痕						



第165図 E<sub>2</sub>-121号住居跡出土遺物(1)



第166図 E<sub>2</sub>-121号住居跡出土遺物(2)

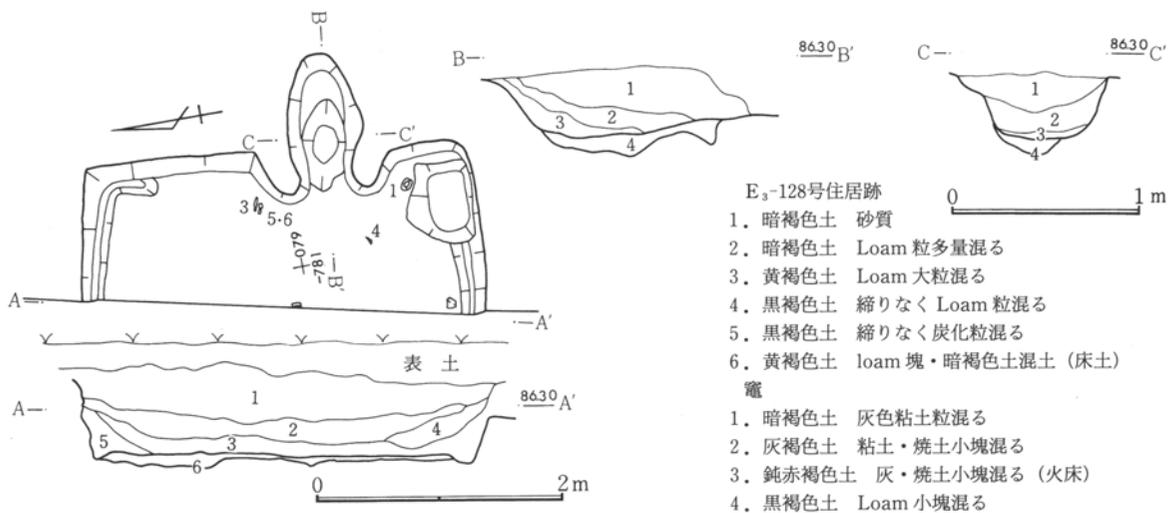
E<sub>3</sub>-128号住居跡 (第167・168図 P L.72・85)

座標値39077~39081・-54779~54782の範囲にある。西半は調査区域外になり不明である。

平面形態は方形を呈すと考えられる。東壁長は3.2m、土層確認での壁高は55cmを測る。検出範囲は南北軸で1.4m。竈先端からは約2mである。主軸方位はN-95°-Eを示す。

竈は東壁の南に偏って付設される。壁線より約70cmほど突出させ、楕円形に作り出す。袖部は小さく30cmほどの長さである。

床面は平坦で、竈前は著しく硬化している。貯蔵穴は竈脇の南東隅に設けられ、45×65cm・深さ20cmの略方形を呈する。南~北壁には幅10cmの壁下溝が巡る。床下の掘形は浅く平坦で、暗褐色土を混じえる Loam 塊



第167図 E<sub>3</sub>-128号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

土を床土とする。

遺物は少量であるが、鉄鏃を含む鉄片4点が出土している。9世紀後半から10世紀になろう。

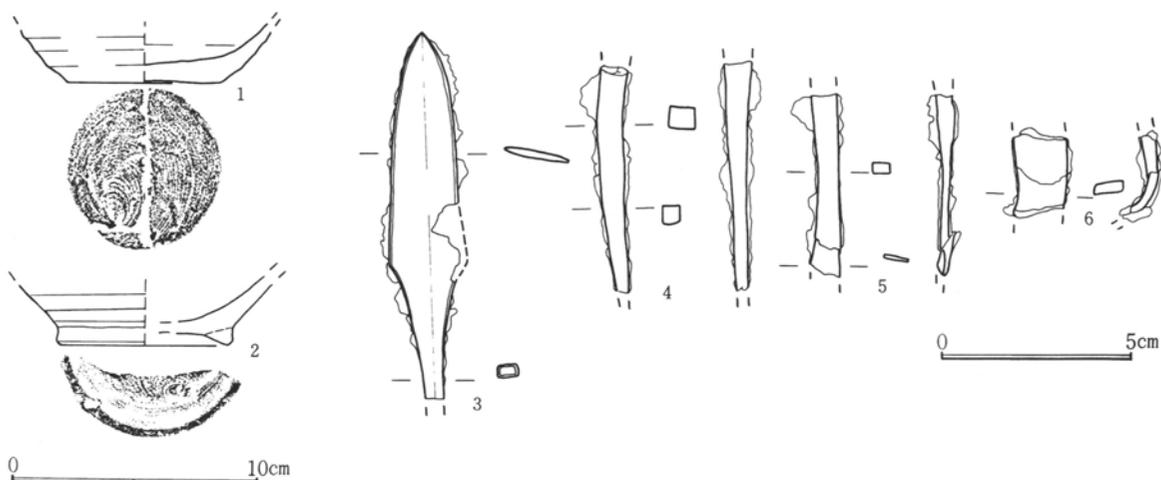
#### 出土遺物

1・2は須恵器杯・椀である。底部で体部欠損。1は右回転糸切り無調整。細砂粒多く灰白色を呈す。2は回転糸切りで低い付け高台砂粒少なく焼成堅緻灰白色を呈す。

3～6は鉄製品。3は柳葉型の鏃になろう。刃部長6cm・最大幅2cm・刃厚0.2cm、現長9.5cm。4・5は角釘状、6は板状である。

E<sub>3</sub>-128号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器杯		6.1		右回転糸切り	4	角釘				両端欠損 現長6.0
2	須恵器椀		7.0		付け高台	5	鏃柄部?				現長4.5
3	鏃	刃 6.0 幅 2.0			柄3.0 刃に鑄あり	6	板状鉄片	長 2.5 厚 0.3			



第168図 E<sub>3</sub>-128号住居跡出土遺物

#### D-144号住居跡 (第169～171図 P L. 72・85)

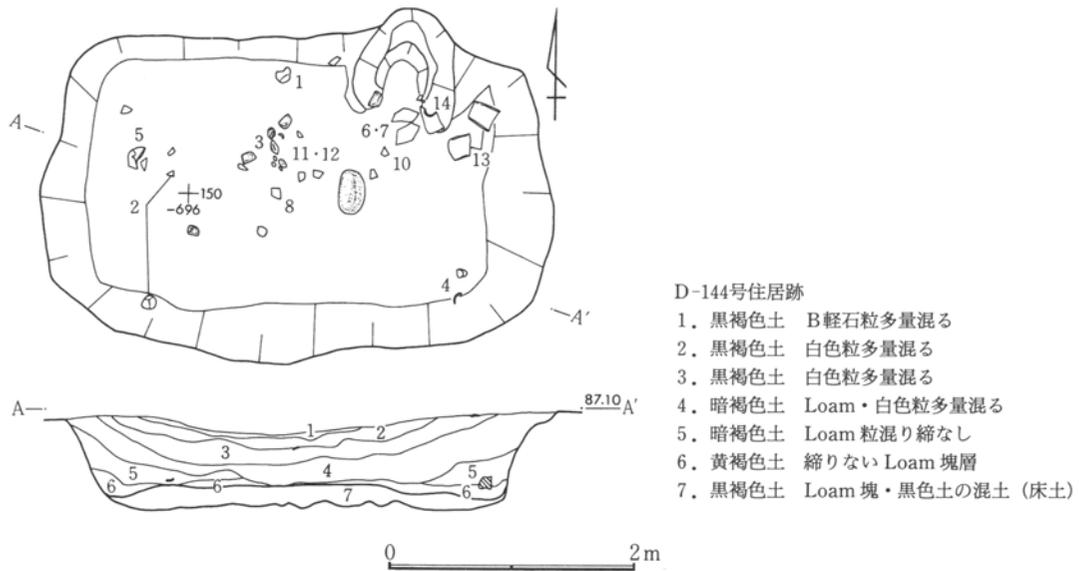
座標値39148～39152・-54693～54697の範囲にある。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈するが、掘形が深く壁面上縁の崩落によって隅丸の形状となっている。規模は長軸3.8m・短軸2.5m・壁高は60cmを測り、上縁は傾斜をなす。当遺跡の住居跡のなかでは、最も深い掘形を有する。主軸方位はN-1°-Eを示す。床面積5.7m<sup>2</sup>。

竈は北壁にあり東に偏って付設されるが、北方向での竈位置は当遺跡では稀な事例である。北壁線より僅かに突出し幅広な袖部が小さく張り出す。竈周辺からは2点の完形男瓦が出土し、うち1点は右袖部前面に立て掛けられた状態であった。また、左袖には長頭形の川原石が芯材として埋め込まれている。

床面は平坦であるが、四壁沿いは緩い窪みをなす。踏み締まりは相対的に堅牢である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。床下の掘形は15～20cmの深さで、さほどの凹凸はない。埋土はLoam塊を混える黒褐色土をもって床土としている。

遺物には完形の男瓦の他、須恵器杯・甕片、羽口・小鉄塊が出土する。鍛冶工房跡の可能性も考えられるが、調査所見からは炉などの施設や工房を示す事象は得られていない。9世紀後半から10世紀前半の頃になろうか。



第169図 D-144号住居跡

出土遺物

1は土師器坏で1/2。床面出土。底部は偏平で、摩滅がすすみ調整痕は不明瞭だが篋削りと考えられる。口縁部に凹線状の強い撫でを施す。口縁部および内面は横位撫で、体部は篋削り。砂粒多く混入し暗褐色を呈す。口径12.8cm。

2は須恵器坏で床面の出土である。体部の一部が欠損する。底部は小径で、体部は直線的に開き、口唇部は肥厚する。内外面に油煙状付着物が残る。右回転糸切り無調整。細土均一で焼成やや甘く灰色を呈す。口径12.7cm。

3は須恵器坏。体部3/4欠損。器肉は厚めである。小径底部で、体部は丸みをもち口唇部は外反気味に開く。右回転糸切り無調整。細土で焼成甘い。鈍黄橙色を呈す。口径11.6cm。

4は須恵器碗で床面出土。体部の2/3が欠損。回転糸切り付け高台。腰部より直線的な体部で立ち上がり、口縁部は肥厚して開く。轆轤目強い。内面体部に「太」の墨書文字を記す。外面に油煙状付着物あり。砂粒少なく焼成は良好。灰白色を呈す。口径13.9cm。

5は須恵器広口の瓶にならうか。床面直上出土。頸部の上半より大きく開き、口唇部は略三角を呈す。紐作り轆轤調整仕上げ。轆轤右回転。器面の爆著しい。細土均一で焼成やや甘い。灰白色を呈す。口径18.8cm 頸部の長10cm。

6・7は須恵器丸底の甕胴部の破片で床面出土。外面は平行叩き、内面は無文の当具痕。7の内面は横位撫で調整が著しい。砂粒少なく焼成は堅緻。灰色を呈す。

8～12は羽口片で床面に近い出土である。いずれも先端部の小片。稲藁状のスサを混入する。

13・14は男瓦。完形である。竈および周辺からの出土。竈構築材として使用されたものか。凹面は布目、側縁と表・裏縁辺は面取り状の削り調整。

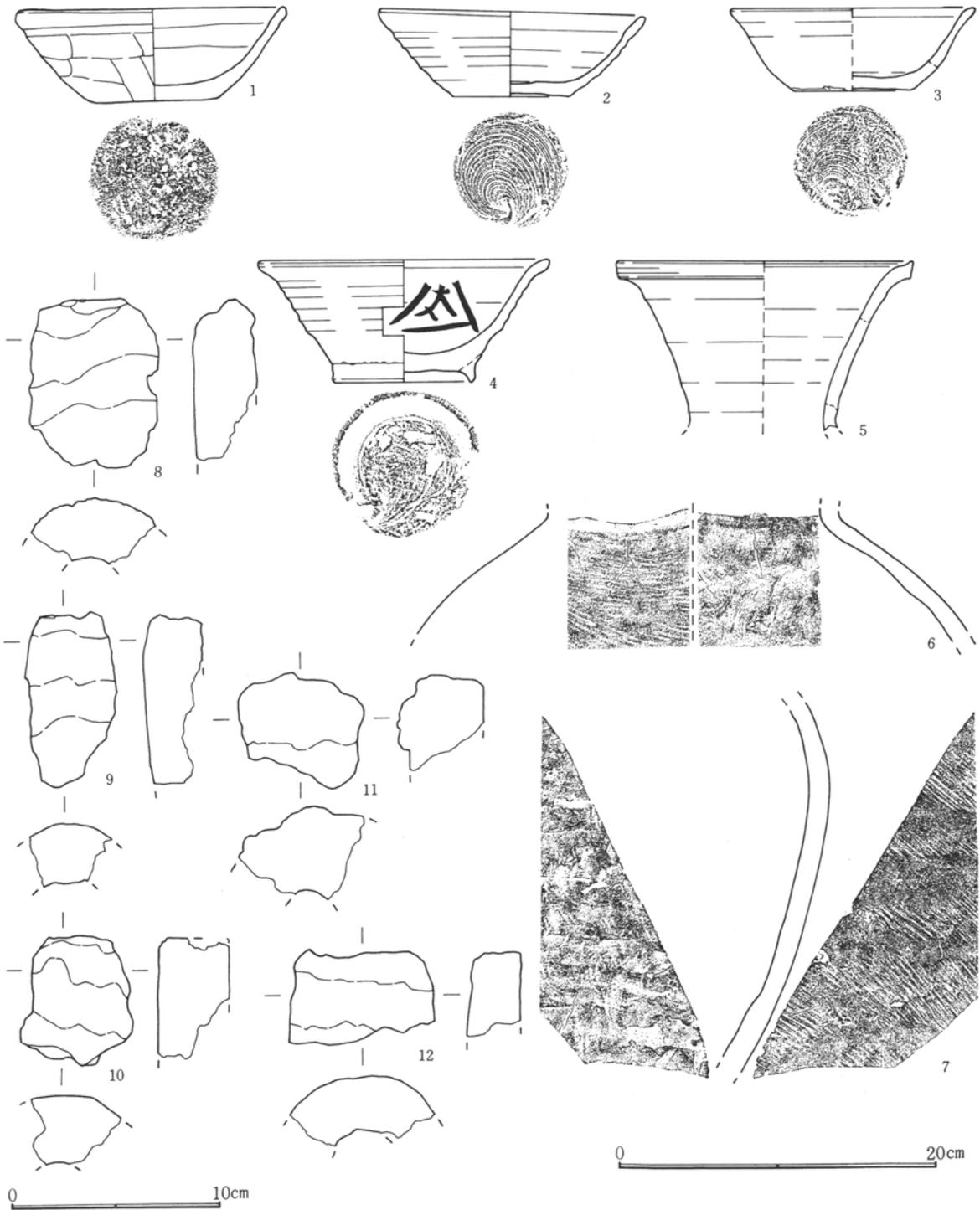
13はやや薄手で紐作りの痕跡が残る。表凹面の縁辺に縦位篋削り。細砂で焼成やや甘い。赤橙色を呈す。

14は表凸面に横位の篋撫で。細砂混じりで焼成堅緻。灰色を呈す。

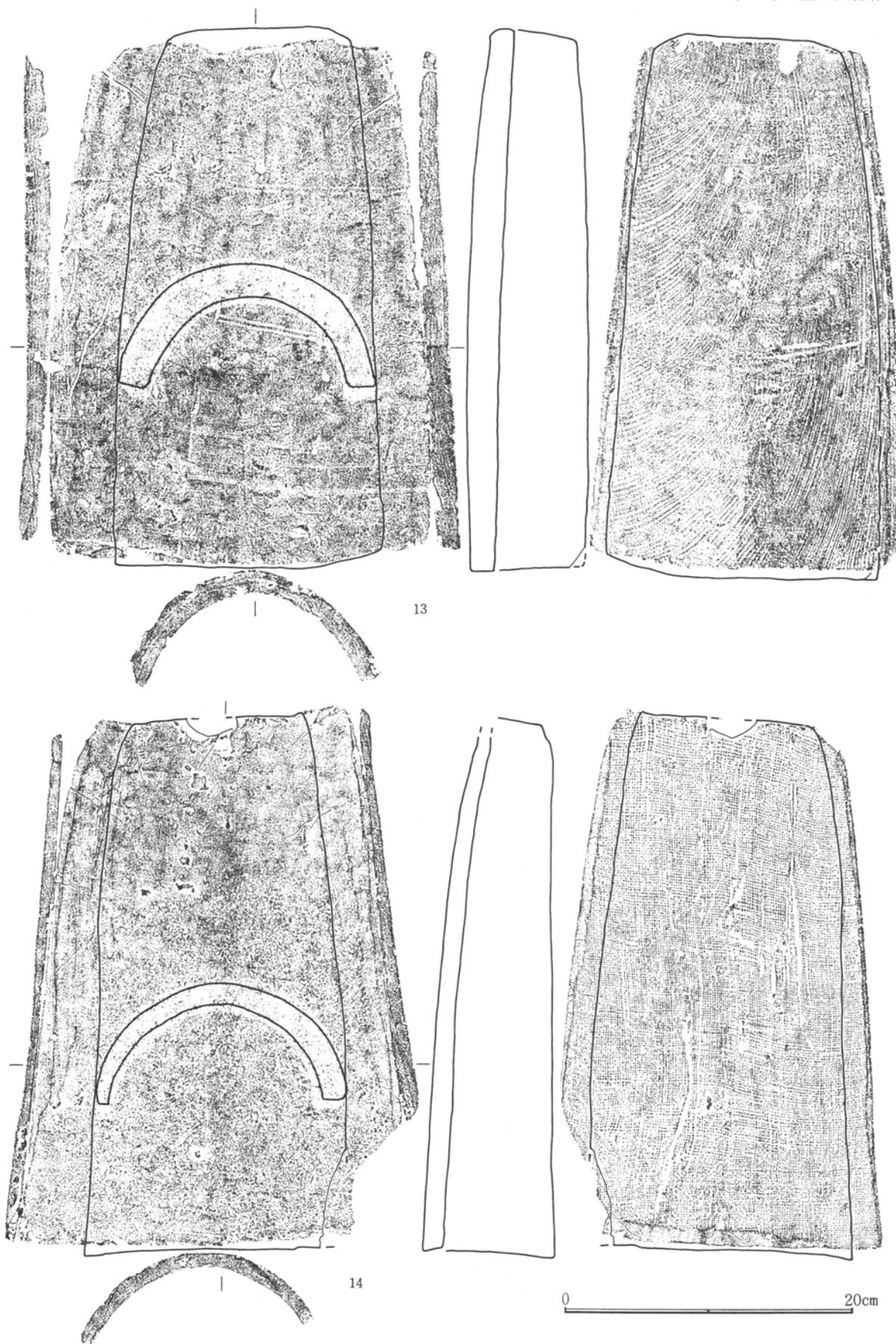
第3章 検出された遺構と遺物

D-144号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.8	5.9	4.3	平底	8	羽口				先端部片 スサ混入
2	須恵器坏	12.7	5.5	3.9	内1面油煙状付着物	9	羽口				先端部片 スサ混入
3	須恵器坏	11.6	5.4	3.9	右回転糸切り	10	羽口				先端部片 スサ混入
4	須恵器碗	13.9	6.8	5.7	内面「太」墨書文字	11	羽口				先端部片 スサ混入
5	須恵器瓶	18.8			口頸部径9.2	12	羽口				先端部片 スサ混入
6	須恵器甕				肩部片	13	男瓦	長37.7幅19.0厚2.6			裏面布目
7	須恵器甕				胴部片	14	男瓦	長38.0幅18.2厚1.8			裏面布目



第170図 D-144号住居跡出土遺物(1)



第171図 D-144号住居跡出土遺物(2)

第3章 検出された遺構と遺物

E<sub>3</sub>-150号住居跡 (第172・173図 P L.72・86)

座標値39077~39080・-54773~54777の範囲にある。E<sub>3</sub>-129号住居跡と重複するがこれより新しい時期の所産である。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈するが竈を付設する北東隅部は方形の一角が削られ短い一辺をなす。長軸3.7m・短軸2.85m、壁高15cm程度で浅い。竈の付設壁線を基軸とする主軸方位は設定できないが長軸の壁線方位はおよそN-90°-Eを示す。床面積7.7m<sup>2</sup>。

竈は北東壁の交する北東隅に付設され、壁線より約20cm突出する。竈の付設位置としては本遺跡での当該期住居跡では稀な事例の一つである。袖部の形跡はない。

床面はほぼ平坦をなす。北壁・南壁にそれぞれ2個の小穴が検出されているが、柱穴に供するかは不明である。径は25~30cm・深さ15~20cmである。貯蔵穴は検出されない。

遺物には土師器杯・甕・墨書文字痕のある須恵器小片の他、砥石の出土がある。

出土遺物

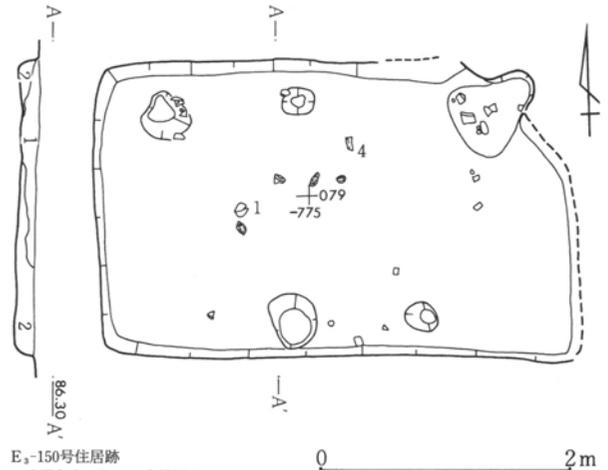
1は土師器杯1/3。平底で、砂粒の付着するいわゆる砂底である。口縁部・内面横位無で、体底部は篋削り。胎土は均一で黄橙色を呈す。

E<sub>3</sub>-150号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器杯	12.4	6.6	4.5	平底	4	土師器甕	19.0			コの字口縁
2	須恵器杯				内外面墨書痕	5	砥石	長8.5 幅3.8 厚3.0			流紋岩 多面使用
3	土師器甕	18.0			コの字口縁	6	砥石	長7.0 幅4.5 厚2.5			流紋岩 多面使用



第173図 E<sub>3</sub>-150号住居跡出土遺物



E<sub>3</sub>-150号住居跡  
 1. 暗褐色土 Loam 大粒混る  
 2. 褐色土 Loam 粒多量混る  
 竈  
 1. 暗褐色土 白灰色粘土・黒色土混る  
 2. 褐色土 Loam 粒多量混る  
 3. 暗褐色土 Loam・焼土粒混り絡りない  
 第172図 E<sub>3</sub>-150号住居跡

2は、内外面に墨書文字痕のある、須恵器の坏底部細片である。

3・4は土師器コノ字口縁の甕で、口縁小片である。胎土は細かく、淡橙色を呈す。

5・6は砥沢石製砥石。両者とも使い減りが著しい。片端部は欠損する。

E<sub>2</sub>-151号住居跡 (第174～176図 P L.73・86)

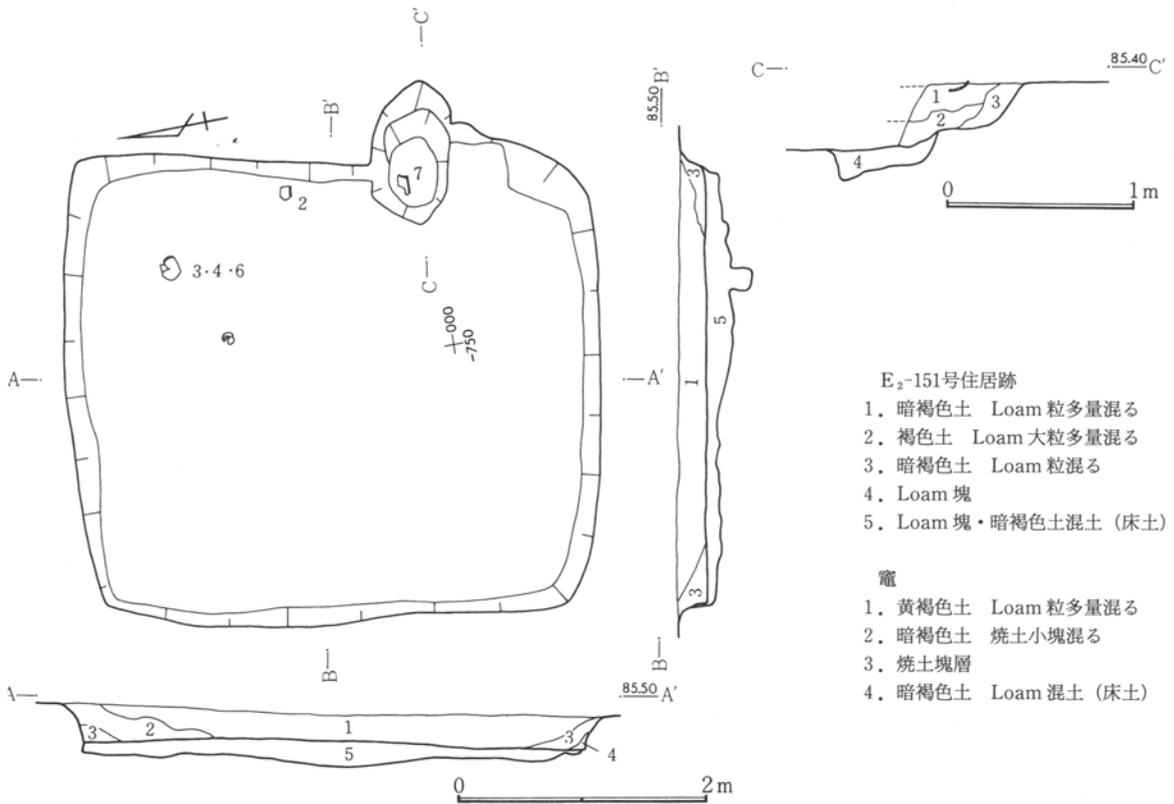
座標値38998～39003・-54748～54752の範囲にある。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸4.3m・短軸3.7m、壁高25cmを測る。主軸方位はN-100°-Eを示す。床面積13.3m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、南に偏って付設される。南側は攪乱のため詳細形状は不明である。東壁を約60cm突出させ楕円形に掘り込む。袖部の形跡はない。

床面はほぼ平坦をなし、踏み締まりは比較的良好である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。床下の掘形は10～20cmで平均化している。埋め土は、Loam塊を混える暗褐色土をもって床土としている。

遺物は須恵器坏・蓋・盤の類などがある。8世紀末から9世紀初頭になろう。



第174図 E<sub>2</sub>-151号住居跡

出土遺物

1～7は須恵器坏である。7は大振りでは通例では碗形とされることが多い。坏類はおおよそ3つの型(1・2・3～6)がある。直線的な体部の1は体部2/3欠損。やや扁平で小振り。粗砂粒多く、焼成堅緻で暗灰色を呈す。腰が丸みをもち張りのある2は体部1/2欠損。深目の体部に口縁は緩く外反。胎土均一で焼成やや甘く、外面白色、内面浅黄橙色を呈す。大きめに開く丸みのある体部は3～6である。3は1/3。細砂粒多く、焼成やや甘く白灰色を呈す。4は1/4。粗砂粒混じり、焼成良好で灰白色を呈す。5は1/3。腰部

第3章 検出された遺構と遺物

に紐巻痕が残る。細砂粒多く二次被熱。浅黄橙色を呈す。6は1/3。粗砂粒多く、焼成良好灰色を呈す。いずれも回転糸切り無調整。轆轤右回転である。

7は3/4。丸みのある腰部で深い体部。右回転糸切り無調整。細土均一で焼成やや甘い。内面浅黄橙、外面焼成時の吸炭。口径15cm。

8は環状摘みの蓋でほぼ完形。口縁部は短く直に折れる。天井右回転篋削り。細砂粒多く、焼成良好白灰色を呈す。口径13.5cm。

9は碗底部。腰部に張りなく体部は直線的になろう。底部の撫でで切り離しは不明瞭だが、中央が小塊状に凸で、回転篋起しの可能性がある。端部の丸い高めの高台でハの字状に開く。細砂粒多く焼成良好。白灰色を呈し、外面は焼成時の吸炭で黒灰色。

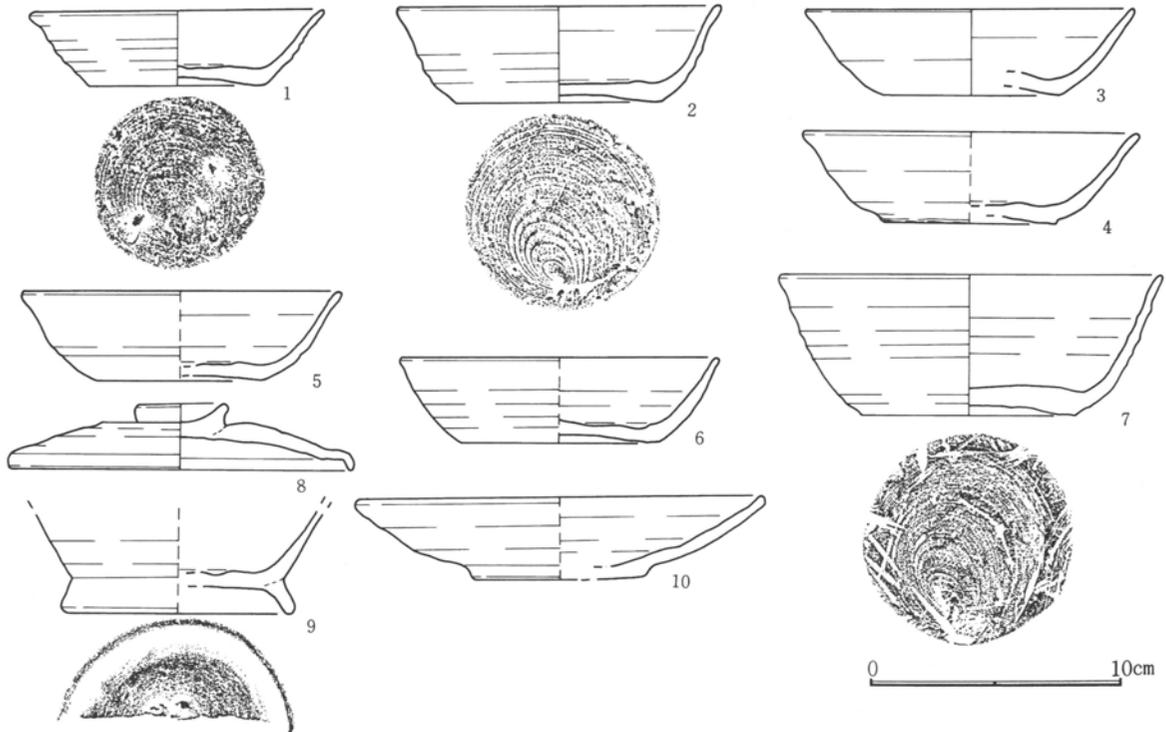
10は盤1/3。やや内湾気味に開く。無高台で、底部高めに突出する。底部手持ち篋削り。轆轤右回転。細土で焼成やや甘く、浅い黄橙色を呈す。

11はほぼ完形、高台付き盤になろう。体部は緩く内湾気味に開く。付け高台低めで端部丸くハの字状に付く。底部右回転篋削り。胎土中には安山岩質粒・長石粒が多い。焼成甘く明黄褐色を呈す。口径17.2cm。

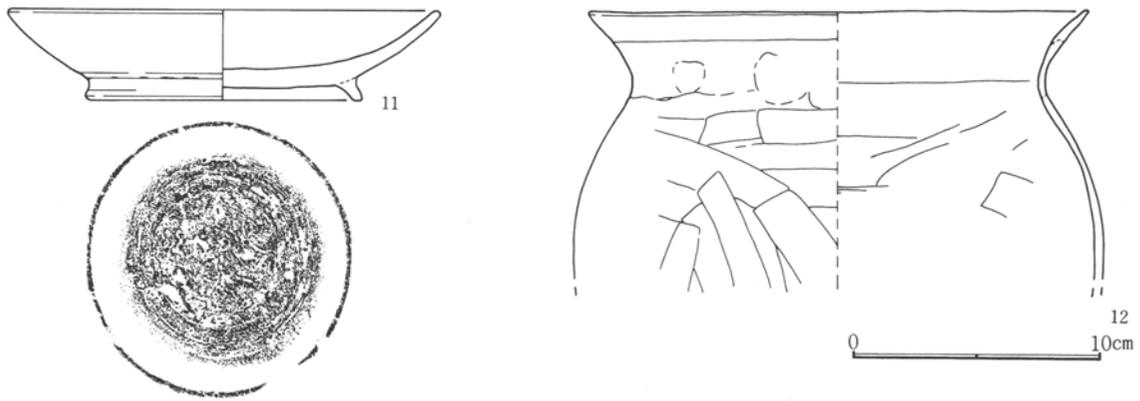
12は土師器甕口縁部小片である。肩部丸く張り口縁部は緩く、くの字状に開く。口縁上位に紐作り痕が残る。口縁部横位撫で、肩部横位・胴部斜～縦位篋削り、内面横位篋撫で。胎土均一で橙色を呈す。

E<sub>2</sub>-151号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器杯	11.8	7.0	2.9	右回転糸切り	7	須恵器杯	15.2	8.4	5.6	右回転糸切り
2	須恵器杯	13.0	8.0	3.8	右回転糸切り	8	須恵器蓋	13.8		2.7	環状摘
3	須恵器杯	13.0	7.0	3.5	回転糸切り	9	須恵器碗			9.4	付け高台
4	須恵器杯	12.4	7.0	3.6	回転糸切り	10	須恵器盤	16.4	7.0	3.3	無高台
5	須恵器杯	12.8	6.6	3.5	回転糸切り	11	須恵器盤	17.3	11.0	3.6	付け高台
6	須恵器杯	12.8	8.0	3.4	右回転糸切り	12	土師器甕	19.8			緩いくの字口縁



第175図 E<sub>2</sub>-151号住居跡出土遺物(1)



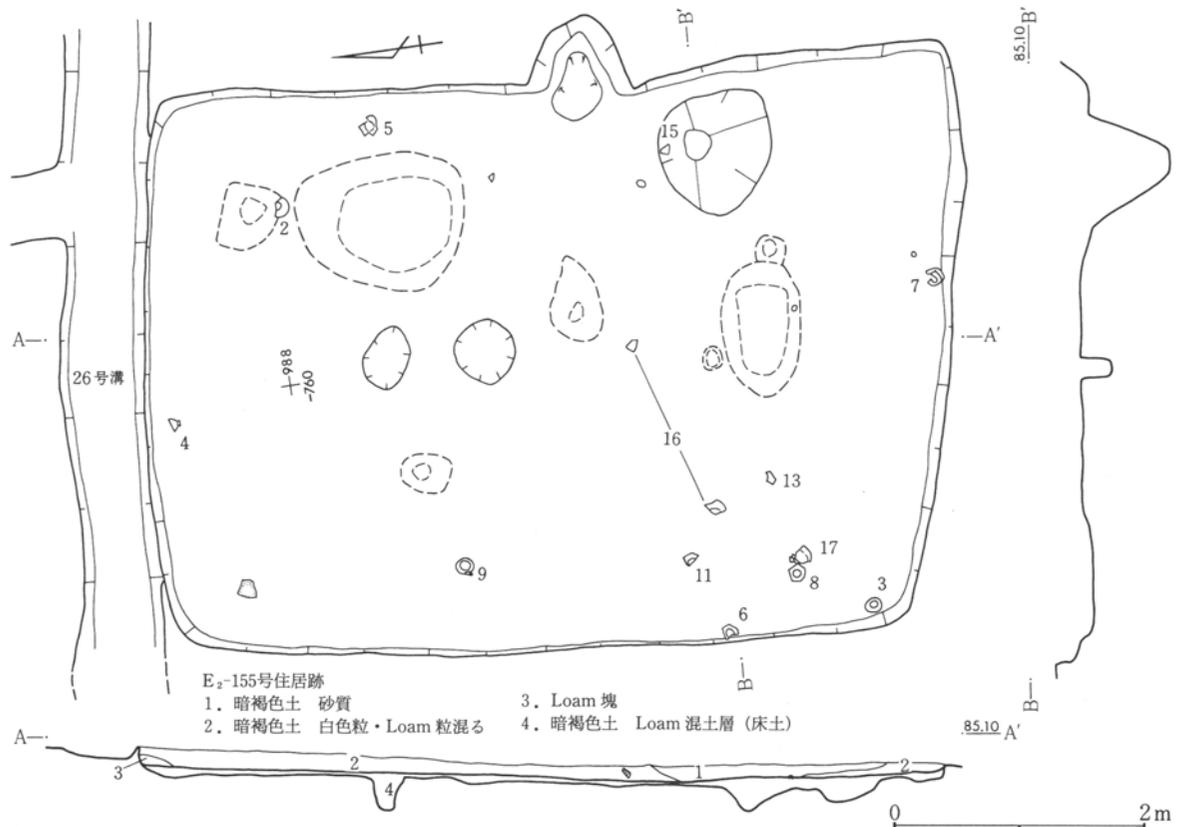
第176図 E<sub>2</sub>-151号住居跡出土遺物(2)

E<sub>2</sub>-155号住居跡 (第177～179図 P L. 73・86・87)

座標値38982～38990・-54757～54763の範囲にある。当住居より新しい26号溝と北壁が接してあるが壁線は辛うじて保たれている。

平面形態は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸6.4m・短軸4.6m、壁高15cmを測る。主軸方位はN-97°-Eを示す。床面積27.5m<sup>2</sup>。

竈は東壁の中央に付設され、壁線より約50cm突出して構築される。袖部は検出されていない。竈前の床面には広く、焼土及び灰層の流出が見られた。火床には厚い焼土層が形成されており、掘形は皿状に窪み多量の Loam 粒を混える暗褐色土が充填されている。



- E<sub>2</sub>-155号住居跡
- 1. 暗褐色土 砂質
  - 2. 暗褐色土 白色粒・Loam 粒混る
  - 3. Loam 塊
  - 4. 暗褐色土 Loam 混土層 (床土)

第177図 E<sub>2</sub>-155号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

床面は平坦をなし、竈前の踏み締まりは特に堅牢である。貯蔵穴と考えられる土坑は竈右脇にあり、径90cmの略円形で、深さ70cmのすり鉢状を呈する。柱穴は検出されていない。床下の掘形は床面下4～5cm程度で、数箇所土坑状あるいは小穴状の凹凸が見られるものいずれも浅い。Loam塊を混える暗褐色土をもって床土としている。

遺物は住居跡の角隅に近く散在しており、須恵器杯・蓋が主で完形度の高い遺物が多い。9世紀前半から中頃になろう。須恵器を中心とする遺物構成や遺物そのものは、舞台遺跡ないしは三和工業団地遺跡の窯跡産のものと同様に極めて近似する類や型状である。それらと同時期に存在した可能性が高く、なんらかの関連を窺わせる。しかし、施設としては工房跡を窺わせるようなものは検出されていない。

#### 出土遺物

1～13は須恵器杯。1～12は右回転糸切り無調整。13は回転糸切り後周辺回転篋削り。1～3は完形。底径7cm前半大。体部直線的で外傾度が小さく深め。粗砂粒多く、焼成良好。1は灰色、2・3は灰白色を呈す。口径11.8～12.5cm。4～8は一部欠損。底径8cmに近い。体部直線的で外傾度大きく浅目。砂粒多く、焼成良好。灰白色を呈す。口径12.7～13.1cm。9は完形。腰部はやや丸みをもち体部は直線的。粗砂粒多く、焼成良好。灰色を呈す。口径12.4cm。10は体部大半欠損。腰部は丸く体部は内湾して立ち上がる。細砂粒多く焼成やや甘い。白灰色を呈す。11・12は1/2。やや丸みのある体部は外傾度小さく深目。11は器肉厚く、胎土均一で焼成甘い。白灰色を呈す。12は粗砂粒多く、堅緻。灰色を呈す。口径12.0～12.4cm。13は1/3。大振りである。器肉厚く、丸い腰部から体部は内湾気味に立ち上がる。胎土均一で焼成堅緻、灰色を呈す。口径15.8cm。

14～16は須恵器蓋。16は摘み欠損、他は環状摘みである。口唇端部は丸く小さく直屈する。天井部右回転篋削り。胎土均一。14は酸化焰焼成、明橙色を呈す。他は焼成良好で灰白色を呈す。口径16.9～21cm。

17は小型碗で完形。腰部は強く張り体部は直線的で浅目。先細りで高めの付け高台。右回転糸切り。粗砂粒混じり焼成良好。灰白色を呈す。口径12.3cm。

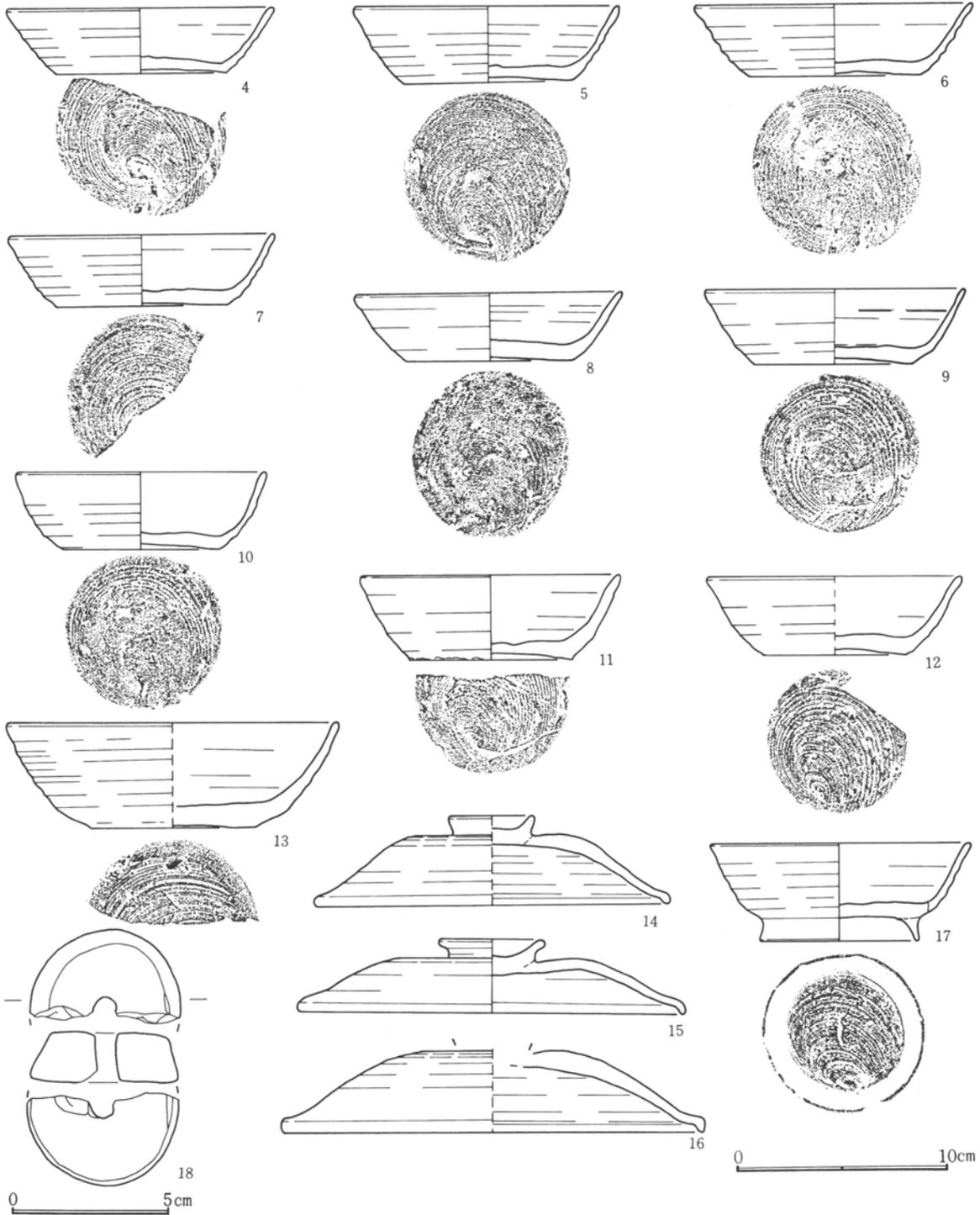
18は土製紡錘輪1/2。上径3.7cm・下径4.8cm。細土で灰白色を呈す。

E<sub>2</sub>-155号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器杯	11.8	7.0	3.3	右回転糸切り	10	須恵器杯	11.9	7.4	3.6	右回転糸切り
2	須恵器杯	12.4	7.0	3.4	右回転糸切り	11	須恵器杯	12.4	7.7	4.0	右回転糸切り
3	須恵器杯	12.5	7.4	3.5	右回転糸切り	12	須恵器杯	12.0	6.8	3.7	右回転糸切り
4	須恵器杯	12.7	8.1	3.1	右回転糸切り	13	須恵器杯	15.8	8.0	5.0	回転糸切り
5	須恵器杯	12.7	7.9	3.6	右回転糸切り	14	須恵器蓋	16.9		4.2	環状摘
6	須恵器杯	13.1	8.0	3.4	右回転糸切り	15	須恵器蓋	18.4		3.5	環状摘
7	須恵器杯	12.7	8.0	3.4	回転糸切り	16	須恵器蓋	21.0			
8	須恵器杯	12.4	7.8	3.2	右回転糸切り	17	須恵器碗	12.3	7.5	4.6	回転糸切り付け高台
9	須恵器杯	12.4	7.4	3.5	右回転糸切り	18	土製紡錘輪	3.7	4.7	1.6	半欠 (23.8×2g)



第178図 E<sub>2</sub>-155号住居跡出土遺物(1)



第179図 E<sub>2</sub>-155号住居跡出土遺物(2)

A<sub>2</sub>-161号住居跡 (第180・181図 P L. 73・87)

座標値39214~39219・-54779~54785の範囲にある。

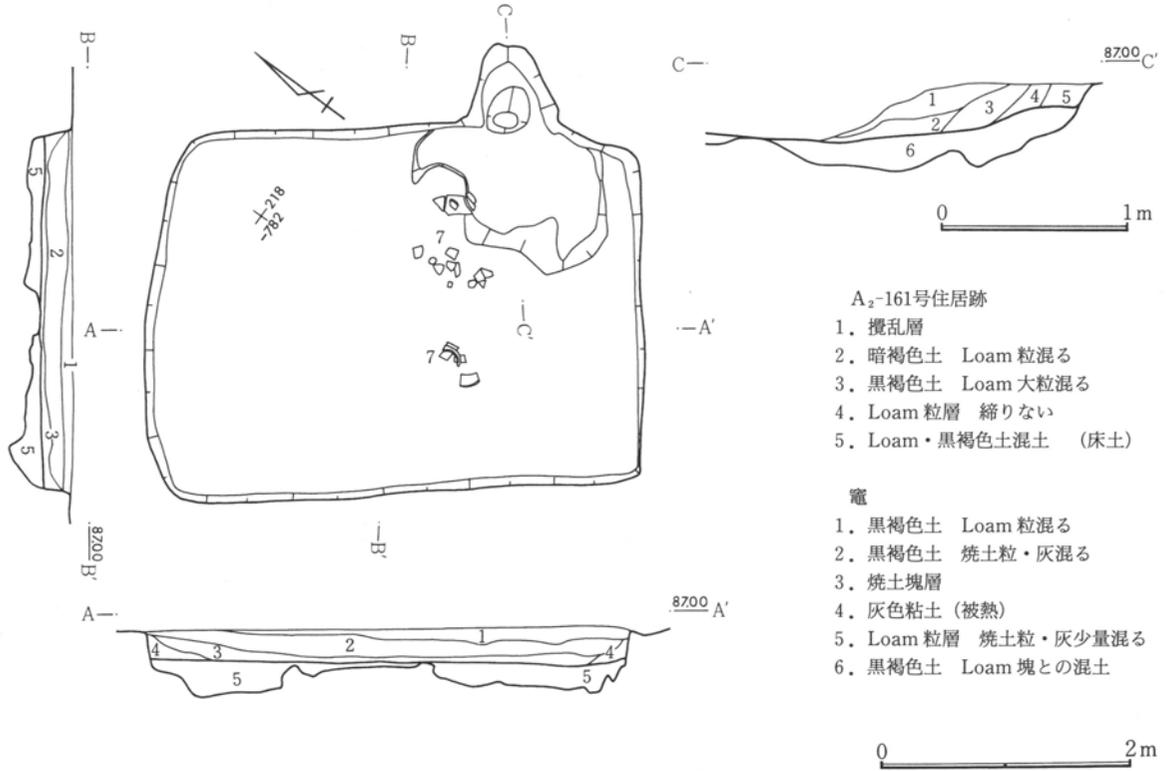
平面形態は南東北西方向に長軸をもつ方形を呈するが北西壁線は緩く膨らむ。規模は長軸3.95m・短軸2.9m、壁高は30cmを測る。主軸方位はN-58°-Eを示す。床面積10.6m<sup>2</sup>。

竈は北東壁にあり南に偏って付設される。壁線より約60cm突出して掘り込まれるが、袖部は検出されない。火床は薄い焼土面をなし、埋土は構築材と考えられる灰色粘土と焼土化した粘土塊が、火床直上に堆積する。

第3章 検出された遺構と遺物

床面は平坦をなすが、柱穴・貯蔵穴などは検出されない。床下の掘形は中央部を残し、四壁沿いに1mの幅で、深さ30cmに窪めてある。埋土は、黒褐色土塊を混える Loam 塊層を用いて床土とする。

遺物は竈前面から中央部の床面に、須恵器甕が出土する。舞台遺跡須恵器窯跡の灰原層出土品に酷似し窯跡焼製品と考えられる。9世紀前半代になろう。



第180図 A<sub>2</sub>-161号住居跡

出土遺物

1～3は土師器坏。2は竈内の出土で1/5。1・3は埋土の出土で1/3。小片である。1・2は丸みのある平底で、口縁部・内面は横位撫で。体部指頭痕、底部篋削り。3は平底に近く、体部中位でくびれ口縁は外反気味に開く。見込み部と底部に墨書文字を記すが解読不明。細土均一で橙色を呈す。

4・5は須恵器坏。埋土の出土。4は体部の一部欠損。底径大きく体部中位で緩くくびれる。回転糸切り後周辺右回転篋削り。使用摩滅著しく、油煙状附着物がある。細土で焼成やや甘く、灰白色を呈す。口径13cm。5は1/4。底径小さく体部は外反気味で深い。腰部は指頭状の粗雑な調整。右回転糸切り無調整。細土で焼成甘く、白灰色を呈す。4とはかなりの時間差がある。

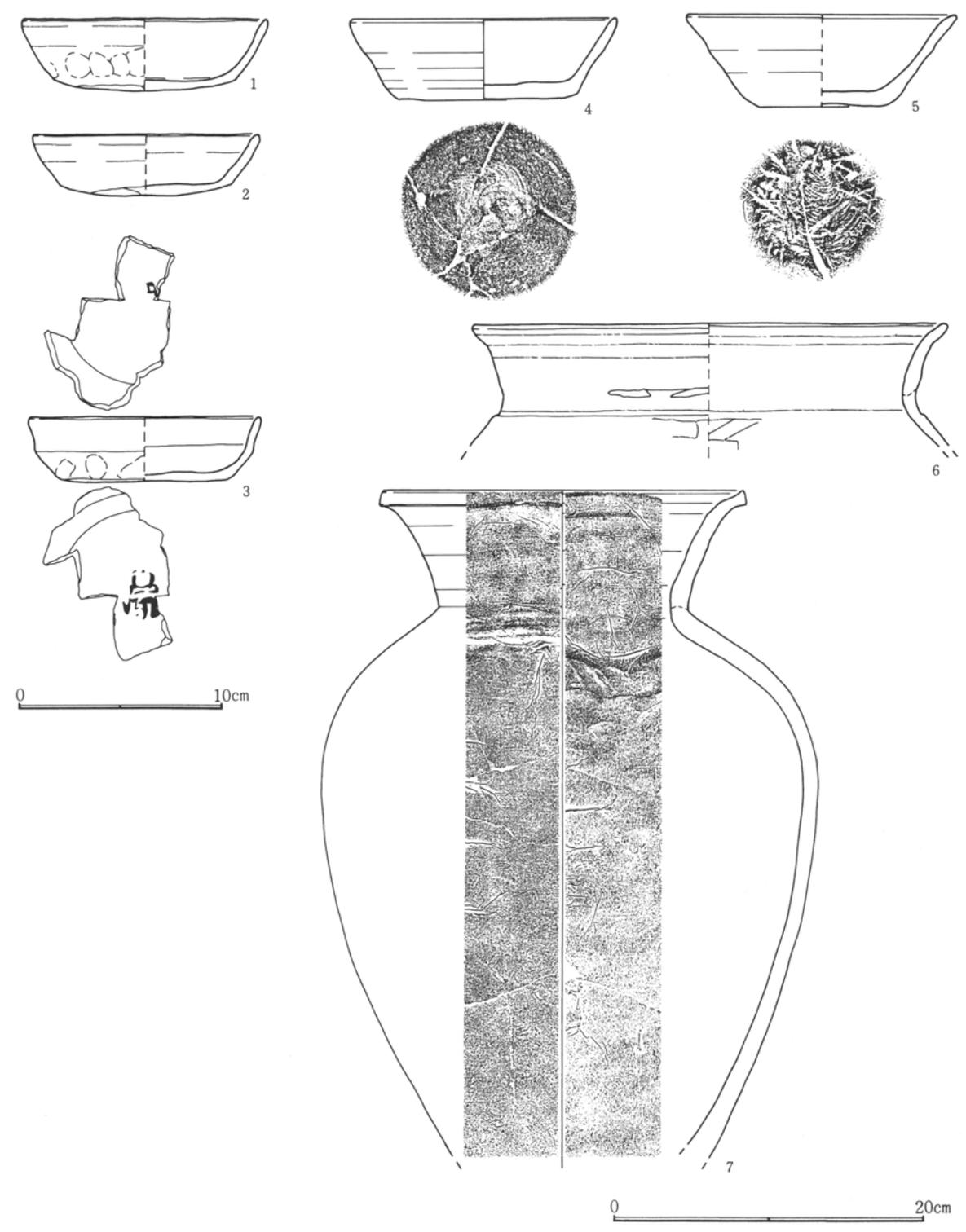
6は土師器コノ字状口縁の甕で小片である。

7は須恵器甕。埋土出土で底部欠損。口頸は外反気味に立ち上がり、口唇断面は略三角形。丸い撫で肩

A<sub>2</sub>-161号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.0	8.7	3.5	底部僅かな丸み	5	須恵器坏	13.0	6.0	4.5	右回転糸切り
2	土師器坏	11.0	8.2	3.0	底部僅かな丸み	6	土師器甕	23.0			緩いコノ字口縁
3	土師器坏	11.4	8.2	3.2	底部内外に墨書文字	7	須恵器甕	23.4	15.0	45.0	
4	須恵器坏	13.0	9.0	4.0	糸切り後回転篋削り						

から胴部は張りなく、緩くすぼまって平の底部に至ろう。胴部外面は痕跡程度の平行叩き文で叩具痕が面取り状に多面をなす。内面無文当て具痕で撫でが顕著。舞台遺跡窯跡の灰原に同類の遺物がある。最大径は肩部下位にあり32.5cm・口径24.0cm。粗砂粒は少なく、焼成堅緻で灰色を呈す。



第181図 A<sub>2</sub>-161号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

E<sub>2</sub>-168号住居跡 (第182図 P L.73・88)

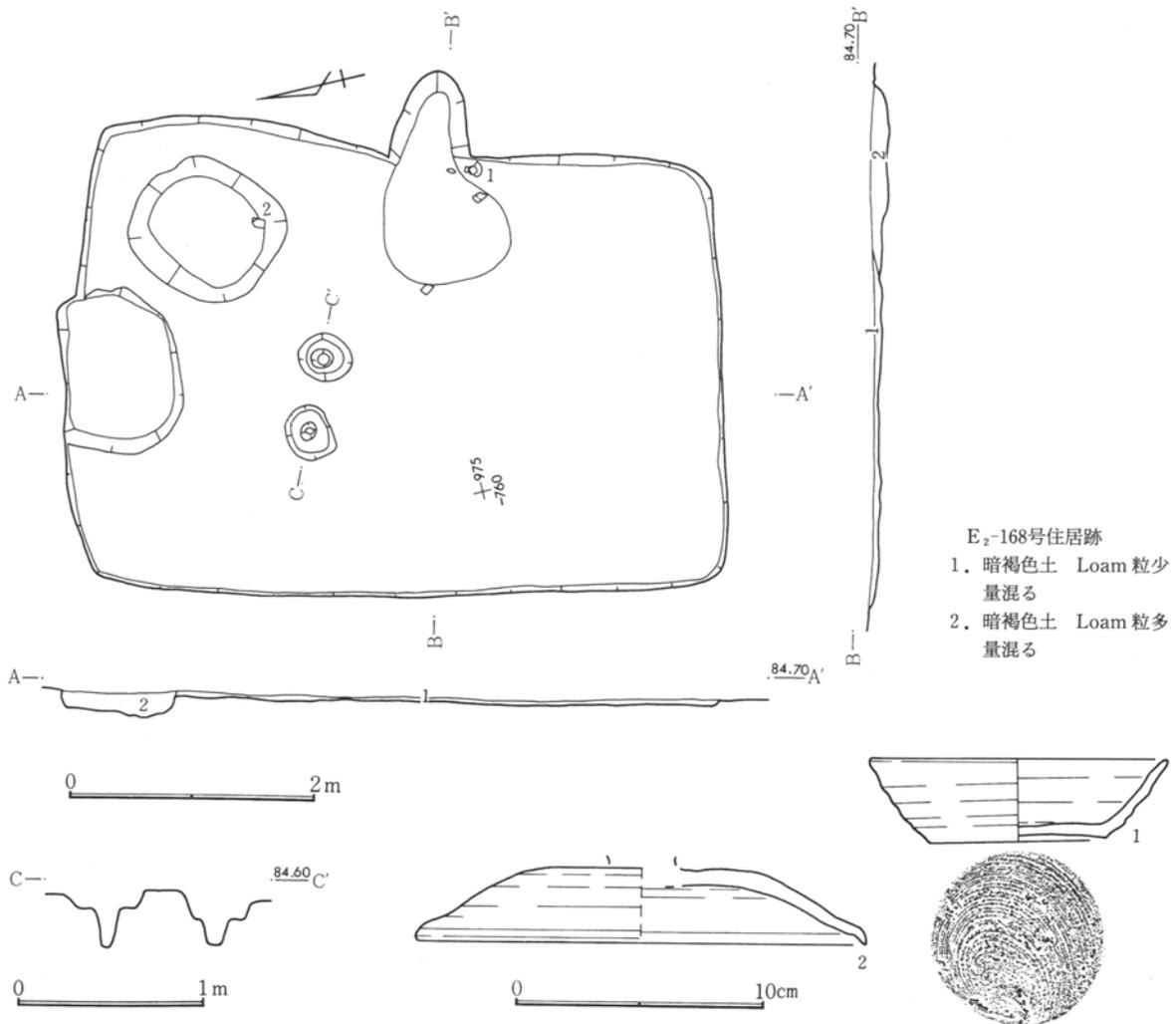
座標値38972~38979・-54756~54761の範囲にある。埋没谷地形の北縁に位置し、削平のためか遺存状態は平面形を確認する程度である。北側で1×1.3mの略方形の土坑と重複し、土坑が新しい。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸5.5m・短軸3.8m、壁高はほとんど残らず5cm程度である。主軸方位はN-105°-Eを示す。床面積17.8㎡。

竈は東壁にあり僅かに南に寄って付設される。袖部は削平のためか検出されず壁線を約70cm突出させて構築する。火床は赤褐色化した薄層をなし、構築材の崩土と考えられる淡黄白色粘土と焼土小塊の混合層で覆われていた。掘形は深さ約10cmの皿状窪みとなり、Loam粒を混えた黒褐色土を埋土とする。

床面は平坦をなし竈周辺から中央部にかけては堅牢に踏み締まる。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。住居中央やや北寄りに、二つの小穴が併置して検出されている。略円形の2段掘り込みで、いわゆる、ロクロ・ピットに形状が類似する。上径40cm・深さ20cmの一段目から、中央を径15cmでさらに深さ30cmの小穴を穿つ。当跡が須恵器工人の工房の可能性もあるが、これ以外に工房を示す積極的な事象は確認されていない。

遺物は少量で、竈周辺に数点残されるのみである。須恵器坏・蓋があり9世紀中頃にならう。



第182図 E<sub>2</sub>-168号住居跡・出土遺物

出土遺物

1は須恵器坏で体部の一部欠損。竈脇出土。体部直線的に開く。右回転糸切り無調整。粗砂粒少なく焼成良好、灰色を呈す。口径11.7cm。2は須恵器蓋。床面出土1/3で、摘み欠損。口縁部丸みをもって屈し、端部は細まって斜に開く。天井部右回転篋削り。砂粒多く焼成やや甘く、灰白色を呈す。

E<sub>2</sub>-168号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	11.9	7.0	3.3	右回転糸切り	2	須恵器蓋	18.0			摘欠損

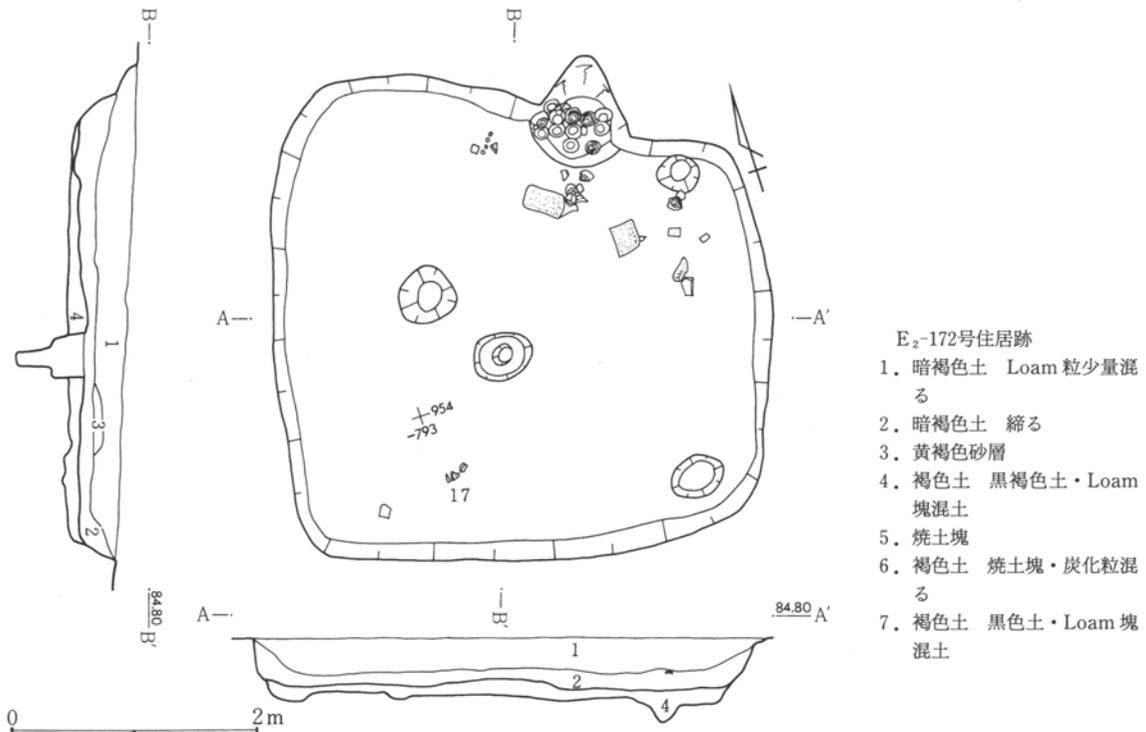
E<sub>2</sub>-172号住居跡 (第183~186図 PL.73・88・89)

座標値38952~38957・-54790~54795の範囲にある。

平面形態は東西軸が若干勝る略隅丸方形を呈するが、西壁線が長く形状は歪む。規模は長軸4.0m・短軸3.2~3.3m、壁高40cmを測る。壁面上縁は崩れて斜度がつく。主軸方位はN-24°-Eを示す。床面積11.9m<sup>2</sup>。

竈は北壁にあり東に偏って付設される。当遺跡での当該期住居では北面の竈設置例は希少である。壁線を略三角形に40~60cmほど突出させる。竈の前面には粗粒砂質の凝灰岩切り石があり竈構築材の一部と考えられる。火床部には13個体の須恵器坏が検出されている。坏は完形もしくは完形にちかく、全てが裏返し状態である。坏は重なり合うことなく、平滑面をなして隙間無く配置されている。火床の湿気防止を目的とした施工であろうか。

床面は中央部が緩く起伏し、全体として踏み締まりは堅牢である。小穴が数個検出されているが柱穴としての配置やや貯蔵穴に相当するものは無い。なお、住居中央部には2段掘り込みの小穴があり、いわゆるロクロ・ピットの形状に類似する。上径40cm・深さ15cmの一段目から、中央を径15cmの深さ30cmで小穴を穿つ。E<sub>2</sub>-168号住居跡と同様に須恵器工人工房の可能性が強いが、当跡でもまたそれ以上の確証を示す事象は見

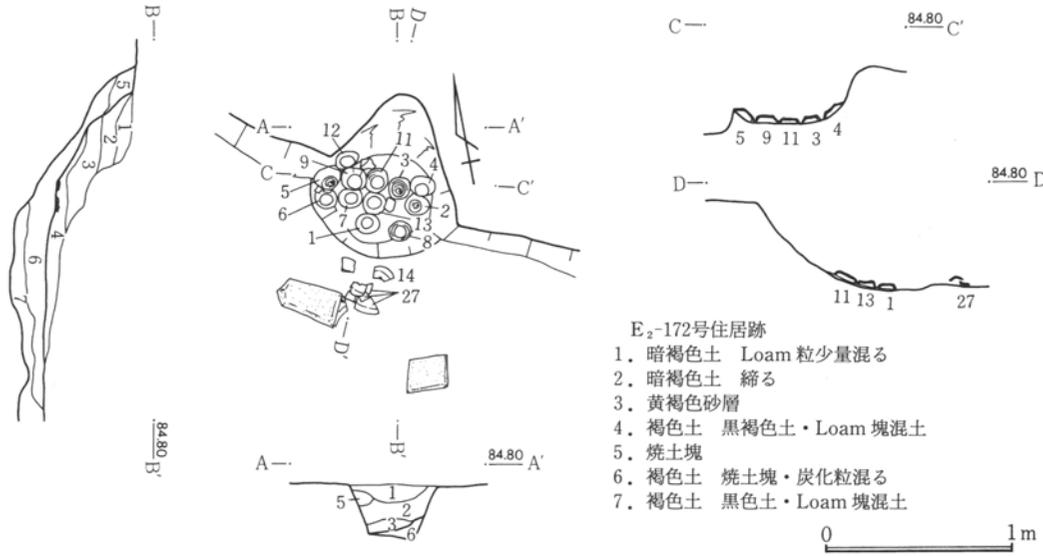


第183図 E<sub>2</sub>-172号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

だせない。床下の掘り方は深さ10cm程度でほぼ平坦をなし、黒褐色土と Loam 土の混合層で床土とする。

遺物は竈内に設置された須恵器坏類が主で、その他須恵器蓋・土師器甕の小片がある。竈に使用された多量の須恵器は完形度は高いものの、使用による破損とは考えられない個体がある。数個体に見られる底部の一字の亀裂は須恵器焼成時に生じたものと考えられる。このような破損品を一括・大量に入手できるのは、須恵器工人の構成員であることが最も条件に適うが、当住居の住人が窯跡操業と極めて近い時期に存在していたであろう可能性が強い。そして、遺物細部の出来具合からは、舞台遺跡窯跡の製品よりは三和工業団地遺跡のそれに近い。9世紀前半から中頃になろう。



第184図 E<sub>2</sub>-172号住居跡竈

#### 出土遺物

1～20は須恵器坏。1～13は竈内火床部、14～17は床面、18～20は埋土からの出土である。全て轆轤回転は右で、底部回転糸切り後無調整である。総じて底部の切り離し処理が粗略である。11・19は腰部に紐作り痕が明瞭に残る。1は腰部の丸みが少なく偏平である。2～12は腰部の丸みが強く、体部上半は外反気味に開く。13は体部の外傾度が小さく直立気味。14は体部が偏平で丸みが強い。15・16は腰部に丸みをもち体部は外反ぎみ。17は体部の丸み少ない。18は体部の直線的。19・20は腰部の丸み強い。胎土は砂粒少なく焼成は良好。灰白色ないしは白灰色を呈す。8・10・18は焼成甘く淡赤橙色・浅黄橙色を呈す。口径11.7～14.0 cm。

21～24は須恵器蓋で埋土からの出土。轆轤回転は右で、天井部は回転篋削り。21は1/3。小型で環状摘み。口縁部は直屈し端部は細まる。粗砂粒多く焼成良好。灰色を呈す。口径13.5cm。22は焼け歪みで天井は偏平。環状摘み。23・24は摘み欠損。口縁の屈曲小さく端部は短く矩形。22・24は細砂粒。焼成良好で灰色を、23は砂粒少ない。焼成甘く、浅黄橙色を呈す。口径18.5～19.0cm。

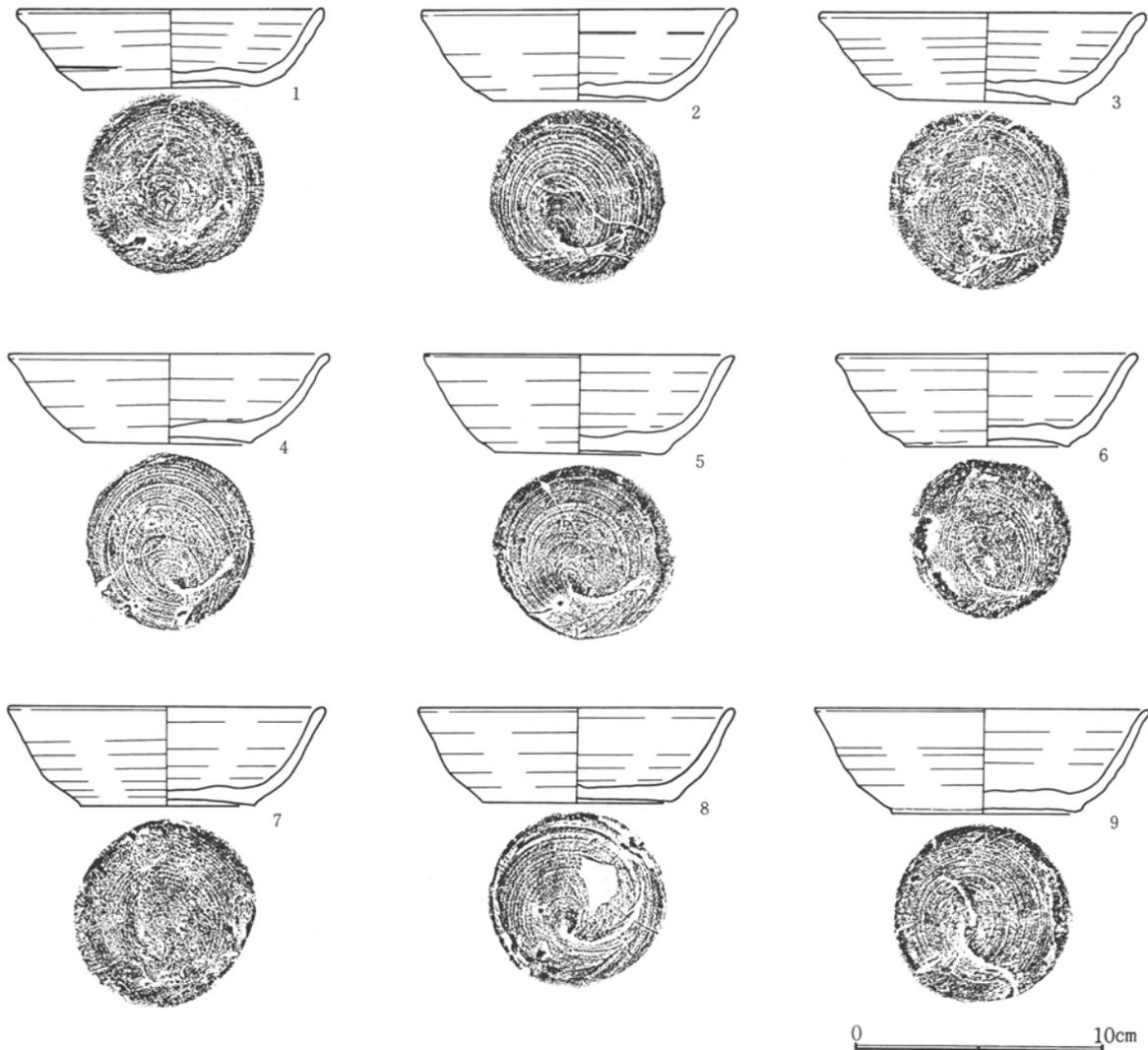
25・26は須恵器碗。埋土出土で底部の1/2。回転糸切り付け高台。轆轤右回転。25は腰部張り高台は高め。細土で焼成やや甘く灰白色を呈す。26は丸みのある腰部でハの字状に開く高台。細土で焼成良好。黄灰色を呈す。

27・28は土師器甕でコの字口縁。27は上半部1/2。竈前床面出土。肩から胴部は丸く張る。28は埋土出土。口縁のコの字は変形著しい。肩部は作らない。口縁部横位撫で、肩部横位・胴部斜～縦位篋削り。内面撫で

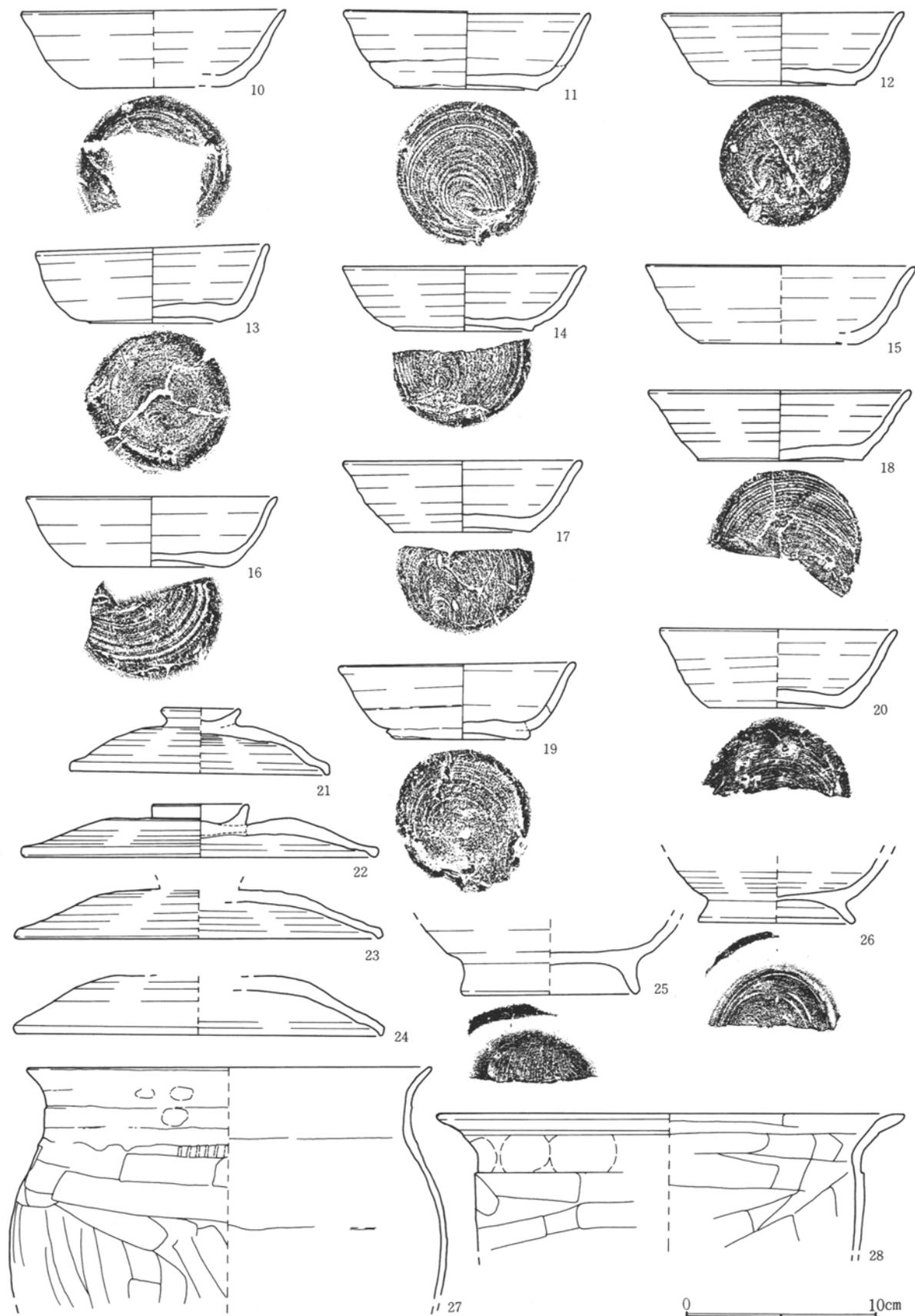
調整。細土で鈍橙色を呈す。

E<sub>2</sub>-172号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	12.5	7.0	3.2	右回転糸切り	15	須恵器坏	14.0	8.0	4.0	回転糸切り
2	須恵器坏	12.8	7.0	3.7	右回転糸切り	16	須恵器坏	13.0	8.0	3.6	回転糸切り
3	須恵器坏	13.2	7.1	3.5	右回転糸切り	17	須恵器坏	12.4	7.2	3.7	右回転糸切り
4	須恵器坏	13.0	6.7	3.6	右回転糸切り	18	須恵器坏	13.6	8.4	3.6	回転糸切り
5	須恵器坏	12.6	6.8	4.0	右回転糸切り	19	須恵器坏	12.2	7.2	3.8	右回転糸切り
6	須恵器坏	12.1	6.1	3.8	右回転糸切り	20	須恵器坏	12.2	6.8	4.0	回転糸切り
7	須恵器坏	13.0	7.6	3.8	右回転糸切り	21	須恵器蓋	13.5		3.3	環状摘
8	須恵器坏	12.8	7.0	4.0	右回転糸切り	22	須恵器蓋	18.5		2.8	環状摘
9	須恵器坏	13.2	7.2	4.2	右回転糸切り	23	須恵器蓋	19.0			摘欠損
10	須恵器坏	13.6	7.6	3.9	回転糸切り	24	須恵器蓋	19.0			摘欠損
11	須恵器坏	11.7	6.6	4.0	右回転糸切り	25	須恵器椀		9.0		回転糸切り付け高台
12	須恵器坏	12.4	7.2	3.7	右回転糸切り	26	須恵器椀		8.0		回転糸切り付け高台
13	須恵器坏	12.2	6.8	4.0	右回転糸切り	27	土師器甕	21.0			コの字口縁
14	須恵器坏	12.6	7.2	3.3	右回転糸切り	28	土師器甕	24.0			土鍋形態か



第185図 E<sub>2</sub>-172号住居跡出土遺物(1)



第186図 E<sub>2</sub>-172号住居跡出土遺物(2)

E<sub>3</sub>-174号住居跡 (第187・188図 P.L.73・89)

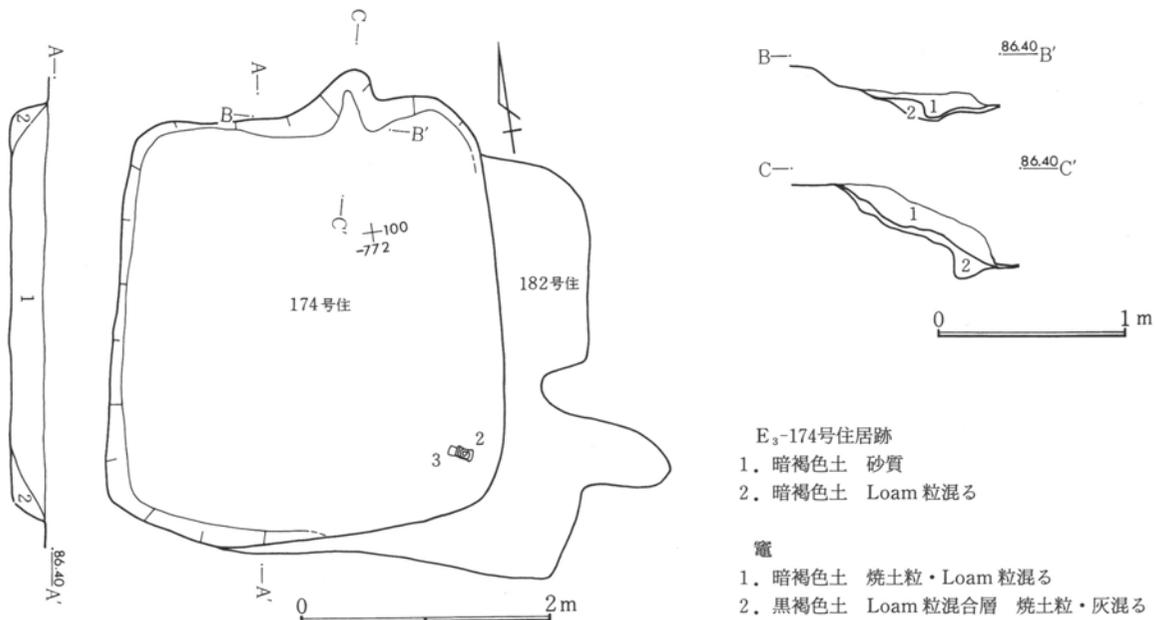
座標値39097～39102・-54771～54775の範囲にある。E<sub>3</sub>-182号住居跡と重複するが、これよりも新しい時期の所産である。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈するが、東壁線は上記の重複によって判然としない。規模は長軸3.4m・短軸3.0mになろう。壁高は40cmを測る。主軸方位はN-13°-Eを示す。床面積9.2m<sup>2</sup>。

竈は北壁屋や東に偏って付設され壁線を約40cm突出させ構築される。壁面にかかる範囲は傾斜がきつく煙道部にあたり、火床面は住居内に位置すると考えられるが不明瞭である。

床面はE<sub>3</sub>-182号住居跡の上位面に構築されているため踏み締まりの堅牢さはない。柱穴・貯蔵穴などの施設は検出されていない。

遺物は少なく、須恵器碗類と灰釉陶器があるものの、いずれも小片である。10世紀前半になろうか。



第187図 E<sub>3</sub>-174号住居跡

出土遺物

1～4は須恵器碗で埋土中の出土。1は体部上半で1/4。口縁は大きく外反して開く。轆轤回転右。細土で燻し焼成。2く4は底部。回転糸切り付け高台。2は丸い腰部で角高台。細砂粒多く焼成堅緻で灰色を呈す。3は丸みの強い腰部で、ハの字状に大きく開く先細りの底高台。4は端部が丸まる底高台。3・4とも細土で焼成甘く灰白色を呈す。

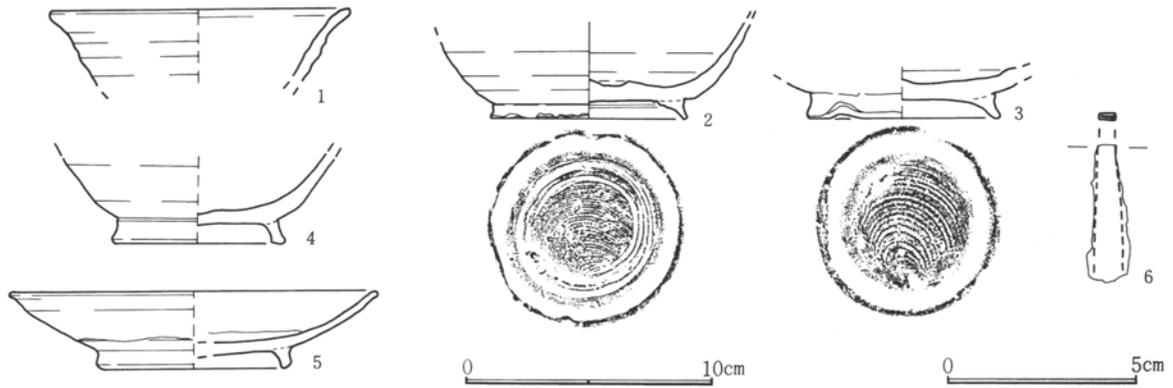
5は灰釉陶器皿。埋土出土で小片。口唇小さく外反。底・体部は丁寧な篋削り調整。緩い三日月高台で端部の稜は無い。漬け掛け施釉。折戸53号窯式（大原2号窯式）期になろうか。

6は柄状鉄器である。偏平細板状。現長3.5cm・厚み0.2cm・幅0.4～0.8cm。

E<sub>2</sub>-174号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	12.0				4	須恵器碗		7.0		回転糸切り付け高台
2	須恵器碗		8.0		回転糸切り付け高台	5	灰釉陶器	14.6	7.8	3.0	大原2号窯式期
3	須恵器碗		7.6		回転糸切り付け高台	6	鉄製品	長3.0幅0.4～0.8厚0.2			

第3章 検出された遺構と遺物



第188図 E<sub>3</sub>-174号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-191号住居跡 (第189・190図 P L. 74)

座標値38970~38974・-54722~54726の範囲にある。西縁はE<sub>2</sub>-190号住居跡と、南側で27号溝とそれぞれ重複し、前者より新しく後者より古い。27号溝によって南壁と壁沿いの床面は深く別られる。

平面形態及び規模は南側の消失によって定かではないが、東西に長軸をもつ方形を呈しよう。規模は長軸3.3mで、短軸2.9mになろう。全体の削平が著しく、壁高は平面形状を辛うじて認める程度である。主軸方位はN-108°-Eを示す。床面積9.4m<sup>2</sup>。

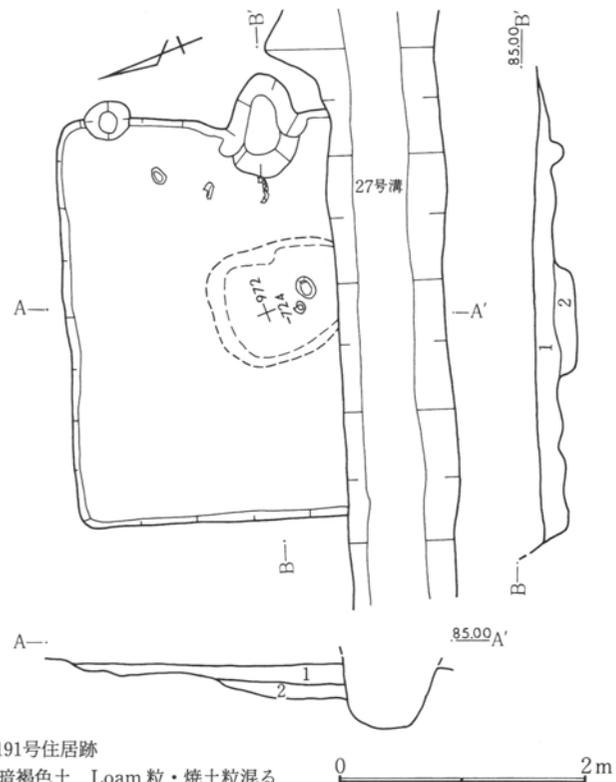
竈は東壁にありやや南に寄って付設される。壁線より40cm余り突出して構築されるが上述のように削平が深く竈も痕跡程度で、火床の焼土面は微弱である。袖部は小さく張り出す様相が見られたが不明瞭である。

床面は平坦をなし竈前から中央部にかけては薄い硬化面が認められた。柱穴・貯蔵穴などの施設は検出されていない。床下の掘形は中央部に1×1.2mの楕円形土坑が穿たれる。埋土はLoam塊を混じえる暗褐色土である。

遺物は少なく、土師器甕類の小片がある。9世紀中頃から後半になろう。

出土遺物

土師器甕で1・2はコの字の口縁部と、3・4は底部である。床面からの出土でいずれも小片である。1は小型で台付きになろう。2は胴部の張りが強い。口縁部横位撫で、肩部横位篋削り。内面撫で調整。3・4は外面縦位篋削り。4は器肉が厚い。砂粒多く、赤橙色・淡黄橙色を呈す。



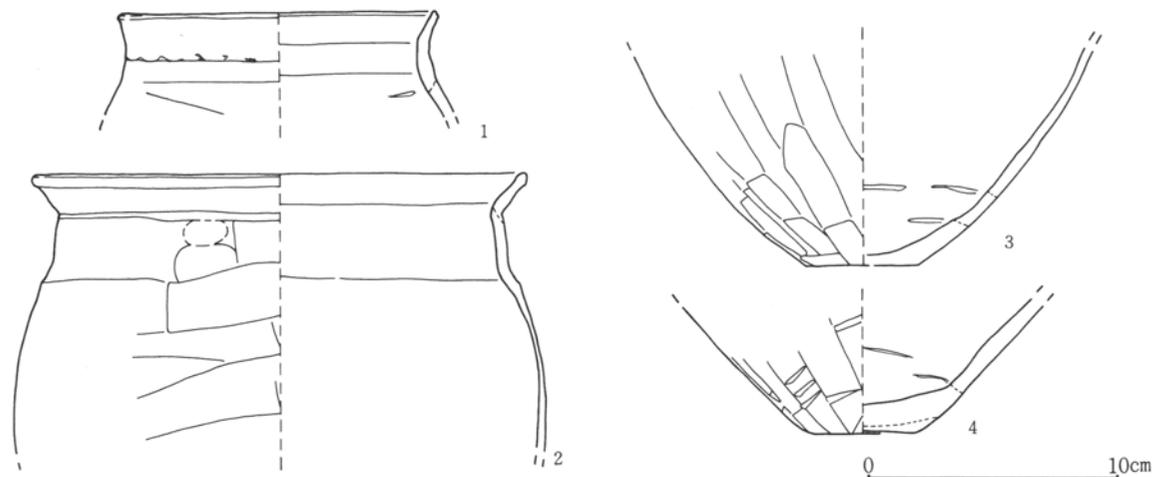
E<sub>2</sub>-191号住居跡

- 1. 暗褐色土 Loam粒・焼土粒混る
- 2. 暗褐色土 Loam粒混る

第189図 E<sub>2</sub>-191号住居跡

E<sub>2</sub>-191号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器甕	12.6			台付き小型甕	3	土師器甕		4.4		
2	土師器甕	19.8			コの字口縁	4	土師器甕		4.0		



第190図 E<sub>2</sub>-191号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-192号住居跡 (第191・192図 P L.74・89)

座標値38987~38991・-54703~54707の範囲にある。南側で11号方形周溝墓と接している。

平面形態は南北方向に長軸をもつ方形を呈する。規模は長軸3.5m短軸3.0m、壁高は痕跡程度で約5cmに満たない。主軸方位はN-117°-Eを示す。床面積9.0m<sup>2</sup>。

竈は東壁に付設されるが、大きく南に偏って南東壁の隅である。袖部の痕跡は無く、壁線を40cmほど突出させて構築する。

床面は平坦をなすが踏み締まりに堅牢さはない。柱穴・貯蔵穴などの施設は検出されない。床下の堀形は

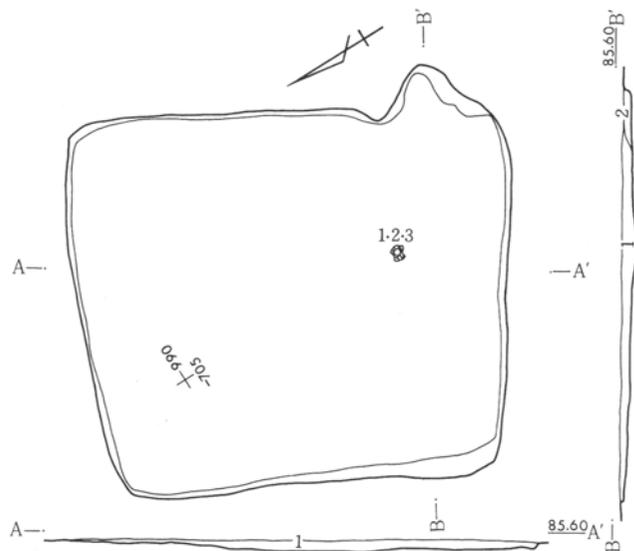
部分的・不規則に凹凸が見られ、Loam塊の混じる暗褐色土で埋まる。

遺物は少量で、土師器・酸化炎焼成土器の碗がある。10世紀後半から末頃になろう。

出土遺物

1・2は土師器碗になろう。床面出土で底部欠損。口縁部下位に緩い段をなす。体部は指頭痕と細かな横位篋削りを施す。器面の荒れが著しい。1は外面、2は内面に黒褐色の塗彩がある。細土で1は内面橙色、2は外面白灰色を呈す。口径14.3・15.0cm。

3は足高高台の大振り碗である。床面出土で体部の大半が欠損。高く、端部が



E<sub>2</sub>-192号住居跡

- 1. 暗褐色土 Loam粒混る
- 2. 暗褐色土 焼土粒混る

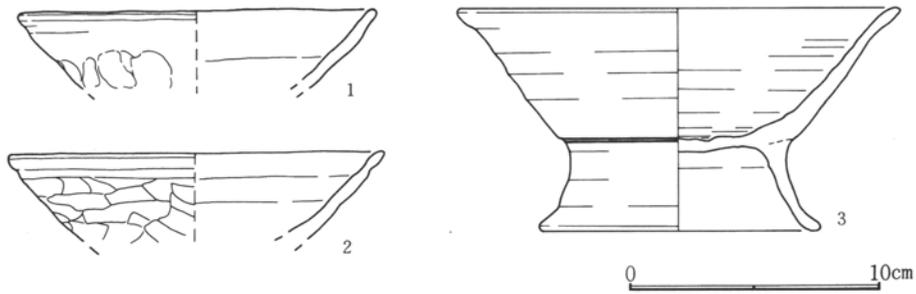
第191図 E<sub>2</sub>-192号住居跡

第3章 検出された遺構と遺物

大きく反って開く付け高台。体部は腰をなさず大きく外傾して直線的で、口縁は外反気味に開く。見込み部  
轆轤目著しく右回転。細土で酸化炎焼成。淡黄白色を呈す。口径17.6cm・高台高3.8cm。

E<sub>2</sub>-192号住居跡出土遺物計測表

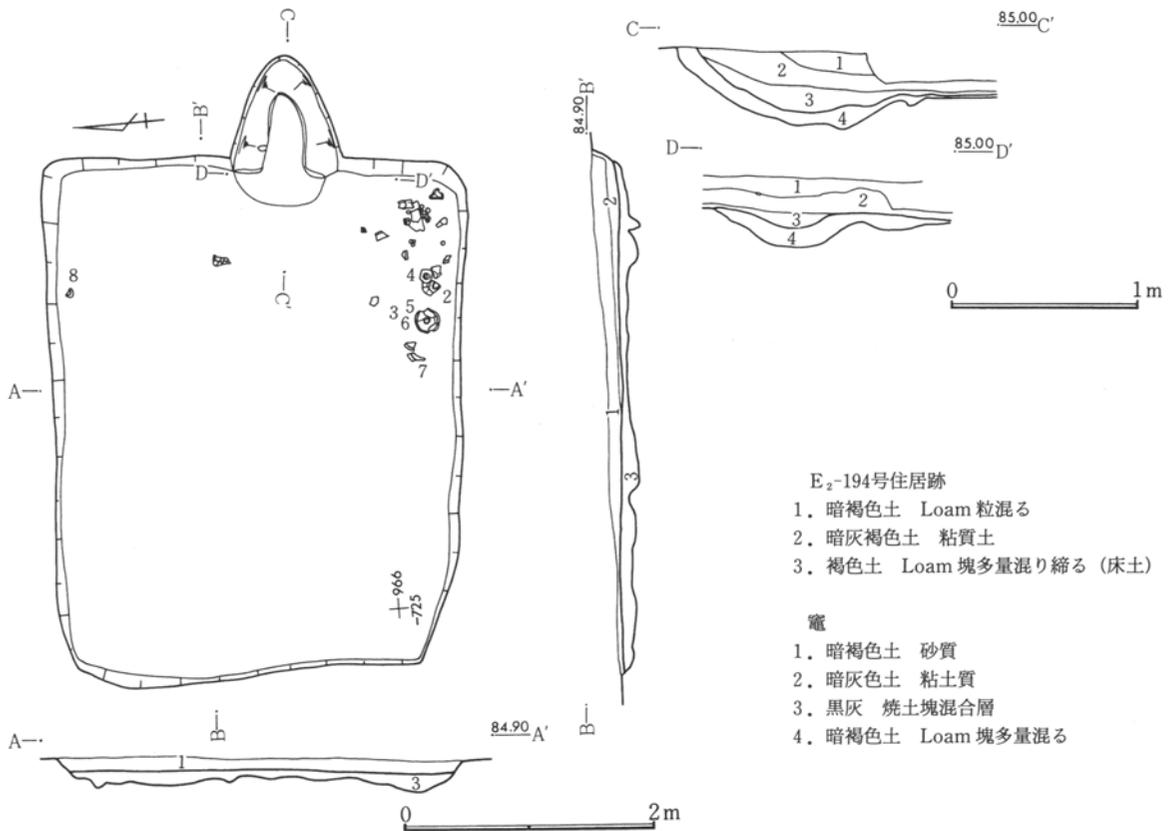
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	14.3				3	須恵器椀	17.6	11.2	8.8	足高高台
2	土師器坏	15.0									



第192図 E<sub>2</sub>-192号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-194号住居跡 (第193~195図 P L. 74・89)

座標値38965~38969・-54720~54726の範囲にある。南側で東西走る52号溝と重複するがこれより古い  
時期の所産である。



第193図 E<sub>2</sub>-194号住居跡

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈するが、南東隅の壁線が歪む。規模は長軸4.15m・短軸3.25m、壁高10cmを測る。主軸方位はN-95°-Eを示す。床面積12.3m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、やや南に偏って付設される。壁線から大きく約80cm突出させて構築する。袖部は形成されていない。竈内には厚く黒色灰層が堆積し、火床は薄く焼土面が形成されている。

床面は平坦をなし、竈前から中央部にかけての踏み締まりは良好である。竈右脇、南東隅には貯蔵穴が認められる。45×50cm・深さ30cmの略方形である。柱穴は検出されていない。床下の掘形は10cm前後の深さで小さな凹凸が多い。Loam塊を多く混じえる褐色土をもって床土とする。

遺物は貯蔵穴とその周辺に多く、須恵器碗・土師器甕等である。なお「覺」?文字刻書の須恵器耳皿がある。9世紀末から10世紀初頭にならうか。

出土遺物

1は土師器坏。底部欠損で1/4。埋土の出土。体部直線的で口唇部細まる。平底にならう。口縁・内面横位撫で、体部は指頭痕著しく底部篋削り。細砂粒多く橙色を呈す。

2・3は須恵器碗。貯蔵穴周辺の床面出土。体部の一部欠損。回転糸切り付け高台。2は体部直線的で逆三角形に開く。内面燻し焼成。細土で焼成やや甘く褐灰色を呈す。口径14.8cm。3は大振りでわずかに丸みをもつ深い体部。口唇は強く外屈する。角高台で低い。砂粒多く焼成やや甘い。灰黄色を呈す。口径17.2cm。

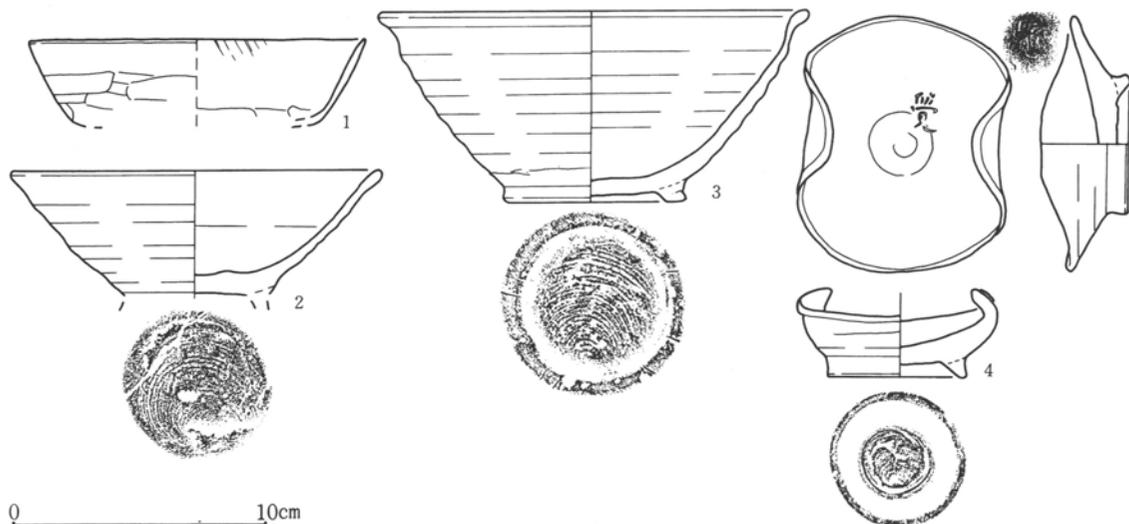
4は須恵器耳皿。貯蔵穴周辺床面で完形。回転糸切り付け高台。見込み部に「覺」?の篋書文字を刻す。砂粒多く焼成良好。灰色を呈す。口径10cm。

5～7は土師器甕。貯蔵穴出土で口縁部片。コの字口縁で、6は小型台付きにならう。口縁部の器肉厚目で口縁やや緩く後半期に属しよう。口縁部指頭痕後横位撫で、肩部横位篋削り。細土で明褐色を呈す。

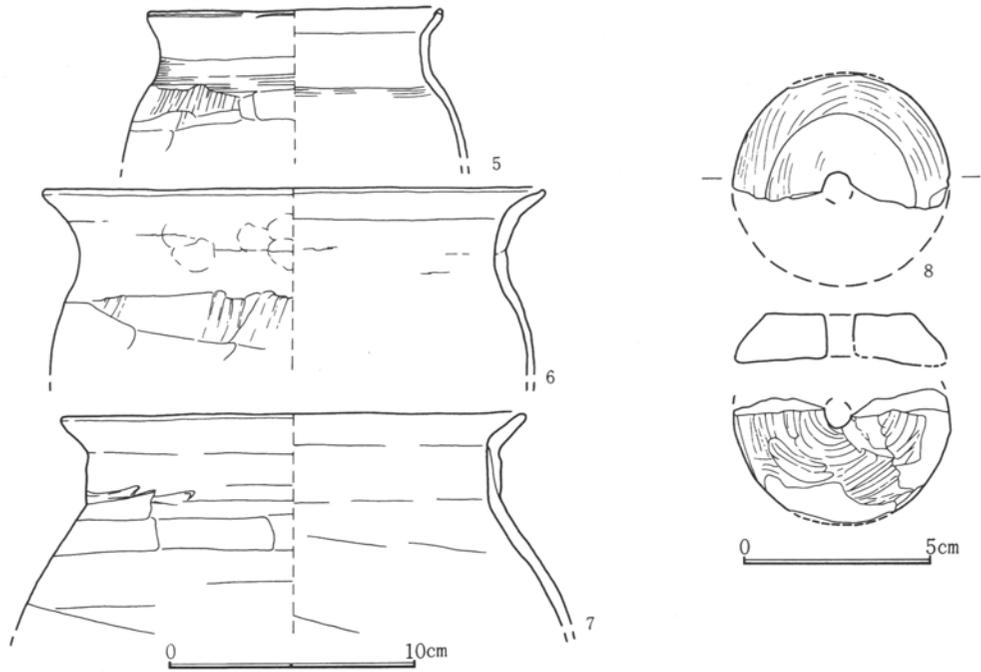
8は土製紡錘輪1/2。北壁際床面。上面・側面上半篋削り後全面篋磨き。細土で黒褐色を呈す。

E<sub>2</sub>-194号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	13.4				5	土師器甕	11.8			台付き小型甕コの字
2	須恵器碗	14.8			回転糸切り付け高台	6	土師器甕	20.0			コの字口縁
3	須恵器碗	17.2	7.3	7.5	回転糸切り付け高台	7	土師器甕	18.5			コの字口縁
4	須恵器耳皿	10.1	5.5	3.5	見込み「覺」刻書文字	8	土製紡錘輪	4.0	5.5	1.3	篋磨き47.6g



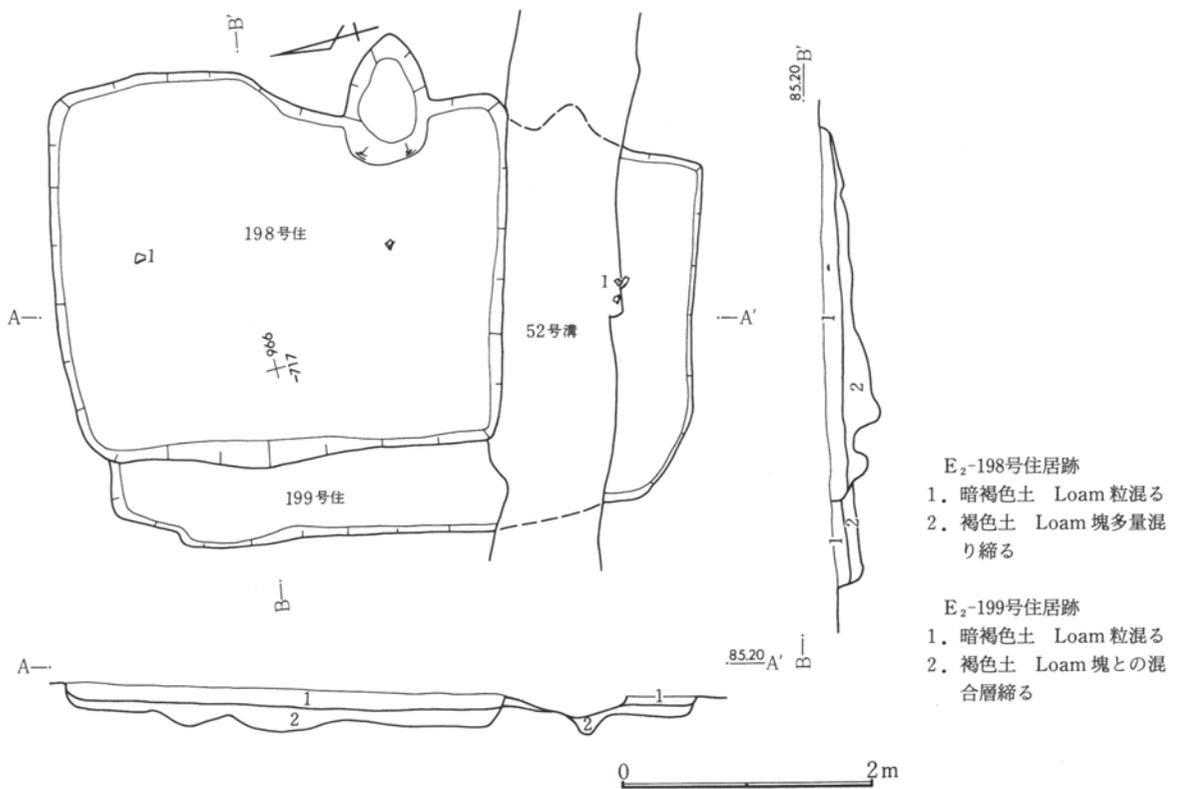
第194図 E<sub>2</sub>-194号住居跡出土遺物(1)



第195図 E<sub>2</sub>-194号住居跡出土遺物(2)

E<sub>2</sub>-198号住居跡 (第196・197図 P L. 74・90)

座標値38963~38968・-54714~54718の範囲にある。E<sub>2</sub>-199号住居跡が重複し、さらに東西走る新しい



第196図 E<sub>2</sub>-198・199号住居跡

52号溝が重なる。新旧関係は平面上ではとらえられないが、床面の検出状況から当跡が新しいと考えられる。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈するが、東壁線が中間部で大きく歪み竈付設部分の壁長が狭まる。規模は長軸3.6m・短軸3.0m (2.7)、壁高は12cm前後を測る。主軸方位はN-105°-Eを示す。床面積9.1m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、南に偏って付設される。壁線を50cmほど突出させ掘形は楕円形状にして構築される。袖部は作られない。

床面は平坦をなし竈前から中央部にかけての踏み締まりは良好である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。床下の掘形は不規則な深浅で最大で20cmである。Loam塊を多量に含む褐色土を埋土に床土とする。

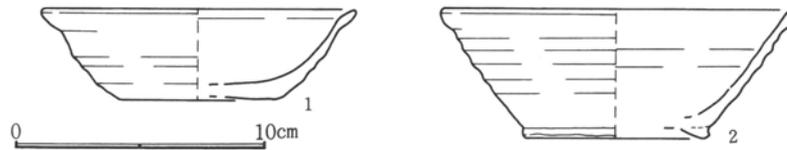
遺物は少量で、須恵器杯・碗の小破片である。10世紀前半から中頃にならうか。

出土遺物

1は杯1/3。床面出土。体部丸く、口唇部肥厚し強く外反する。轆轤右、回転糸切り無調整。粗砂粒混じり焼成良好。灰白色を呈す。2は碗1/4。直線的な体部で低い付け高台。細土で施成甘い。淡黄色を呈す。

E<sub>2</sub>-198号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器杯	12.6	6.0	3.6	右回転糸切り	2	須恵器碗	14.0	7.4	5.1	回転糸切り付け高台



第197図 E<sub>2</sub>-198号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-199号住居跡 (第196・198図 P L.74・90)

座標値38962~38968・-54715~54719の範囲にある。後出のE<sub>2</sub>-198号住居跡と重複し北東部の大半と、東西走る52号溝によっても南側と竈部分は消失している。

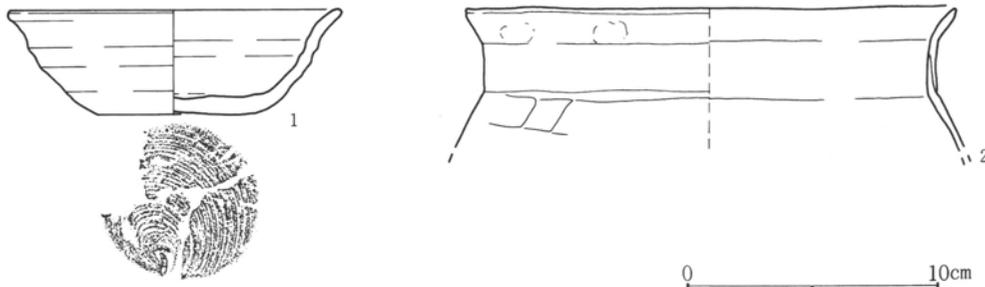
平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈すると考えられるが、南西隅の壁線が丸みを帯びる。規模は長軸4.6m・短軸3.6m、壁高は10cm前後である。主軸方位はE<sub>2</sub>-198号住居跡とほぼ同じN-105°-Eを示す。

竈は東壁に大きく南に偏って付設されるが、52号溝の底面に焼土粒の分布として確認されたのみである。

床面は平坦をなすが遺存部分が少なく詳細は不明である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。

E<sub>2</sub>-199号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器杯	13.2	6.2	4.1	右回転糸切り	2	土師器甕	19.4			コの字口縁



第198図 E<sub>2</sub>-199号住居跡出土遺物

### 第3章 検出された遺構と遺物

遺物は少量で須恵器坏・土師器甕片などがある。10世紀前半頃になろうか。

#### 出土遺物

1は須恵器坏2/3。床面出土。体部に丸みをもち、口縁部は緩く大きく外反して開く。右回転糸切り無調整。砂粒少なく焼成甘い。灰白色を呈す。口径12.8cm。

2は土師器甕。床面出土の口縁部小片。コの字口縁。細土で鈍い黄橙色を呈す。

#### E<sub>2</sub>-200号住居跡 (第199・200図 P L, 74・90)

座標値38958～38962・-54719～-54724の範囲にある。北壁で当跡より新しい51号溝と重複する。

平面形態は軸長をほぼ同じくする方形で、南東および北西隅の壁線は隅丸を呈す。規模は南北軸3.5m・東西軸3.4m、壁高は15cmを測る。主軸方位はN-100°-Eを示す。床面積10.3m<sup>2</sup>。

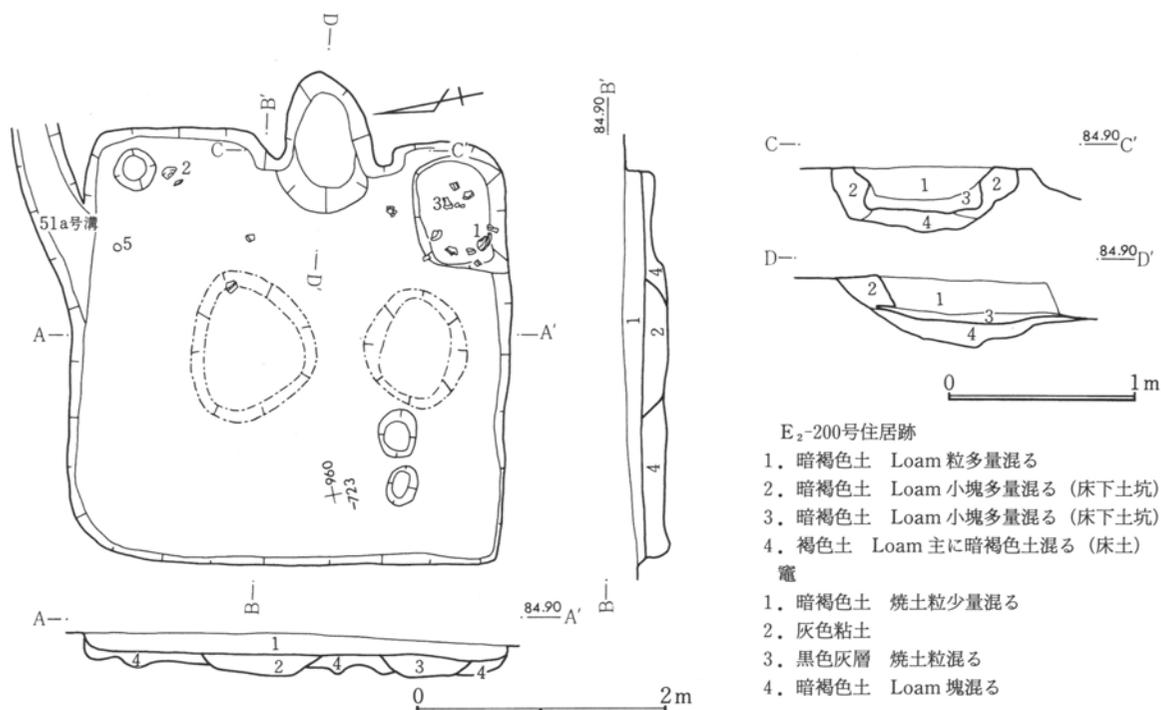
竈は東壁ほぼ中央に付設される。壁線を約40cm突出させ、袖部は短く作る。袖および竈壁面には灰色粘土材を15cm程度の厚さで塗布して構築する。火床には薄い焼土面を形成し、5cm程度の黒色灰層が堆積する。

床面は平坦をなし踏み締まりは良好である。2～3の小穴が検出されているが柱穴としての配置にはない。南東隅には方形の窪みがあり集中的に遺物が出土している。この窪みは貯蔵穴位置に相当するが、掘形形状・規模とも貯蔵穴にそぐわない。床下掘形には中央部に径1m・深さ10cm前後の楕円形土坑が2ヶ所に穿たれる。Loam粒・塊混じりの暗褐色土を埋めて床土とする。

遺物は少なく小破片である。墨書文字を記す土師器・須恵器のほか須恵器甕片転用の紡錘輪がある。9世紀後半になろう。

#### 出土遺物

1は土師器坏。南東隅の方形窪みの出土でほぼ完形。墨書土器である。底部は偏平な丸底で口縁部は外反気味に開く。体部外面に「十」の墨書文字を記す。口縁部・内面横位撫で、体部指頭痕に弱い篋撫で。底部中央に絞り状小亀裂が入り周辺篋削り。砂粒少なく赤橙色を呈す。口径12.7cm。



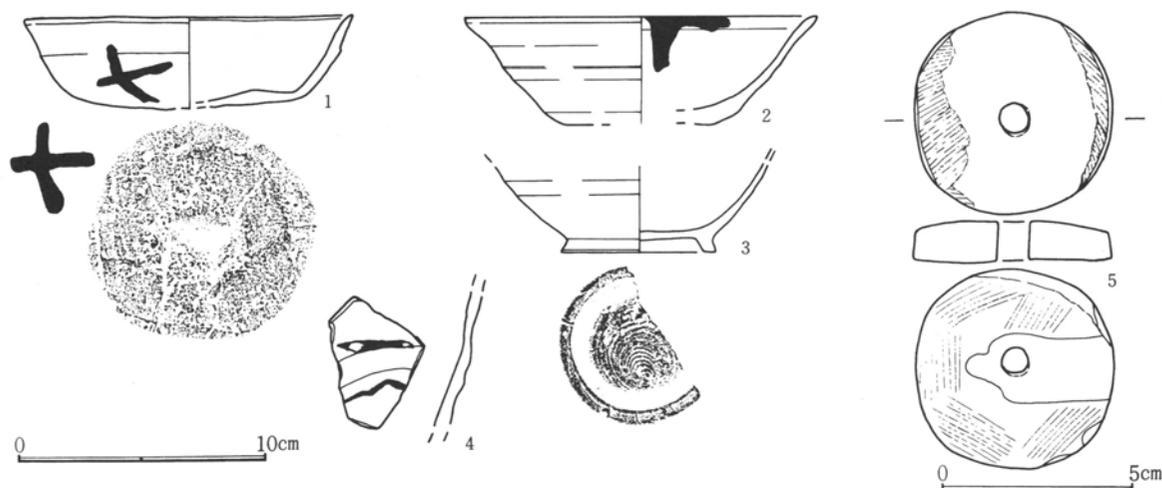
第199図 E<sub>2</sub>-200号住居跡

2～4は須恵器杯・碗。2は床面出土1/2。小底径で体部丸く口縁部は外反気味に開く。内面剝離痕が多数口縁部に油煙状付着物。回転糸切り無調整、轆轤右回転。砂粒混じり焼成甘く浅黄橙色を呈す。口径13.3cm。4は竈出土の体部小片。外面に不明墨書痕がある。

5は須恵器甕類の破片を転用する紡錘輪。床面出土の完形。器外面を上位に見立て僅かに凸レンズ状を作る。上・下・側面を削磨して成形。径5.0cm、中央に径0.8cmの円孔を穿つ。

E<sub>2</sub>-200号住居跡出土遺物計測表

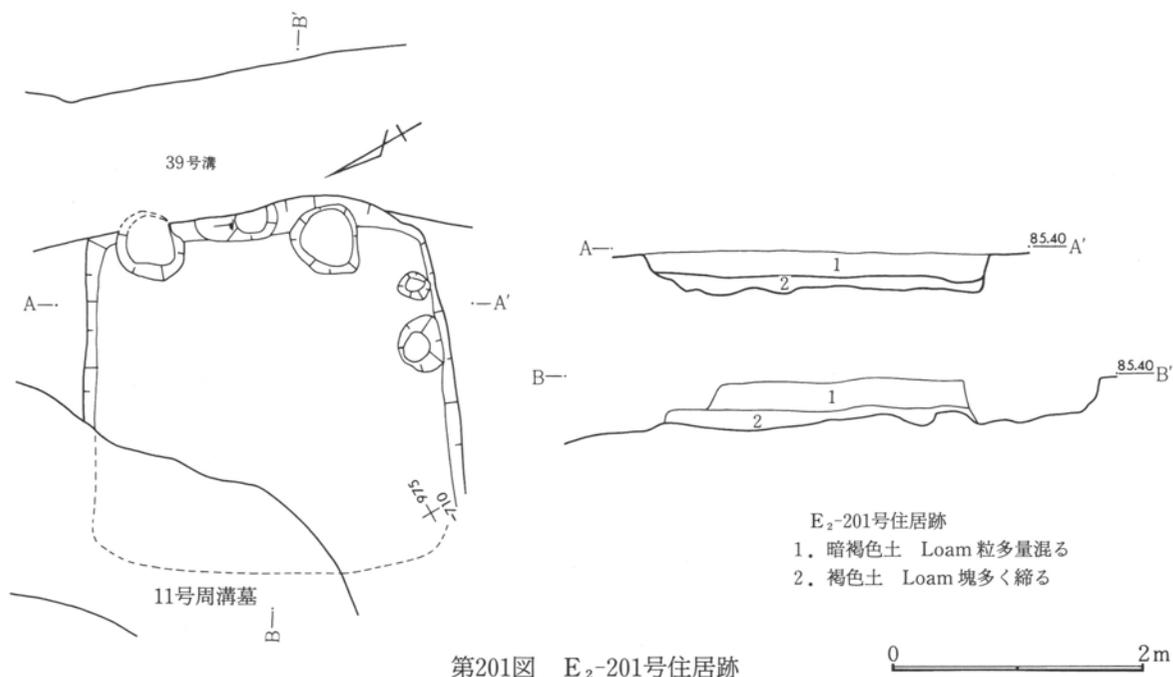
番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器杯	13.4	9.0	3.6	外面「十」2字墨書	4	須恵器杯	小片			内面墨書文字痕
2	須恵器杯	14.0	6.0	4.2	内外面油煙付着	5	転用紡錘輪	5.0	5.3	1.0	須恵器片使用
3	須恵器碗		6.2		回転糸切り付け高台						



第200図 E<sub>2</sub>-200号住居跡出土遺物

E<sub>2</sub>-201号住居跡 (第201図 P L. 74)

座標値38974～38977・-54706～54711の範囲にある。東壁は南北走る39号溝で消失する。また、南西部



E<sub>2</sub>-201号住居跡

1. 暗褐色土 Loam 粒多量混る
2. 褐色土 Loam 塊多く縮る

第201図 E<sub>2</sub>-201号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

で11号方形周溝墓と重複するが当住居の確認が遅れ、検出できていない。

平面形態は消失部分が多く全容は不明である。一辺3.0m程度の方形と考えられる。壁高は約20cmを測る。主軸方位は後述するように竈消失で、南壁線を基準としてN-110°-Eを示す。床面積7.4m<sup>2</sup>。

竈は痕跡すら確認されていないが、該期では東面する例が多く、39号溝によって消失した可能性が高い。

床面は中央部の踏み締まりが比較的良好である。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。東壁際に数個の小穴は当住居に伴うかは不明である。床下は不規則な小凹凸があり深さ10cm程度の掘形である。Loam 塊混じりの褐色土を埋めて床土とする。

遺物は極めて小さな土器器甕片で図示できるものはない。10世紀後半頃になろう。

#### E<sub>2</sub>-205号住居跡 (第202・203図 PL.74・90)

座標値38953~38957・-54705~54710の範囲にある。埋没谷地形の東辺上端に位置し、後世の削平が著しい。このため当跡の検出時には床面直上の状態で確認された。20号掘立柱建物跡と重複するが、新旧関係は確認されていない。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈するが、南壁の西端が小さく膨らむ。規模は長軸3.5m・短軸3.2mを測る。主軸方位はN-98°-Eを示す。床面積10.0m<sup>2</sup>。

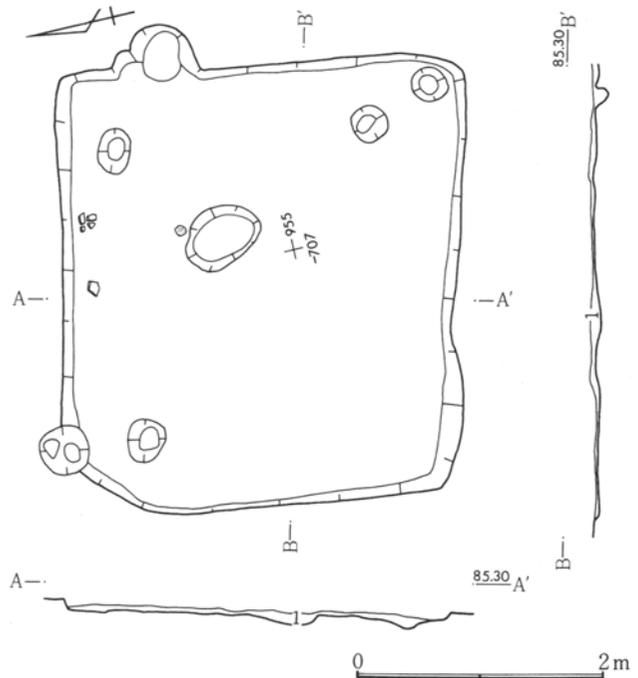
竈は東壁にあり、大きく北に偏って付設される。当遺跡での竈位置は東壁南寄りが通例であり、本例は稀である。壁線を約50cm突出して構築されるが詳細は不明である。

床面は平坦をなし竈前が比較的踏み締まりが強い。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。床下の掘形は浅く、中央部に径80cm・深さ10cmの楕円形土坑が穿たれる。埋土は褐色土を混じえる薄いLoam 塊層で床土とする。

遺物は須恵器甕の胴部小片のみである。9世紀代になろうか。

#### 出土遺物

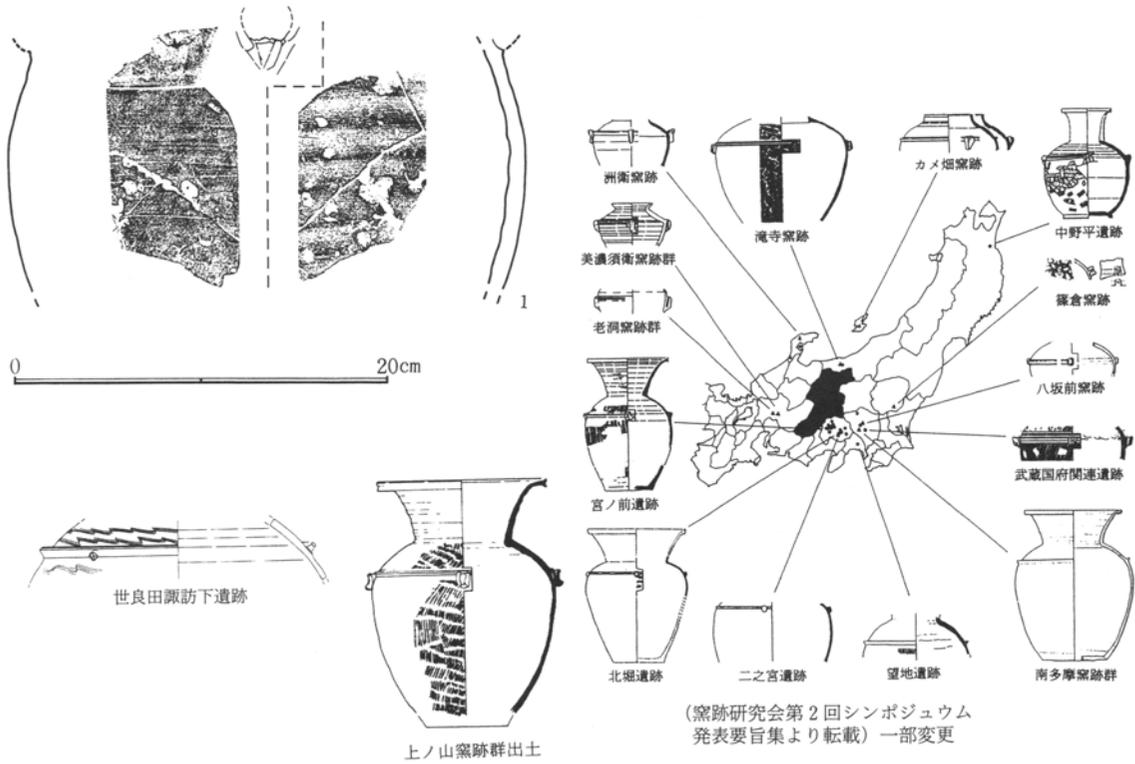
1は須恵器甕胴部の小片である。下半には弱い回転篋撫で調整がなされる。上端に小突起の剝離痕と周辺の撫で痕が観察される。極めて小片断片的な資料であるが、あえて類推すれば凸帯付四耳壺が考えられる。凸帯付四耳壺は8世紀前半の美濃須衛窯にその起源が求められている。8世紀末から9世紀代にかけて長野県を中心に生産され、関東・甲信越に分布が知られている。本資料が凸帯付四耳壺とすれば群馬県内での2例目となろう。胎土に関しては県内ではさほど特異とはみられない。細土でやや軟質な焼き上がりで淡青灰色を呈す。



E<sub>2</sub>-205号住居跡

1. 明褐色土 Loam・暗褐色土混り締る (床土)

第202図 E<sub>2</sub>-205号住居跡

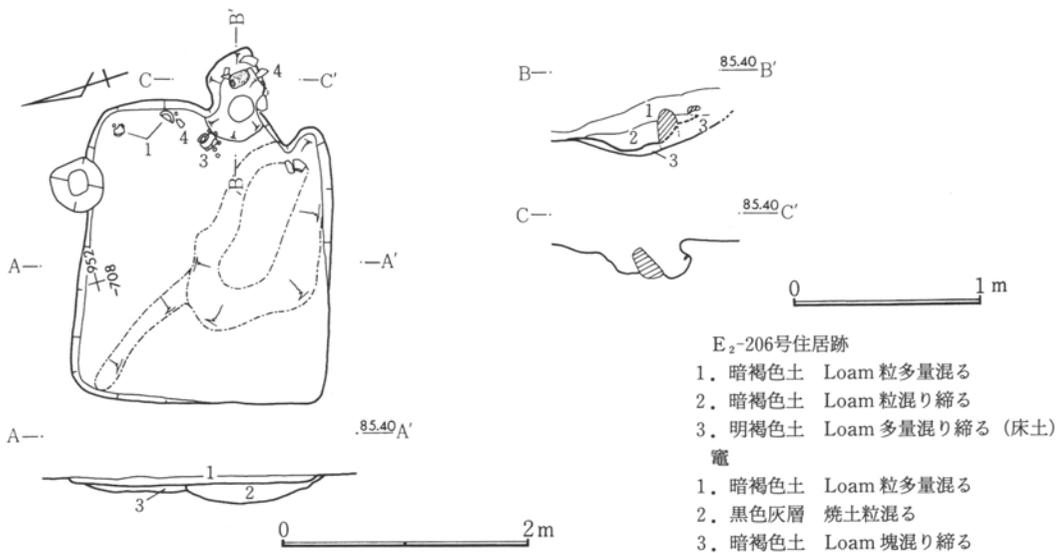


第203図 凸帯付四耳壺と類例の分布

E<sub>2</sub>-206号住居跡 (第204・205図 P L.75・90)

座標値38950～38953・-54706～54710の範囲にある。埋没谷の東縁辺上端に位置し、後世の削平が著しく西半の壁線は痕跡程度である。20号掘立柱建物跡と重複するが新旧関係は不明である。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈するが、北東隅の壁線は隅丸に近い。南東隅は竈の袖部を意識してか内側に張り出す。かなり小型の住居に属し、規模は長軸2.4m・短軸2.0mを測る。主軸方位はN-107°-E



第204図 E<sub>2</sub>-206号住居跡

### 第3章 検出された遺構と遺物

を示す。床面積4.2m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。壁線より楕円形に約50cm突出して構築されるが右側の壁線が住居内に大きく張り出し袖部の形状をなす。袖部の構築には粘土などの材はなく基層の Loam のままである。竈右側の壁線上には小児頭大の川原石が埋設される。また、竈内には長さ20cmほどの円柱状川原石が設置状態で出土しており、支脚として用いたものであろう。

床面は平坦をなし踏み締まりは全体に良好である。柱穴・貯蔵穴は検出されない。

遺物は須恵器杯・椀、土師器甕片があり、須恵器には墨書文字が記される。9世紀後半になろう。

#### 出土遺物

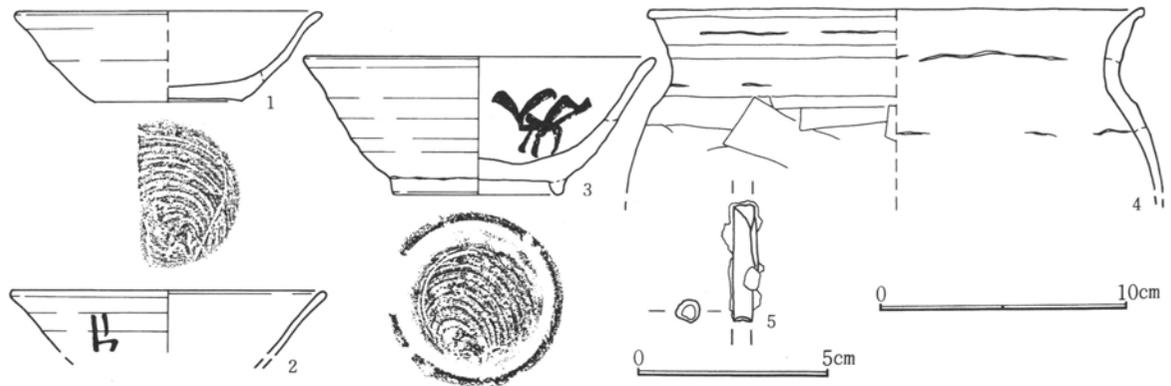
1～3は須恵器杯・椀。1は床面出土で1/2。腰部丸く口唇部は肥厚し外屈して開く。右回転糸切り無調整。細砂で焼成やや甘く灰褐色を呈す。2は口縁部小片で外面に墨書文字を記すが解読不能。3は椀2/3、竈前床面出土。腰部に丸みもち体部緩く外反。内面に墨書文字を記すが解読不能。回転糸切り付け高台。細土で焼成甘く浅黄橙色を呈す。

4は土師器コの字口縁甕。口縁1/3竈内出土。口縁部上半は短く、外傾する。コの字口縁の退化形態で器肉厚め。口縁部指頭痕後弱い横位撫で、肩部横位篋削り。細土で鈍橙色を呈す。

5は鉄製品残欠。細棒状で両端は欠損。断面矩形。現長3cm・径0.5cm。

E<sub>2</sub>-206号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器杯	12.2	5.8	3.6	右回転糸切り	4	土師器甕	19.6			コの字口縁
2	須恵器椀	12.6			外面に墨書文字痕	5	鉄器	現長3.0	径0.5		
3	須恵器椀	14.0	6.8	5.4	内面墨書文字痕						



第205図 E<sub>2</sub>-206号住居跡出土遺物

#### E<sub>2</sub>-208号住居跡 (第206～208図 P L. 75・90・91)

座標値38780～38785・-54062～54066の範囲にあるが、西半は調査区域外で全容は不明である。

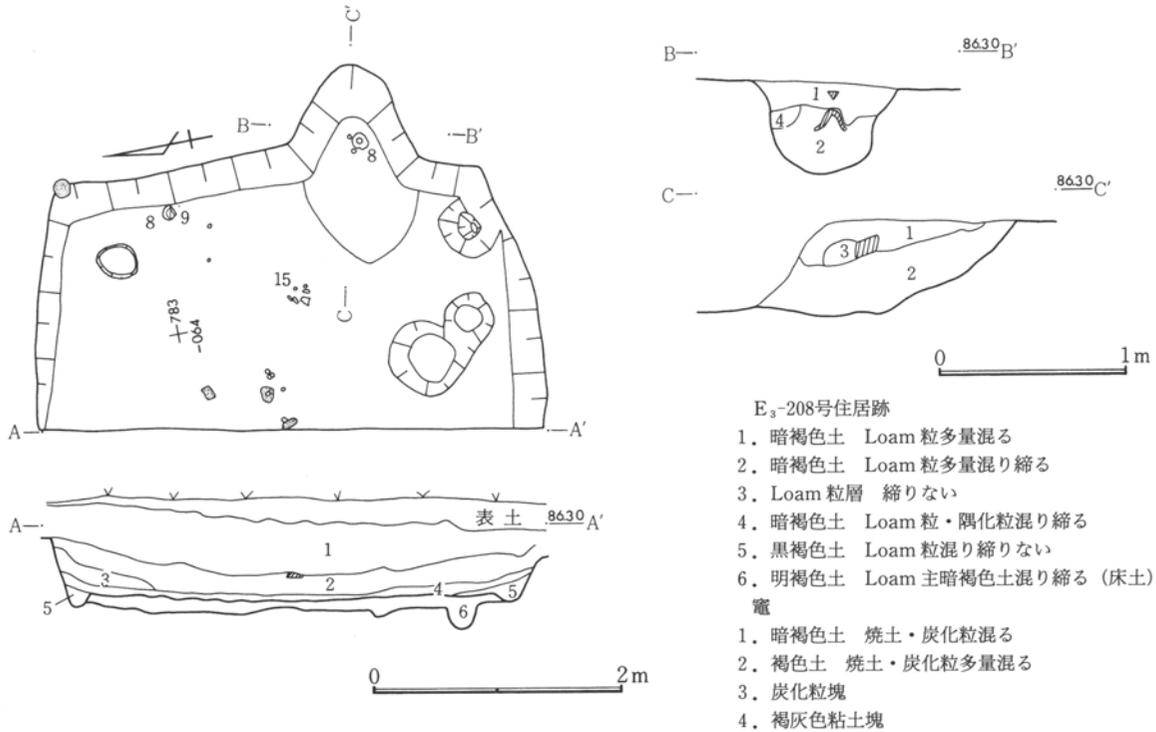
平面形態は方形を呈するであろう。東西軸は東壁線より2.2mの範囲を検出。南北長は4.0m、壁高は掘形が深く45cmを測る。主軸方位はN-103°-Eを示す。

竈は東壁にあり、大きく南に偏って付設される。壁線より約60cm突出するが火床から先端への立ち上がりは急傾斜となっている。袖部の形成はない。

床面は平坦で踏み締まりは堅牢である。南東・北東の2カ所に柱穴と考えられる小穴が検出されているが、

深さ20cmと浅い。また、南東壁際に小穴が穿たれ、径50cmで貯蔵穴としては小規模である。深さ30cmを測る。床下掘形は浅く平坦で Loam 塊を主体に暗褐色土を混えて床土とする。

遺物は土師器坏・須恵器坏・椀があり、土師器坏1点には内外面に墨書文字が記される。また、風字硯様の小片がある。9世紀後半になろう。



第206図 E<sub>3</sub>-208号住居跡

### 出土遺物

1～7は土師器坏。埋土。3形態がある。口縁部・内面横位撫で、体部指頭痕、底部篋削り。細土で鈍橙色を呈す。1～3は小片、平底で体部中位で外反し大きく開く。4～6は1/4～2/3。平底の箱型で体部は直線的。5は見込み部と底部に墨書文字を記す。「位」か。7は丸底で体部内湾気味。

8は須恵器坏、竈出土の完形。小底径で体部の丸み強く口唇部細まって外反気味に開く。右回転糸切り無調整。砂粒多く焼成良好。灰色を呈す。口径13.2cm。

9・10は須恵器坏・椀。9は床面出土でほぼ完形。腰部丸く張り、口縁部外反し強く開く。右回転糸切り付け高台。断面矩形で畳付けに凹線巡る。内湾しハの字状に立つ。砂粒多く、焼成堅緻灰色を呈す。10は体部直線的。回転糸切り付け高台。畳付けに凹線巡る角高台。轆轤右回転。砂粒多く焼成良好灰色を呈す。

11は須恵器皿。1/2埋土。体部直線的に開き、口唇部小さく外屈。回転糸切り無調整。無高台。細土で焼成甘く鈍赤褐色を呈す。二次被熱か。無高台の皿は県内で多少の類例が知られてきたが、高台付きが一般的な形状である。

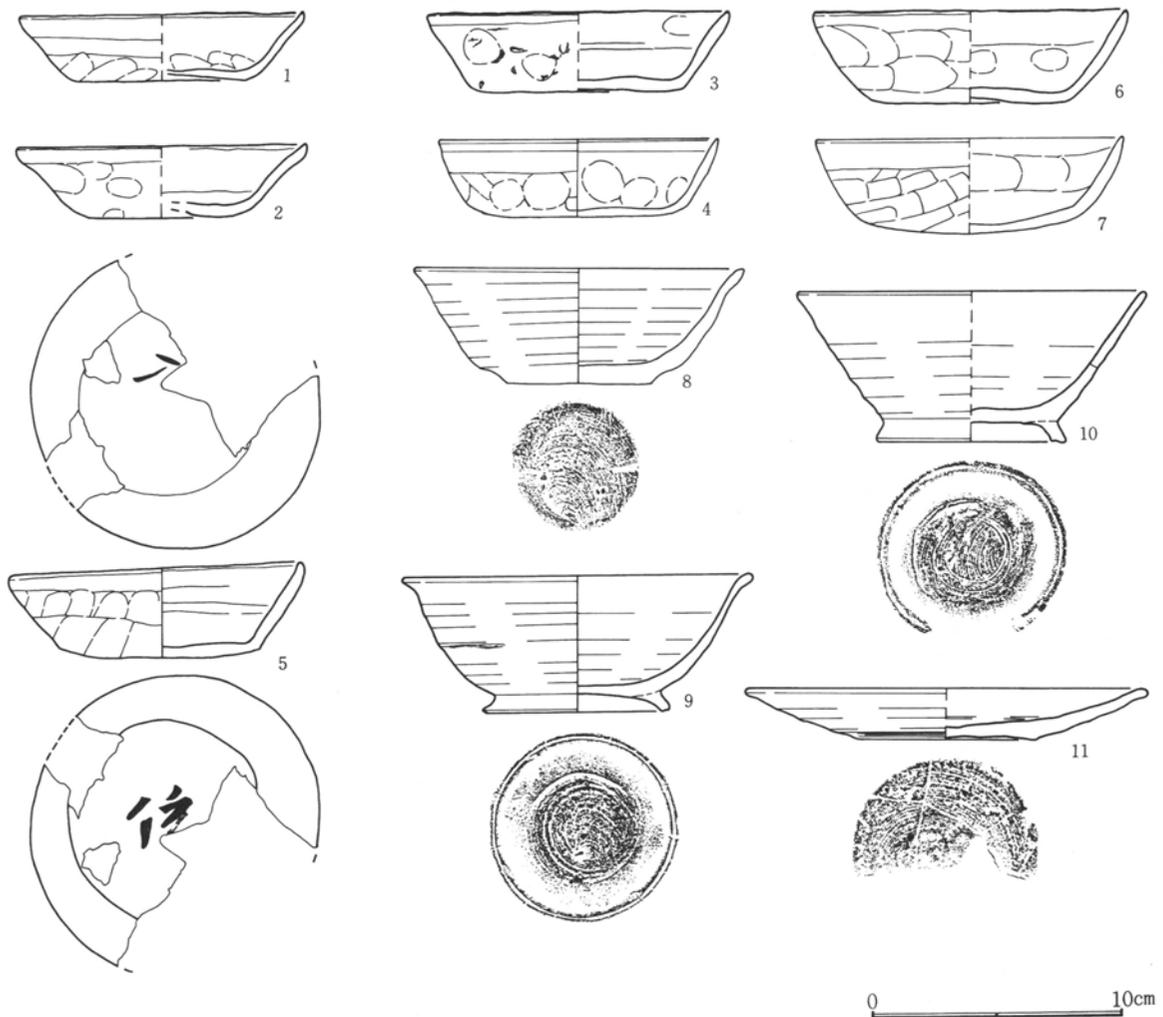
12～16は土師器甕。12・13は小型。14～16はコの字口縁甕である。いずれも小片で埋土出土。12は胴の張りが緩いくの字口縁。内面黒色処理、口縁部横位の篋磨き。13は胴下半、縦位篋削り。内面見込みに篋止め痕顕著。14～16は胴部の張り強くコの字頸部の立ち上がりが高い。口縁部指頭痕後横位撫で。肩部横位、胴上半斜位篋削り。細土で橙色を呈す。

第3章 検出された遺構と遺物

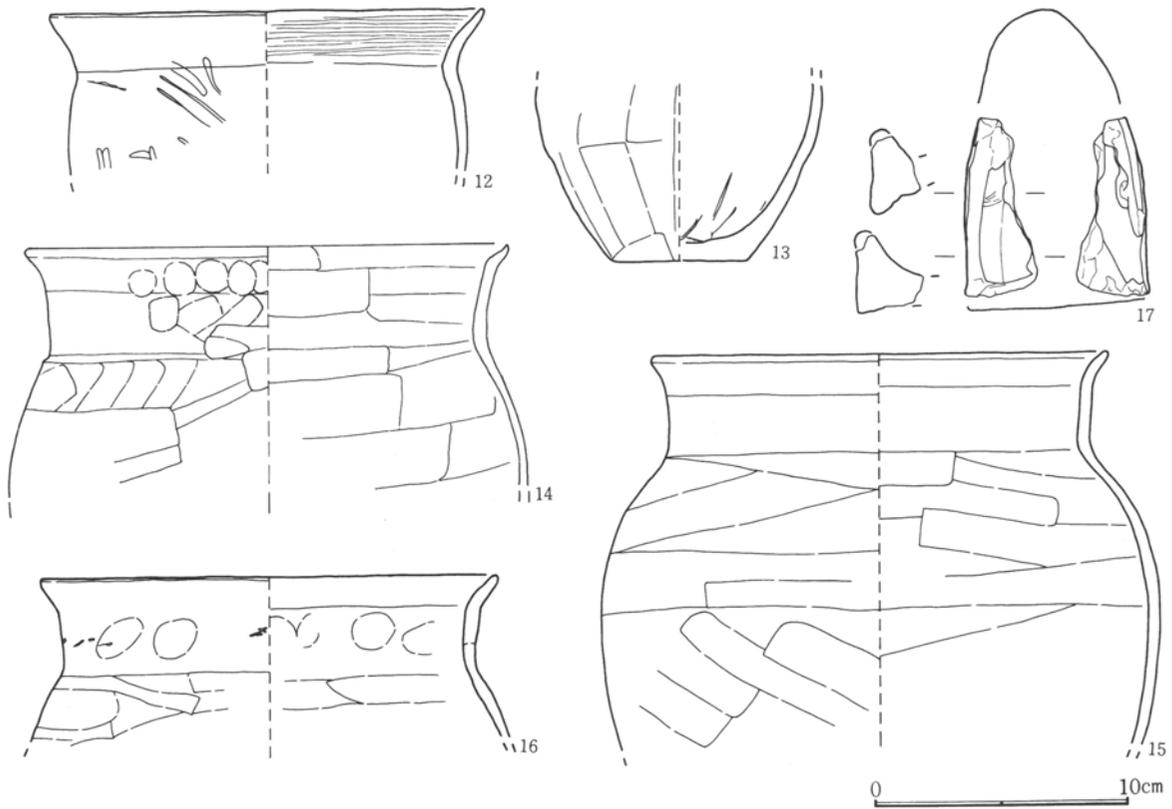
17は陶硯の小片。風字硯様の硯尻部と考えられる。やや作りが雑で黒色燻焼成。舞台遺跡窯跡より小舟型陶硯が出土している。本例より丁寧な作りで同様に黒色燻焼成の製品である。硯尻部の船縁部に類似する。

E<sub>3</sub>-208号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	11.4	7.0	2.6	偏平平底	10	須恵器碗	13.9	7.5	5.4	回転糸切り付け高台
2	土師器坏	11.6	6.0	2.9	偏平平底	11	須恵器皿	16.0	7.5	6.0	回転糸切り高台未着
3	土師器坏	12.0	8.0	3.1	平底	12	土師器甕	17.0	7.0	2.0	内面黒色処理
4	土師器坏	11.0	7.5	3.0	平底	13	土師器甕		5.5		小型甕
5	土師器坏	11.8	8.0	3.5	内外面「位」墨書文字	14	土師器甕	19.2			コの字口縁
6	土師器坏	12.5	7.6	3.6	平底	15	土師器甕	18.2			コの字口縁
7	土師器坏	12.2	8.0	3.7	底部丸み	16	土師器甕	18.2			コの字口縁
8	須恵器坏	13.2	5.6	4.5	右回転糸切り	17	陶硯	小片			風字か舟形硯
9	須恵器碗	14.0	7.5	5.4	回転糸切り付け高台						



第207図 E<sub>3</sub>-208号住居跡出土遺物(1)

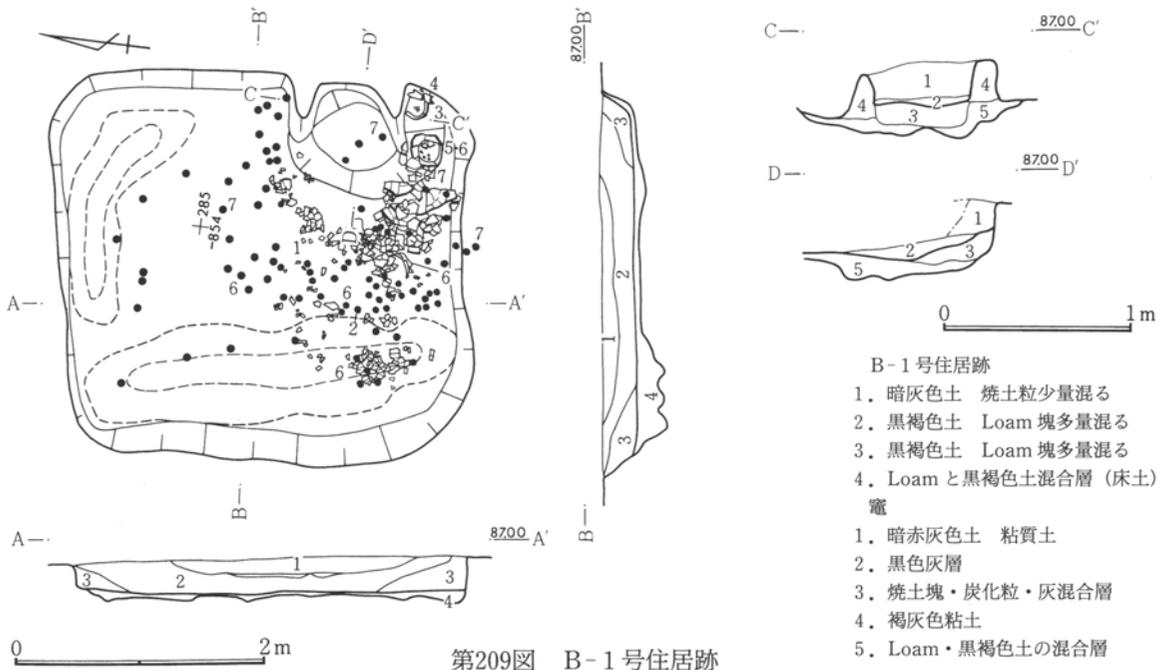


第208図 E<sub>3</sub>-208号住居跡出土遺物(2)

B-1号住居跡 (第209~211図 PL.91)

座標値39282~39287・-54852~54856の範囲にある。

平面形態は南北方向に長軸をもつ隅丸の方形を呈す。規模は長軸3.2m・短軸2.9m、壁高30cmを測る。主



第3章 検出された遺構と遺物

軸方位はN-84°-Eを示す。床面積16.7㎡。

竈は東壁にあり大きく南に偏って付設される。壁線からの突出はほとんどなく、幅広な火床部と小さく張り出す袖部を作る。竈内には構築材と考えられる焼土塊混りの灰色粘土が厚く堆積する。火床面は灰と炭化物の混土を載せる焼土面が形成される。袖部は褐灰色粘土をもって構築される。

床面は平坦をなし、竈前面の踏み締まりは顕著である。柱穴・貯蔵穴などは検出されていないが、竈右袖に沿って2個体の土師器甕口縁部が倒置状態で出土している。この2個体には僅かながら設置掘形めいた痕跡が認められ、置台として用いられた可能性がある。床下の掘形は北・西壁沿いを幅70~90cm・最深で15cmの窪みを巡らす。埋土はLoam 塊と粘性黒褐色土の混土をもって床土とする。

遺物は竈前の床面より大型土師器甕類が複数個体集中して出土している。7世紀後半から8世紀初頭になるろう。

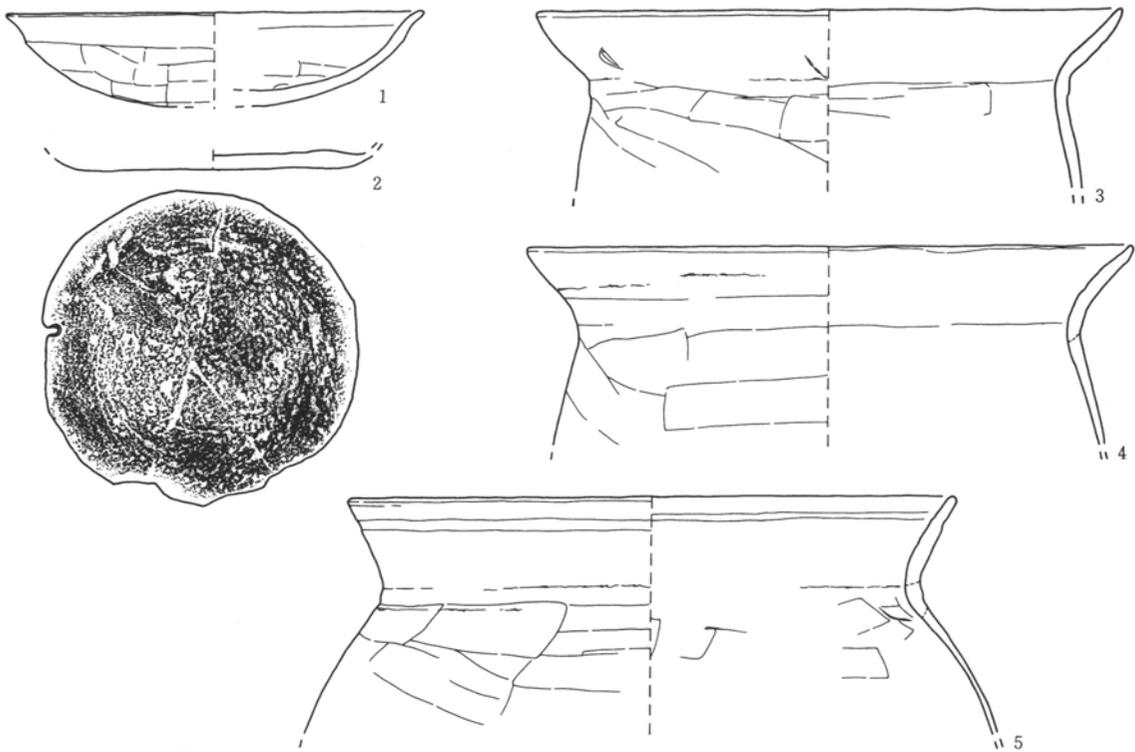
出土遺物

1は土師器盤型坏である。床面出土小片。丸底で口縁部外反して開く。口縁部横位撫で、体・底部篋削り。細土で鈍橙色を呈す。

2は須恵器無台盤。床面出土体部欠損。使用摩滅著しい。欠損縁部に穿孔があり用途不明ながら転用品であろう。左回転篋削り。粗砂粒少量で焼成甘く黒灰色を呈す。

B-1号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器盤	16.6		4.0	丸底	5	土師器甕	24.0			くの字口縁球胴
2	須恵器盤		10.5		右回転篋削り	6	土師器甕	24.6	7.4	31.3	くの字口縁球胴
3	土師器甕	23.2			くの字口縁長胴	7	土師器甕	23.4	6.0	32.0	くの字口縁球胴
4	土師器甕	24.0			くの字口縁長胴						

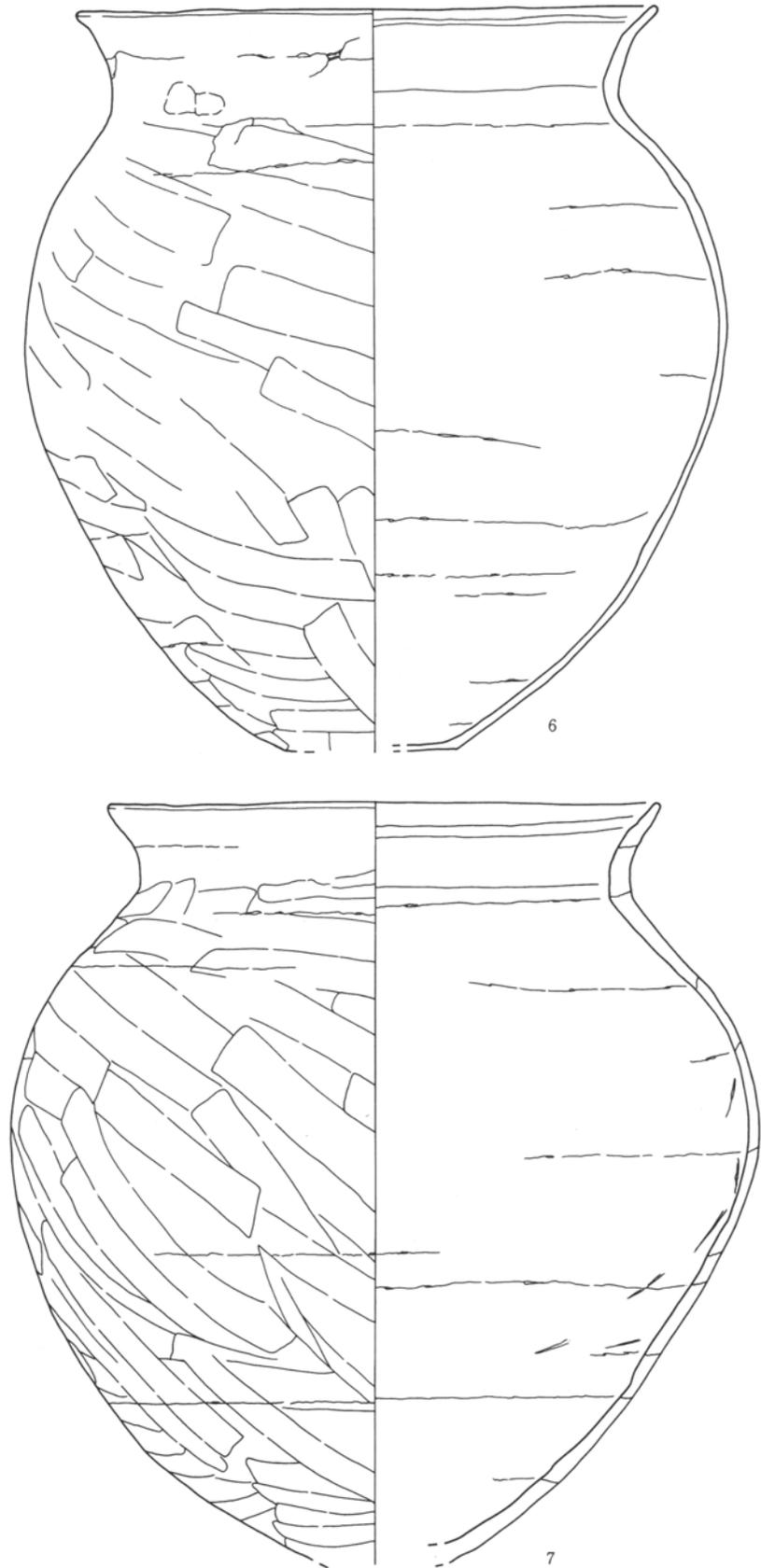


第210図 B-1号住居跡出土遺物(1)

0 10cm

3・4は土師器、長胴甕になる。口縁部1/2。竈右袖脇に倒置されていたものである。口縁部緩い受け口状に開く。口縁部横位撫で、胴上位横位・下位に向かい斜篋削り。3は砂粒多く赤褐色、4は細土で橙色を呈す。

5～7は土師器球胴甕。器肉極めて薄く、最大径は胴部中位にある。竈前床面出土。5は口縁部のみ。丸く強く張る肩部から直線的なくの字口縁。肩部横位篋削り。6・7はほぼ完形。内面の横位割れ痕は紐作りを示し、底部から胴部の紐数は11～12条になろう。口縁部は外反気味に開く。肩部横位・胴中位は斜位・下位は再び横位に近い篋削り。6は細土で鈍橙色を呈す。口径24.6cm・最大径29.7cm。7は細砂土で橙色を呈す。口径23.4cm・最大径31.6cm。



第211図 B-1号住居跡出土遺物(2)

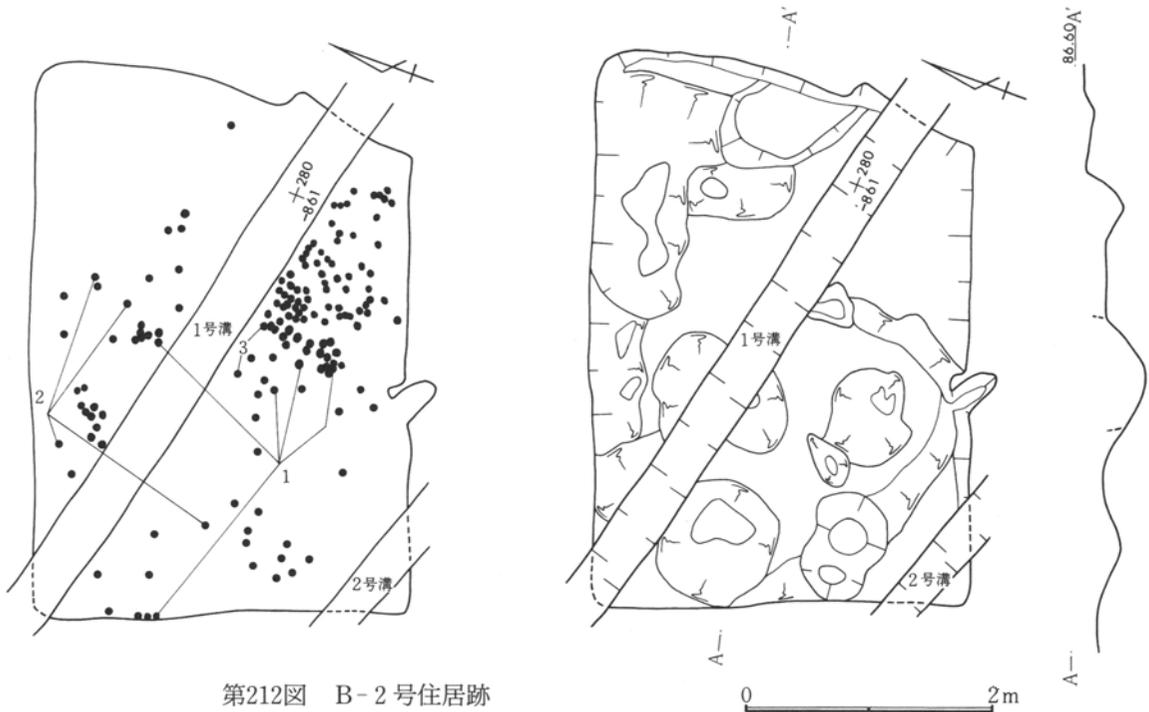
第3章 検出された遺構と遺物

B-2号住居跡 (第212・213図 P.L.91)

座標値39278~39282・-54860~54865の範囲にある。削平が著しく、遺物分布と僅かな掘形の痕跡をたよりに検出したものである。

平面形態は東西に長軸をもつ方形を呈すると考えられ、長軸4.4m・短軸3.0mほどになるうか。竈は検出されず、これを基軸にする主軸方位は不明であるが東西壁線に基づけばN-75°-Eになるう。掘形は不整土坑状の落ち込みが多く規則性を見いだすことはできない。床面積8.5㎡。

遺物は小破片の状態以南寄りに多く点在したが、形状を残すものは少ない。土師器坏類と須恵器蓋がある。8世紀後半になるう。



第212図 B-2号住居跡

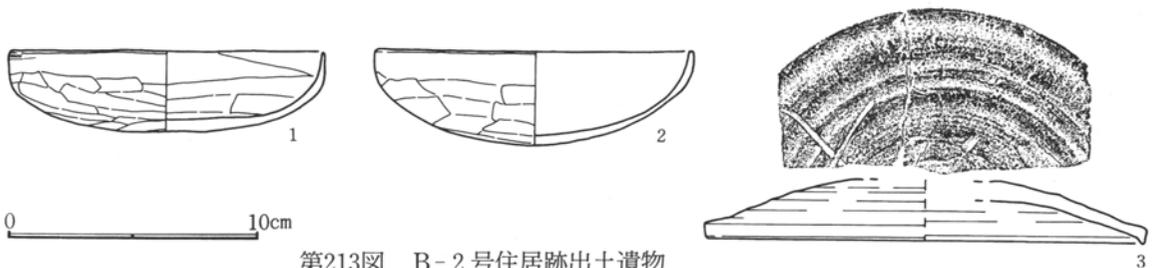
出土遺物

1・2は土師器坏2/3。丸底で口縁部は直立気味。口縁部横位撫で。底・体部篋削り。細砂土で橙色を呈す。口径12.7cm。

3は須恵器蓋。摘み欠損1/4。口唇内傾して屈し端部細まって略三角を呈す。天井部右回転篋削りで「×」?の篋書を刻す。砂粒少なく焼成やや甘く灰白色を呈す。

B-2号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	土師器坏	12.6		3.2	偏平丸底	3	須恵器蓋	17.4			摘み欠損天井篋削痕
2	土師器坏	12.8		3.8	丸底						



第213図 B-2号住居跡出土遺物

F-47号住居跡 (第214・215図 P.L.75・92)

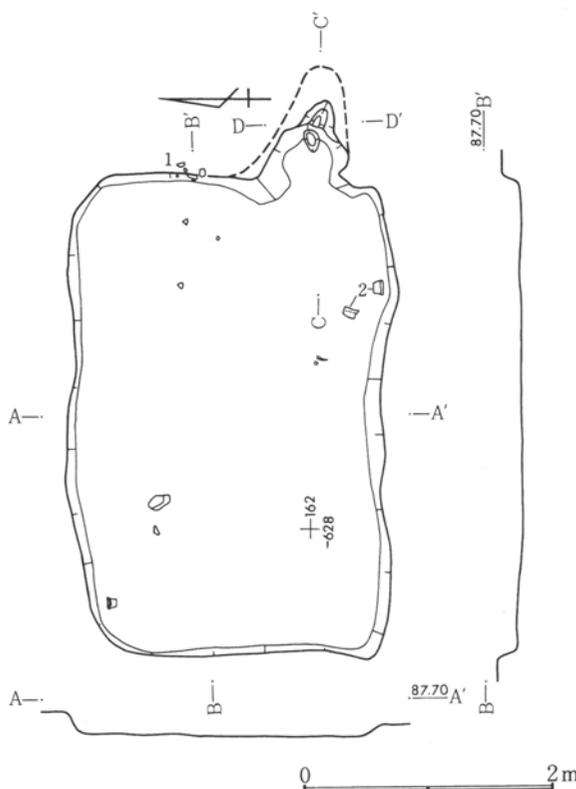
座標値39161~39164・-54624~54629の範囲にある。古墳時代前期に属するF-61号住居跡と重複する。

平面形態は東西に長軸をもつ隅丸方形である。規模は長軸3.8m・短軸2.5m、壁高15cmを測る。主軸方位はN-88°-Eを示す。床面積は12.5m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、南に偏って付設される。壁線を60cmほど楕円形に掘り込み、先端部は傾斜を付けて細めて煙道孔とするようである。袖部は見られないが竈構築材には茶褐色・灰色粘土が使用されたと考えられ、埋土中に粒・塊状に多く見られた。

床面は竈前から中央寄りにかけて比較的踏み締まっている。柱穴・貯蔵穴などは検出されない。床下掘形は浅く、Loam 塊混じりの暗茶褐色土をもって床土とする。

遺物は少なく、須恵器大型碗・土師器甕片である。9世紀前半から中頃になろう。

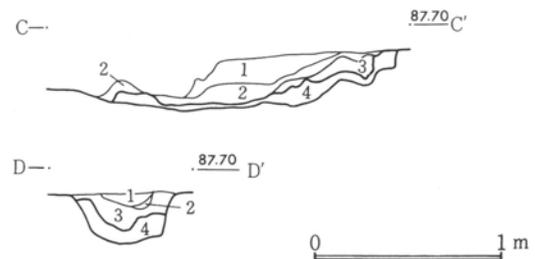


第214図 F-47号住居跡

出土遺物

1は須恵器碗1/2。東壁上縁から住居内に流れ込む状態で出土。腰部の丸み強く体部上半は緩く外反して大きく開く。内外面とも焼成気味。回転糸切り角形の付け高台。細土で焼成甘い。口径17.8cm。

2は土師器コの子口縁の甕。床面出土、口縁部1/2。整ったコの子口縁で器肉薄い。口縁部横位撫で、肩部横位、胴部に向かい斜位篋削り。細土で橙色を呈す。

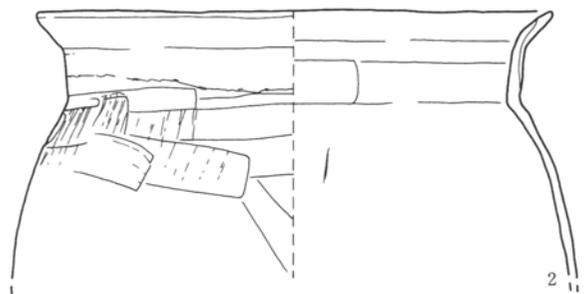
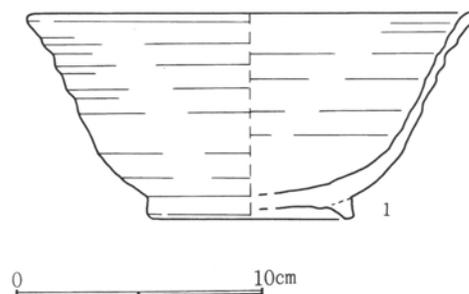


F-47号住居跡竈

- 1. 暗茶褐色土 粘質土
- 2. 灰色粘土
- 3. 焼土塊
- 4. 黒色 黄褐色粘土の混合層

F-47号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器碗	17.8	8.0	8.1	回転糸切り付け高台	2	土師器甕	20.6			コの子口縁



第215図 F-47号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物

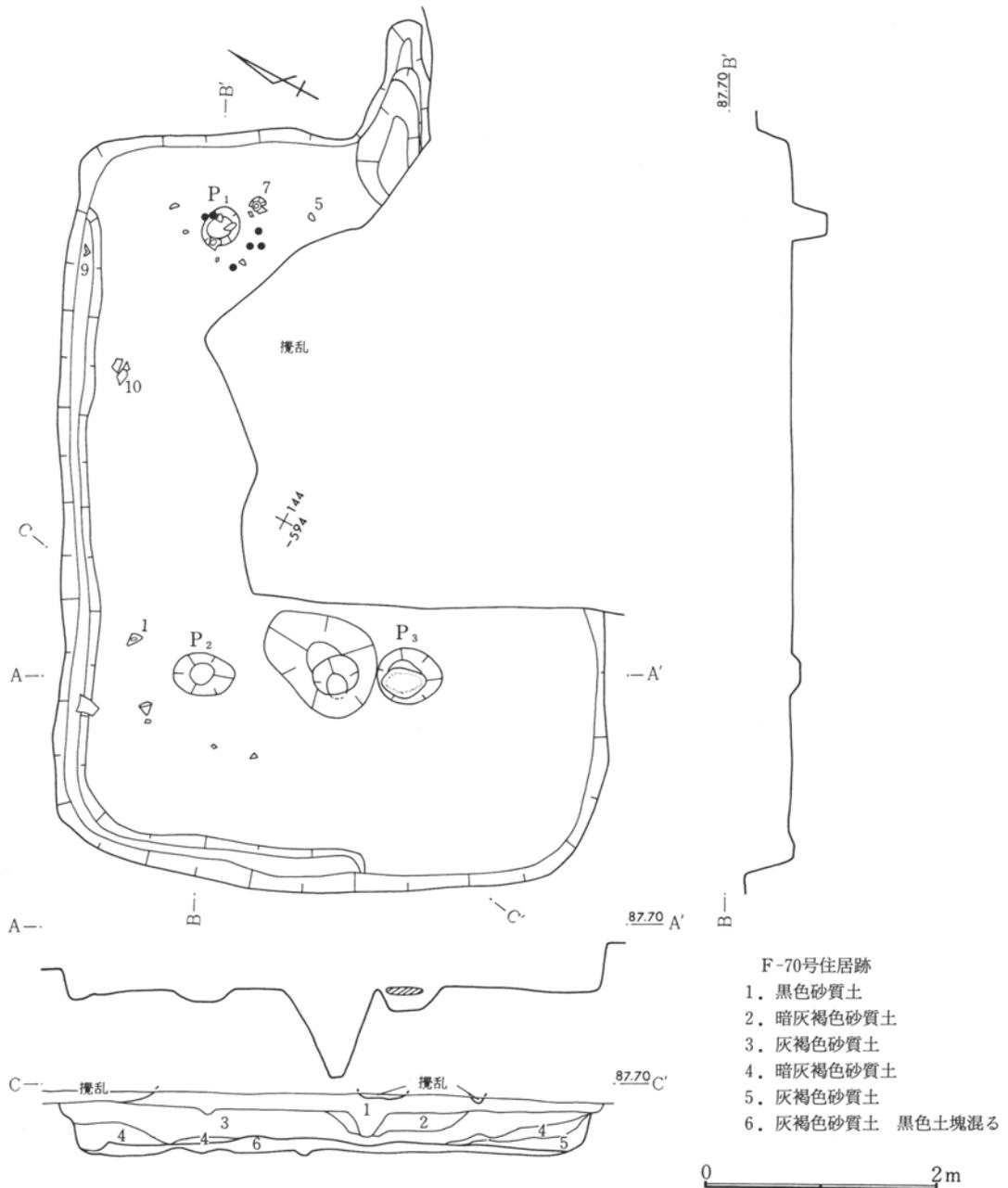
F-70号住居跡 (第216・217・218図 P L.75・92)

座標値39140~39147・-54589~54598の範囲にある。北側で古墳時代前期に属するF-71号住居跡と重複し、南東部は大きく攪乱土坑によって消失している。

平面形態は東西方向に長軸をもつ方形を呈する。舞台遺跡内当該期の竪穴住居としては最大規模の住居になる。規模は長軸6.8m・短軸4.8m、壁高35cmを測る。主軸方位はN-65°-Eを示す。床面積26.1m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、僅かに南に偏って付設され、南半は攪乱によって消失する。火床部はほぼ住居内に納まり、壁線を突出する狭長な煙道部を有する。この竈には袖部を備えることを通例とするが、当跡には検出されていない。

床面は平坦をなすが壁に沿った残存部分のため、踏み締まりは弱い。北壁から西壁にかけて幅15cmの壁下



第216図 F-70号住居跡

溝が巡る。P1～P3の小穴が検出され、柱穴とも考えられるがP1の他は浅い掘り込みである。P2・P3の間には0.7×1.0m、深さ70cmの楕円形土坑が穿たれる。これに近接するP3上には20×40cmの偏平川原石が意図的な設置と考えられる状態で検出されている。両者の組み合わせは何らかの工房的施設が想定されるが、それを特定できる調査所見は得られていない。床下の掘形は浅く不規則な凹凸になる。埋土は黒色土塊を混じえる砂質灰褐色土である。

遺物は破損品が多く、北東寄りの床面に比較的集中して出土する。須恵器碗類と墨書文字を記す小片が目立つ。10世紀前半頃にならう。

出土遺物

1は須恵器坏1/2。床面出土。体部に丸みをもち内面の底・体部の変換が緩やか。口唇は肥厚し屈曲して開く。内面コテ状調整痕。右回転糸切り無調整。細土で焼成甘く白灰色を呈す。口径12.6cm。

2～7は須恵器碗1/3～1/4。4は底部欠損、5は小片。5・7は床面、他は埋土の出土。2～4は体部に丸みをもち、うち3・4は口唇が緩く外反する。5～7は体部直線的で、うち5・6は口唇が緩く外反する。5は内面に厚く油煙状付着物がある。回転糸切り低い付け高台。3は高台畳付けに凹線をなす角高台。轆轤右回転。4は細土で、他は粗砂粒混じる。焼成甘く灰白色を呈す。2・6は内外面とも黒灰色を呈し燻焼成。

8は須恵器皿。小片で埋土出土。断面略三角の低い付け高台。轆轤右回転。細土で焼成甘く白灰色を呈す。

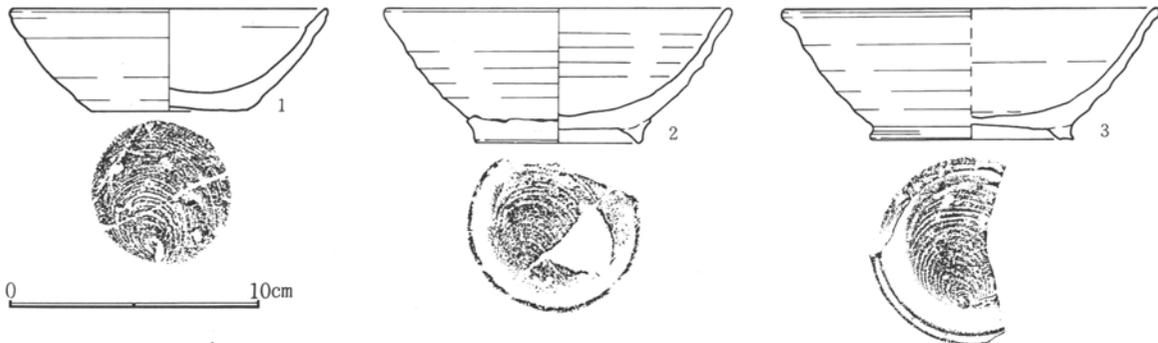
9は灰釉陶器碗底部1/2。埋土出土。高台は高く丸みのある三ヶ月。折戸53号窯式(大原2号窯式)期に相当しようか。

10は土師器甕。口縁部1/3床面出土。整ったコの字口縁。口縁部内外面横位撫で、肩部横位篋削り、内面横位篋撫で。細土で鈍褐色を呈す。

11～20は墨書文字および墨書文字痕が記される須恵器坏・碗類の小片。埋土の出土。11・12・15は体部内面、13・14は外面、16は内外面、17～24は見込み部に記される。11～13は「七」。17も同字の可能性がある。

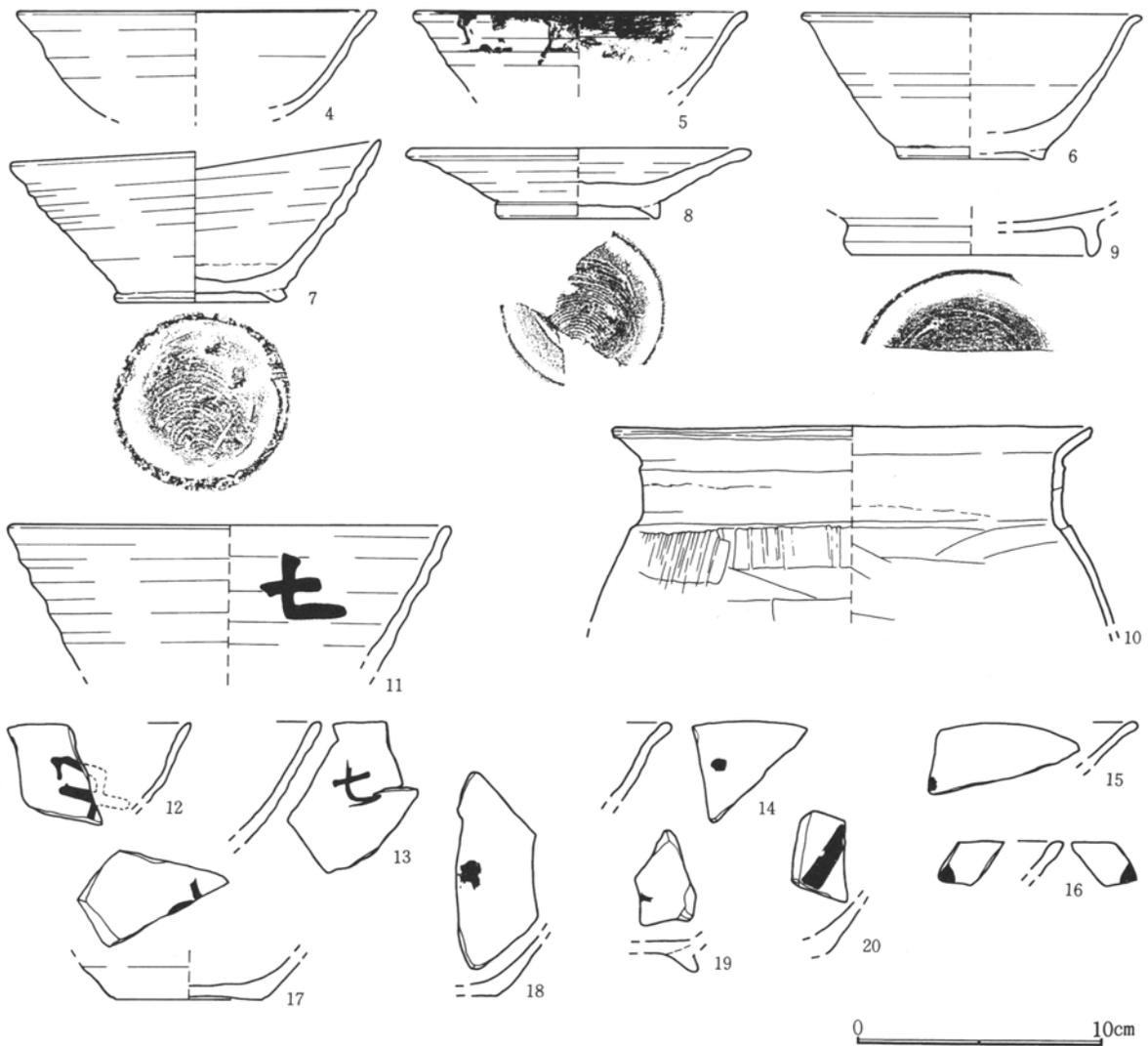
F-70号住居跡出土遺物計測表

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	須恵器坏	12.6	6.2	4.0	右回転糸切り	8	須恵器皿	14.0	6.7	2.8	回転糸切り付け高台
2	須恵器碗	14.0	6.6	5.3	回転糸切り付け高台	9	灰釉陶器皿		9.8		
3	須恵器碗	15.0	8.0	5.2	回転糸切り付け高台	10	土師器甕	19.6			コの字口縁
4	須恵器碗	14.7				11	須恵器碗	小片			内面「七」墨書文字
5	須恵器碗	13.6			内外面油煙付着	12	須恵器碗	小片			内面「七」墨書文字
6	須恵器碗	13.8	6.7	5.8	回転糸切り付け高台	13	須恵器碗	小片			外面「七」墨書文字
7	須恵器碗	15.2	7.1	6.1	回転糸切り付け高台	17	須恵器坏	小片			内面「七」?墨書文字



第217図 F-70号住居跡出土遺物

第3章 検出された遺構と遺物



第218図 F-70号住居跡出土遺物(2)

工境-6号住居跡 (第219図 P L.75・92)

座標値39139~39144・-54527~54531の範囲にある。

平面形態は南北に長軸をもつ方形を呈する。規模は、長軸4.3m・短軸2.5m・壁高10cm足らずの浅い立ち上がりである。主軸方位はN-89°-Eを示す。床面積は10.1㎡。

竈は東壁のやや南寄りに付設される。壁線を70cmほど先細りに掘り込み、小さな袖部を作る。竈前には角柱状の被熱した石材があり、形状から竈の支脚に用いられていたと考えられる。

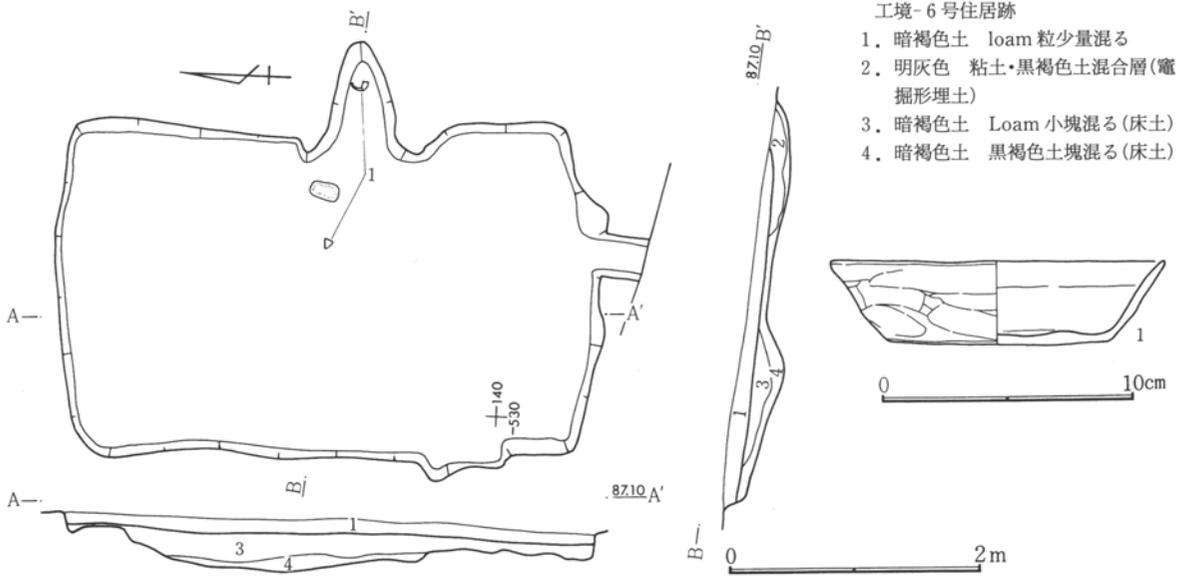
床面は平坦をなし竈前が比較的堅く踏み締まる。柱穴・貯蔵穴は検出されない。床下掘形は最深で30cm程になり、Loam塊・黒褐色土を混える暗褐色土をもって床土とする。

遺物は少なく竈内より土師器片が見られた程度である。9世紀中頃から後半になろう。

出土遺物

1は土師器坏1/3。平底偏平で体部が直線的に開く。底部・外面は手持ちへら削り、口縁部は横位撫で。口径13.2cm・底径8.8cm・器高3.3cm。鈍赤褐色を呈す。

第3節 竪穴住居跡



第219図 工境-6号住居跡・出土遺物

工境-13号住居跡 (第220図 P L.75・92)

座標値39208～39213・-54733～54737の範囲にある。

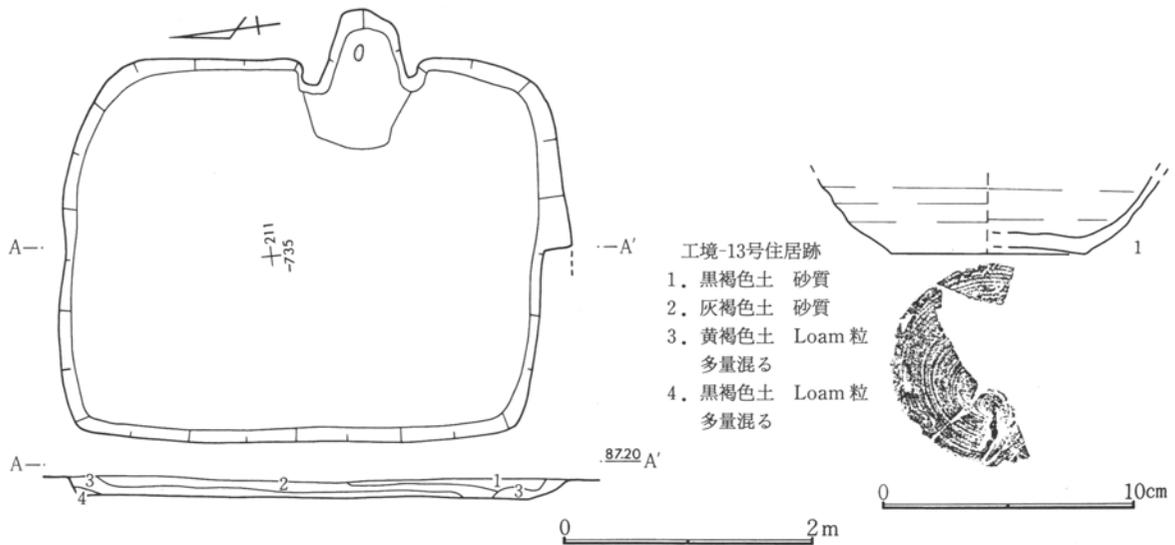
平面形態は南北に長軸をもつ隅丸方形である。規模は長軸4.1m・短軸3.0m・壁高2.cmほどである。主軸方位はN-100°-Wを示す。床面積は10.4m<sup>2</sup>。

竈は東壁にあり、僅か南に偏って付設される。壁線を楕円状に約40cm掘り込み、小さな袖部が付く。火床には薄い焼土層が形成され、火床下15cmの掘形には Loam 小塊を混える黒褐色土が充填される。

床面は南西隅がやや不安定な面をなし、竈前は踏み締まっている。柱穴・貯蔵穴は検出されていない。遺物は極めて少なく、土師器・須恵器の小片が僅かである。9世紀中頃になろう。

出土遺物

1は須恵器坏で口縁部が欠損1/3。底径7.6cm、右回転糸切り、細土で焼成良好。白灰色を呈す。

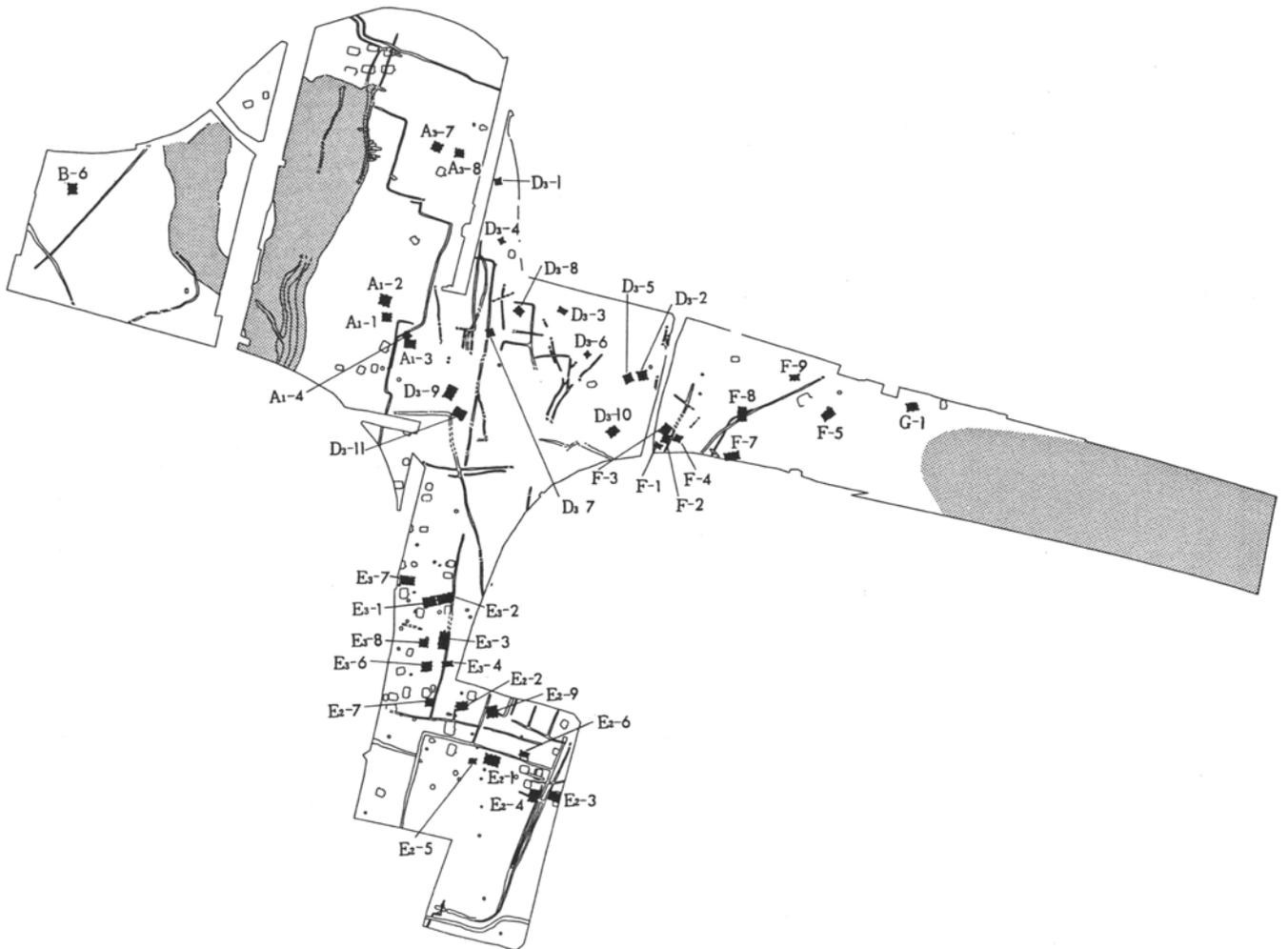


第220図 工境-13号住居跡・出土遺物

## 第4節 掘立柱建物跡

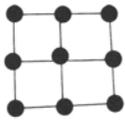
舞台遺跡で検出された掘立柱建物跡の確認数は40棟である。これらの建物跡のすべては特定の時代に帰属するものではなく、中世・古代・古墳時代の各時代にわたると考えられる。しかし、ここでは各遺構に対し帰属する時代を判定するには調査時点での明確な基準や情報がないため一括して掲載してある。

遺跡全体としての建物の分布状況はおよそ、東部・北部・中央部・南部の4群に大別できるようなのである。群馬県をはじめ東日本では、掘立柱建物跡が主体的な集落の構成となる畿内や西日本とは異なり竪穴住居跡と客体的に共存することが一般的である。これを前提にすれば、舞台遺跡での掘立柱建物跡の時代的な位置付けは周辺近接の竪穴住居との分布関係からある程度の比定は可能となろう。まず、遺跡地東部では古墳時代前期の住居跡が大半を占め掘立柱の多くはこれに関係すると考えられる。さらに舞台遺跡の北側に連なり、先年調査された三和工業団地遺跡では（三和工業団地遺跡2（助群馬県埋蔵文化財調査事業団 1999）当該期と認識されている建物跡が多い。また、建物跡の形状は1×1間あるいは1×2間程度の小規模不整形であることも古墳時代前期に符合するようである。北・中央・南部では古代と考えられる建物跡と、とくに南部の北半には下屋状の施設が付属する例や、小径な柱穴掘形等から中世に相当するものが多く、井戸・地下式土坑の存在からも首肯できる。掘立柱建物跡としては主屋を想定できる程のきぼのものは少なく高床構造のものも存在するが小規模である（第221図）。



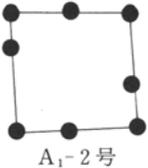
第221図 掘立柱建物跡位置図

A<sub>1</sub>-1号掘立柱建物跡 (第222図 P L.93)



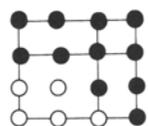
座標値39178~39182・-54792~54797の範囲にある。  
 桁行・梁行とも2間で束柱をもち、東西方向の柱間が僅かに勝るものの正方形形態を呈す総柱建物跡である。南北軸方位は真北に近い。四面の柱列総長には若干の長短がある。東側柱列3.5m、柱間1.8m・1.7m。西側柱列3.6m、柱間1.8m。南側柱列3.8m、柱間1.9m。北側柱列3.7m、柱間1.8m・1.9m。束柱は中軸線上北東にずれる。建物面積は13.4m<sup>2</sup>である。柱穴掘形は円形で径20~30cm、深さ15~30cmのものが多く、西側柱列の南および中央柱穴が小径で浅い。

A<sub>1</sub>-2号掘立柱建物跡 (第222図 P L.93)



座標値39185~39192・-54792~54799の範囲にある。  
 桁行・梁行とも2間の正方形形態を呈する建物跡である。東・西面の中央柱はそれぞれ北と南に大きく偏った配置である。南・北面中央柱を中軸線とする方位はN-18°-Eを示す。四面の柱列長は東・西面が不均衡で若干歪む。東側柱列4.3m、柱間2.7m・1.6m。西側柱列4.5m、柱間1.3m・3.2m。南側柱列4.6m、柱間2.0m・2.6m。北側柱列4.6m、柱間2.3m。建物面積は20.6m<sup>2</sup>である。柱穴掘形は略円形で径20~40cm・深さ30~50cmであるが、北西隅柱は10cmたらずの浅い掘り込みである。

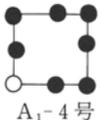
A<sub>1</sub>-3号掘立柱建物跡 (第223図 P L.93)



座標値39165~39170・-54780~54786の範囲にある。当跡より古い古墳時代後期に属するA<sub>1</sub>-20号竪穴住居跡と重複する。重複部分南西側で確認の不備から数個の柱穴を検出できていない。また、A<sub>1</sub>-4号掘立柱建物跡とも重複関係にあるが、新旧は不明である。

A<sub>1</sub>-3号 桁行・梁行とも3間の東西棟建物である。南西部の柱穴は失われているものの束柱をもつ総柱建物になろう。桁行4.5m、柱間中央が1.7mで東・西側が1.4m。梁行3.7m、柱間はほぼ当間隔で1.2m強である。梁行方位はN-4°-Eを示す。建物面積は16.9m<sup>2</sup>である。柱穴掘形は略円形で径30cm、深さ3~40cmである。

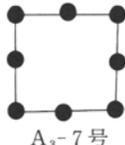
A<sub>1</sub>-4号掘立柱建物跡 (第223図 P L.93)



座標値39169~39174・-54782~54787の範囲にある。A<sub>1</sub>-3号掘立柱建物跡およびA<sub>1</sub>-6号土坑と重複するが、新旧関係は不明である。

A<sub>1</sub>-4号 桁行・梁行とも2間の正方形形態の建物跡である。南・北面の中軸線方位は東側に振れてN-38°-Eを示す。東・西面と南・北面の相対する柱列は2.9mと2.8mの等規模で、柱間も前者は1.2m・1.7m、後者は1.2m・1.6mである。建物面積は7.7m<sup>2</sup>と小規模である。柱穴掘形は略円形で、径30~40cmである。深さは15~60cmと開きが大きく南東隅柱が浅い。

A<sub>3</sub>-7号掘立柱建物跡 (第224図 P L.93・109)

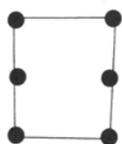


座標値39259~39264・-54769~54775の範囲にある。  
 桁行・梁行ともに2間の正方形形態の建物跡である。南・北面の中軸線は東に振れ、N-27°-Eを示す。東・西面柱列は3.7mの同規模で、柱間は東面で1.8m・1.9m、西面は1.7m・

### 第3章 検出された遺構と遺物

2.0m。南面は1.8m・2.0m、北面は2.0mの規模である。なお、南・北面の中央柱穴は柱列線より僅か外側に位置する。建物面積は14.4m<sup>2</sup>である。柱穴の掘形は略円形で、径20~50cm、深さは総じて浅く、北面柱列の中央柱穴が50cm前後の他は20cmのものがほとんどである。

#### B-6号掘立柱建物跡 (第224図)



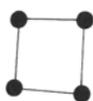
B-6号

座標値39236~39242・-54940~54946の範囲にある。

桁行2間、梁行1間の南北棟の建物である。桁行方位はほぼ真北を示す。四面柱列の対面はほぼ同規格で、東西面4.5m、南北面3.7mを測り東西面桁行はともに2.2mと2.3mである。建物面積は16.7m<sup>2</sup>である。柱穴の掘形は50×60cm大の略方形を呈し、深さ40~70cmを測る。

柱痕径は15~20cmになろう。なお、北西と南西の2穴には抜き取りと考えられる重複の穴が認められる。

#### D<sub>3</sub>-1号掘立柱建物跡 (第225図)

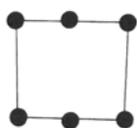


D<sub>3</sub>-1号

座標値39243~39247・-54741~54745の範囲にある。

桁行1間、梁行1間の正方形形態の建物跡である。南北軸方位はN-10°-Wを示す。東西長2.7m、南北長2.8mを測る。建物面積は6.9m<sup>2</sup>と小規模である。柱穴掘形は径40~50cmの略円形を呈し、掘り込みは50~60cmと深い。

#### D<sub>3</sub>-2号掘立柱建物跡 (第225図 P L.93)



D<sub>3</sub>-2号

座標値39152~39158・-54699~54675の範囲にある。古墳時代前期に属するD<sub>3</sub>-6号住居跡と重複する。

桁行2間、梁行1間の長方形建物跡である。梁行方位はN-17°-Wを示す。桁行南面は4.0mで柱間は2.0mの等間。北面は4.3m、柱間は2.1m・2.2m。梁行は3.6mである。建物面積は15.5m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は方形形態を呈し、50×50cm~50×70cm、深さ70cm前後の大きな掘り込みである。

#### D<sub>3</sub>-3号掘立柱建物跡 (第226図 P L.93)



D<sub>3</sub>-3号

座標値39183~39187・-54707~54713の範囲にある。

南東の1穴は未検出であるが桁行1間、梁行1間の長方形建物跡になろう。梁行方位はN-26°-Eを示す。桁行3.4m、梁行2.0mで建物面積は6.8m<sup>2</sup>の小規模である。柱穴掘形は40×50cmの略方形を呈し、深さ50cmを測る。

#### D<sub>3</sub>-4号掘立柱建物跡 (第226図 P L.93)

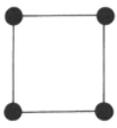


D<sub>3</sub>-4号

座標値39215~39219・-54738~54742の範囲にある。

桁行1間、梁行1間の正方形形態の建物跡である。南北軸方位はN-25°-Wを示す。桁・梁行とも3面は2.0mを測り、東面のみ2.3mでやや歪む。建物面積は4.3m<sup>2</sup>と極めて小規模である。柱穴掘形は径約40cmで、深さ30cm程度である。

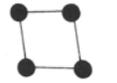
D<sub>3</sub>-5号掘立柱建物跡 (第226図 P L.94)



D<sub>3</sub>-5号

座標値39151~39156・-54673~54679の範囲にある。  
 桁行1間、梁行1間の正方形形態の建物跡である。柱間は四面とも3.6mで整っている。南北軸方位はN-25°-Wを示す。建物面積は12.8m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径50cm前後の略円形を呈し、南西の1穴が方形形状である。深さ50cm前後である。

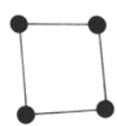
D<sub>3</sub>-6号掘立柱建物跡 (第227図 P L.94)



D<sub>3</sub>-6号

座標値39162~39167・-54696~54699の範囲にある。  
 桁行1間、梁行1間の正方形形態の建物跡である。南北軸方位はN-43°-Wを示す。柱間は2面が2.0mで他は2.1m・2.2mを測り、南の1穴はずれて歪む。建物面積は4.4m<sup>2</sup>と小規模である。柱穴掘形は50×60cm程度の方形を呈し、深さ40~50cmを測る。

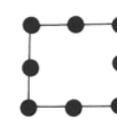
D<sub>3</sub>-7号掘立柱建物跡 (第228図 P L.94)



D<sub>3</sub>-7号

座標値39171~39176・-54743~54748の範囲にあり、古墳時代前期6号方形周溝墓と重複する。  
 桁行1間、梁行1間の方形形態の建物跡である。南北軸方位はおよそN-20°-Wを示す。南・北面柱間は3.0m、東西面は3.5mと3.2mで形状が歪む。建物面積は10.1m<sup>2</sup>を有する。

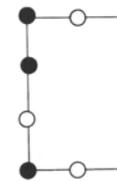
D<sub>3</sub>-8号掘立柱建物跡 (第229図 P L.94)



D<sub>3</sub>-8号

座標値39181~39187・-54728~54734の範囲にある。  
 桁行2間、梁行2間の長方形形態の建物跡である。梁行方位はN-40°-Eを示す。桁行東・西面は3.5mで柱間は等間である。梁行の南・北面は3.1mで同じく等間になる。建物面積は10.6m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径40~70cmの略円形または楕円形状をなす。深さは各面の中央柱穴がやや浅く30cm、四隅柱穴はおおよそ50cmを測る。

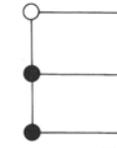
D<sub>3</sub>-9号掘立柱建物跡 (第227図)



D<sub>3</sub>-9号

座標値39141~39149・-54760~54768の範囲にある。古墳時代前期に属する3号及び5号方形周溝墓との重複により、幾つかの柱穴は検出できていない。  
 桁行3間、梁行2間の長方形建物跡である。検出できなかった柱穴は桁行西面の中央南寄りの1穴の外、梁行南面および北面中央の柱穴でいずれも周溝内に位置するものである。桁行方位はN-28°-Eを示す。桁行長4.8m、柱間は2.0m・1.9m・1.9m。梁行は4mである。建物面積は23.3m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径50~60cmの略円形を呈し、50~70cmの深い掘形である。

D<sub>3</sub>-10号掘立柱建物跡 (第228図)



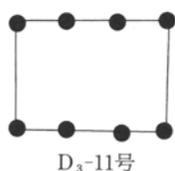
D<sub>3</sub>-10号

座標値39125~39131・-54681~54688の範囲にあり、古墳時代前期D<sub>3</sub>-146号住居跡と重複する。重複部分である北隅の1穴は検出されていない。  
 桁行2間、梁行1間の長方形建物跡である。梁行方位はN-42°-Wを示す。桁行4.5m、柱間は2.1m・2.4m。梁行は3.7mである。建物面積は16.7m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径30~50cm

### 第3章 検出された遺構と遺物

の略円形を呈し、深さ40~50cmを測る。

#### D<sub>3</sub>-11号掘立柱建物跡 (第229図 P L.94)

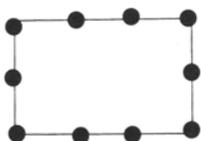


D<sub>3</sub>-11号

座標値39131~39139・-54755~54764の範囲にある。古墳時代前期に属するD-186号住居跡と重複する。

桁行3間・梁行東面2間・西面1間の東西棟建物跡である。梁行方向は大きく東に振られて、N-31°-Eを示す。南北面柱列の各東西端1間分の柱穴はいわゆる布堀工法による立柱であり、中央柱間には施されない布堀掘形は深く整った平坦面と不整面をなすものがある。最も深い掘形で60cmを測る。桁行南・北面は6mで、北面柱間は2.0m、南面は西側より2.0m・2.2m・1.8m。梁行西面は4m、東面は4.2mで2mと2.2mの柱間である。建物面積は24.3㎡である。柱穴掘形は略円形を呈し、底面柱痕径は20cm前後になろう。深さは0.7m~1.0mである。

#### E<sub>2</sub>-1号掘立柱建物跡 (第230図 P L.94)

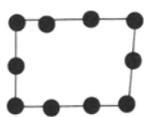


E<sub>2</sub>-1号

座標値38967~38974・-54735~54744の範囲にある。遺跡南に広がる埋没谷地形北端の谷頭に位置する。

桁行3間・梁行2間の東西棟建物跡である。梁行方位はN-13°-Eを示す。南・北面梁行は同規格で6.7mを測るが、柱間は南面が西側より2.5m・1.9m・2.3m。北面は2.5m・2.1m・2.1mである。また、南北面とも中間の2穴は柱線からやや外側へずれる。梁行は東面が4.2mで柱間は2.1mの同寸。西面は4.0mで南側より2.2mと1.8mを測る。建物面積は29.7㎡である。柱穴掘形は方形気味の楕円形を呈し、径50~80cm・深さ40cm・柱痕径約20cmである。

#### E<sub>2</sub>-2号掘立柱建物跡 (第230図 P L.94)

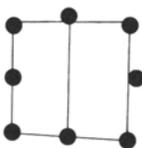


E<sub>2</sub>-2号

座標値38994~38998・-54752~54757の範囲にある。

桁行3間・梁行2間の東西棟建物跡である。梁行方位はN-6°-Eを示すが、東面梁行は桁行に対して若干歪む。南面桁行は4.3m、柱間は両側1.4m・中央1.5m。北面は4.6mで西側柱間は1.2mで短く、他は1.7mの等間である。梁行は東西面3.3mで、東面柱間は1.6m・1.7m、西面は1.8m・1.5mを測る。建物面積は14.8㎡である。柱穴掘形は径50~60cmの略円形か楕円形を呈する。深さ約50cmで均一な掘形をつ。柱痕は判然としないが約15cm程度になろう。

#### E<sub>2</sub>-3号掘立柱建物跡 (第231図)

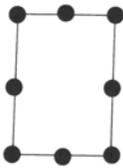


E<sub>2</sub>-3号

座標値38951~38958・-54706~54712の範囲にある。E<sub>2</sub>-205号住居跡と重複するが新旧関係は不明である。

桁行2間、梁行2間の正方形形態の建物跡である。東・北面の中央柱穴は柱列より若干外へずれる。E<sub>2</sub>-205号住居跡との重複によって確認はできないが東柱を有する総柱の可能性もある。南北軸方位はN-16°-Eを示す。東・西面総長4.5m、柱間は2.2m・2.3m。南・北面は4.2mで柱間は2.1mの等間である。建物面積は19.3㎡を有する。

E<sub>2</sub>-4号掘立柱建物跡 (第231図 P L.94)

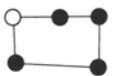


座標値38951～38958・-54716～54721の範囲にある。39号溝・41号溝に重複するが、これより古い時期の所産である。

桁行2間・梁行2間の等間であるが、南北棟の建物跡である。桁行方位はN-11°-Eを示す。桁行・梁行および柱間の整った建物跡で、桁行5.4m・柱間2.7m、梁行3.8m・柱間1.8

E<sub>2</sub>-4号 mの等間間隔である。建物面積は20.4m<sup>2</sup>になる。柱穴掘形は略円形ないしは楕円形を呈し、径40～70cm・深さ60cm前後である。柱痕径は底面の観察から15cm程度になろう。

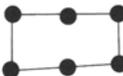
E<sub>2</sub>-5号掘立柱建物跡 (第232図 P L.95)



座標値38969～38972・-54747～54751の範囲にある。E<sub>2</sub>-1号掘立柱建物跡に近く、埋没谷地形の谷頭に位置する。

E<sub>2</sub>-5号 北西隅と南面中央の柱穴は検出されていないが、桁行2間・梁行1間の東西棟建物になろう。梁行方位はN-5°-Eを示す。南・北面桁行は3.2m、北面の柱間は1.7m・1.5mである。東面梁行は1.9mを測る。建物面積は5.8m<sup>2</sup>で小規模である。柱穴掘形は、削平が深く及んだためか10cm程度である。

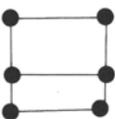
E<sub>2</sub>-6号掘立柱建物跡 (第233図 P L.95)



座標値38972～38976・-54721～54727の範囲にある。平安期のE<sub>2</sub>-191号住居跡および縄文期E<sub>2</sub>-190号住居跡と重複するが、前者との新旧関係は不明である。

E<sub>2</sub>-6号 桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡である。南東隅部の1穴が北側にずれて南面の柱列が歪む。梁行方位はN-18°-Eを示す。桁行南・北面長は4.1m、柱間は2.2mと1.9mである。梁行東面は1.9m、西面は2.1mである。建物面積は8.4m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は40～60cmの略円形で、深さ30cm前後である。

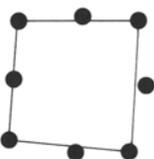
E<sub>2</sub>-7号掘立柱建物跡 (第233図)



座標値38995～38999・-54768～54772の範囲にある。東面の柱列が24号溝と重複するがこれより古い時期の所産である。

E<sub>2</sub>-7号 桁行2間・梁行1間のほぼ正方形の建物跡であるが、東面柱列は内側に若干ずれる。桁・梁行とも3.7mで桁行柱間は2.2m・1.5mである。梁行方位はN-2°-Eを示す。建物面積は13.1m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径30～40cmの略円形で、深さ30cm程度である。

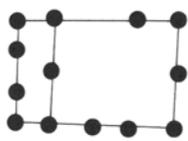
E<sub>2</sub>-9号掘立柱建物跡 (第232図 P L.95・109)



座標値38990～38997・-54737～54743の範囲にある。30号溝・35号溝と重複し、両者より古い時期の所産である。

E<sub>2</sub>-9号 桁行・梁行2間の正方形形態の建物跡である。北西隅の柱穴がやや内側に位置し北面の柱線が歪み、東面中央の柱穴が大きく外へずれる。南北軸方位はN-6°-Wを示す。東面の総長5.0m、柱間は2.5mの等間。西面は4.6mで柱間2.2mと2.4m。南面は4.7mで柱間2.5m・2.2m。北面は4.6mの柱間2.1mと2.5mを測る建物面積は22.4m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径40～70cmの略円形で、深さ40～60cmを測る。底面の痕跡から柱材径は15cm程度になろう。

E<sub>3</sub>-1号掘立柱建物跡 (第234図)

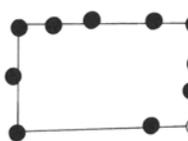


E<sub>3</sub>-1号

座標値39041~39047・-54767~54775の範囲にあり、東にあるE<sub>3</sub>-2号掘立柱建物跡と並置する。

桁行き3間、梁行2間の東西棟に西庇の付く建物跡になろう。梁行方位はN-13°-Wを示す。桁行総長6.2m、南面柱間は西側より1.6m・1.4m・1.8m。梁行は4.1mで、柱間は2.0m・2.1m。庇は西面柱列より1.4mを測り、柱間は北側より1.2m・1.4m・1.2mである。建物面積は24.6㎡を有する。柱穴掘形は径30×40の略円形を呈し、20cm程度の浅目の柱穴が多く、南面両端の2穴が40cmとやや深い。

E<sub>3</sub>-2号掘立柱建物跡 (第234図)



E<sub>3</sub>-2号

座標値39043~39049・-54760~54768の範囲にある。

桁行4間、梁行3間の東西棟建物跡である。南面の3間のうち2柱穴は未検出で建物としてはやや不安がある。桁行方位はN-13°-Wを示す。桁行長6.8mで南面の東側柱間は1.6m、北面の柱間は西より1.3m・1.5m・2.4m・1.6m。梁行は4m、東面は1.5m・2.5m。西面は1.8m・2.2mを測る。建物面積は26.5㎡を有する。柱穴掘形は径40cm前後の略円形を呈する。深さ50~60cmが多く、西面の3穴は15cm程度で浅い。

E<sub>3</sub>-3号掘立柱建物跡 (第235図)

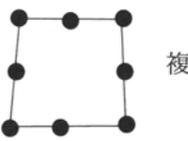


E<sub>3</sub>-3号

座標値39022~39030・-54761~54767の範囲にある。東面柱列の一部が本跡より新しい24号溝と重複する。

桁行2間・梁行1間の南北棟に南面庇の付く建物跡になろうが、庇の西側柱穴は桁行西面柱列に合致せず内側に位置する。桁行方位はN-9°-Eを示す。桁行南面は5.4m、柱間3.0m・2.4m。西面は5.3m、柱間2.7m・2.6m。梁行南面は4.0m、北面3.6mを測る。庇は南面から2.1mで、柱間は3.2mである。建物面積は29.3㎡を有する。柱穴掘形は径3040cmの略円形で、北西隅の1穴をのぞきごく浅い。

E<sub>3</sub>-6号掘立柱建物跡 (第236図 P L.95)

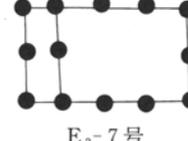


E<sub>3</sub>-6号

座標値39001~39017・-54769~54775の範囲にある。東面の柱穴はE<sub>3</sub>-115号住居跡との重複によって一部痕跡程度のものもある。

桁行・梁行とも2間の正方形形態の建物跡である。南西隅の1穴が西にずれて西面柱列が歪む。東面柱列を機軸にする方位はN-7°-Wを示す。東・北面長は4.0m、柱間は2.0mの等間である。西面長は4.2m、2.0m・2.2mの柱間で、南面は4.5mの2.0mと2.5mの柱間間隔となる。建物面積は12.2㎡である。柱穴の掘形は径約40cmの楕円形をなし、深さ40~50cmである。

E<sub>3</sub>-7号掘立柱建物跡 (第236図 P L.95)



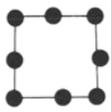
E<sub>3</sub>-7号

座標値39052~39057・-54778~54786の範囲にある。

桁行3間、梁行2間の身舎に西庇が付く東西棟建物跡である。梁行方位はほぼ真北を示すが、南・北面の柱列が僅かに歪む。身舎柱列は南・北面桁行が5m、梁行東面

は3.4m・西面3.7mを測る。南・北面柱間は1.7m・1.7m・1.6mに割り振るが南面は西側、北面が東側の柱間が短い。東面柱間は1.7mの等間、西面は1.7m・2.0mである。西庇は身舎より1.2mの間隔をもち、柱間は1.7m・1.9mである。建物面積は22.4㎡である。柱穴掘形は略円形で径40×60cm、深さ40～70cmを測る。西庇柱穴は身舎のものときほどの差はないもののやや浅目の掘形である。

E<sub>3</sub>-8号掘立柱建物跡 (第235図 PL.95)



座標値39023～39027・-54711～54716の範囲にある。

桁行・梁行2間の正方形形態を呈する建物跡である。南北軸方位はN-3°-Eを示す。四面とも総長3.1mを測り、柱間は東面1.6m・1.5m。西面は1.4m・1.7m。南面は1.9m・1.2m。北面は1.6m・1.5mである。建物面積は10.1㎡を有する。柱穴掘形は径40cm前後の略円形を呈し、深さ30～40cmである。

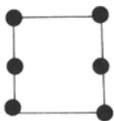
F-1号掘立柱建物跡 (第237図 PL.95)



座標値39119～39124・-54661～54666の範囲にある。

桁行1間、梁行1間の長方形形態の建物跡である。南東面梁行柱間が短く形状は歪む。桁行方位はN-29°-Eを示す。桁行3.5m、梁行北西面は2.0m、南東面は1.8mを測る。建物面積は6.8㎡を有する。柱穴掘形は約40cmの略円形を呈し、20～30cmの深さを測る。

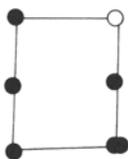
F-2号掘立柱建物跡 (第237図 PL.95)



座標値39122～39127・-54657～54663の範囲にある。

桁行2間、梁行1間の南北棟建物跡である。桁行方位はN-19°-Eを示す。桁行3.6mで柱間は1.9m・1.8m。梁行南面は3.4m、北面3.3mを測る。建物面積は12.2㎡を有する。柱穴掘形は径50～70cmの楕円形状で、深さは40cm前後である。

F-3号掘立柱建物跡 (第238図 PL.96)

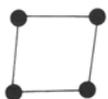


座標値39125～39132・-54657～54664の範囲にある。

南東隅の1穴は検出されていないが桁行2間、梁行1間の長方形形態の建物跡になろう。桁行方位はN-32°-Eを示す。桁行5.0m、柱間は2.5mの等間である。梁行4.0mを測る。建物面積は19.5㎡を有する。柱穴掘形は径40×60cmの略楕円形を呈し、深さ60～70cmである。

F-3号

F-4号掘立柱建物跡 (第237図 PL.96)



座標値39122～39127・-54652～54657の範囲にある。

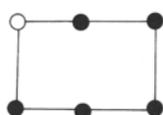
桁行1間、梁行1間の正方形形態の建物跡である。西面の柱列に基ずく南北軸の方位はN-28°-Eを示す。柱間は北面が3.0m、他は2.9mを測る。建物面積は8.4㎡有する。柱穴掘形は40×60cmの楕円形状で、深さ40cmである。

F-4号

F-5号掘立柱建物跡 (第240図 PL.69)

座標値39133～39140・-54578～54586の範囲にある。

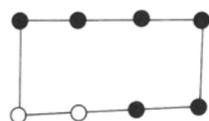
### 第3章 検出された遺構と遺物



F-5号

北西隅の1穴は未検出であるが、桁行2間・梁行1間の長方形形態の建物跡になろう。桁行方位はN-53°-Eを示す。桁行は5.3m、柱間2.8m・2.5m。梁行は3.2mを測る。建物面積は17.7m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径30×40cm前後の略円形で、深さ40~60cmである。

#### F-7号掘立柱建物跡 (第238図)

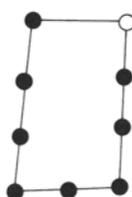


F-7号

座標値39113~39119・-54624~54632の範囲にある。

南面柱列の西側の2穴は調査区域外にあり南検出であるが、桁行3間、梁行1間の東西棟建物になろう。梁行方位はN-11°-Wを示す。桁行は7.0m、柱間は2.3m・2.4m・2.3m。梁行は3.3mを測る。建物面積は23.8m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径約40cmの楕円形を呈し、深さ20~40cmを測る。

#### F-8号掘立柱建物跡 (第239図)



F-8号

座標値39133~39141・-54621~54626の範囲にある。古墳時代前期F-87号住居跡と重複する。

北東隅の1穴が未検出であるが、桁行3間、梁行2間の南北棟の建物跡である。桁行西面と梁行南面の柱間が長く形状は歪む。また、梁行北面には間柱が見られない。桁行方位は南面柱列に基づけばほぼ真北を示す。桁行東面6.3m、柱間は2.3m・1.9m・(2.1m)。西面6.5m、柱間2.1m・2.1m・2.3m。梁行南面は4.0m、柱間は2.0mで等間である。北面は3.6mになろう。建物面積は24.2m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径40~50cmの略円形で、深さ40~50cmである。

#### F-9号掘立柱建物跡 (第239図)



F-9号

座標値39153~39156・-54597~54601の範囲にある。

桁行2間、梁行1間の東西棟建物跡で、北面の中間梁柱穴が欠如する。梁行方位はN-5°-Wを示す。桁行南・北面は4.0m、南面の柱間は2.0mの等間である。梁行は2.1mを測る。建物面積は8.4m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は径30~40cmの略円形を呈し、深さ60~70cmである。

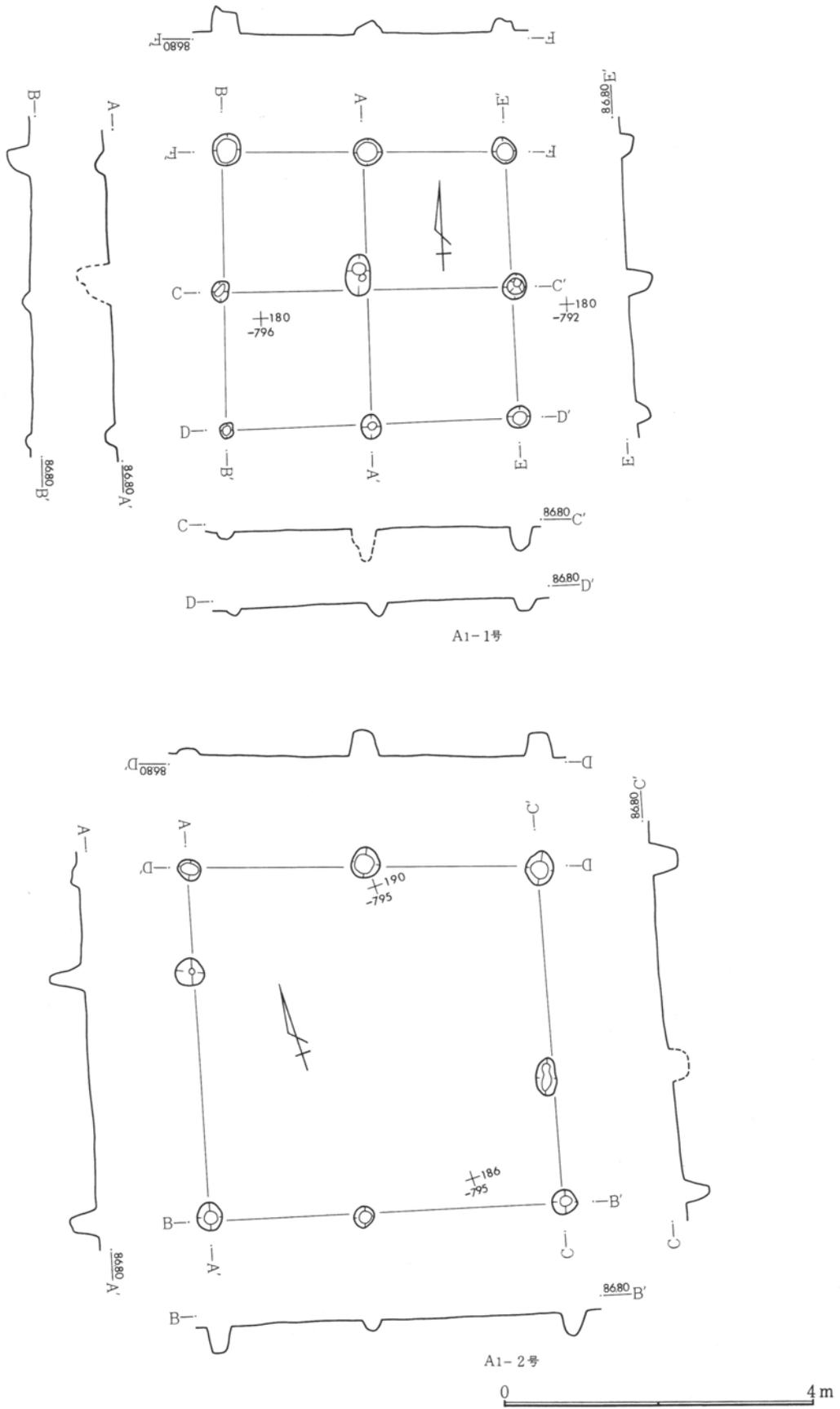
#### G-1号掘立柱建物跡 (第240図 P L.96)



G-1号

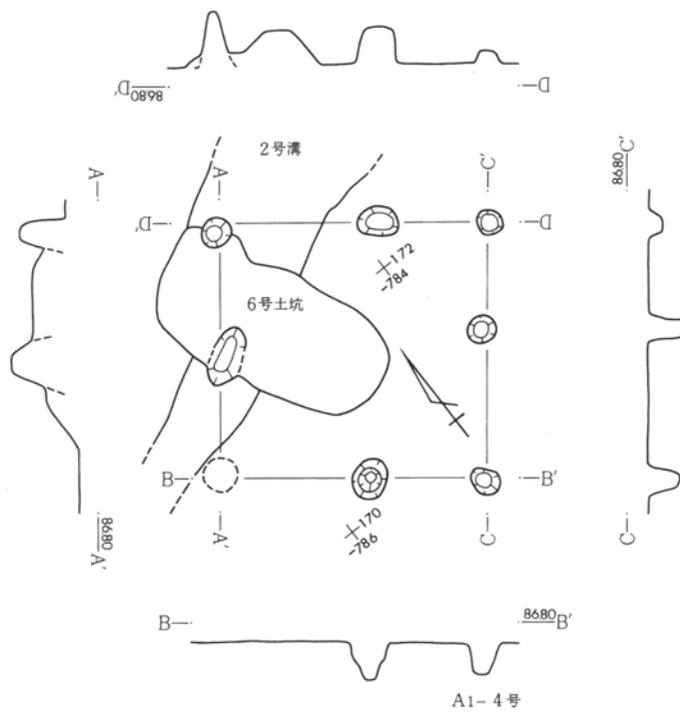
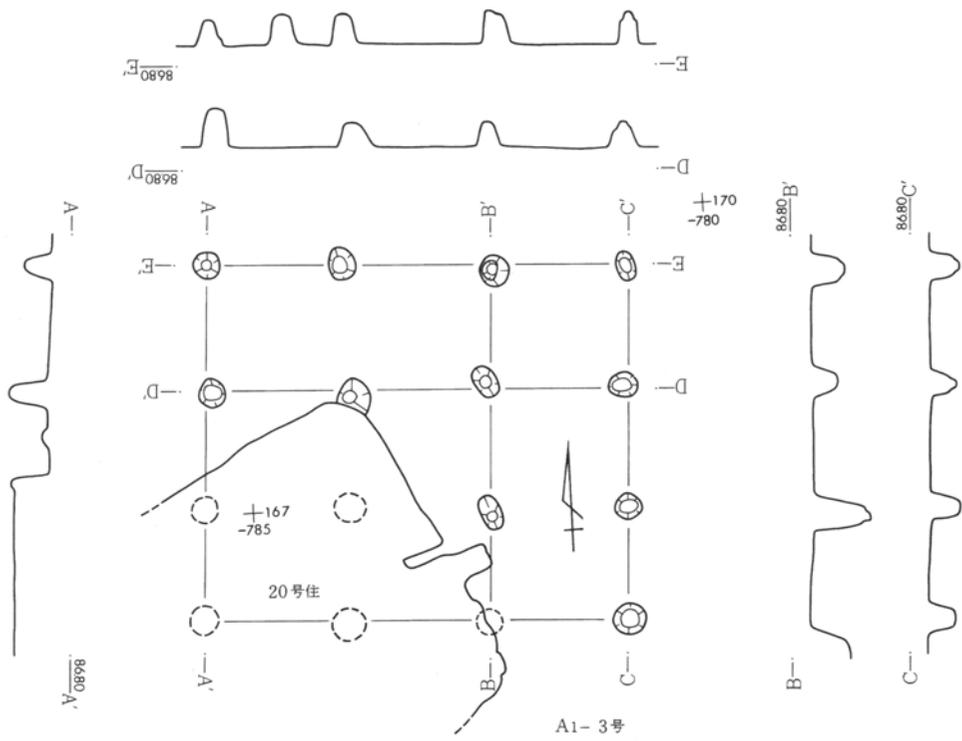
座標値39138~39143・-54540~54547の範囲にある。

北東隅の1穴は未検出であるが、桁行2間、梁行2間の東西棟の建物跡でやや歪みのある形状となる。梁行西面の中間柱は欠如する。梁行方位はN-15°-Wを示す。桁行南・北面は5.1m、柱間2.3m・2.8mで北面も同じ柱間になろう。梁行西面は3.5m、柱間1.8m・1.5mになろう。東面は3.3mを測る。建物面積は18.3m<sup>2</sup>を有する。柱穴掘形は30~40cmの略円形で、深さ2.0~40cmである。

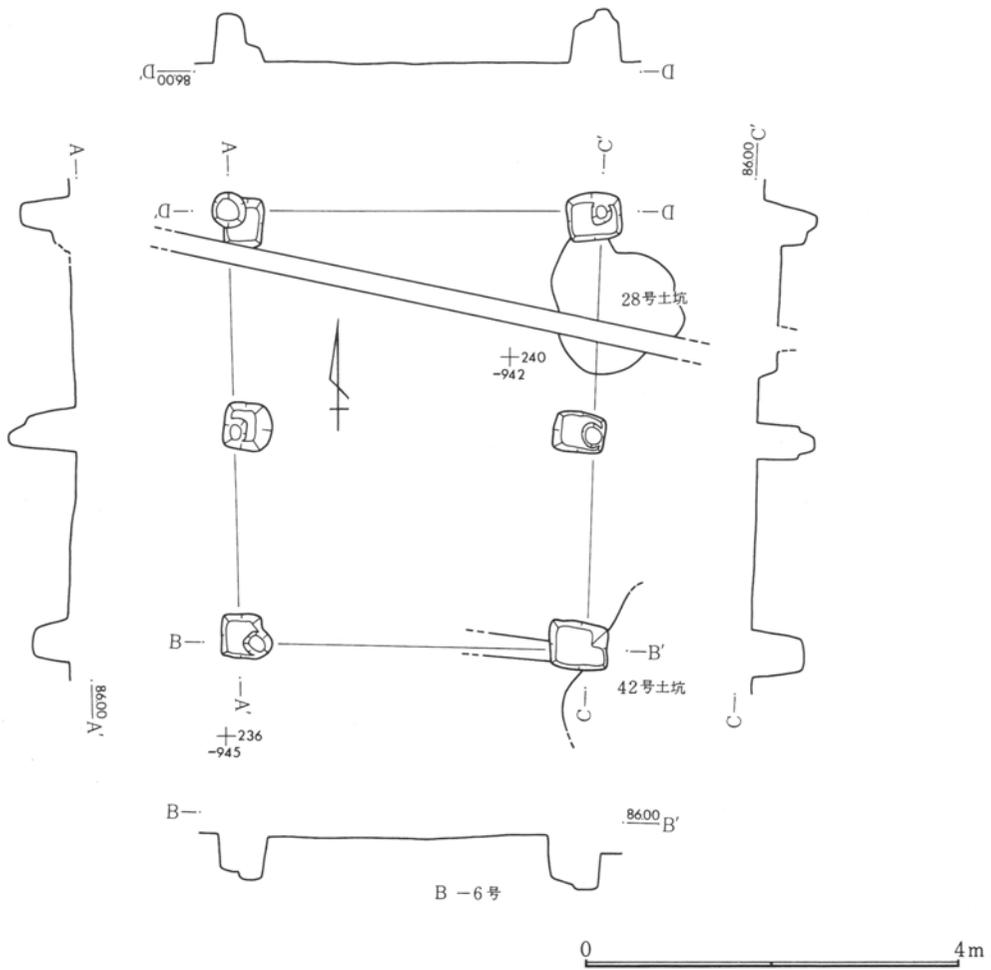
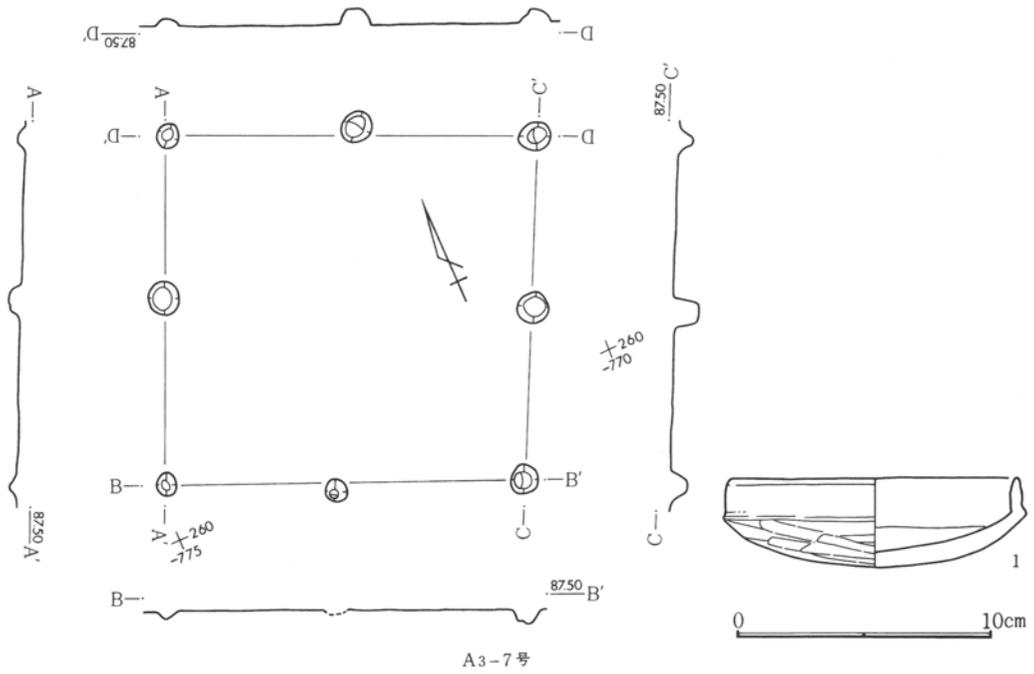


第222図 掘立柱建物跡 (A<sub>1</sub>-1・2号)

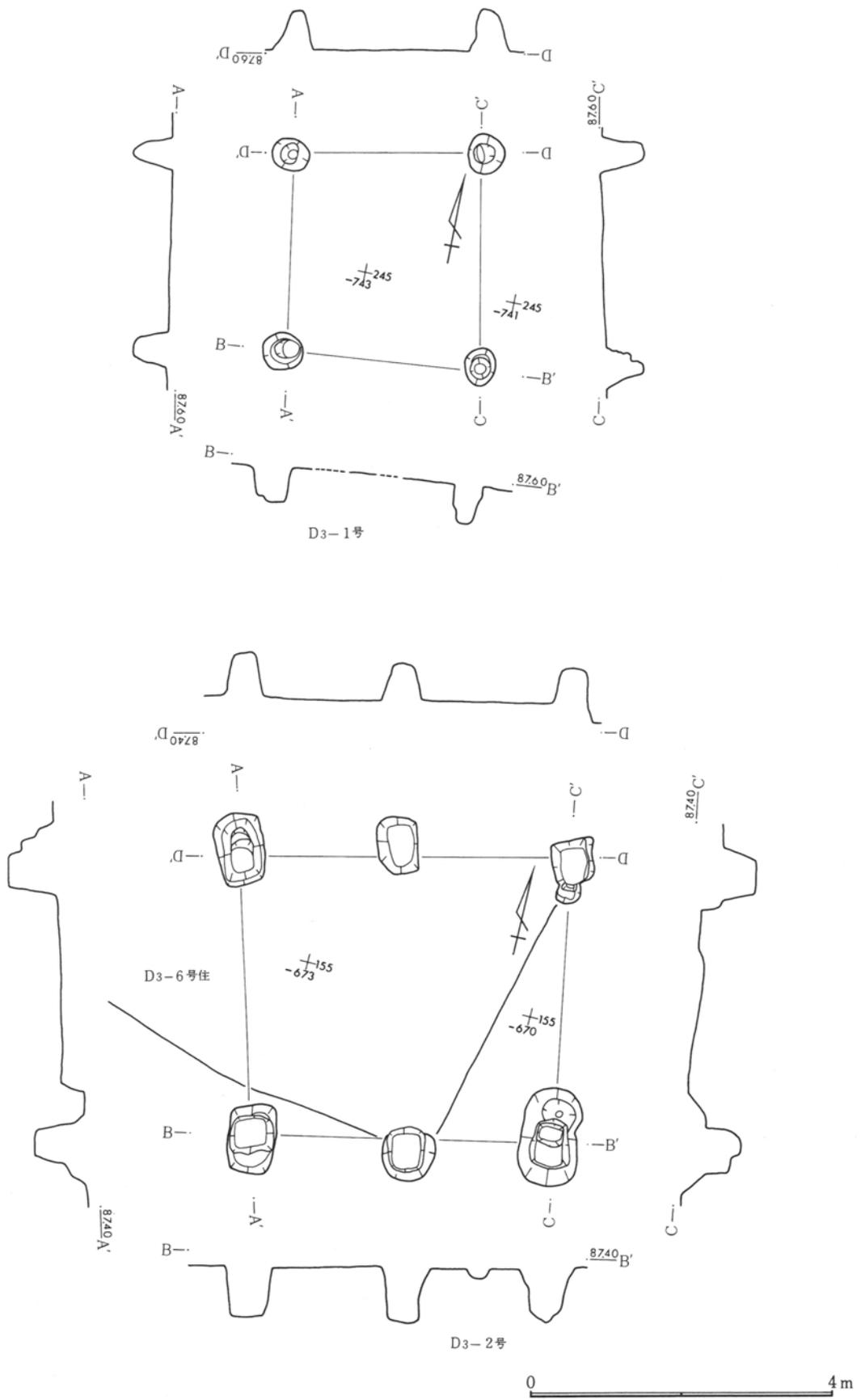
第3章 検出された遺構と遺物



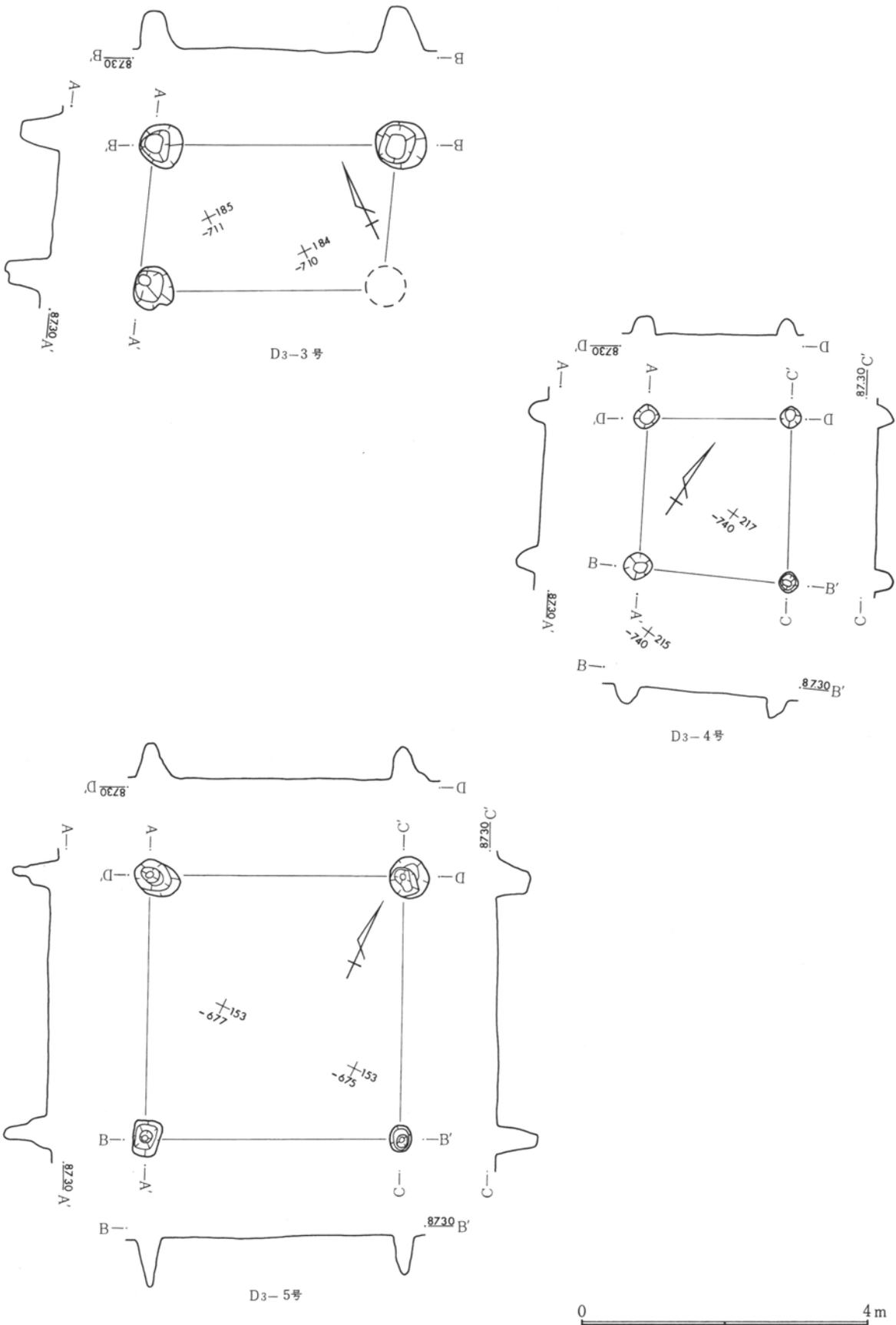
第223図 掘立柱建物跡 (A<sub>3</sub>-3・4号)



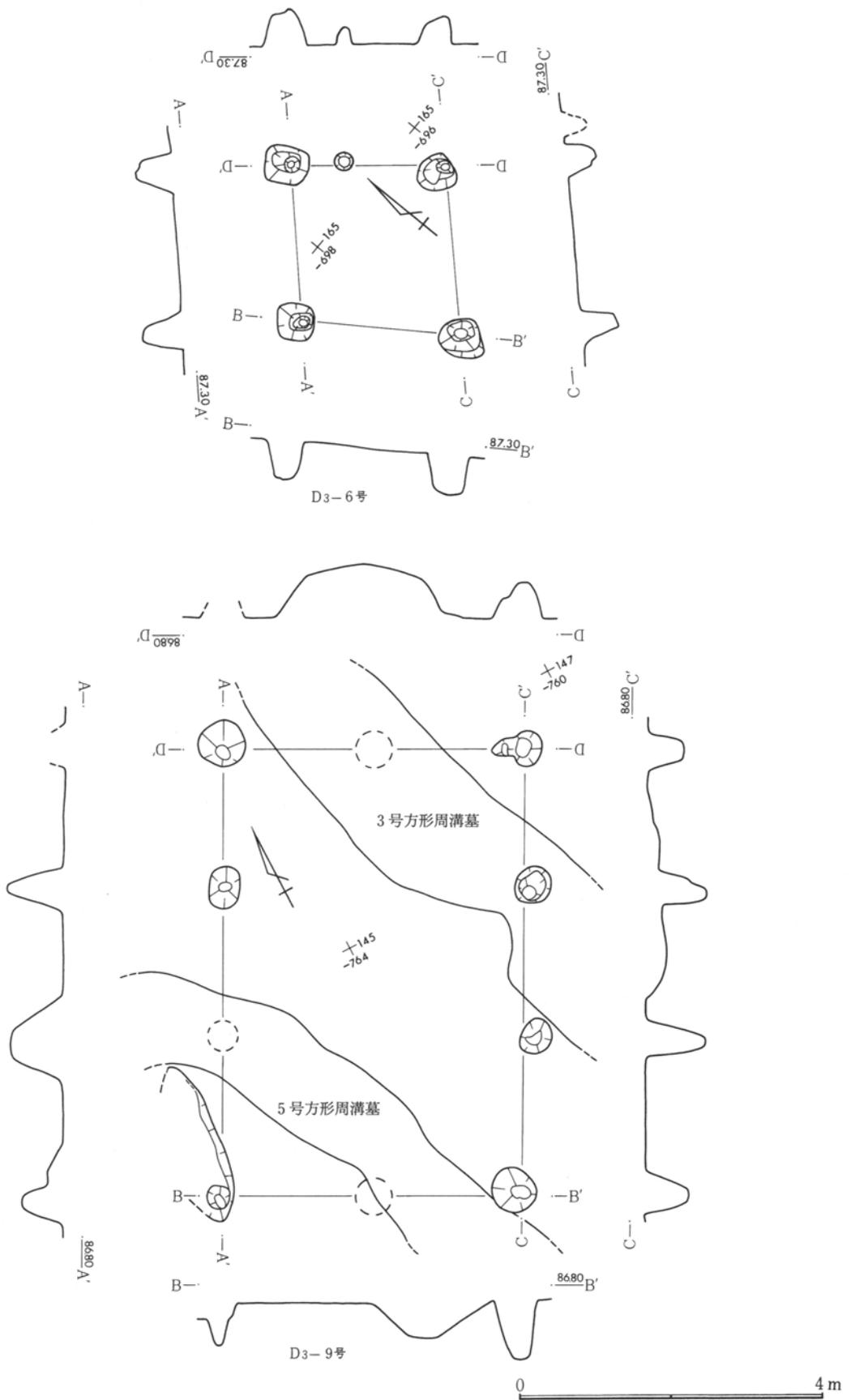
第224図 掘立柱建物跡・出土遺物 (A<sub>3</sub>-7・B-6号)



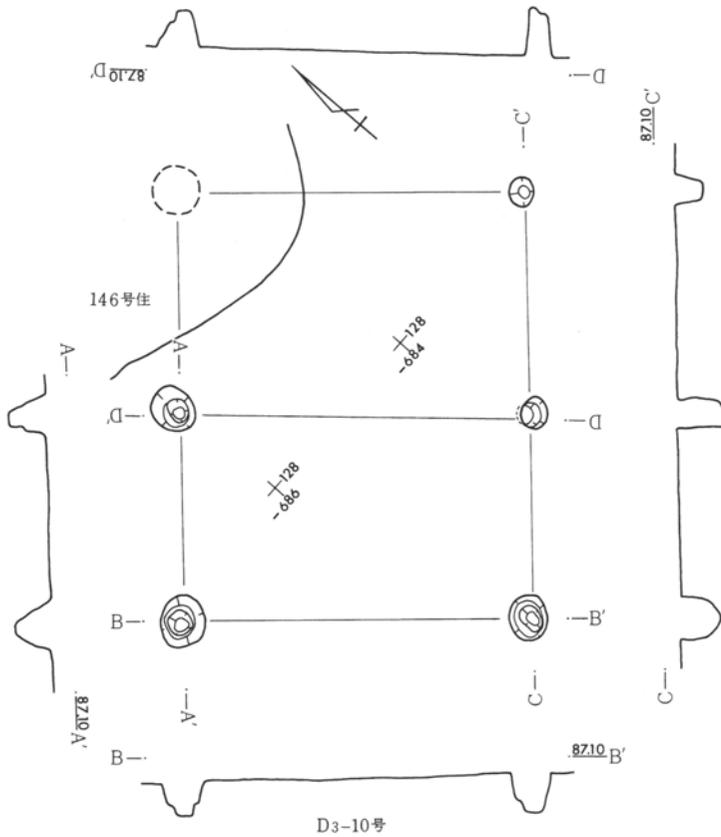
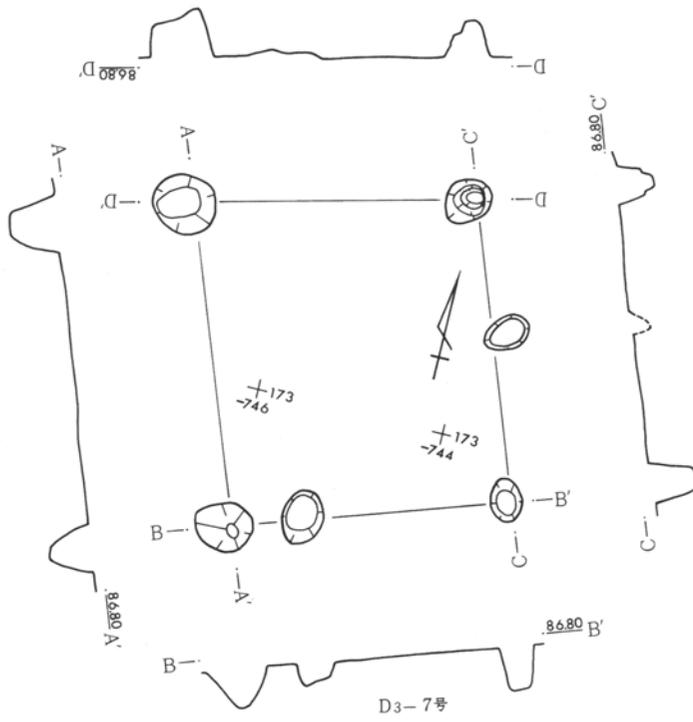
第225図 掘立柱建物跡 (D<sub>3</sub>-1・2号)



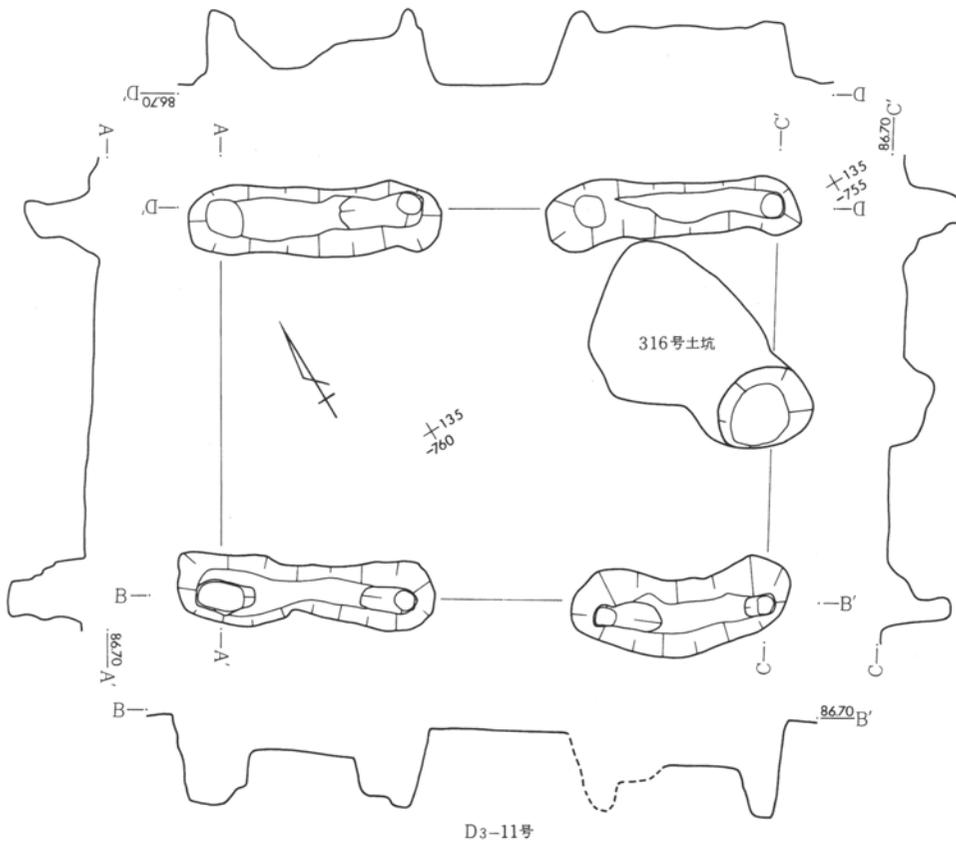
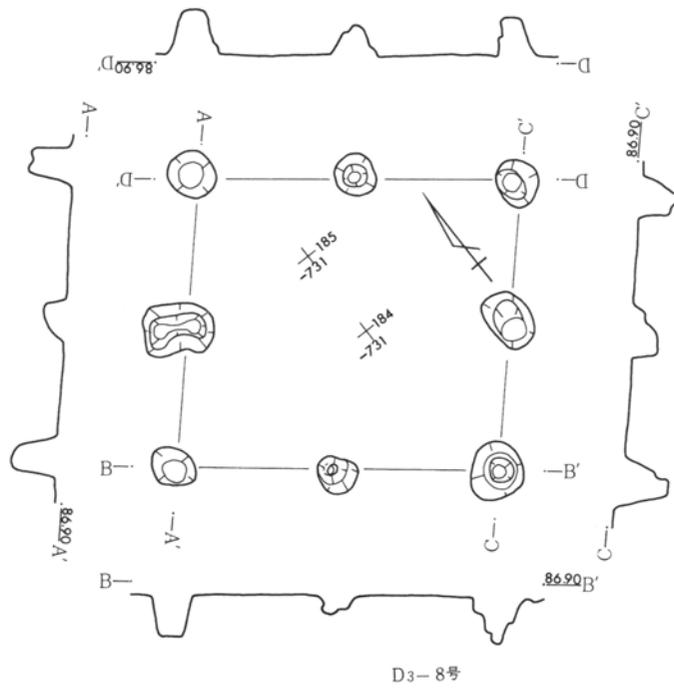
第226図 掘立柱建物跡 (D<sub>3</sub>-3・4・5号)



第227図 掘立柱建物跡 (D<sub>3</sub>-6・9号)

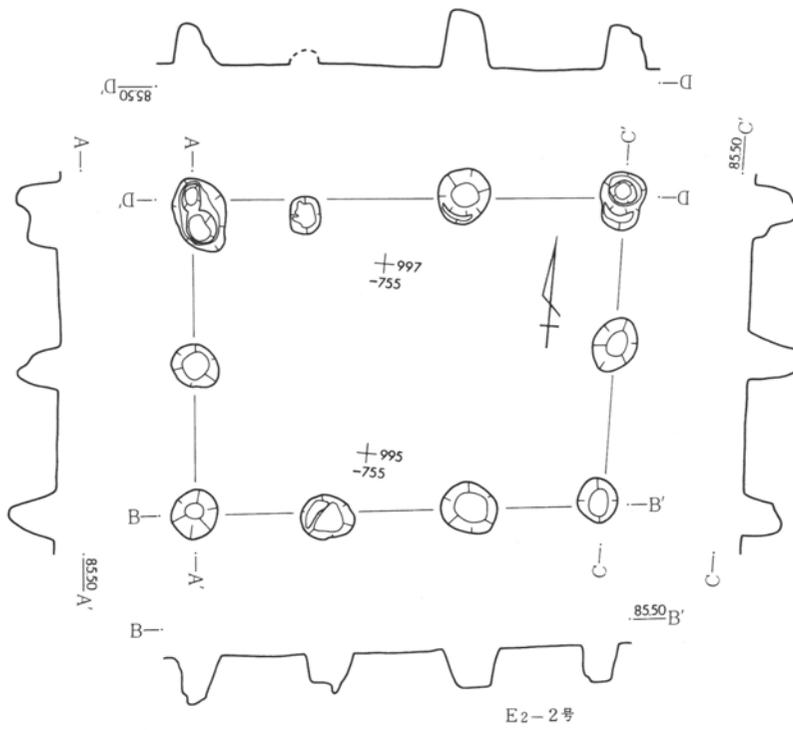
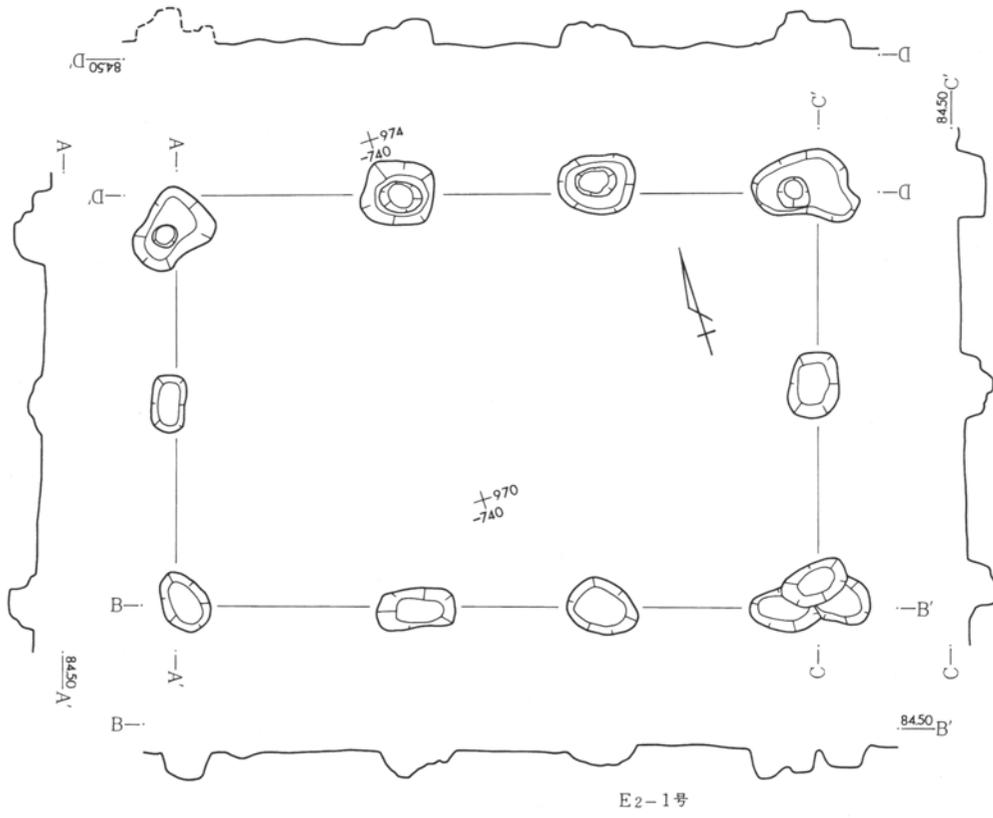


第228図 掘立柱建物跡 (D<sub>3</sub>-7・10号)



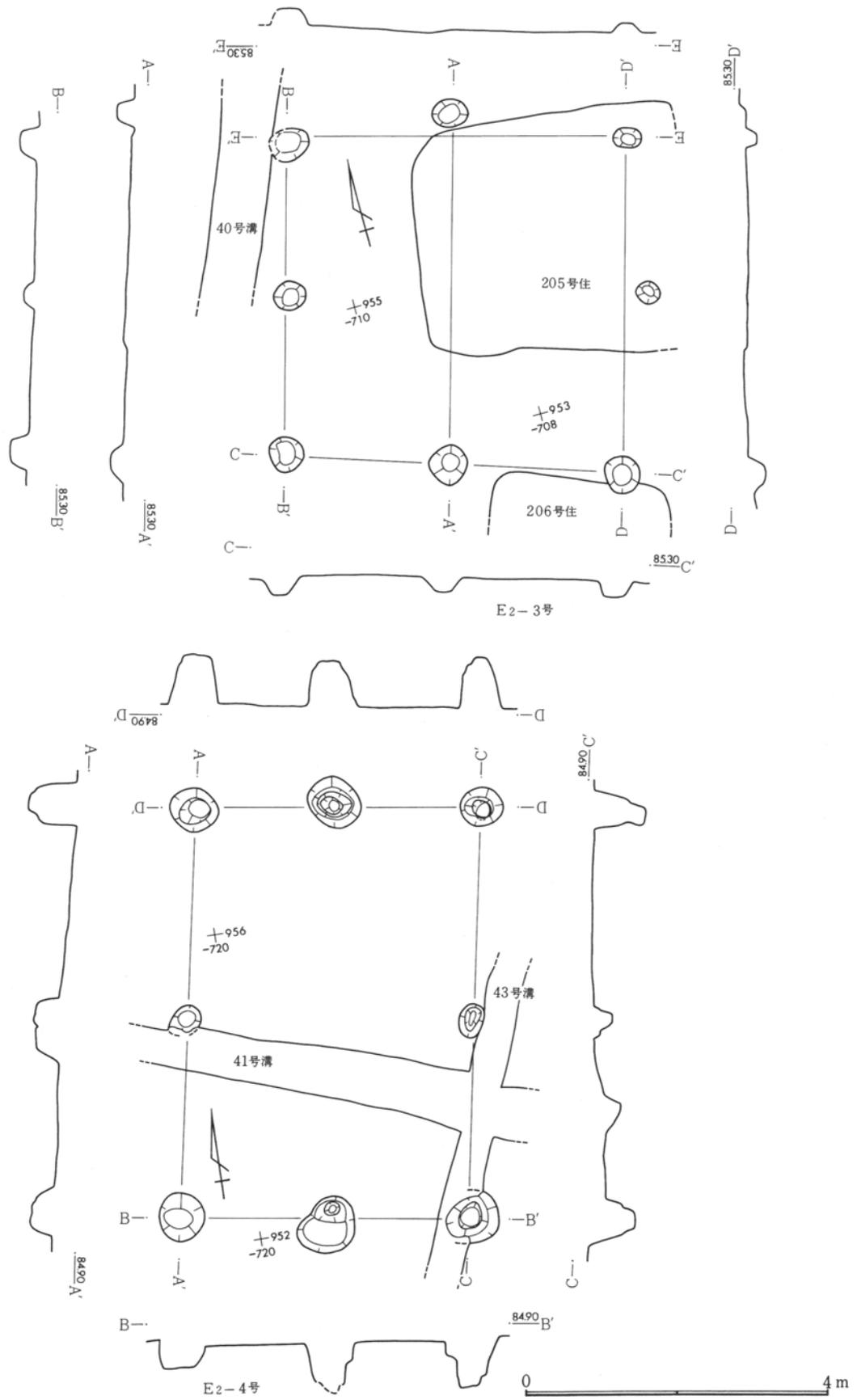
0 4 m

第229図 掘立柱建物跡 (D<sub>3</sub>-8・11号)

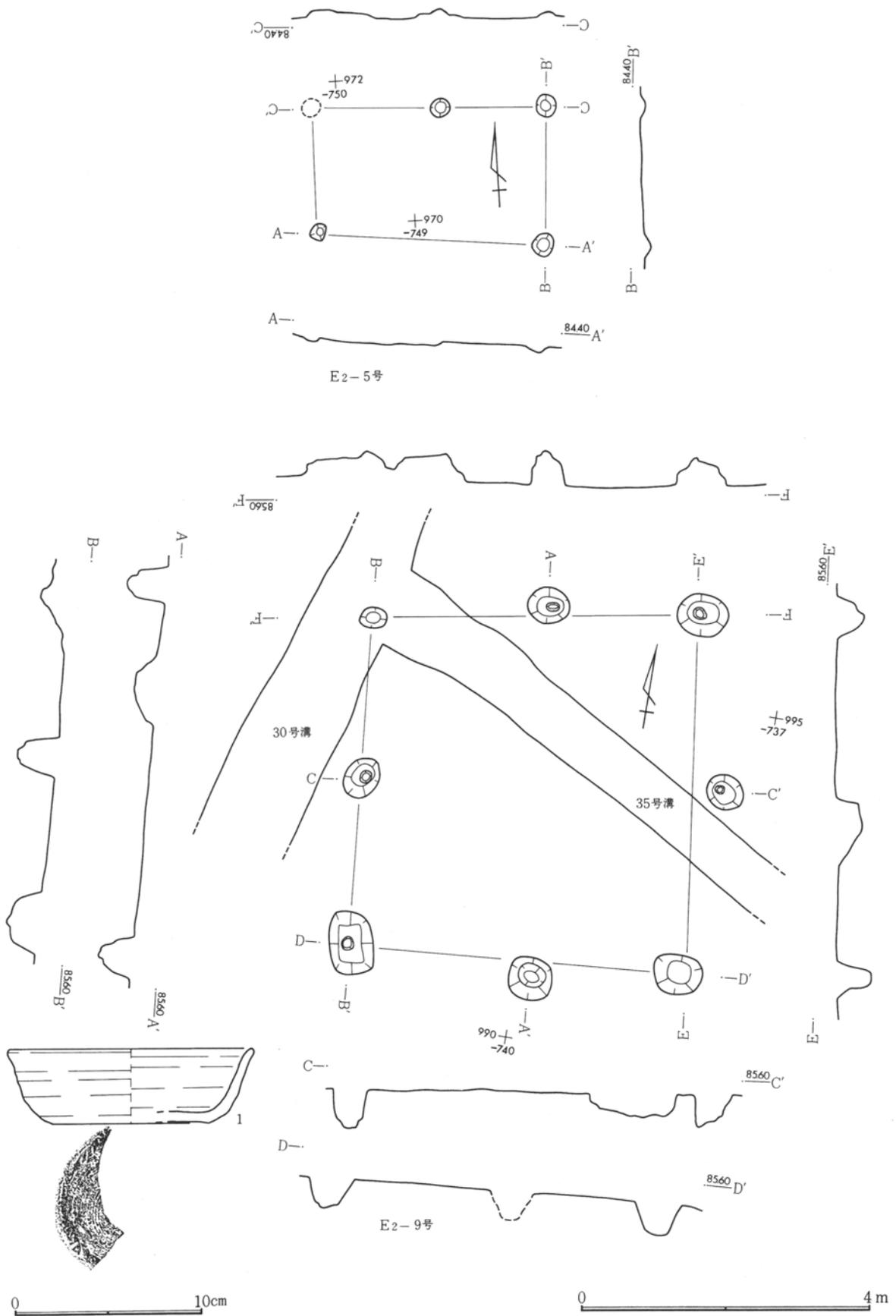


0 4 m

第230図 掘立柱建物跡 (E<sub>2</sub>-1・2号)

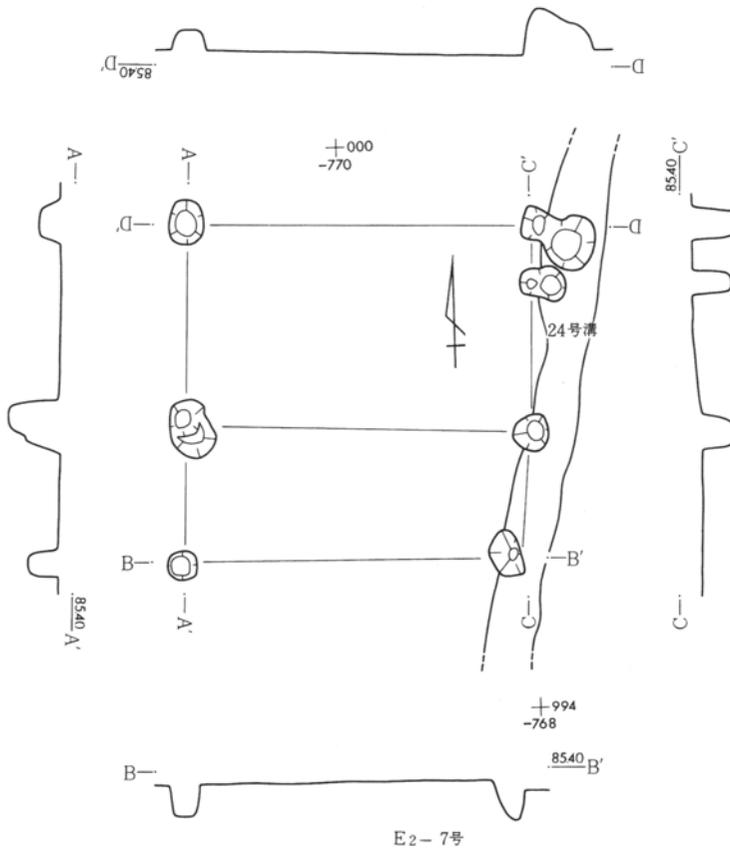
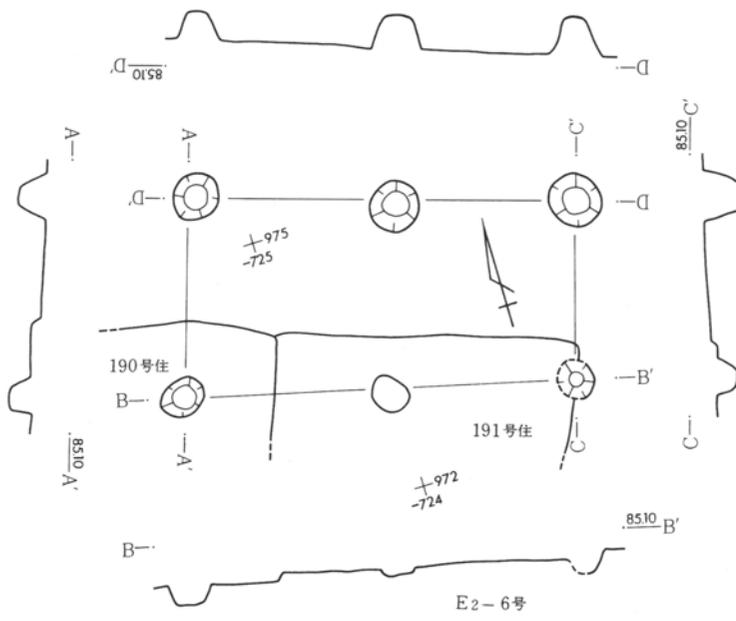


第231図 掘立柱建物跡 (E<sub>2</sub>-3・4号)



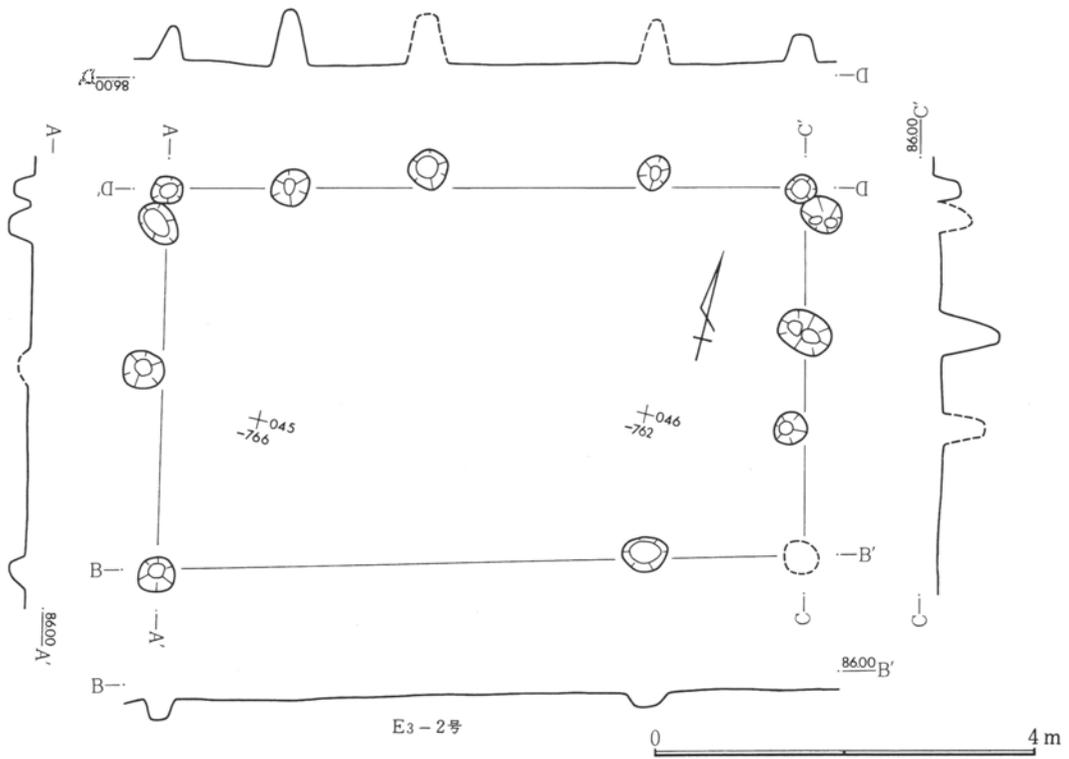
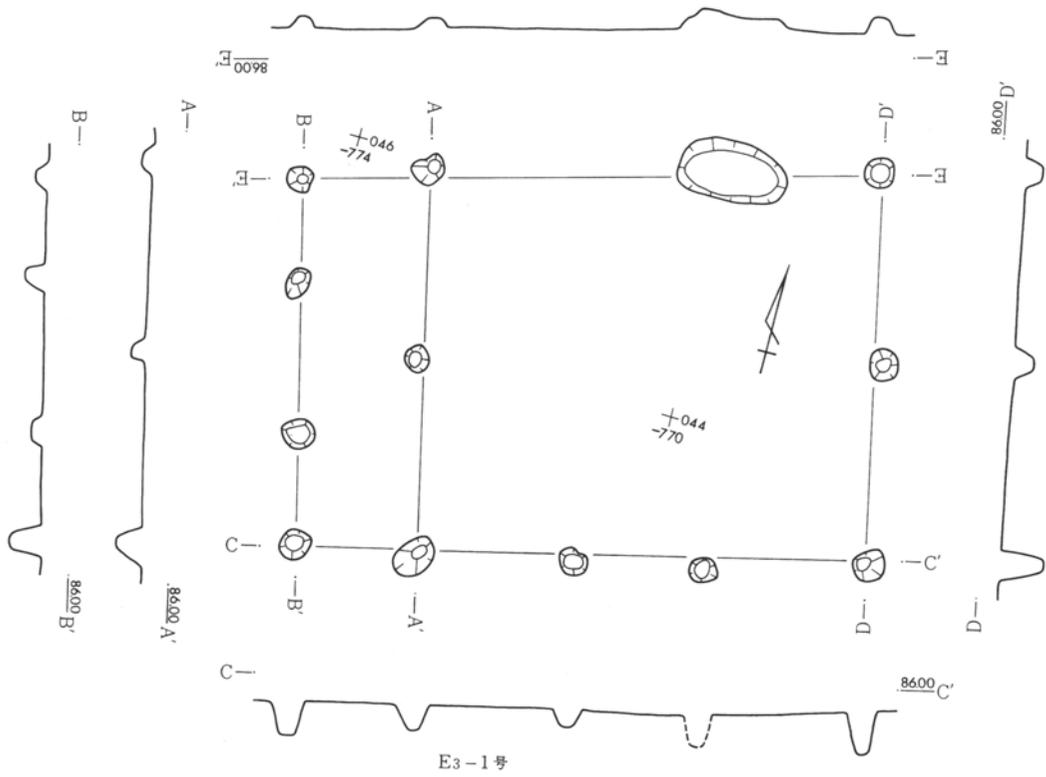
第232図 掘立柱建物跡・出土遺物 (E<sub>2</sub>-5・9号)

第3章 検出された遺構と遺物



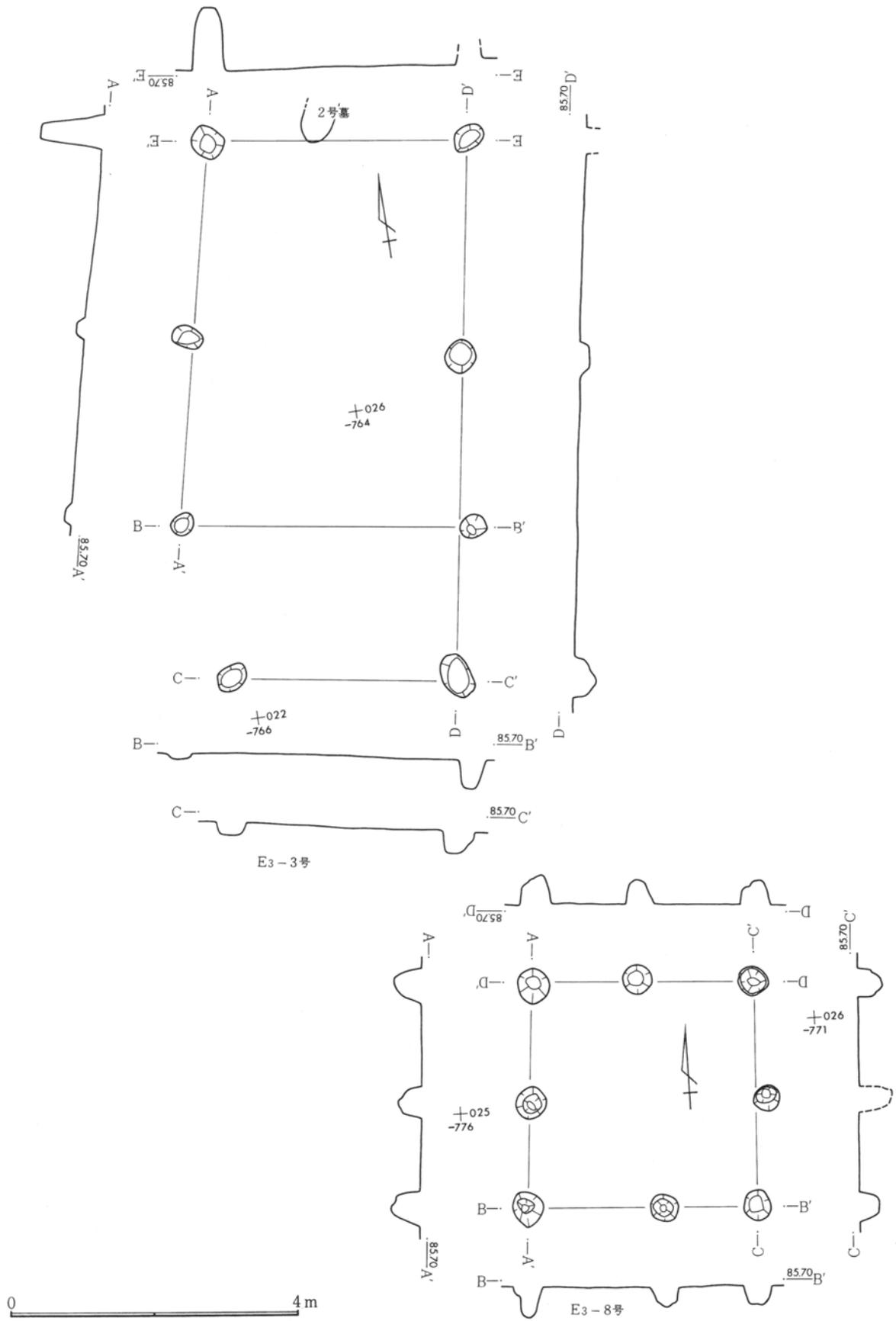
0 4 m

第233図 掘立柱建物跡 (E<sub>2</sub>-6・7号)

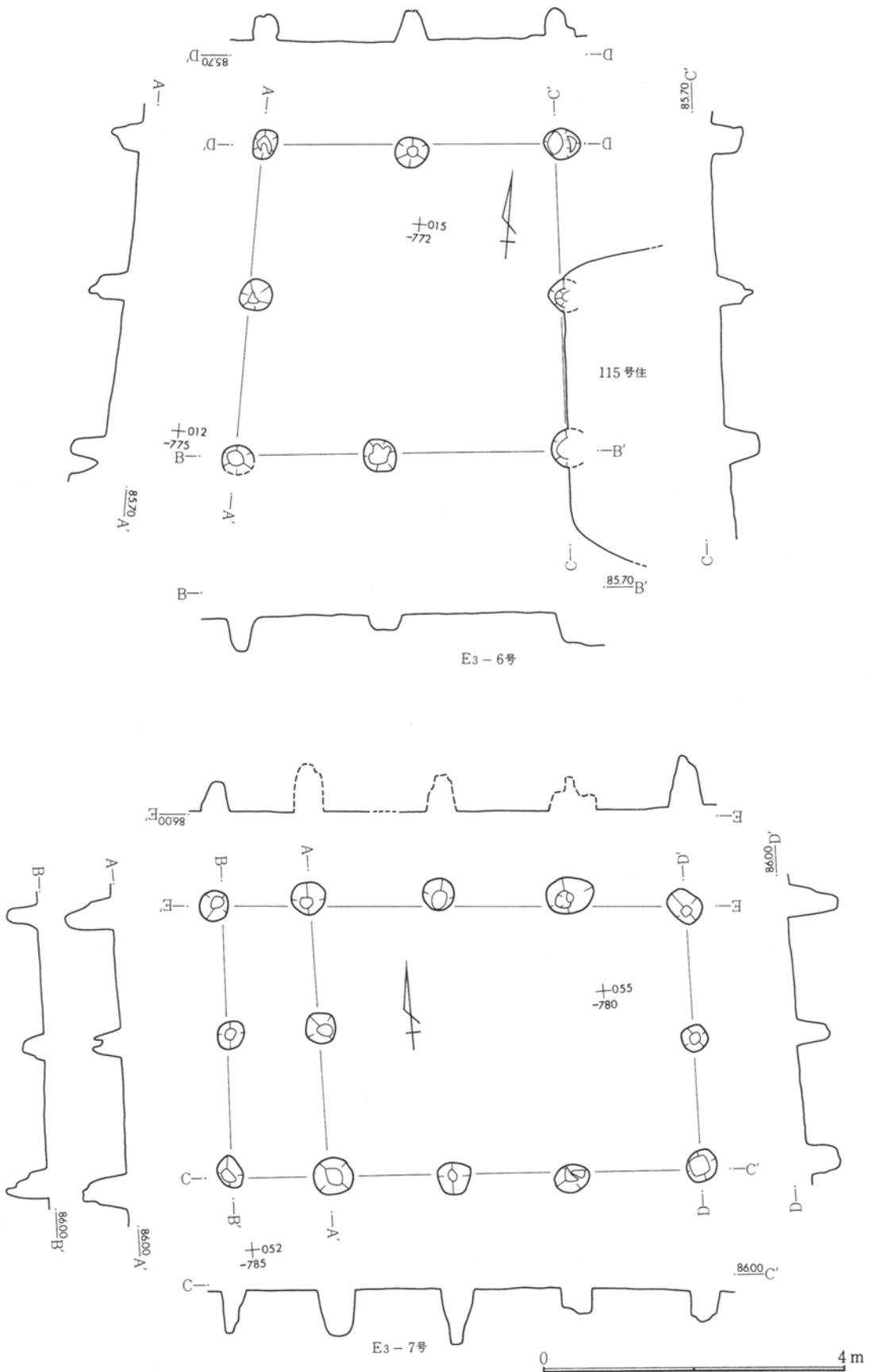


第234図 掘立柱建物跡 (E<sub>3</sub>-1・2号)

第3章 検出された遺構と遺物

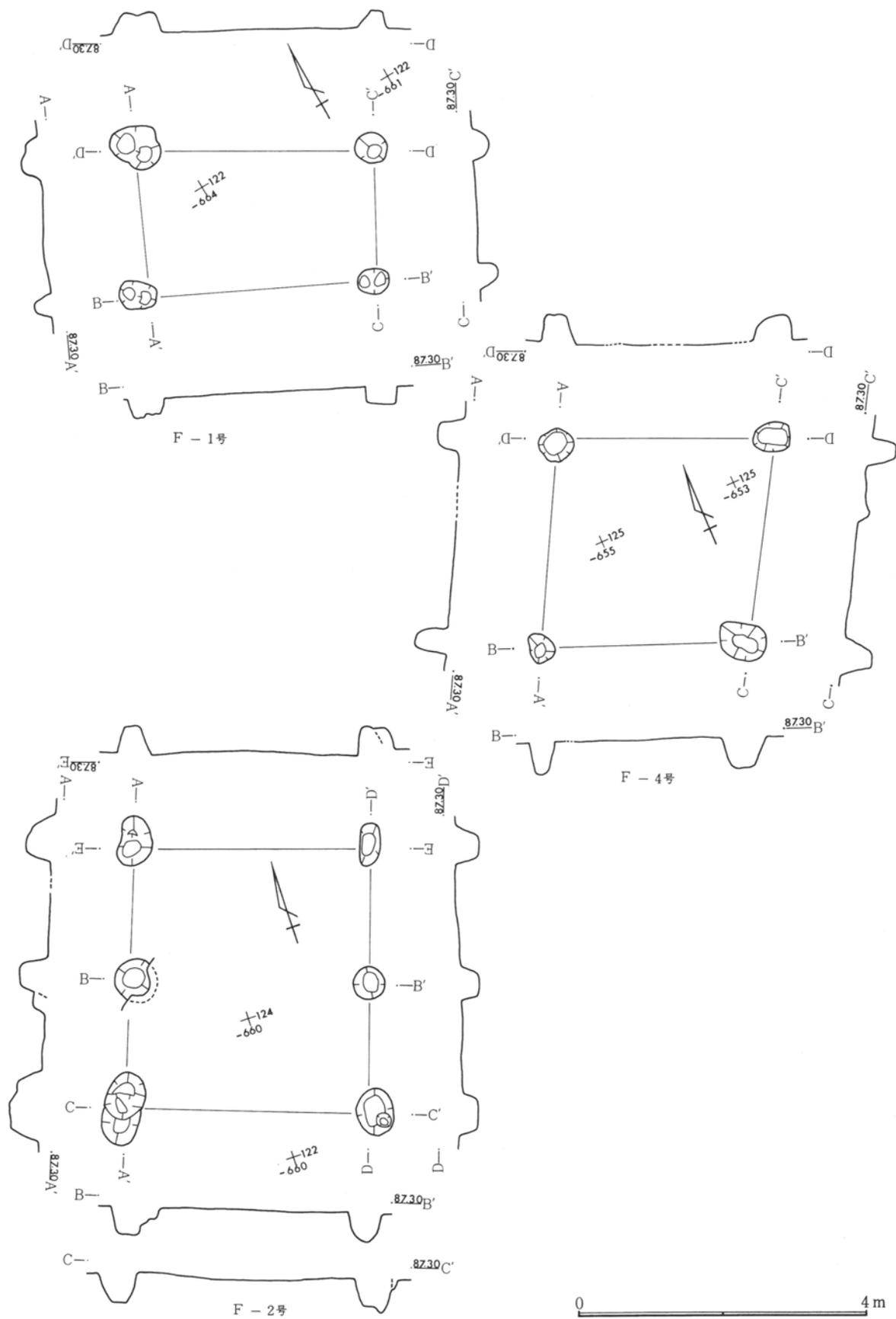


第235図 掘立柱建物跡 (E<sub>3</sub>-3・8号)

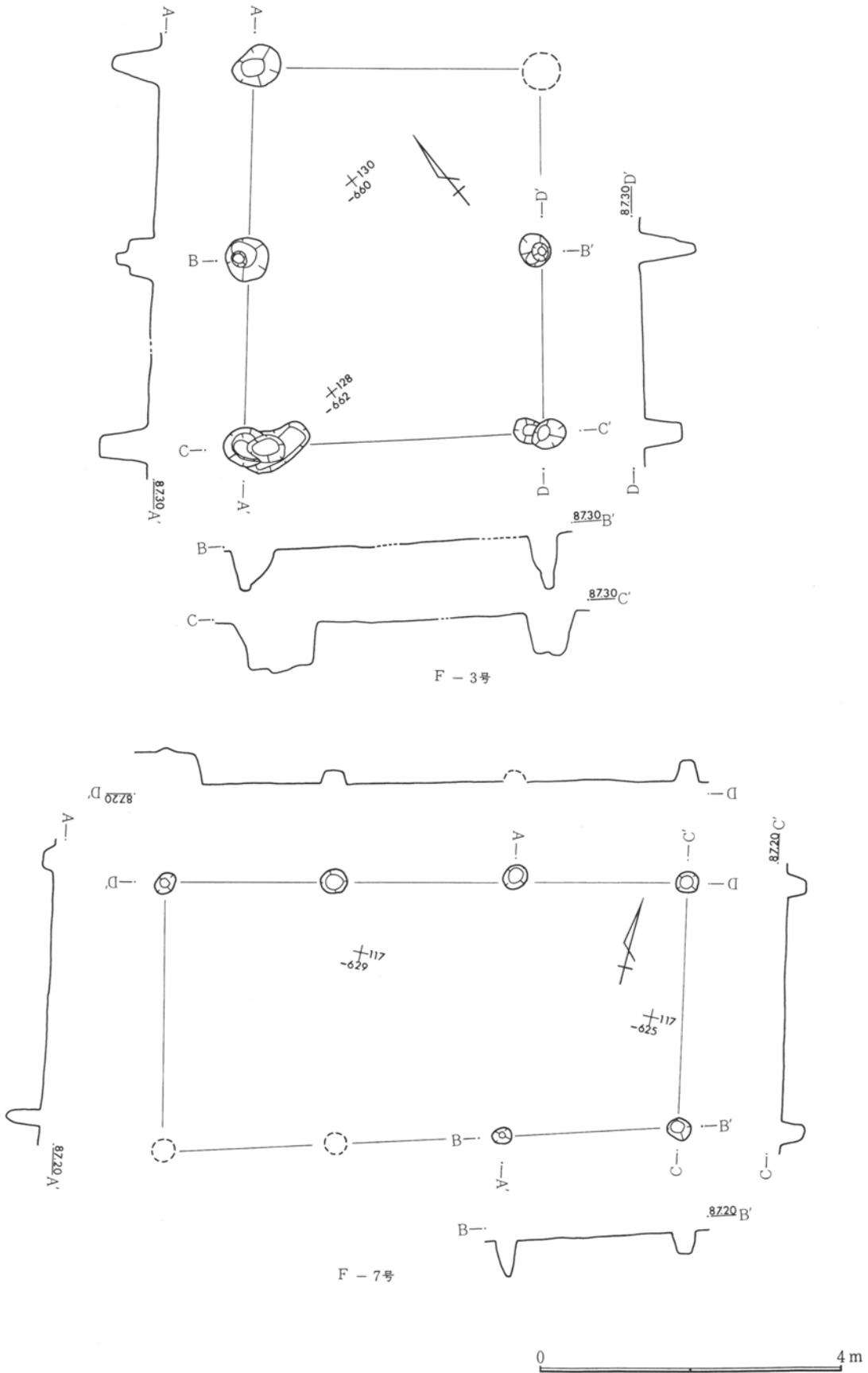


第236図 掘立柱建物跡 (E<sub>3</sub>-6・7号)

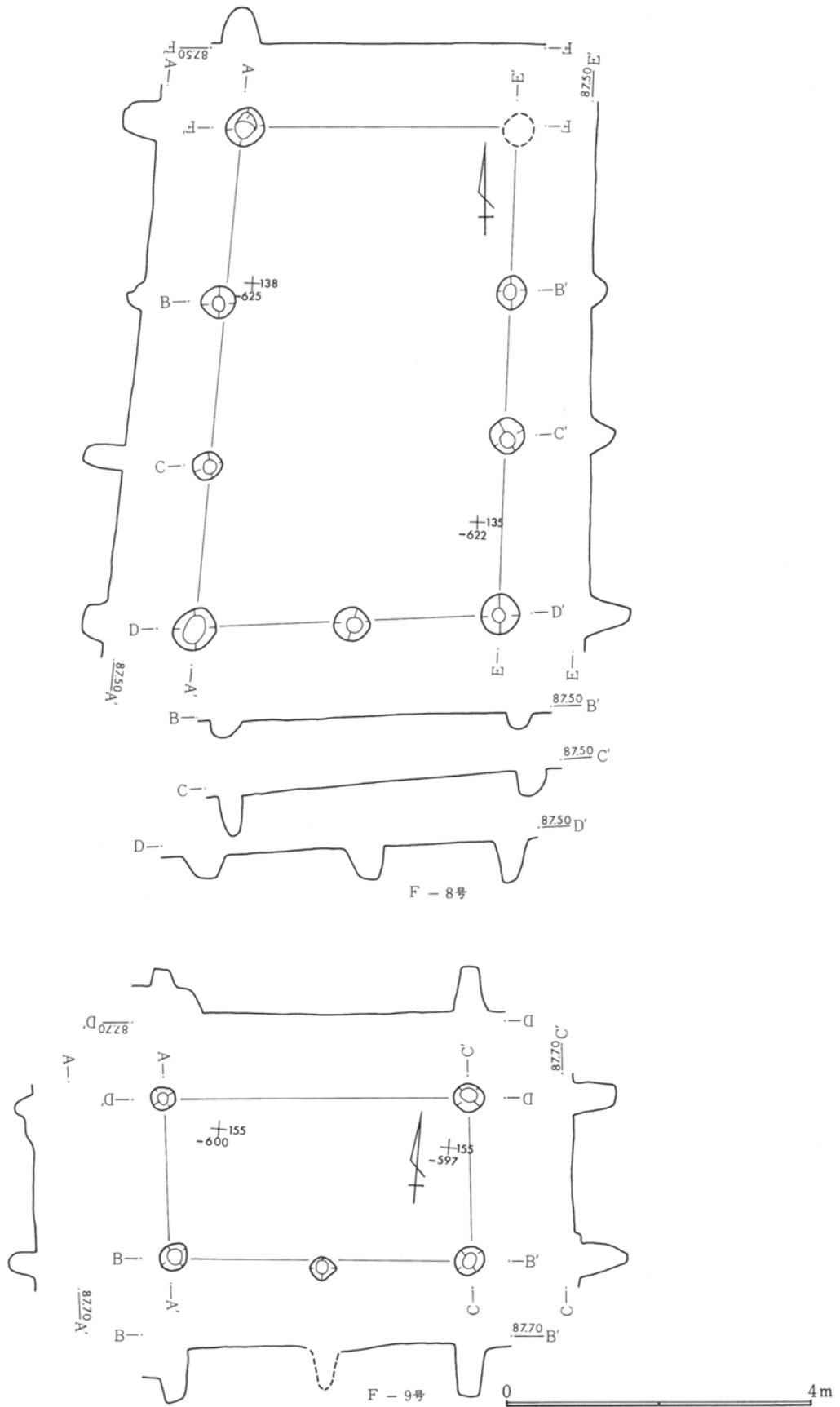
第3章 検出された遺構と遺物



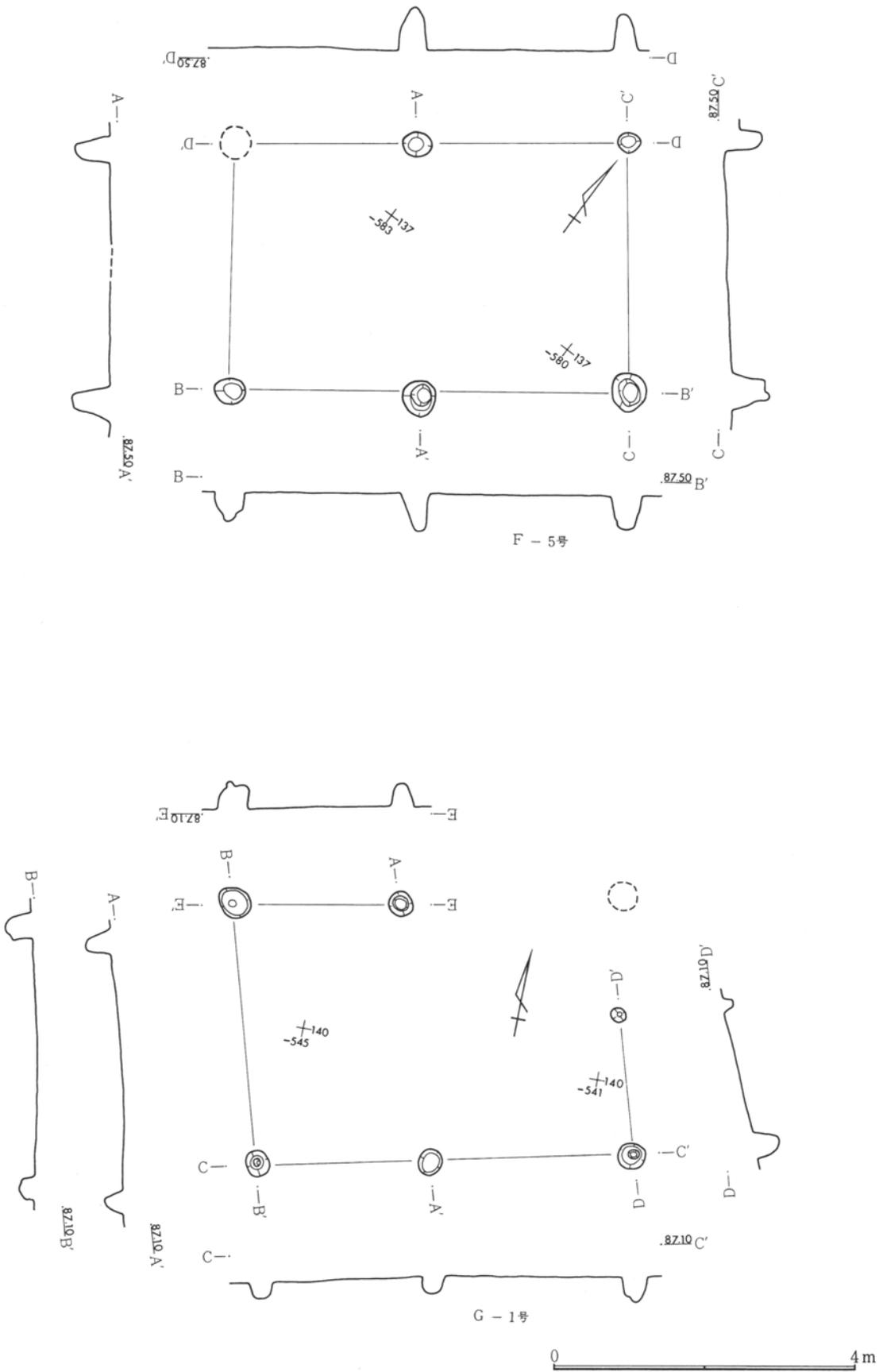
第237図 掘立柱建物跡 (F-1・2・4号)



第238図 掘立柱建物跡 (F-3・7号)



第239図 掘立柱建物跡 (F-8・9号)



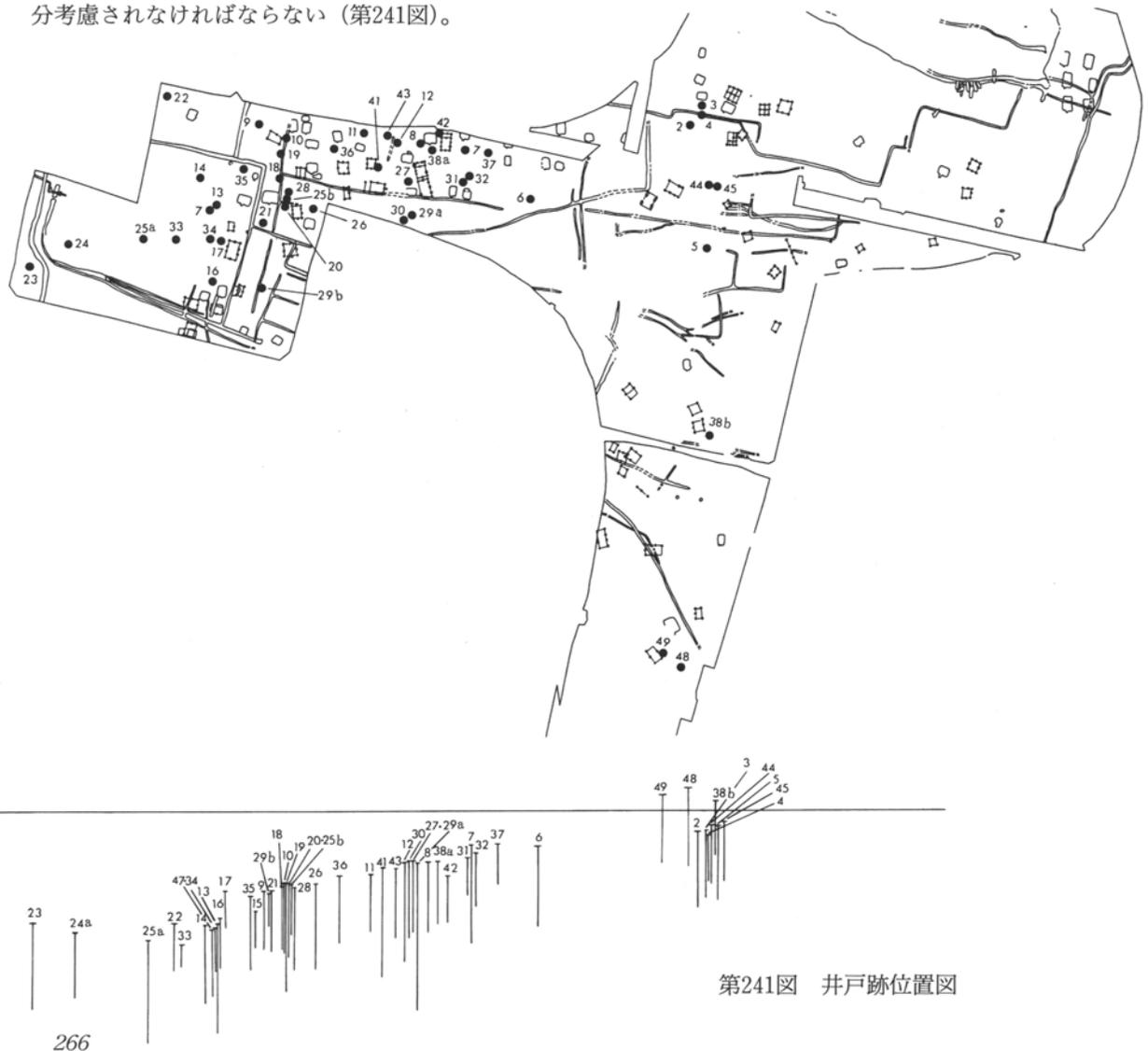
第240図 掘立柱建物跡 (F-5・G1号)

## 第5節 井戸跡

舞台遺跡での井戸跡は総数48基が検出されており、その多くは中世に属すると考えられる。井戸跡掘削はそのほとんどが井戸枠などが設けられない素掘井戸であるが上縁に円形の平坦部を有する例や、掘形上半部に石組を施すものもある。遺跡地の地勢的には北から南に向って低くなり全体では3mほどの比高差をもっているが、現地での視界は遺跡地の南北約500mの距離によってほとんどその傾斜を感じさせない。しかし、井戸跡の検出面および底面から得られる標高には地形変化が明瞭に現れており、地下堆積層とそれに伴う水脈の在り方を示唆しているようである。

井戸掘削の深さは1m前後から3mを上回るものがある。浅深は特定域のものではなく、およそ4地点に別れて群在するなかでそれぞれの群中に一基のみが深い傾向がある。各井戸群の分離には確たる根拠はなく概観的な分布によるものであるが、深い井戸跡の存在が群としてのまとまりを仮定する要件とする考え方もできよう。また、その数の多さは遺跡地での不安定な水資源の状況を示すものとも想定されよう。

井戸跡の分布にはかなりの偏りがあり、埋没谷地形のある遺跡の南に集中する傾向がある。ここ一帯には少数ながら中世の地下式土坑・掘立柱建物跡などの検出が比較的多くそれらと関連するものであろう。また舞台遺跡の南に連続する下植木壱町田遺跡には120m方形区画の館跡があり、当該遺跡との有機的な関係は十分考慮されなければならない(第241図)。



第241図 井戸跡位置図

## 2号井戸跡 (第242図 PL.97)

座標値39150～39152・-54788～54789の範囲にあり、古墳時代前期A-28号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈する。上縁はやや大きく開口し、屈して窄まり気味に底面に至る。壁面には湧水等による崩落も見られず、底面は平坦である。杵材などの痕跡はなく素掘り井戸である。規模は上径1.60×1.40m・中段径1.20m・底面径0.5m・深さ1.8mを測る。埋土は上位に Loam 塊の混入が多く、人為的な埋没が窺われる。出土遺物は少なく、常滑焼と思われる焼締陶器甕小片がある。

## 3号井戸跡 (第242図 PL.97)

座標値39150～39152・-54795～54797にあり、古墳時代前期のA-28号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈する。上部南縁が大きく開口し、中位より直気味で底面に至る。壁面の崩落は少なく底面は平坦である。南東部上縁近くには足場跡と思われる2ヶ所の凹部がある。規模は上径1.90×1.80m・中段径0.95m・底面径0.7m・深さ1.50mを測る。中位より上位層にかけては Loam 等の塊状混入堆積層があり、人為的な埋没の可能性が高い。出土遺物はない。

## 4号井戸跡 (第242図 PL.97)

座標値39155～39157・-54792～54794の範囲にある。古墳時代前期A-28号住居跡と、また本跡より新しい4号溝と重複する。

平面形状は略円形を呈する。上位面削平のためか、上縁から直に下る筒形の断面形状である。壁面の崩れは見られず底面は平坦をなす。素掘り井戸であろう。規模は上径1.10m・底面径0.88m・深さ1.10mを測る。埋土上位層は Loam 塊の混入が多く人為的な埋没であろう。出土遺物はなく、中位より投棄と考えられる10～20cm大の礫数個がある。

## 5号井戸跡 (第243図 PL.97)

座標値39157～39158・-54741の範囲にあり、古墳時代前期D-83号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈する。上縁は僅かに広がり、窄まり気味で底面に至る。壁面の荒れは少なく、底面は平坦をなす。木杵などの痕跡はなく素掘り井戸である。規模は上径1.20m・底径0.45m・深さ1.80mを測る。埋土上位には人頭大の礫数個があり、Loam や黒色土が塊状に堆積することから人為的な埋没と考えられる。出土遺物はない。

## 6号井戸跡 (第243図 PL.97)

座標値39087～39089・-54759～54761の範囲にあり、古墳時代前期E<sub>3</sub>-96号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開口し西縁の広がりが強い。屈して窄まり気味に底面に至る。断面形は漏斗状になる。壁面は中位から下位かけて抉り状の凹帯が生じており、湧水あるいは留水位を示すと考えられ、底面も小さな起伏がある。木杵等の痕跡はなく、素掘り井戸であろう。規模は上径1.70×1.40m・中段径1.08m・底面径0.6m・深さ2.0mを測る。埋土下位は水分の多い砂質層で、上位は Loam ・黒色土が塊状に堆積する。人為的な埋没であろう。出土遺物はない。

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 7号井戸跡 (第243図 P L.97・109)

座標値39061～39064・-54777～54780の範囲にある。

平面形状は略円形を呈するが、井戸口周縁に同心円状の掘り込みを巡らす特異な形状である。井戸本体は上縁が大きく開き、約40cmで筒形になる、断面漏斗状を呈する。さらに1.0m程で再び径を窄めて底面に至る。中位での壁面の脹らみは湧水あるいは留水のための崩落とも考えられる。規模は上径1.40m・中段径0.80m・底面径0.50m・深さ2.40mを測る。

周縁の円形掘り込みは径2.50mで井戸開口部はほぼ中心に納まる。立ち上がりは約20cmで緩い傾斜をなすが、井戸口近くでは平坦面をなす。井戸上枠の掘形とも考えられるが、施設の埋設したような痕跡は検出されていない。井戸本体は素掘りであろう。埋土は下位に近く水分の多い黒色土で、上位層には人為的埋没と見られる Loam を主体とする塊状の堆積土が目立つ。出土遺物は少なく、平安時代の土師器の小片がある。

#### 8号井戸跡 (第244図 P L.97)

座標値39004～39046・-54780～54782の範囲にあり、古墳時代後期E<sub>3</sub>-99号・105号住居跡に接してある。

平面形状は略円形を呈するが、上縁はやや南に広がる。上端より下って0.70mで筒状になり底面に至る。壁面の崩れは殆どなく、底面は平坦をなす。素掘り井戸であろう。規模は上径1.50×1.30m・中段径1.10m・底面径0.85m・深さ1.70mを測る。埋土は比較的均質層であるが、中位から下位にかけて小児頭大の礫が目立ち、人為的な埋没であろう。出土遺物はない。

#### 9号井戸跡 (第244図 P L.98)

座標値38980～38982・-54788～54790にある。

平面形状は楕円形を呈し、上縁はやや東に広がり僅かに窄まって底面に至る。底面形状は明瞭ではないが方形気味になる素掘り井戸である。壁面の崩れは少なく、底面は平坦をなす。規模は上径1.25×1.06m・底面径0.60m・深さ1.4mを測る。埋土は砂質土が主体で Loam 塊などの混入は少ないが上位層中に礫が多くみられ、人為的埋没である。出土遺物には布目瓦片・軟質陶器播鉢がある。

#### 10号井戸 (第244図 P L.98)

座標値38990～38992・-54783～54784の範囲にある。24号溝と重複するが新旧関係は不明である。

平面形状は略円形を呈する。上縁開口部は僅かに広がるが筒状のまま底面に至る。壁面の崩れはほとんど見られず底面も平坦をなす。素掘り井戸である。規模は上径1.10m・中段径0.87m・底面径0.70m・深さ1.63mを測る。埋土は砂質土を主体に Loam 粒・塊が混じり、人為的な埋没の可能性が高い。出土遺物はない。

#### 11号井戸 (第244図 P L.98・109)

座標値39021～39023・-54785～54786の範囲にある。

平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開き、約40cm下り筒状で底面に至る。壁面は約1.0mで小さな挟りが生じている。底面は中央部が緩く凹む。素掘り井戸である。規模は上径1.44×1.36m・中段径0.86m・底面径0.6m・深さ1.6mを測る。埋土は Loam 塊を多量に混え、中位には拳大から人頭大の礫が20数点出土している。人為的な埋没と考えられる。出土遺物には土器・陶器など小片がある。

## 12号井戸 (第245図 P L.98・109)

座標値39034～39036・-54785～54786の範囲にあり、古墳時代前期のE<sub>3</sub>-171号住居跡と重複する。

平面形状は楕円形を呈するが、中段および底面の形状はやや方形にちかい。上縁部はやや広く開口し筒状で底面に至る。約1.3m下って壁面は大きく抉り、湧水位か留水位による崩落と考えられる。底面は平坦をなし素掘り井戸である。規模は上径1.34×1.06m・中段径0.86m・底面径0.7m・深さ2.44mを測る。埋土下位は砂質の均一層で上位に粘土塊・Loam 塊を混えており、人為的な埋没であろう。出土遺物は平安時代に属する土師器・須恵器小片がある。

## 13号井戸 (第245図 P L.98・109)

座標値38963～38966・-54755～54758の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈し、上縁は大きく開口する。約50cm下り筒状で底面に至る。壁面の崩れは少なく底面は緩く皿状にくぼむ素掘り井戸である。規模は上径2.28×2.10m・中段径1.43m・底面径1.01m・深さ2.73mを測る。埋土下位層は均一砂質で、上位にも混入物は少ない。自然埋没と考えられる。出土遺物は平安時代に属する土師器・須恵器小片のみである。

## 14号井戸 (第245図 P L.98)

座標値38957～38959・-54766～54768の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈する。上縁の東側が大きく開口し約70cmで筒状になり断面形は漏斗状である。壁面に崩れは見られず、底面が緩く凹凸する素掘り井戸である。規模は上径2.45×2.12m・中段径1.03m・底面径1.02m・深さ2.05mを測る。埋土は砂質土を主体にするが上位層には粘土塊の混入が目立ち、人為的な埋没と考えられる。出土遺物は軟質陶器の播鉢片など少量のほか、縄文時代前期に属する土器片などがある。

## 15号井戸 (第246図 P L.98)

座標値38976～38978・-54746～54748の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形の谷頭縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈し、僅かに窄まって底面に至る浅い筒状の素掘り井戸である。壁面の荒れは少なく、底面は緩く凹む。規模は上径0.93×0.76m・底面径0.52m・深さ0.8mを測る。埋土は砂質層である。出土遺物はない。

## 16号井戸 (第246図 P L.99)

座標値38962～38965・-54726～54729の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開口し、40～50cm下って中段をなす。僅かに窄まって筒状で底面に至る素掘り井戸である。規模は上径2.05×1.85m・中段径1.24m・底面径0.75m・深さ1.45mを測る。埋土は砂質土が主体である。出土遺物は少なく、平安時代に属する土師器・須恵器小片である。1は須恵器坏底部。回転糸切り。底径5.8cm。2は灰釉陶器椀底部。底径9cm。いずれも小片である。

## 17号井戸 (第246図 P L.99)

座標値38966～38967・-54742～54744の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形の谷頭縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の浅い素掘り井戸である。壁面の荒れはなく底面も平坦である。規

### 第3章 検出された遺構と遺物

模は上径1.05m・底面径0.68m・深さ0.95mを測る。埋土は単層にちかく砂質土で混入物は少ない。出土遺物はない。

#### 18号井戸 (第246図 P L.99)

座標値38989～38991・-54767～54768の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。26号溝と重複するが新旧関係は不明である。

平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開口し、約30cm下って筒状になり平坦な底面に至る。断面形は緩い漏斗状になる素掘り井戸である。規模は上径1.26×1.13m・中段径0.81m・底面径0.52m・深さ1.54mを測る。出土遺物は少量で古墳・平安時代の土師器小片がある。

#### 19号井戸 (第247図 P L.99・109)

座標値38988～38990・-54776～54778の範囲にある。

平面形状は楕円形を呈する。上縁は大きく開口し、西側の開きが大きい。約1.3m下り細まって筒状の断面漏斗状になる。壁面下位は荒れが少なく、底面は平坦をなす素掘り井戸である。底面形状はやや不整な方形にちかい。規模は上径1.76×1.54m・中段径1.14m・底面径0.55m・深さ2.65mを測る。埋土は中位層にLoam塊が多量に混り、人為的な埋没と考えられる。出土遺物には平安時代土師器・須恵器杯・椀類がある。1は土師器杯。平底で底部から体部下半に篋削り、上半は指頭痕。細土で鈍橙色を呈す。口径12.8cm・底径5.8cm・器高4.2cm。2～4は須恵器杯。右回転糸切り無調整。体部直線的な3と丸味をもつ2・4がある。2・3は内面に油煙状付着物があり灯明皿になろうか。2は著しい細土で灰白色。口径12.0～12.2cm・底径5.0～5.5cm・器高4.0～4.9cm。5は須恵器椀。口縁1/3欠損。体部丸く口縁外反。回転糸切り付け高台。細土で浅黄橙色を呈す。口径14.0cm・底径6.2cm・器高5.6cm。

#### 20号井戸 (第246図 P L.99)

座標値38991～38992・-54757～54759の範囲にあり、26号溝から北へ派生する小溝と重複するが新旧関係は不明である。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。壁面にはさほどの荒れもなく、底面は平坦である。上縁の西側に小さな段を設けるが掘削時の足場であろうか。規模は上径0.86m・底面径0.60m・深さ1.76mを測る。出土遺物には平安時代に属する灰釉陶器・須恵器・土師器など小片である。

#### 21号井戸 (第246図 P L.99・109)

座標値38982～38984・-54779～54780の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈し、断面筒状の素掘り井戸である。壁面の荒れはなく、底面は平坦をなす。規模は上径0.98×0.88m・底面径0.48m・深さ1.22mを測る。出土遺物は平安時代須恵器小片である。

#### 22号井戸 (第247図 P L.99)

座標値38944～38946・-54798～54800の範囲にある。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の浅い素掘り井戸である。壁面は緩く波打つが著しい崩落などの痕跡はなく、底面は僅かに凹む。規模は上径0.86m・底面径0.73m・深さ1.05mを測る。埋土は下位が黒色粘

質土で充ち、上位層には Loam 塊が多量に混る。人為的埋没になろう。出土遺物はない。

#### 23号井戸 (第247図 P L.99)

座標値38891～38893・-54732～54734の範囲にあり、調査区南端の谷地形の地勢内にある。

平面形状は楕円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。壁面には緩い凹凸があり、底面は平坦である。規模は上径1.16×0.99m・底面径0.64m・深さ2.15mを測る。埋土下層は粘質土と砂層の薄い互層となり、上層は多量の Loam 塊を混えて埋まる。人為的な埋没となろう。出土遺物は平安時代土師器小片のみである。

#### 24号井戸 (第247図 P L.100)

座標値38906～38908・-54741～54743の範囲にあり、調査区南端の谷地形地内にある。

平面形状は略円形を呈し、平坦な底面にむかい窄まる筒形である。東壁面は緩い傾斜をなし、西壁面は直立気味である。規模は上径1.33×1.18m・底面径0.67m・深さ1.6mを測る。埋土は下位層に Loam 塊を多く混え、上位では薄い粘質土層で埋まる。人為的な埋没と考えられる。出土遺物は少なく、須恵器小片である。

#### 25 a 号井戸 (第248図 P L.100)

座標値38935～38937・-54744～54746の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形内に位置する。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。壁面の崩落はほとんどどなく、底面は緩く凹む。規模は上径1.3×1.2m・底面径1.04m・深さ2.6mを測る。埋土は下位が粘質土と砂層の互層で、上位には黄白色粘土塊層が見られる。人為的な埋没になろうか。出土遺物は少なく、平安時代須恵器・瓦片と縄文土器片がある。

#### 25 b 号井戸 (第248図 P L.100)

座標値39233～39235・-54768～54770の範囲にあり、調査区南端埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。西に接して28号井戸がある。

平面形状は略円形を呈す。上縁はやや大きく開口し、断面形筒状の素掘り井戸である。約90cm下って壁面には顕著な抉りを生じ、湧水か留水によるものであろう。底面の形状は不整形である。規模は上径1.22×1.16m・中段径0.81m・底面径0.42m・深さ1.45mを測る。埋土は最下位に砂質層が堆積し、中位以上には Loam 塊が多く人為的な埋没になろう。出土遺物は少なく、古墳時代後期・平安時代に属する土師器や須恵器の小片である。

#### 26号井戸 (第248図 P L.100)

座標値39001～39003・-54754～54756の範囲にある。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。開口部の小ささに対しては深い掘り込みである。壁面の崩れは少なく、僅かに窄まって平坦な底面に至る。規模は上径0.9×0.82m・底面径0.5m・深さ2.09mを測る。出土遺物は少なく、平安時代須恵器小片である。

#### 27号井戸 (第248図 P L.100・109)

座標値39038～39041・-54765～54768の範囲にある。

### 第3章 検出された遺構と遺物

平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開口し、約50cm下り筒状になって底面に至る。断面形漏斗状の素掘り井戸である。壁面の崩れは少なく、底面は平坦である。規模は上径1.46m・中段径0.6m・底面径0.4m・深さ1.7mを測る。埋土最下層は水分の多い砂質層である。中位層に Loam 塊層が見られ人為的な埋没になろうか。出土遺物は少なく、平安時代土師器・須恵器碗などがある。1は須恵器碗1/4。体部丸く口唇部強く外屈する。回転糸切り、やや高めの角高台で畳み付けに凹線。灰色を呈す。口径14.4cm・底径7.0cm・器高6.5cm。

#### 28号井戸 (第248図 PL100)

座標値38991～38993・-54760～54762の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形縁辺に位置する。東には接して25b号井戸がある。

平面形状は楕円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。壁面の崩れは見られるものの大きな抉りを生じるほどではない。底面は平坦をなすがやや方形にちかい掘形である。規模は上径1.36×0.99m・底面径0.7m・深さ2.04mを測る。埋土下位層は壁面崩落土が混るが総じて混入物の少ない砂層である。上位層には Loam 塊層が混り人為的な埋没と考えられる。出土遺物はない。

#### 29a号井戸 (第249図 P L.100・109)

座標値39040～39042・-54751～54753の範囲にある。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。壁面は上位に大きな崩落を生じている。2.2mほど下って小さな抉りが見られ、湧水によるものと考えられる。底面は平坦をなす。規模は上径1.52×1.25m・底面径0.68m・深さ3.14mを測る。埋土は混入の少ない砂質土で埋まり、上位でも Loam などの混入は少ない。出土遺物には軟質陶器の播鉢・青磁片などがある。1は青磁小片。蓮弁文の碗になろう。2は軟質の播鉢。5条4対の播り目をもつ。外面体部には煙が付く。口唇上端は凹状の段をなす。片口かは不明。口径27cm・底径11.4cm・器高11.7cm。3は口縁部小片で内耳鍋になろう。4は内面刷毛塗り灰釉を施す陶器大盤の底部小片。

#### 29b号井戸 (第249図)

座標値38981～38983・-54752～54756の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。E<sub>2</sub>-153号住居跡と重複し、これより新しい。

平面形状は略円形を呈する。断面形筒状の素掘り井戸である。湧水が著しく完掘できていない。規模は上径0.94×0.91m・深さは検出面より約1mまで確認した。埋土は上位層に多くの Loam 塊が見られ、人為的な埋没と考えられる。出土遺物はない。

#### 30号井戸 (第249図 P L.101)

座標値39036～39038・-54751～54757の範囲にある。

平面形状は略円形を呈する。上縁は大きく開口するが西縁の広がり強い。約50cm下り筒状をなす、断面形漏斗状素掘り井戸である。壁面には崩落による緩い凹凸が見られるが、湧水での抉りは顕著ではない。規模は上径1.4×1.1m・中段径0.8m・底面径0.48m・深さ1.82mを測る。埋土は底面から中位にかけて水分の多い砂質土で、上位でも Loam 塊等の混入は少ない。自然埋没になろう。出土遺物はない。

## 31号井戸 (第249図 P L.101)

座標値39061~39063・-54766~54768の範囲にあり古墳時代後期E<sub>3</sub>-140号住居跡と重複する。

平面形状はやや不整な楕円形を呈する。断面先細りで底は明瞭な面をなさない。規模は上径1.6×0.85m・深さ1.02mを測る。埋土は浅間B軽石粒と考えられる砂粒主体で混入物が少ない。自然埋没であろう。出土遺物はない。

## 32号井戸 (第250図 P L.101)

座標値39063~39065・-54768~54770の範囲にあり、31号井戸にちかく古墳時代後期E<sub>3</sub>-140号住居跡に接する。

平面形状は楕円形を呈し、南縁の開きが大きい。広めの開口部から約50cm下り、くびれて壁面は脹らむが明瞭な底面を作らない先細りした素掘り井戸である。規模は上径1.42×1.11m・中段径0.84m・深さ1.2mを測る。埋土は上位に浅間B軽石粒主体の砂質土で、下位はLoam塊が著しく壁面の崩落によると考えられる。出土遺物はない。

## 33号井戸 (第250図 P L.101)

座標値38948~38950・-54743~54745の範囲にあり、調査区南端埋没谷地形内に位置する。湧水が著しく完掘するに至っていない。

平面形状は略円形を呈し、断面形は筒状の素掘り井戸になろう。規模は上径0.72×0.68m・深さは50cmあまりの確認である。出土遺物はない。

## 34号井戸 (第250図 P L.101)

座標値38961~38963・-54744~54745の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形内に位置する。

平面形状は楕円形を呈し、広めの開口部より約30cm下り筒状になって平面方形気味の底面に至る。開口径・深さとも小規模な素掘り井戸である。上径0.92×0.68m・中段径0.58m・底面径0.57m・深さ0.87mを測る。埋土下位は粘質土が、上半はLoam塊を多く混える粘質土で埋まる。人為的な埋没になろうか。出土遺物はない。

## 35号井戸 (第250図 P L.101)

座標値38977~38978・-54768~54770の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形谷頭縁辺に位置する。

平面形状は略円形を呈する。やや広めの開口部から約40cmで細まる。断面形筒状をなすと考えられるが、中位の壁面が大きく崩れ決れる。底面は平坦をなし、素掘りの井戸である。規模は上径1.27×1.08m・中段径0.86m・抉れ部は1.1m・底面径0.61m・深さ1.98mを測る。埋土は上位層にLoam塊が見られ人為的な埋没と考えられる。出土遺物はない。

## 36号井戸 (第250図 P L.101)

座標値39010~39011・-54778~54780の範囲にあり、古墳時代後期E<sub>2</sub>-112号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。壁面の崩れは少なく、底面は平坦をなす。規模は上径0.7m・底面径0.5m・深さ1.36mを測る。埋土にはLoam塊などの混入物が少なく自然埋没になる

### 第3章 検出された遺構と遺物

う。出土遺物はない。

#### 37号井戸 (第250図 P L.102)

座標値39041~39042・-54777~54778の範囲にあり、古墳時代後期E<sub>2</sub>-98号住居跡と重複する。検出面より深さが1mに満たず井戸跡としてはやや疑念が残る。

平面形状は略円形を呈する。規模は上径1.14×0.91m・底面径0.66m・深さ0.96mを測る。調査時および以後にも湧水は観察されなかった。埋土上位層には浅間B軽石粒の混入が認められた。出土遺物はない。

#### 38a号井戸 (第250図 P L.102)

座標値39048~39050・-54778~54779の範囲にある。

平面形状は通例の井戸跡には見られない楕円形を呈し、壁面・底面の掘削は粗雑で井戸としては疑念が残る。規模は上径1.16×0.7m・底面径0.49×0.25m・深さ1.25mを測る。埋土は浅間B軽石粒混入が多い。出土遺物は歴史時代土師器の小片僅かである。

#### 38b号井戸 (第252図 P L.102)

座標値39158~39160・-54667~54669の範囲にあり、古墳時代前期D<sub>3</sub>-16号住居跡と重複する。

平面形状は明瞭な方形を呈する。当遺跡での井戸跡平面形状が円形ないしは楕円形を通例とすることからは異例である。井戸とするかは疑問が残るが、ここでは調査時の所見に従う。

規模は上径1.3×1.05m・底面径1×0.6m・深さ1.45mを測る。調査時の湧水量は著しいものがあつたが壁面の崩落は見られない。出土遺物はない。

#### 41号井戸 (第251図 P L.102)

座標値39026~39028・-54771~54773の範囲にある。

平面形状は略円形を呈す。上縁はやや広めに開口し、約40cm下り筒状になる。深さのわりには壁面の崩れは少なく、顕著な抉りは認められない。底面はほぼ平坦をなす素掘り井戸である。規模は上径1.4×1.31m・中段径0.82m・底面径0.75m・深さ2.63mを測る。埋土は最下層の砂質土を除きLoam塊を混える。最上層は浅間B軽石粒を混入する砂質土である。人為的な埋没と考えられる。出土遺物はない。

#### 42号井戸 (第251図 P L.102)

座標値39052~39053・-54785~54786の範囲にあり、古墳時代後期E<sub>3</sub>-209号住居跡と重複する。

平面形状は楕円形を呈し、断面形筒状の素掘り井戸である。当井戸はE<sub>3</sub>-209号住居跡の床面検出後に調査されたため上径及び深さに関しては現況計測値とは異なる。上径0.89×0.76m・底面径0.65m・深さは本来の検出面から約1.1mになろう。埋土は最下層で混入物の少ない粘性土で、上位層にはLoam塊などが多い。人為的な埋没になろう。出土遺物はない。

#### 43号井戸 (第251図 P L.102)

座標値39031~39033・-54784~54785の範囲にある。

平面形状は楕円形を呈する。開口部は広く、とくに東縁を中心に開きが大きい。断面形は、約30cm下り筒

状で底面に至る漏斗状になる。壁の東面が崩落によって緩く扶れる。規模は上径1.44×1.13m・中段径0.74m・底面径0.8m・深さ1.61mを測る。埋土はLoam粒が多く混入するが塊状のものは少ない。出土遺物は古墳から平安時代の土師器小片で、一点の鉄塊が含まれる。

#### 44号井戸（第251図 P L.102）

座標値39158～39160・-54764～54766の範囲にあり、古墳時代前期のD-139号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈し、断面形筒状で平坦な底面に至る。壁面の崩れは見られない。素掘り井戸である。規模は上径1.06×0.91m・底面径0.88m・深さ1.40mを測る。埋土への混入物は少ない。出土遺物はない。

#### 45号井戸（第251図 P L.102）

座標値39161～39162・-54763～54765の範囲にあり、古墳時代前期のD-139号住居跡と重複する。

平面形状は略円形を呈し、開口部は西・南縁が広がる。中位までの壁面は整っているが崩落のためか下位東面がやや粗雑な形状になる。素掘り井戸である。規模は上径1.07×0.9m・底面径0.43m・深さ1.51mを測る。埋土上位層にLoam塊が見られ人為的な埋没の可能性がある。出土遺物はない。

#### 47号井戸（第251図 P L.103・110）

座標値38061～38063・-54755～54757の範囲にあり、調査区南端の埋没谷地形内に位置する。

平面形状は略円形を呈するが、北縁はやや広く開口する。断面形筒状で底面に至るが、壁面には崩落による凹凸が見られる。規模は上径1.4×1.25m・中段径0.87m・底面径0.4m・深さ1.57mを測る。埋土は全体にLoam塊が多く混り、上位には大小の礫が出土する。人為的な埋没であろう。

出土遺物には古墳・平安時代の土器類が数点ある。1は土師器坏。扁平な丸底で古墳時代後期の模倣坏である。器肉は厚めで灰黄色を呈す。口径11cm・器高3.7cm。2は須恵器碗下半。回転糸切り付け高台。灰白色を呈す。底径7.7cm。9世紀中～後半になろう。

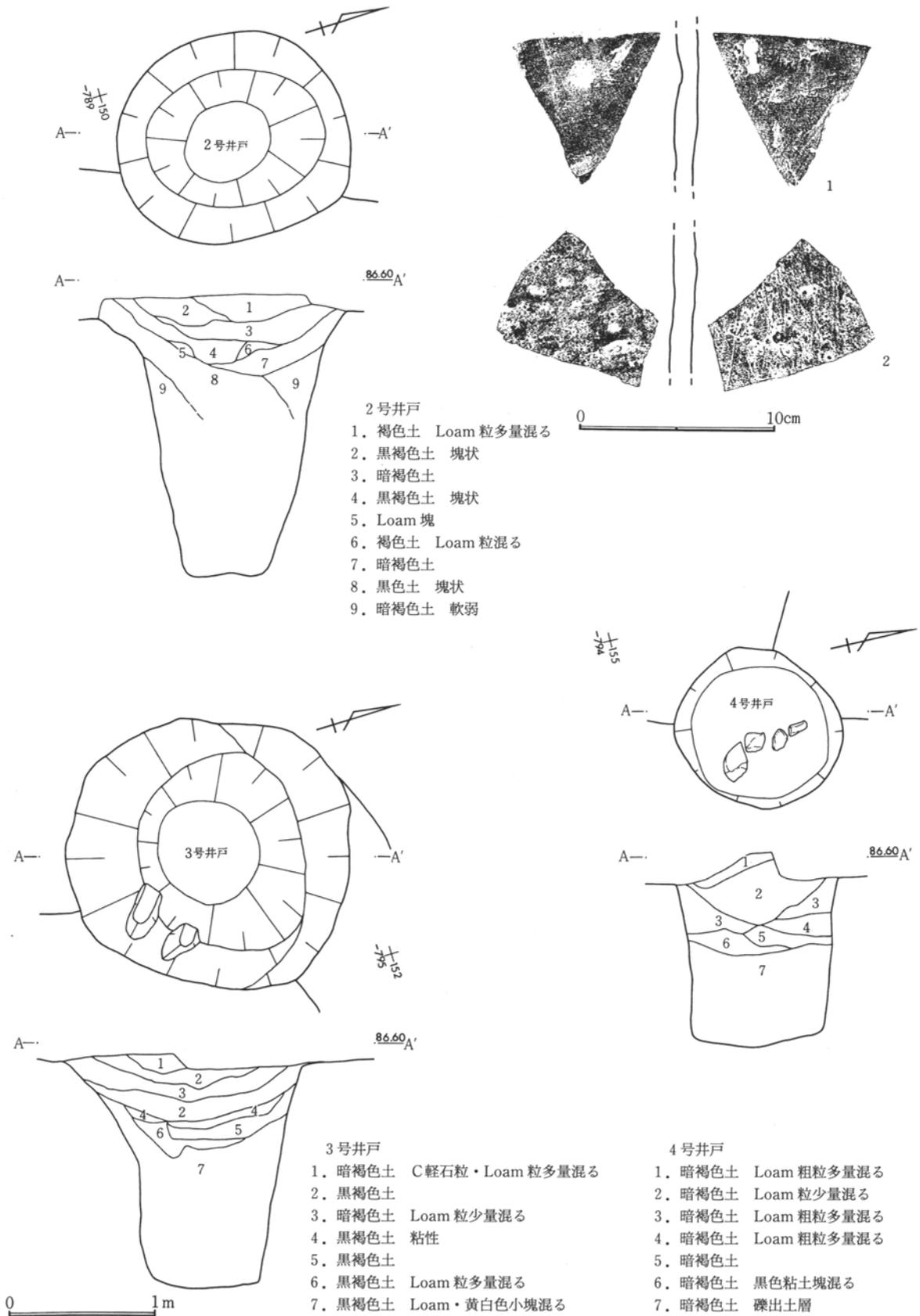
#### 48号井戸（第252図 P L.103）

座標値39146～39148・-54576～54579の範囲にあり、古墳時代前期F-78号住居跡と重複する。

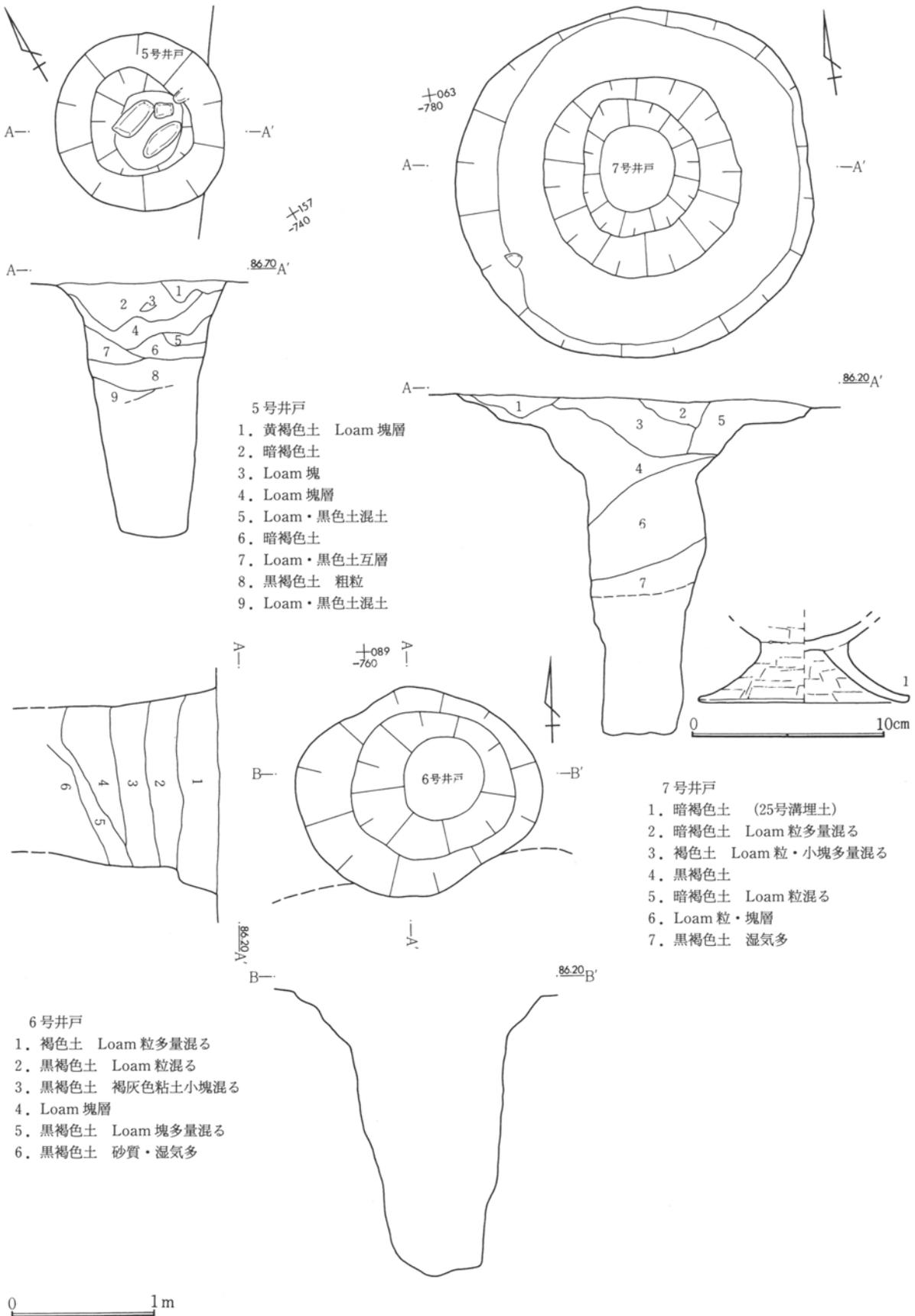
平面形状は略円形を呈す。広い開口部から窄まって筒状で底面に至る。壁面はやや胴張りになる。規模は上径1.8×1.65m・中段径1.2m・底面径0.75m・深さ1.8mを測る。埋土は上位層が砂質土主体で、浅間B軽石粒の混入であろう。出土遺物はない。

#### 49号井戸（第252図 P L.103）

座標値39139～39141・-54581～54583の範囲にあり、古墳時代前期F-76号住居跡と重複する。当遺跡で検出された唯一の石組井戸である。使用される石材の最大は人頭大の川原石で、小口積みにする。石組は検出面より約1mの深さまで施され、以下は素掘りのままである。石材除去後の境目掘形は段状になる。なお、西側壁面は崩落のためか上位にのみ石組が残る。規模は石積内径で0.7m・底面径0.55m・深さ1.55mを測る。掘形は上縁が広めに開口し、断面形は先細りの形状になる。上径1.9×1.3m・中段径1mを測る。出土遺物はない。

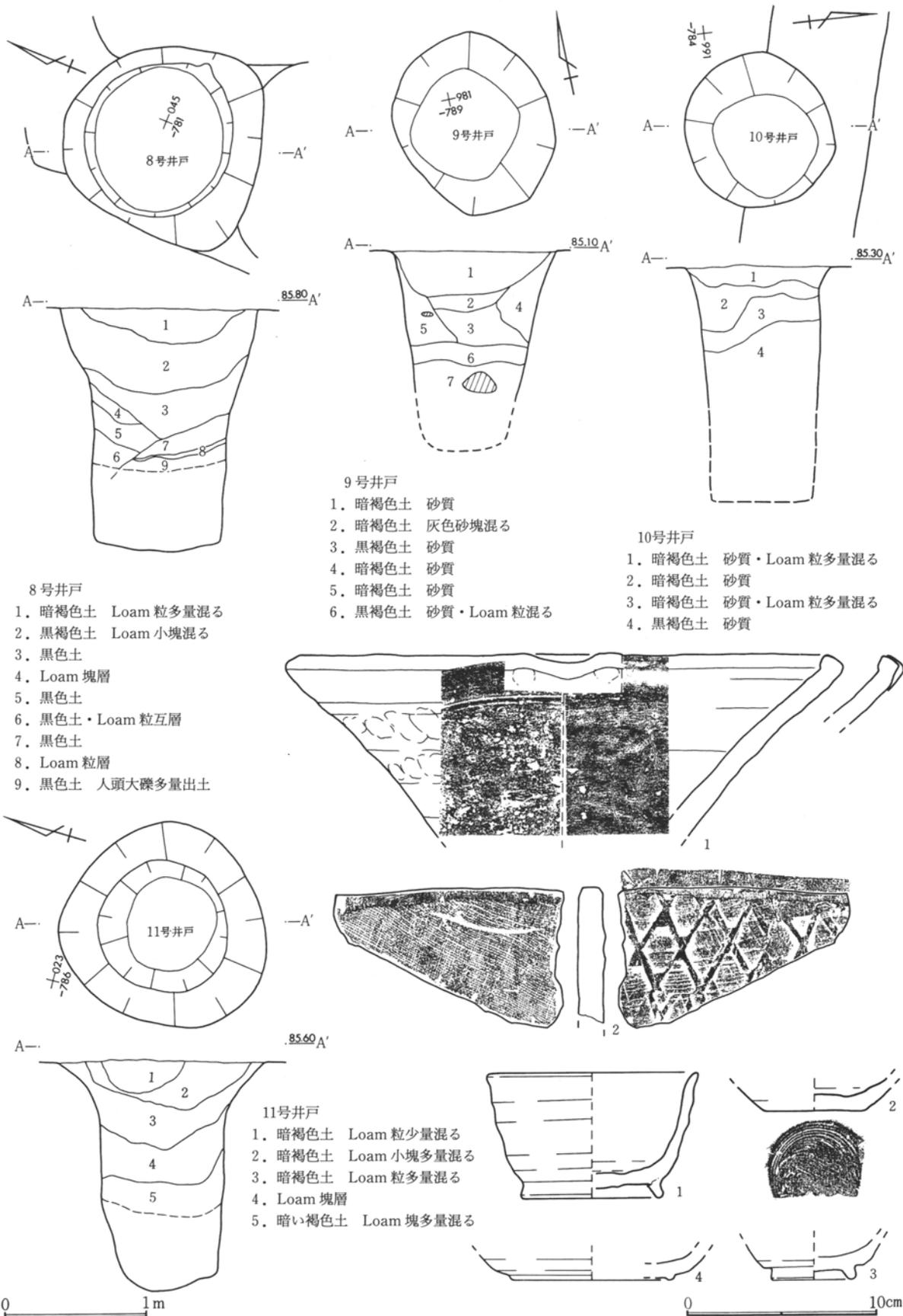


第242図 井戸跡・出土遺物（2・3・4号）

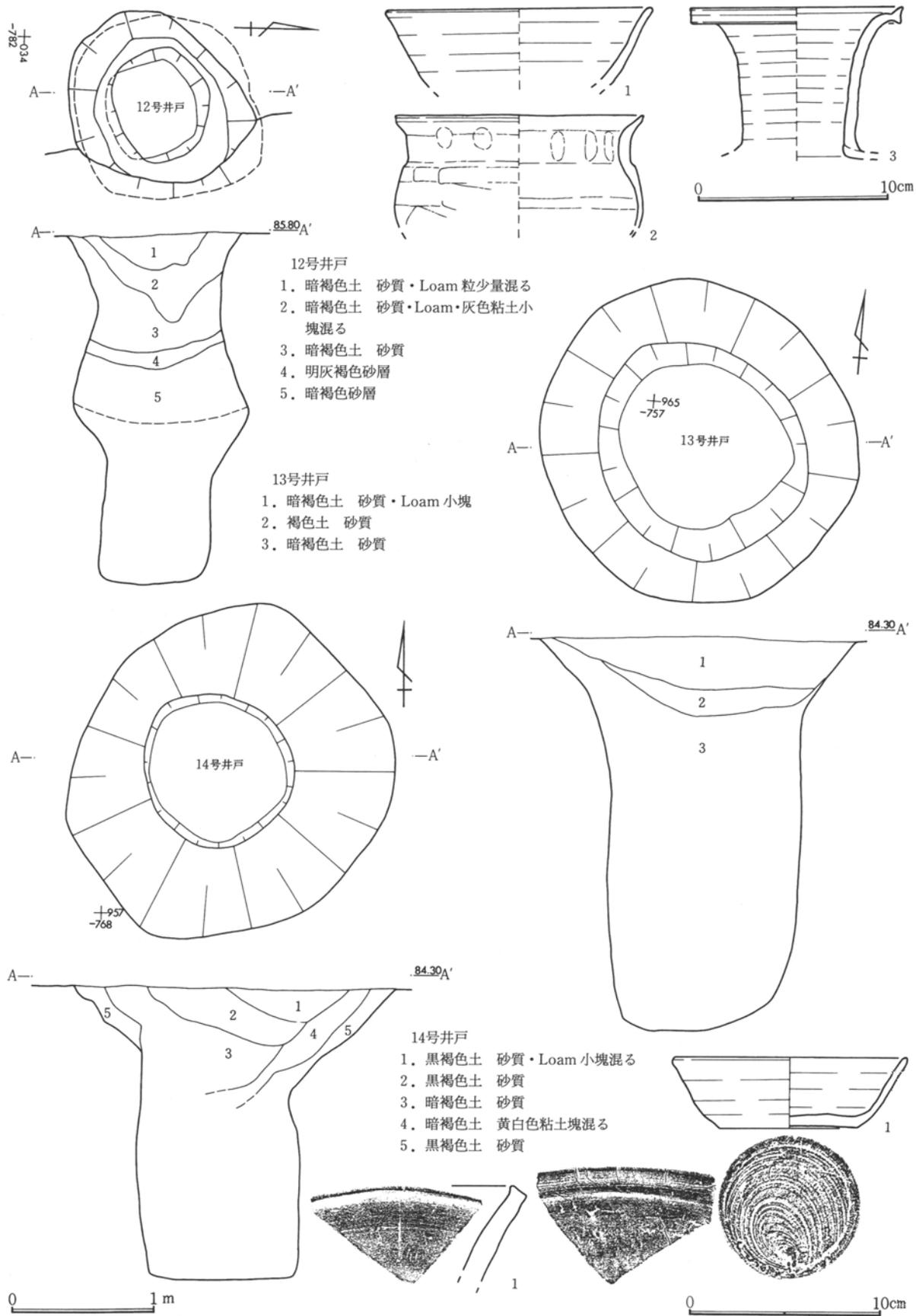


第243図 井戸跡・出土遺物 (5・6・7号)

第3章 検出された遺構と遺物

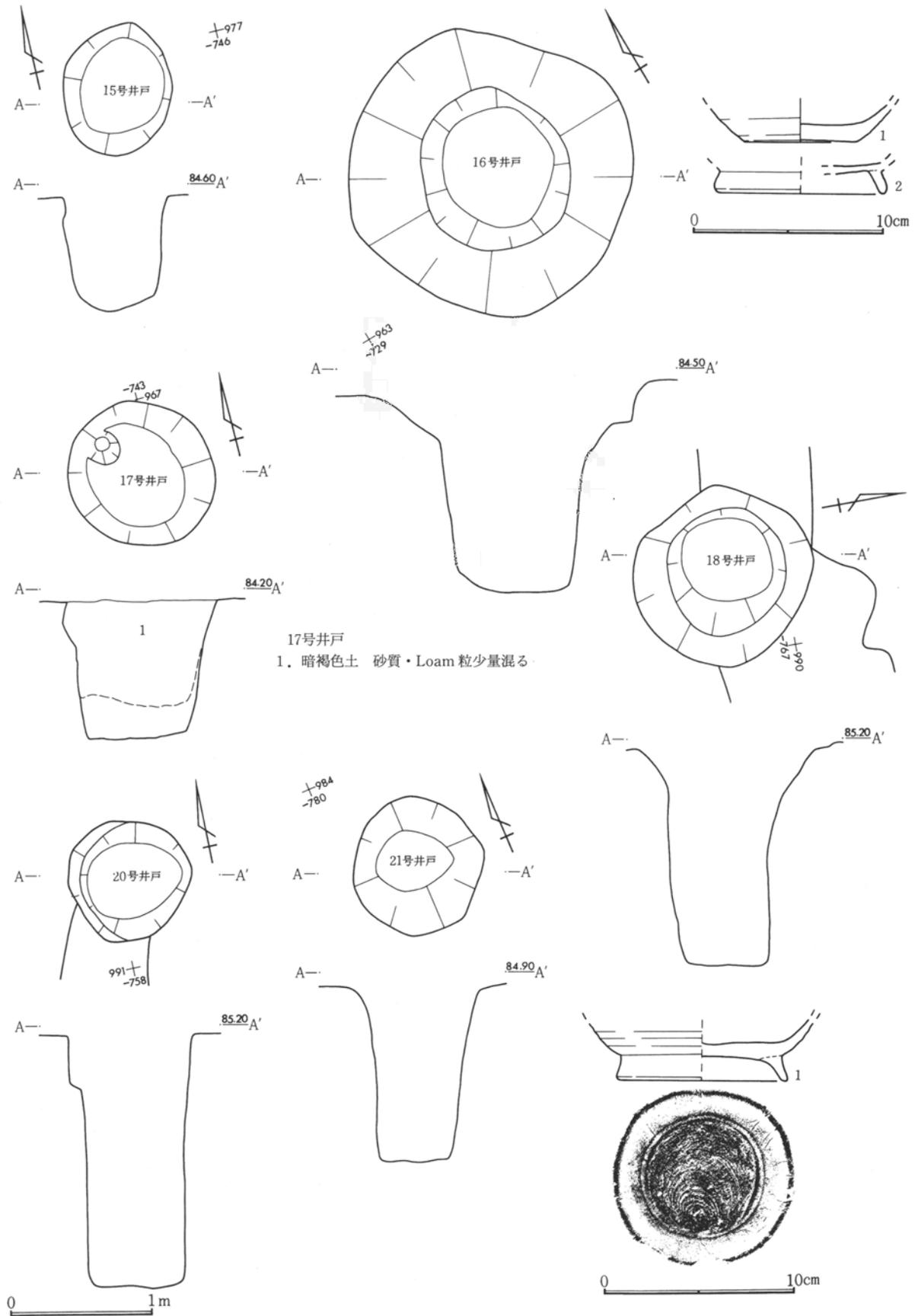


第244図 井戸跡・出土遺物（8・9・10・11号）



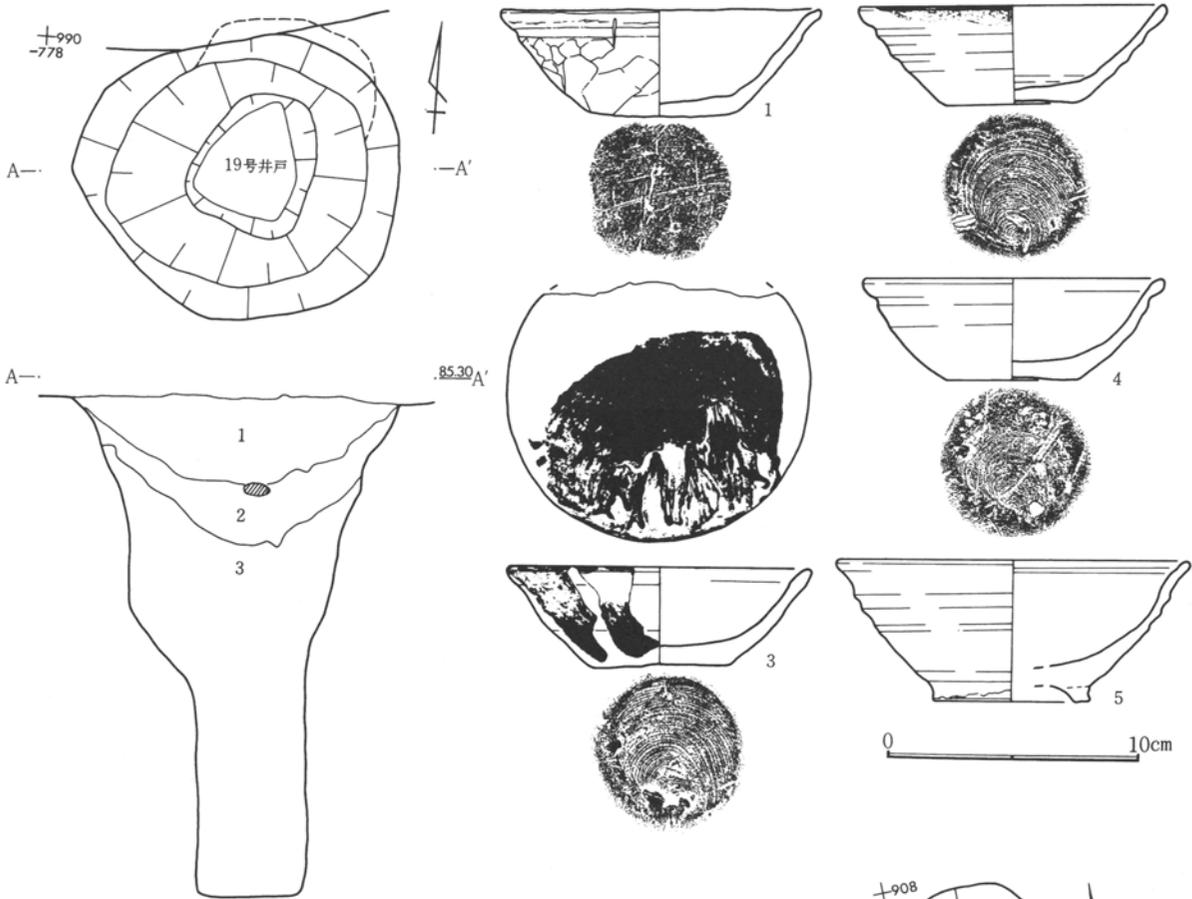
第245図 井戸跡・出土遺物 (12・13・14号)

第3章 検出された遺構と遺物

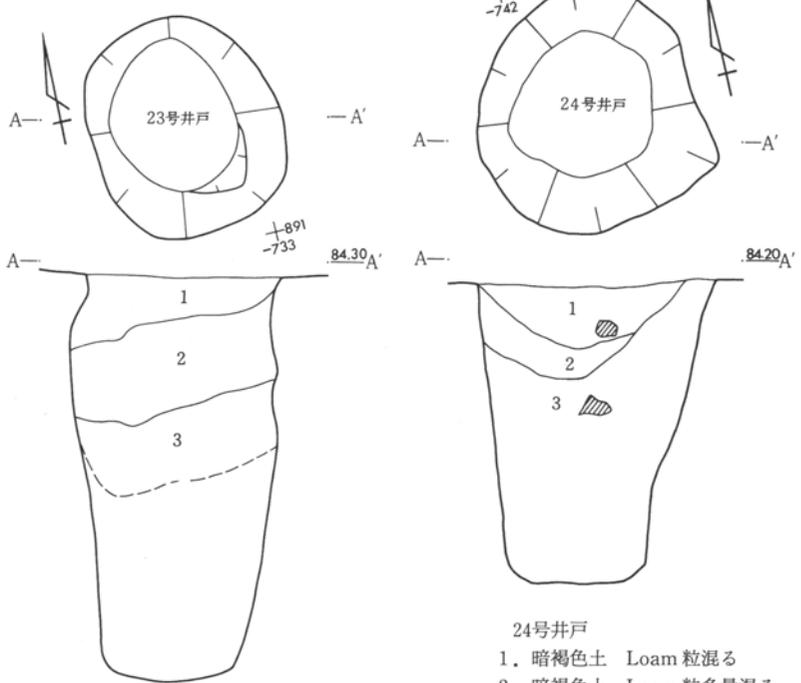


17号井戸  
1. 暗褐色土 砂質・Loam 粒少量混る

第246図 井戸跡・出土遺物 (15・16・17・18・20・21号)



- 19号井戸  
 1. 黒褐色土  
 2. 黒褐色土 Loam 粒混る  
 3. 暗褐色土 Loam 粒多量混る



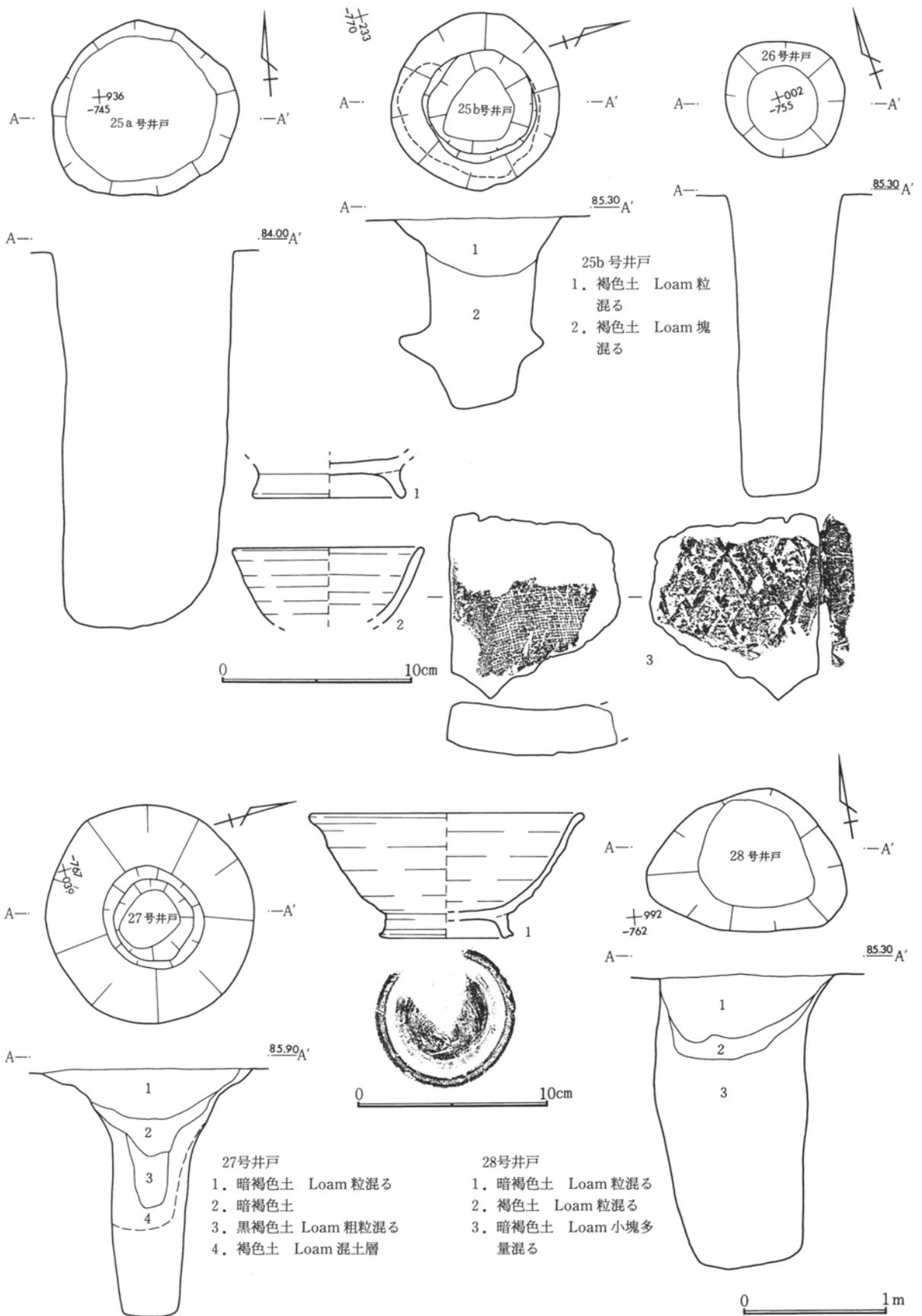
- 22号井戸  
 1. 暗褐色土 Loam 粒多量混る  
 2. 黒褐色土  
 3. 黒褐色土 粘性

- 23号井戸  
 1. 暗褐色土 Loam 粒多量混る  
 2. 暗褐色土 Loam 粒・塊多量混る  
 3. 暗褐色土 砂互層

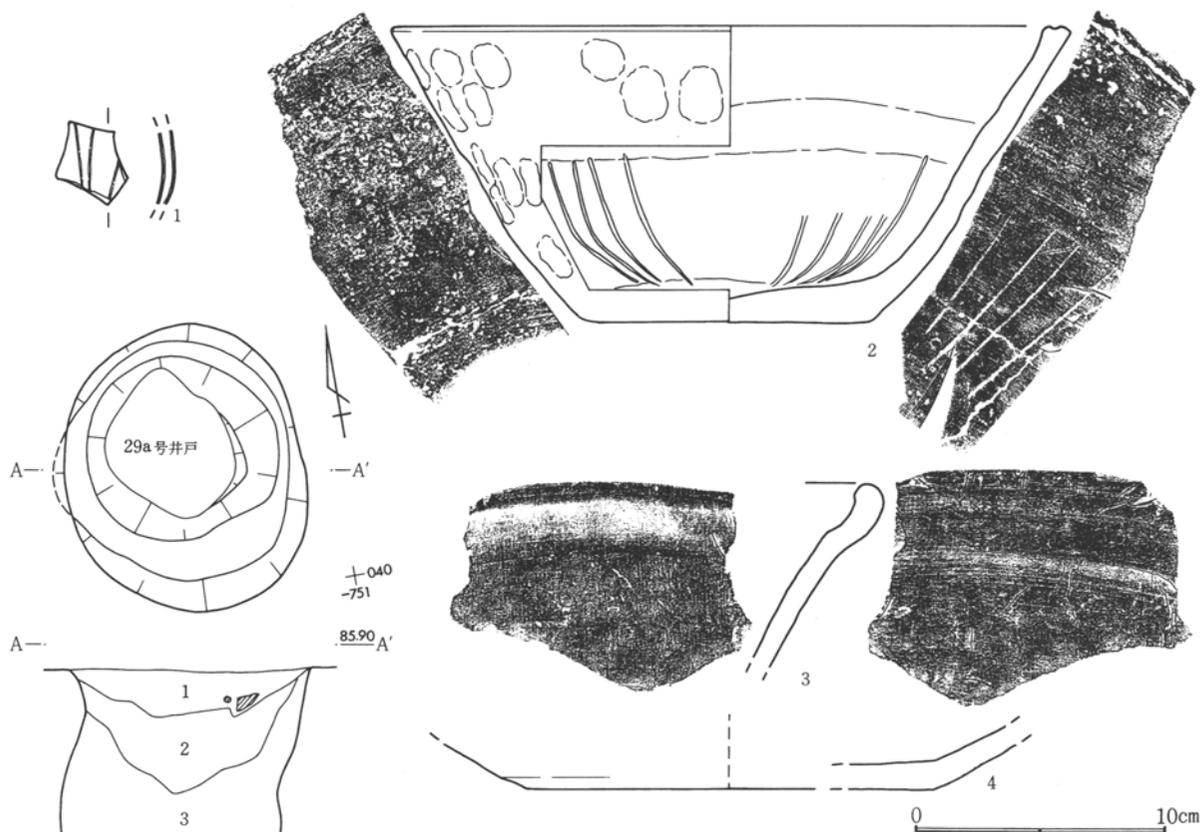
- 24号井戸  
 1. 暗褐色土 Loam 粒混る  
 2. 暗褐色土 Loam 粒多量混る  
 3. Loam 塊層

第247図 井戸跡・出土遺物 (19・22・23・24号)

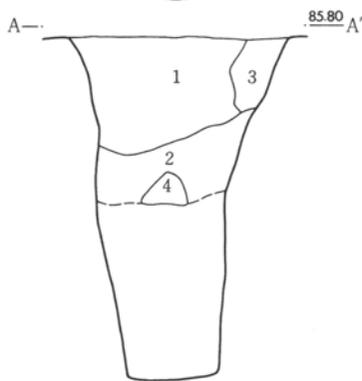
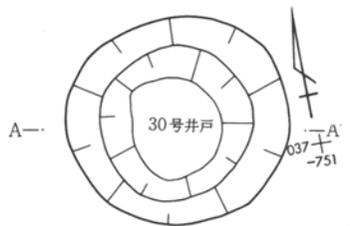
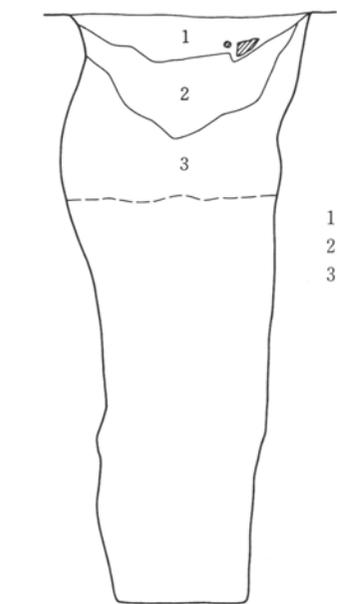
第3章 検出された遺構と遺物



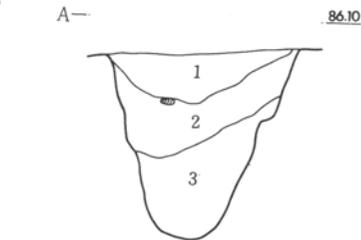
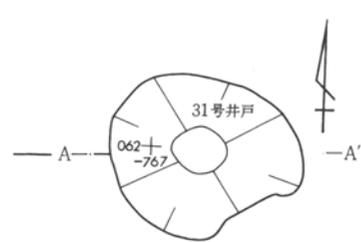
第248図 井戸跡・出土遺物 (25 a・25 b・26・27・28号)



- 29a号井戸
1. 暗褐色土 Loam 粒混る
  2. 暗褐色土 Loam 混土層
  3. 暗褐色土 Loam 粗粒混る

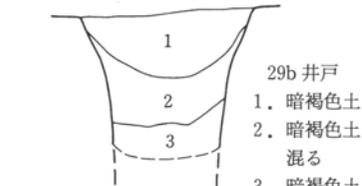
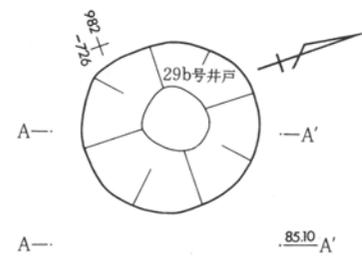


- 30号井戸
1. 黒褐色土 Loam 粒混る
  2. 黒褐色土 Loam 粒混土層
  3. 褐色土 Loam 粒混土層
  4. Loam 塊層



- 31号井戸
1. 黒褐色土 B 軽石粒多量混る
  2. 黒褐色土 B 軽石粒少量混る
  3. 褐色土 Loam 粒混土層
  4. Loam 塊

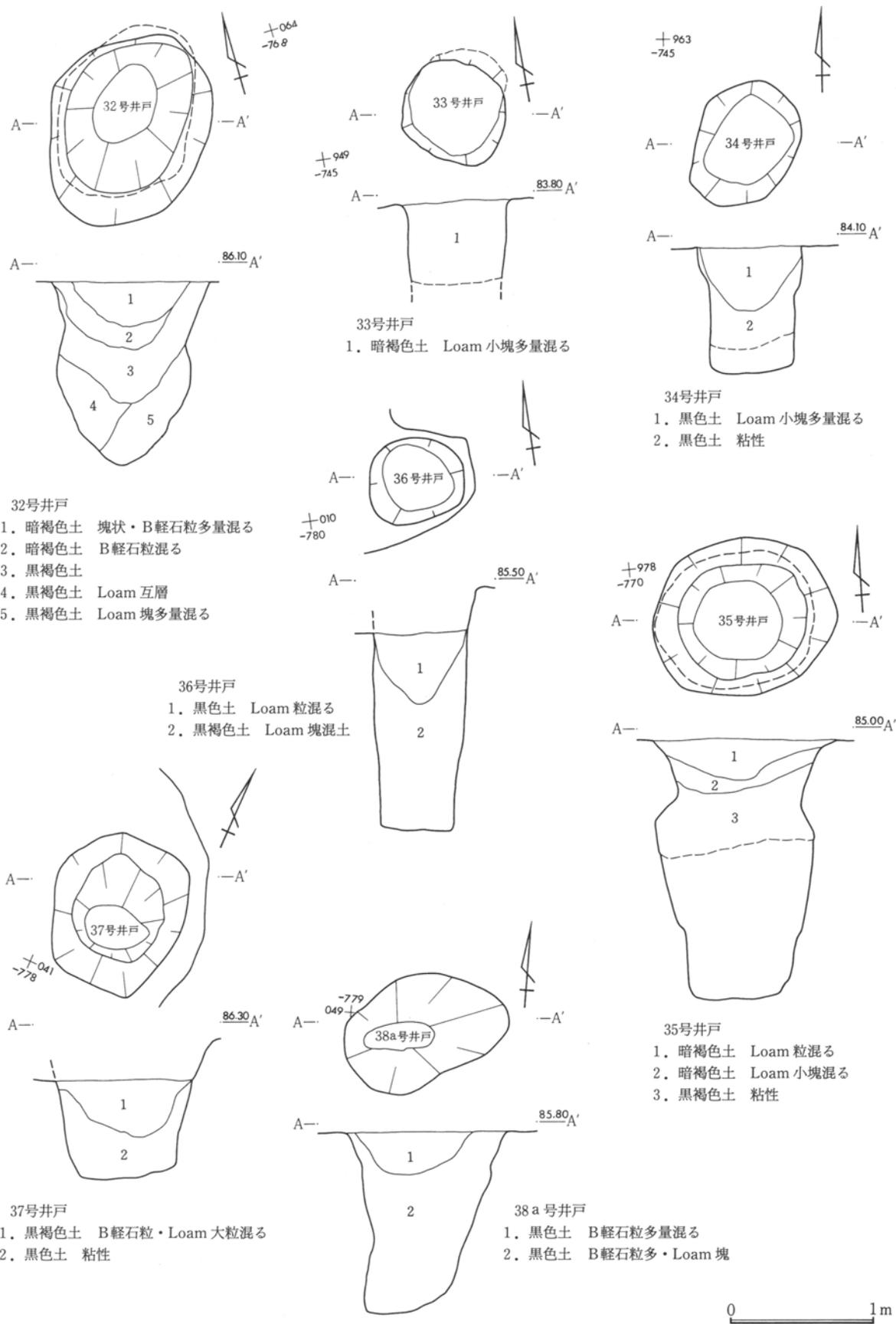
0 1m



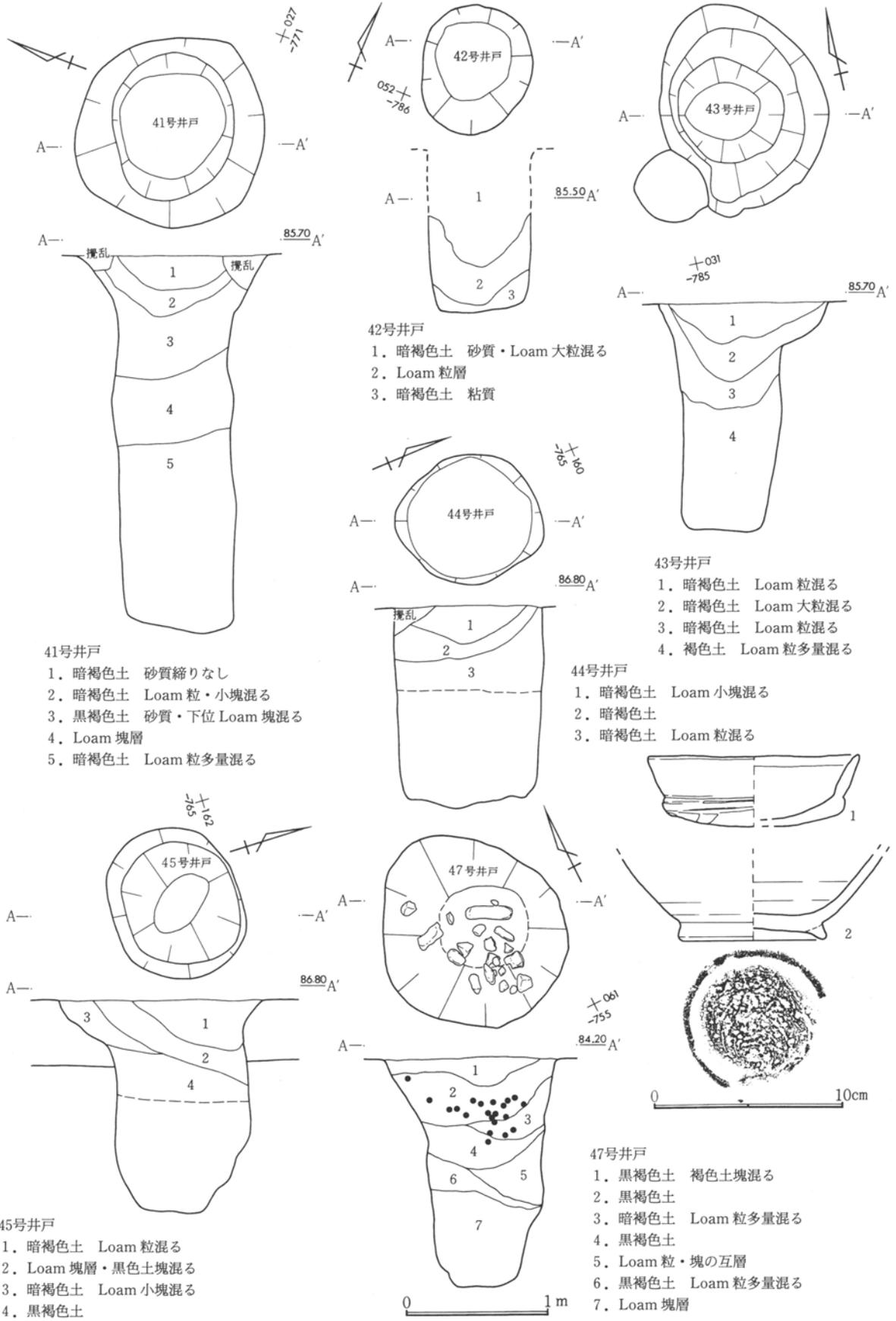
- 29b 井戸
1. 暗褐色土 Loam 粒混る
  2. 暗褐色土 Loam 大粒多量混る
  3. 暗褐色土 Loam 粒混る

第249図 井戸跡・出土遺物 (29 a・29 b・30・31号)

第3章 検出された遺構と遺物

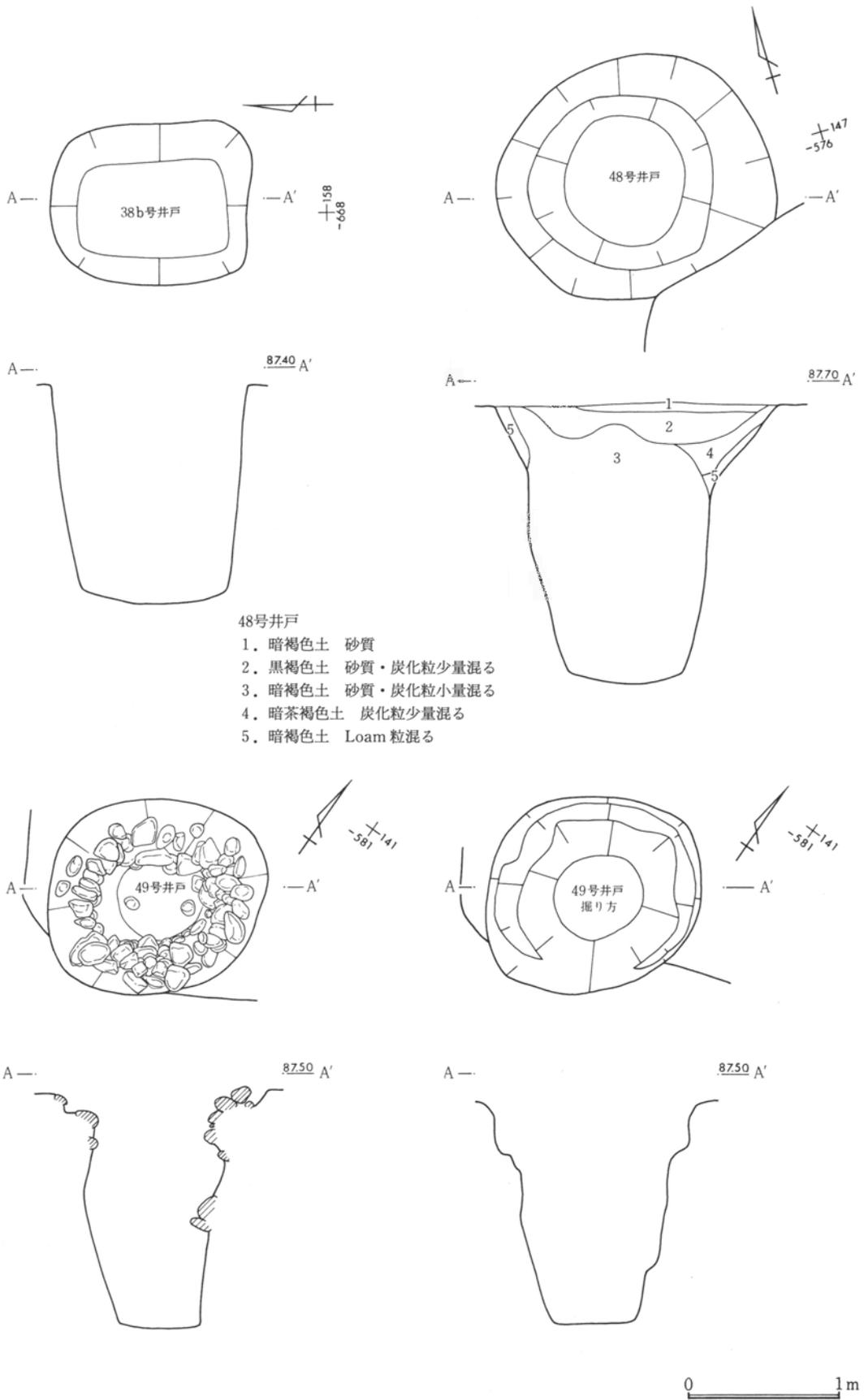


第250図 井戸跡 (32・33・34・35・36・37・38a号)



第251図 井戸跡・出土遺物 (41・42・43・44・45・47号)

第3章 検出された遺構と遺物



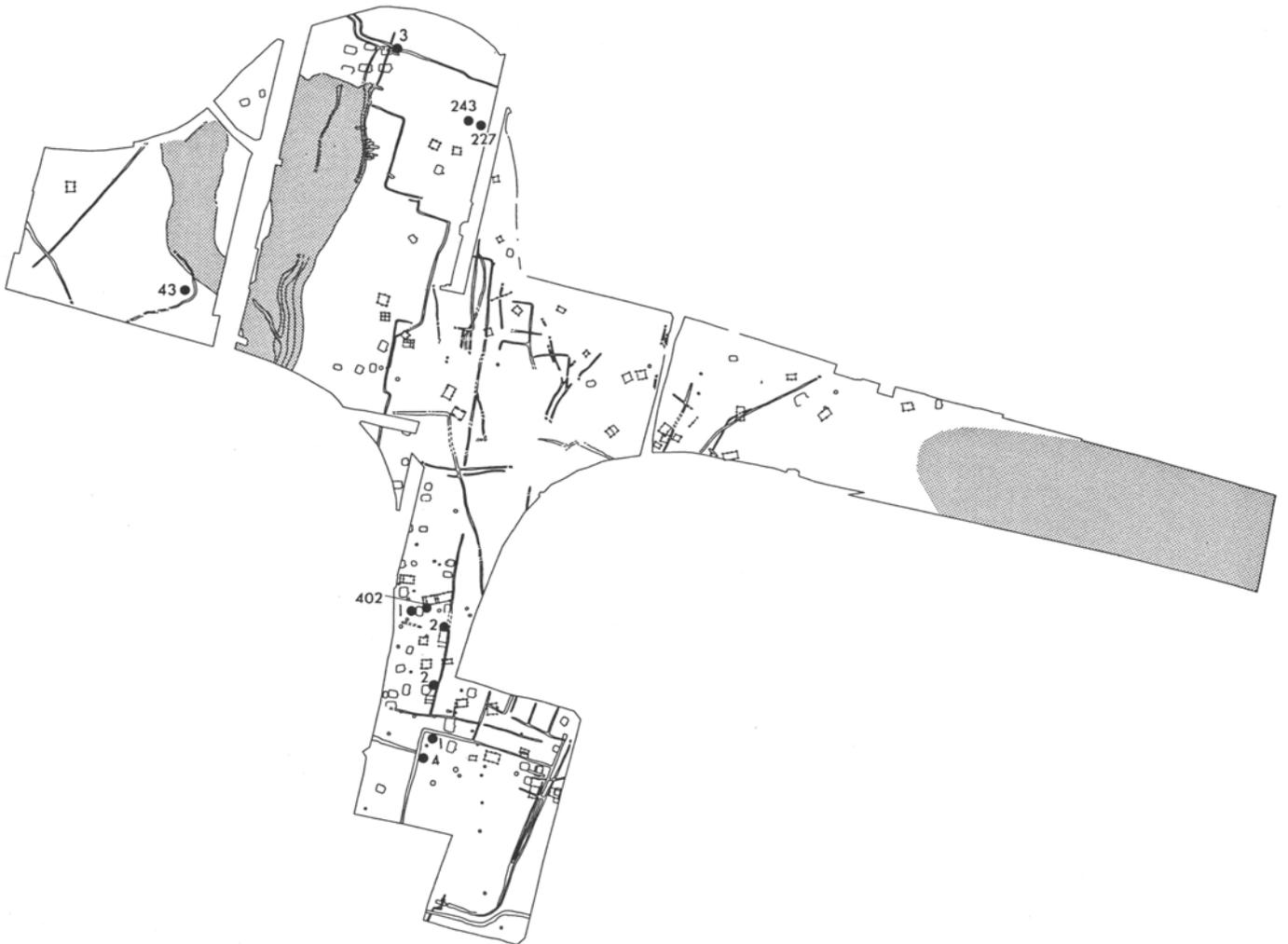
第252図 井戸跡 (38b・48・49号)

## 第6節 土坑・土墳墓

遺跡地南部の北半より2基の地下式土坑が検出されている。周辺は中世に属すると考えられる井戸跡・掘立柱建物跡・溝等が多く集中する。地下式土坑は関東地方に多く知られ、群馬県内においてもさほど希な遺構ではなくなりつつある。この遺構は墓跡とも地下貯蔵施設としての機能とも考えられているが多くの場合遺物の出土例が少なく、少数例ながら墓跡を示唆するような人骨の発見も知られるが確証には至っていないようである。

当遺跡の2基はいずれも土坑内に掘り抜きの基盤 Loam が崩落土として重填しており、天井形状及び構造は知ることができない。底面形からは両者とも方形で、壁面の立ち上がり状況では内弯気味に天井に至るようである。床面には日常的な生活の痕跡を示す踏み締まりなどの現象は顕著ではない。しかし、出入りを想定させるような緩い傾斜ないしは階段状の施設が一方に設けられており、なお頑強な閉塞を必要とするような痕跡はない。2号地下式土坑からは使用状態を示すものではないが甕・羽釜・陶器など日常生活品が出土している。

墓跡で明らかなものは古代末期と近世と考えられる4基である。いずれも土坑墓形式で、古代に属する1号墓は棺を用いた伸展葬、近世の3・4号墓は座棺になろう(第253図)。



第253図 土坑・墓位置図

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 1号地下式土坑 (第254図 P L.104)

座標値38978~38981・-54766~54770の範囲にある。

室部は方形で東側に縦坑をもつ。縦坑と室部を結ぶ主軸方位はN-97°-Eを示す。縦坑の底面には明瞭さを欠くが室部に向かって下る1段の階段をもつようである。室部底面は平坦をなし、壁面下位にやや膨らみをもって立ち上がる。壁面上位及び天井は崩落しており室部断面形状は残らないが、この状況から推測して丸天井の形態であったと考えられる。

規模は室部底面で、東西・南北長は1.65m、深さは検出面より0.9m。縦坑は底面長0.9m・検出面よりの深さは0.6mで室部との境目で0.75mを測る。

埋土は天井と見られる Loam 塊層をはさみ、最下層に天井崩落前の流入の暗褐色土が、上位には天井崩落後の砂質土が堆積する。出土遺物はない。

#### 2号地下式土坑 (第254・255図 P L.104・110)

座標値39002~39006・-54767~54770の範囲にある。

平面形状は上縁及び壁面の崩落が著しく不整楕円形を呈するが、室部底面形状では南北長が若干勝る方形を呈する。縦坑は室部の南にあり、半楕円形に付き断面形状はU字状をなす。縦坑底面は室部に向かって前半部は35度程度の傾斜をなし、奥部は傾斜を増し50度前後で室部へ続く。

規模は全長3.7mで、室部底面で2.0×1.7m・検出面からの深さ1.1m、縦坑長さ1.5mを測る。

埋土は室部底面直上にノロ状の黒色土薄層が見られる。埋土の大半は Loam 塊で満ち天井・壁面の崩落を示している。

出土遺物は室部と縦坑の境界付近に集中し、底面より若干浮いた位置にある。軟質の陶器・陶器・土製羽釜等がある。1・2は軟質で壺か甕になろう。1は底部回転糸切り後周辺削り。2は頸部が短く直立し、口唇部は丸まる。肩部は丸く張る。外面は黒色を呈し燻し焼成を施す。3は土製羽釜で幅広水平な鐔がつく。扁平な形状になろう。4は陶器で3足盤か鉢になろう。内面は刷毛塗り白色釉が施される。

#### 1号墓 (第255図 P L.104・110)

座標値39039~39040・-54777~54779の範囲にある。

平面形状は南北方向に長軸をもつ長楕円形を呈する。規模は長軸2.2m・短軸1.0m・深さ26cmで、長軸方位はN-27°-Eを示す。床面は平坦で Loam を混ぜた褐色土を整地土として使用しており、層厚は4~5cmである。土坑長軸中央線上の南北両端には径25~30cm・深さ30~45cmの小穴1対が穿たれる。出土遺物の中には6本の鉄釘があり、いずれも土坑四隅から検出されている。幾本かには木質が錆化して付着しており屍体収納木棺の留釘と考えられる。先の1対小穴は墓穴の覆い施設、あるいは棺設置に関わる台部などが想定されるが、覆屋の柱穴としてもその内法から木棺の長さは1.5~1.6mになり屍体埋葬形態は伸展葬であろう。骨片などは検出されていない。

出土遺物は鉄釘のほか、副葬品として土坑長軸南よりに酸化炎焼成の皿と小型甕が、東壁沿い中央に灰釉陶器碗がいずれも完形で出土している。1は酸化炎焼成で足高高台の皿。右回転轆轤成形。砂粒多く淡黄色を呈す。口径13.2cm・底径8cm・器高6cm。2は灰釉陶器輪花碗で完形。見込み部にこて当て調整。重ね焼き痕。腰部無で。高台直立気味。漬け掛け施釉。虎溪山1号窯式期。口径17cm・底径8.2cm・器高5.6cm。3は酸化炎焼成の小型甕で完形。肩部の張り無く短いくの字状に折れる口縁部。底部右回転糸きり。胴上半轆

轆右回転撫で、下半回転篋削り。内面の荒れ著しい。細土。口径11.2cm・底径5.2cm・器高10.5cm。4～9は鉄角釘。8は完形で長さ4cm。7～9は木質が明瞭に残る。

#### 2号墓 (第256図 P L.104・110)

座標値39092～39031・-54763～54764の範囲にある。

平面形状は南北方向に長軸をもつ長楕円形を呈する。規模は長軸1.18m・短軸40cm・深さ20cmを測る。長軸方位はN-25°-Eを示す。底面直上にはLoam土を用いてある。屍埋葬形態は土坑幅から伸展葬と考えられるが長軸規模からすれば、成人とは考えられない。極めて小柄か小児が妥当であろう。骨片などは検出されていない。

副葬品は土師器椀1・須恵器杯2の3点である。須恵器杯は南縁端と東縁やや北寄りに、土師器椀は中央僅か南に寄って配される。1は土師器椀完形。表面体部に△墨書文字がある。体部下半は手持ち篋削り、上半に指頭痕、口縁部横位撫で、付け高台。口縁部小さくくびれて外反。口径14.5cm・底径6.3cm・器高5.2cm。砂粒混じり黄橙色を呈す。2・3は須恵器杯完形。右回転糸切りで底径は小さい。体部に丸みをもち口縁は緩く外反。細砂多く混じり白灰色を呈す。2・3とも口径12.1cm・底径5.5cm・器高4.1cm。

#### 3号墓 (第256図 P L.104・110)

座標値39305～39307・-54791～54793の範囲にある。

平面形状は略円形を呈する。上面径1.7m・底面径1.3m・深さ50cmを測る。確認面では砂質暗褐色土を中心にLoam塊層が環状に巡る状況で検出された。調査では骨片などの物証は得られなかったが検出時の土層平面形状の観察から座棺使用の墓跡に通有のものと判断した。上面の削平はかなり進んでいるものと考えられる。底面にはLoam塊を主体にした土を平坦に敷き、棺の埋設後周辺隙間に掘り上げたLoamを充填したものであろう。棺の形状は円形座棺と推定される。

出土遺物には鉄鎌1点がある。かなり大振り刃部先端は欠損するが、柄部は先端をU字状に折り曲げている。現長12.4cm・刃幅2.9cm・柄部長さ8cm。

#### 4号墓 (第256図 P L.104)

座標値38969～38970・-54773～54734の範囲にある。

平面形状は円形を呈し断面は筒状になる。上面径95cm・底面径85cm・深さ95cmを測る。底面には人骨と思われる骨片が認められ、数個の人頭大で角のとれた角礫が重なって検出された。棺を思わせるような痕跡は見られなかったが、土坑形状から座棺形態の屍体埋納が想定できる。土坑内の礫は墓坑被覆後に置かれたものが内部腐食によって空洞化した際に陥没したものと考えられる。副葬品などは検出されない。

#### 402号土坑 (第256図)

座標値39041～39043・-54772～54774の範囲にある。

平面形状は東西方向に長軸をもつ隅丸長方形を呈するが西端部は丸みが強い。規模は長軸1.55m・短軸80cm・深さ10cmならずである。長軸方位はN-85°-Wを示す。埋土はLoam粒を多量に混じえる黒褐色土である。出土遺物は少量で平安時代須恵器小片である。

### 第3章 検出された遺構と遺物

#### 43号土坑 (第256図)

座標値39191～39193・-54889～54890の範囲にある。

平面形状は南北に長軸をもつ隅丸長方形を呈し、規模は長軸2.2m・短軸1.1m・深さ20cmを測る。長軸方位はN-5°-Eを示す。埋土は粘性のある黒褐色土が主体となるが下位面には12～13cmの砂層が堆積する。

出土遺物は青磁碗の小片で大振りな器になろうか。表面は鎬蓮弁紋が刻される。胎土は灰色、龍泉窯系で13世紀になろうか。

#### 243号土坑 (第257図 P L.110)

座標値39271～39273・-54754～54756の範囲にある。

平面形状はやや不整な隅丸長方形を呈する。南北に長軸をもち、規模は長軸1.25cm・短軸60cm・深さ30cmで断面幅広なU字形である。須恵器坏類を多く検出するが出土状況が不明であり、当遺構とのかかわりにぎねんがこのころここでは調査所見に従う。遺構埋土は粘性のある暗・黄褐色土でLoam粒の混入が多い。また、須恵器は舞台遺跡窯跡の製品に類似する。

出土遺物は須恵器の坏・碗類で完形品はない。形状の知れるものは1～4である。3はやや大振りで口径13.6cm、4は小振りで口径11cm、他は12.4・12.8cm。底径は6.8～7.8cm・器高は3.3～4.0cmの間にある。5・8は口縁部を欠く。底径は5・8が大きく8cm、他は6～7cm大である。すべて右回転糸切り無調整。9は碗の底部。回転糸切りで付け高台。底部径10cm。胎土には白色細粒が混じり、3・7・9は酸化炎焼成。

#### 227号土坑 (第257図 P L.111)

座標値39269～39272・-54748～54752の範囲にある。

平面形状は方形と楕円形状遺構の重複とも考えられるが調査時の所見に従い一連のものとして扱う。長軸方位は東西方向にあり約3.4m、短軸は最大で2.8m、最小で1.7m、深さ30cmを測る。長軸方位はN-72°-Wを示す。埋土は粘性の黒・黄褐色土で浅間C軽石やLoam粒を混じえる。

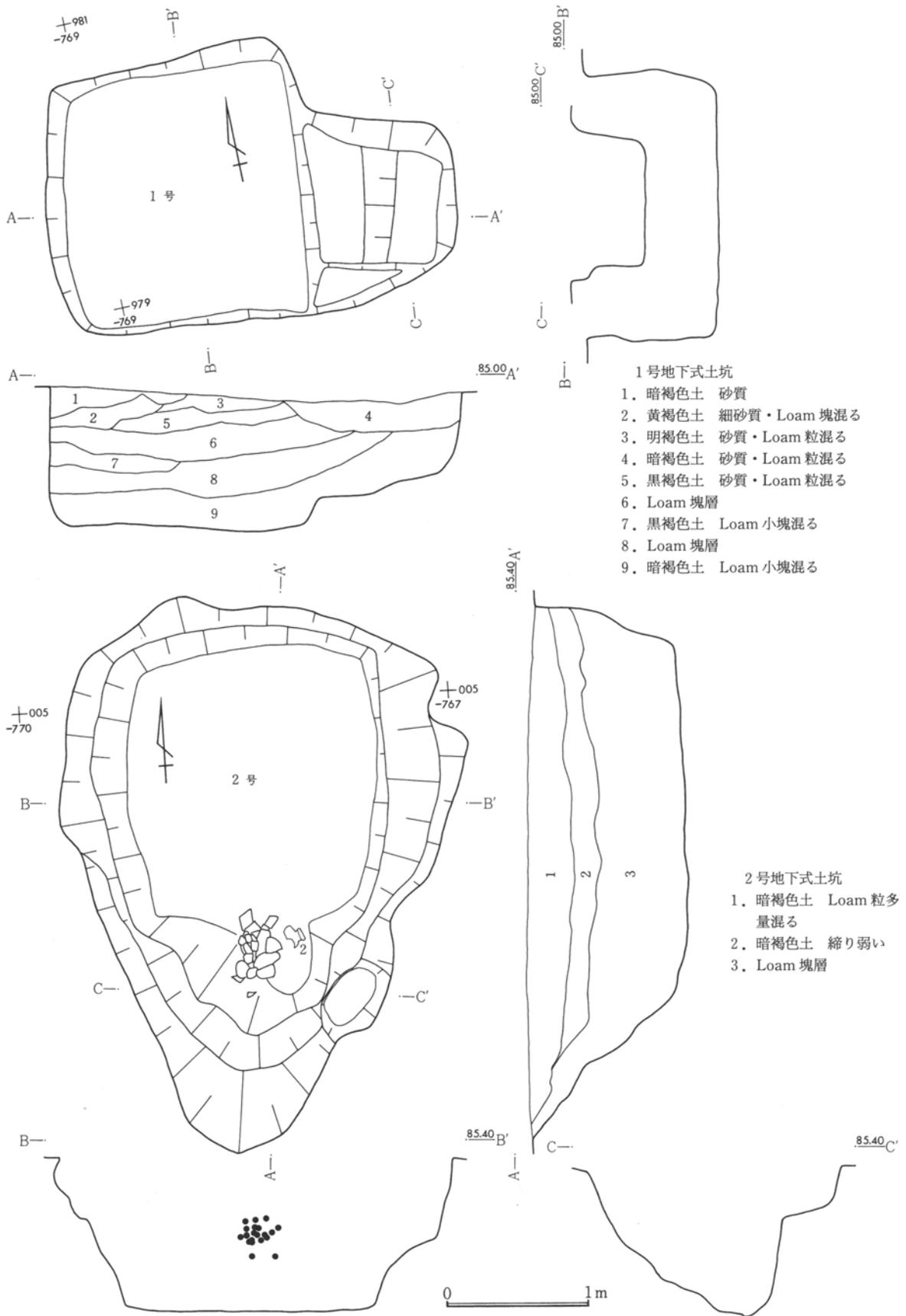
出土遺物は須恵器碗1点である。丸い腰部から口縁部は外反して開く。内面体部には強いこて状工具の上痕が9～10条巡る。回転糸切り付け高台。細土で焼成甘く灰黄褐色。口径15.5cm・底径7.2cm・器高5.8cm。

#### 311号土坑 (第257図 P L.111)

座標値38940～38941・-54724～54726の範囲にある。

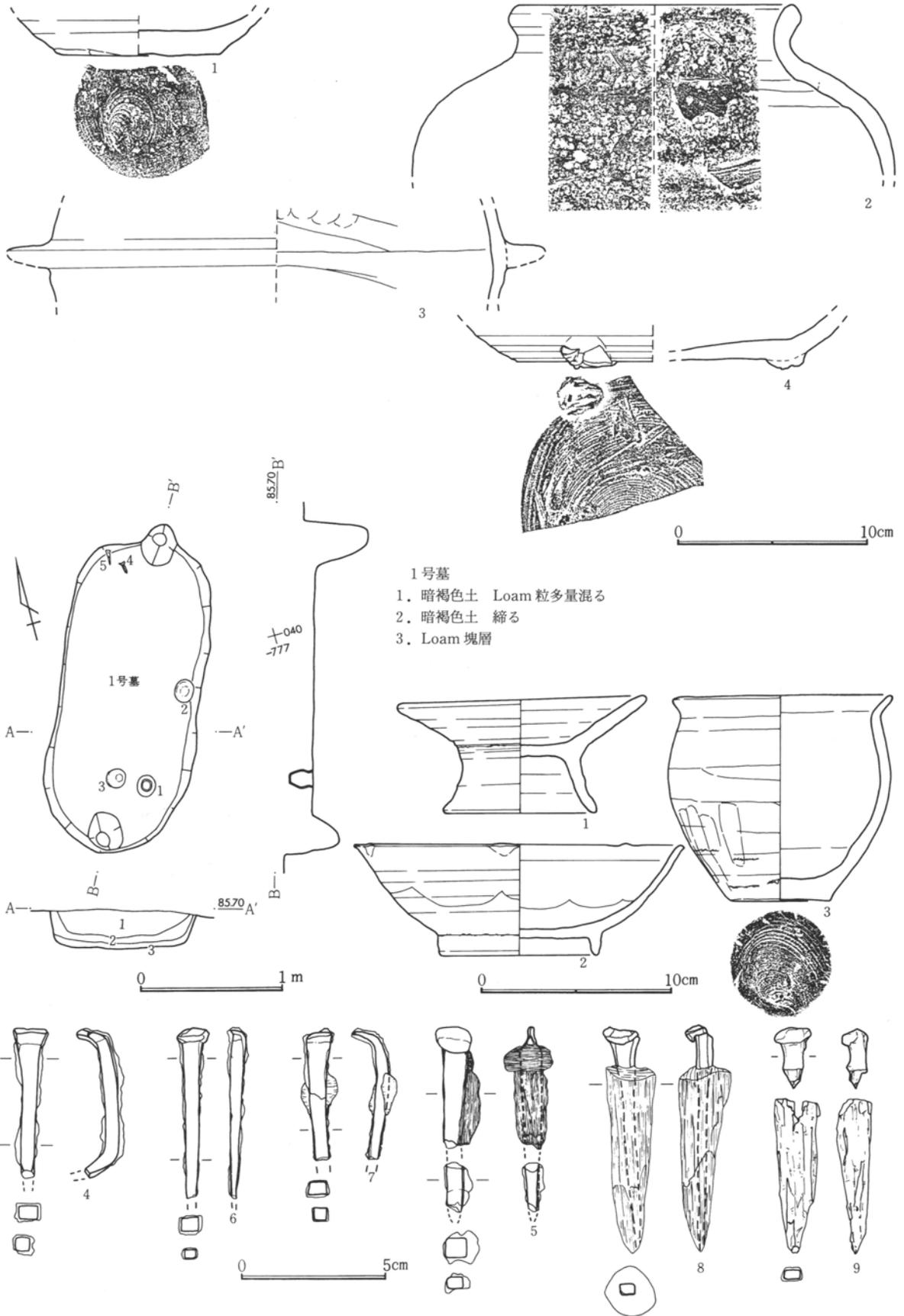
平面形状は略円形を呈し断面U字形になる。上縁径1.15×0.95m・深さ60cmを測る。埋土は炭化粒を少量混じえる黒褐色土である。出土遺物には数個の破礫の他羽口・碗形鉢滓半欠がある。出土遺物からは鍛冶関連の遺構と考えられるが、壁・底には被熱などの痕跡は見られない。また、周辺にも関連するような遺構はなく単独遺構である。

出土遺物の羽口は縦半欠で長さ5cmの極めて短いものであるが、両端部に飴状の溶解が生じており異例である。

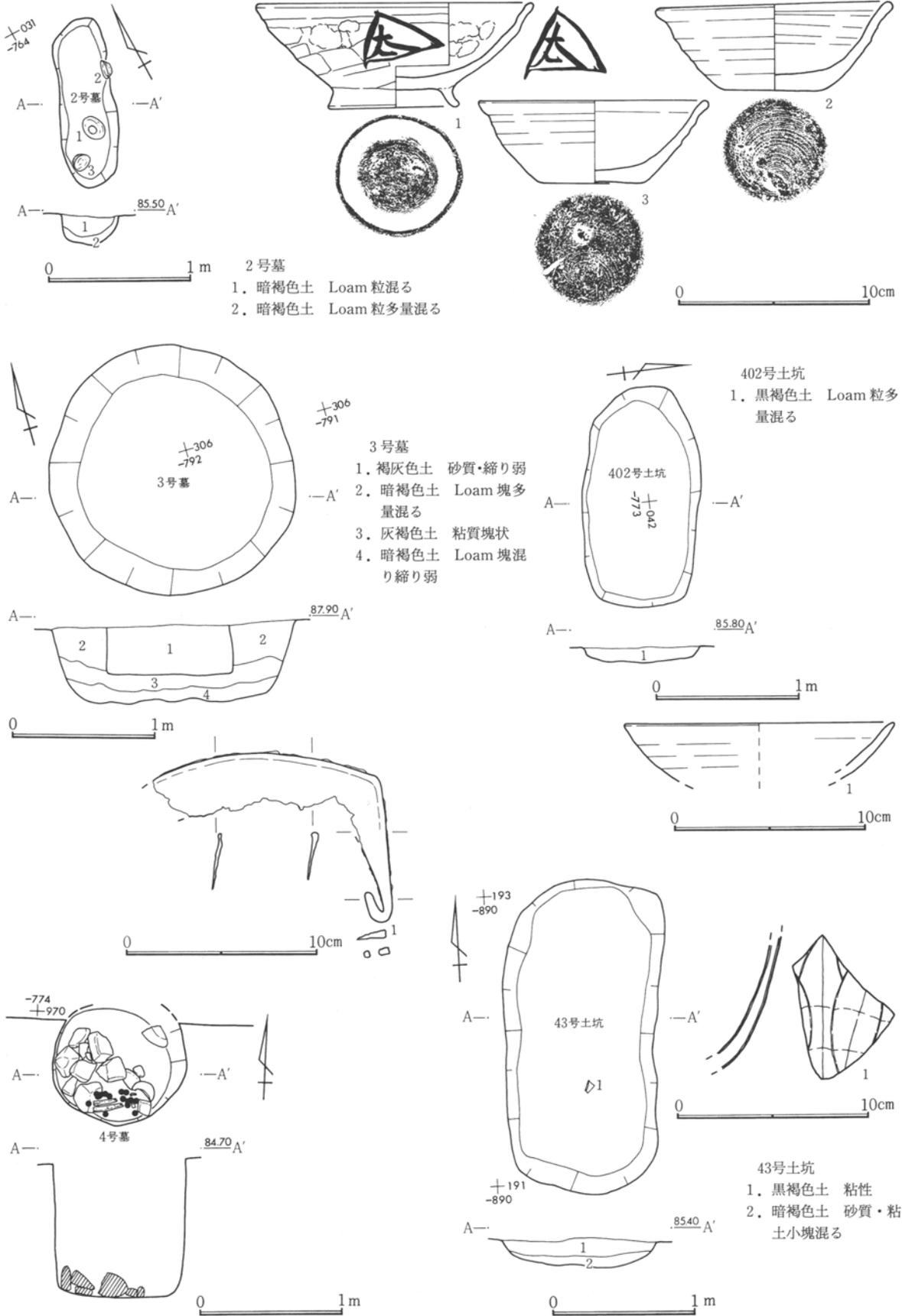


第254図 地下式土坑 (1・2号)

第3章 検出された遺構と遺物

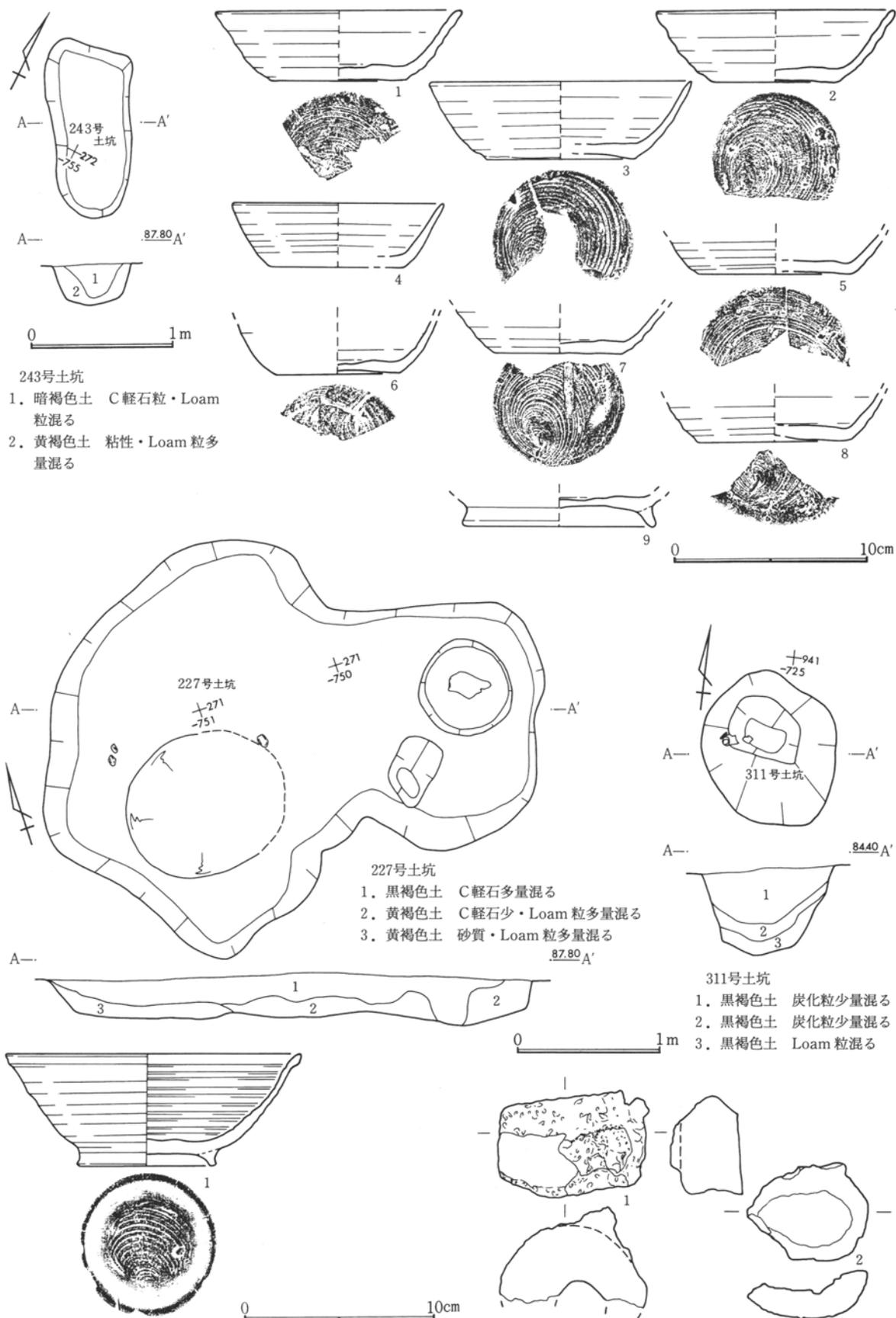


第255図 2号地下式土坑出土遺物・1号土墳墓出土遺物



第256図 土墳墓・出土遺物(2・3・4号)土坑・出土遺物(402・43号)

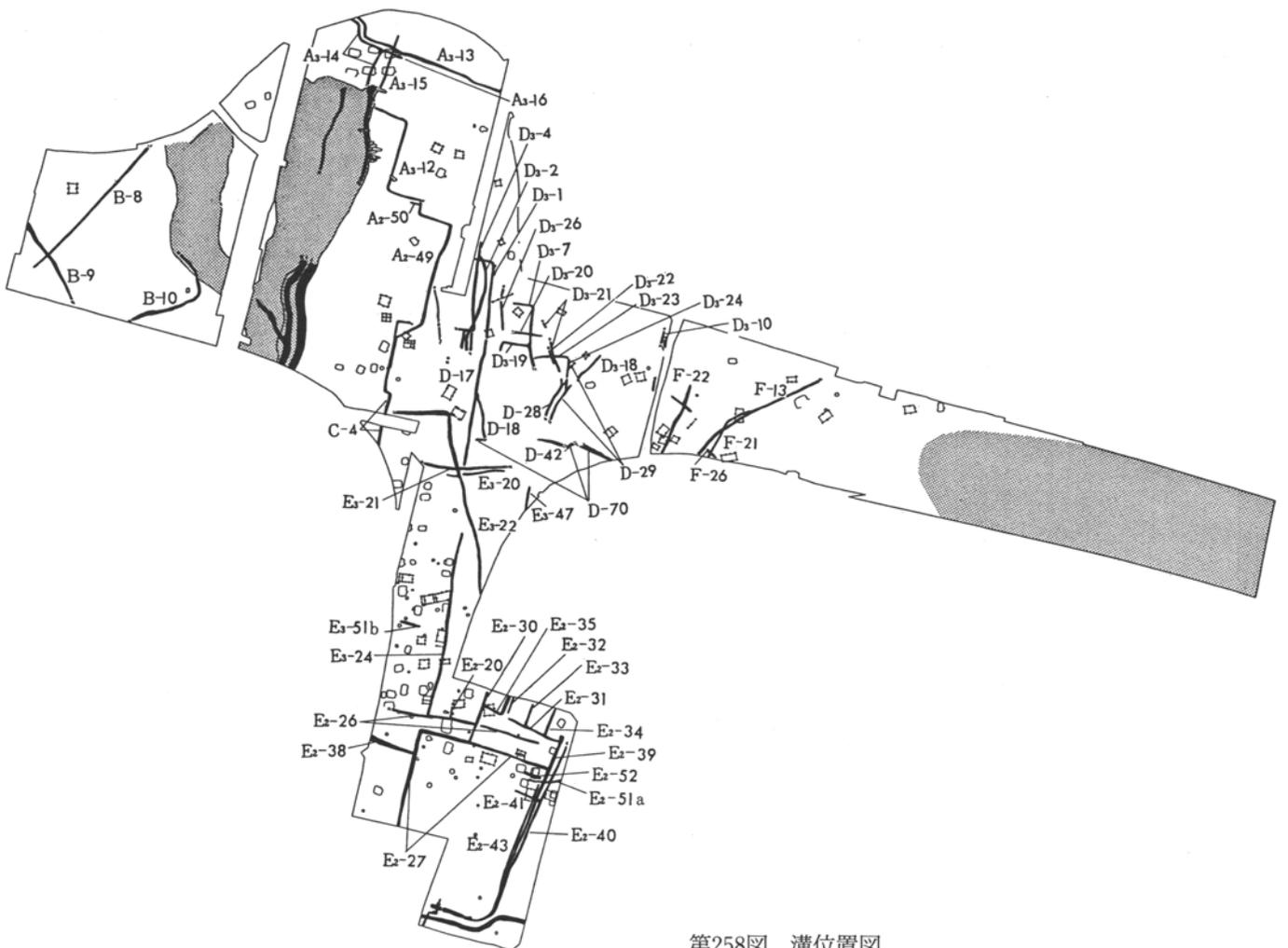
第3章 検出された遺構と遺物



第257図 土坑・出土遺物 (243・327・311号)

## 第7節 溝

舞台遺跡で検出された溝跡は全体として狭長で、機能の不明確なものが多い。これには各溝跡の始・終が明らかでないものがほとんどであることにも由来しよう。帰属する時代は判然としないが、時代を問わず重複する遺構のほとんどを貫いており、古くは古代末から中世にあり近世・近代に属すると考えられる。なお、古墳時代前期の住居跡に隣接する小規模の溝類については続巻該当時代編で扱う。大多数の溝は基本的な走方向としては南北走し大略的には北が高く、南へ下る地形に沿っているようである。機能的には地形傾斜を考慮すれば導水路と考えるので一般的であるが溝底面などの状況や堆積層の所見からは積極的な見解は得られていない。また、幾つかの区画機能を示唆する溝跡も見られる。遺跡地北部から階段状に直折れて南下する12(4・49)号溝は全長160mにおよび西側に発達する幅広な谷地地形を内包するような形状となっている。北端は谷地の湧水点に近接するが取水機能は考えられない。現状では谷地を挟む空間には直接関係を考えさせるような施設は検出されていない。南部の埋没谷地地形縁辺を27(40・43)号溝が囲むごとくにある。東西65m・南北85mの規模をもつが先年の調査になる下植木寺町田遺跡の範囲になる南西部には削平のためか検出されていない。方形状・溝掘形規模など舞台遺跡内では最も整った様相をもつ溝であるが、内区には2～3棟の掘立柱建物跡(やや時期が溯る)と時代的には符合すると思われる8基程の井戸跡が検出されたのみである(第258・260～271図 P L.105～108・111～113)。



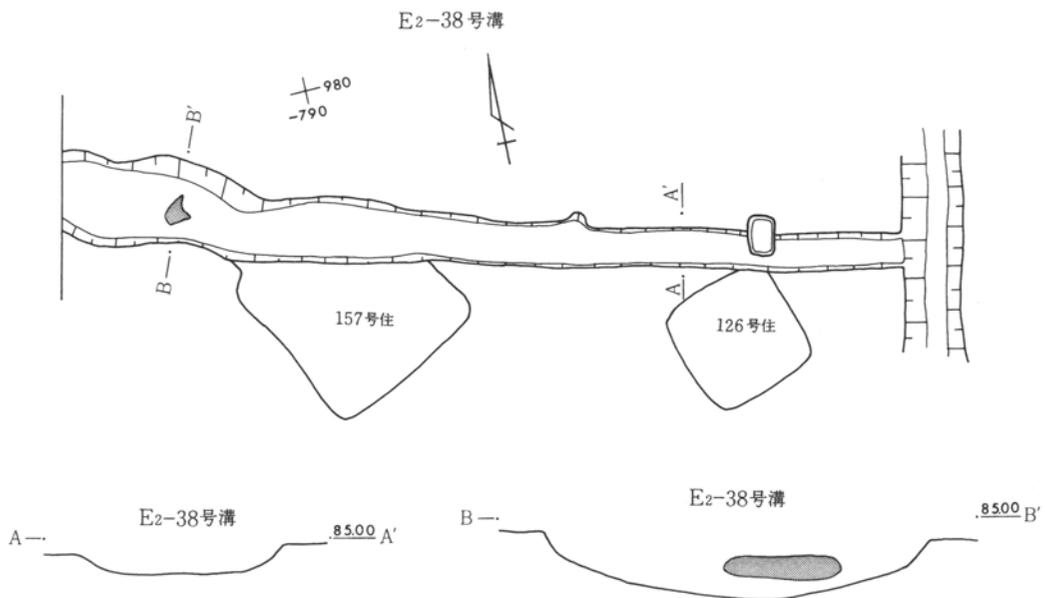
第258図 溝位置図

38号溝 (第259・272~278図 P L.113~116)

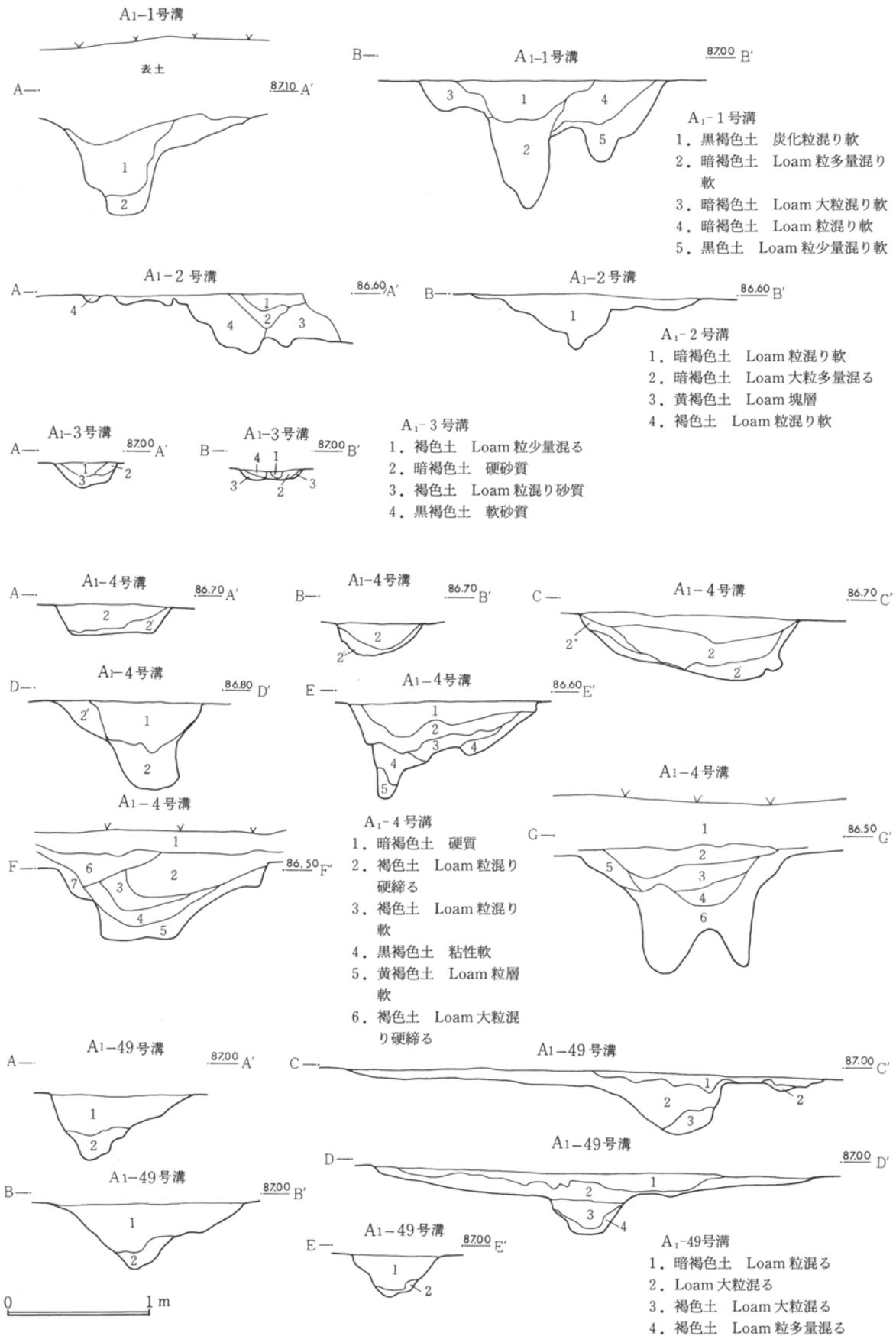
遺跡地南部の西にあり、上述した方面形状27号溝の西縁から西へ直線的に派生する溝である。27号溝の内区には延びないことから同時期に近い所産と考えられる。27号溝西縁より約23m西走して調査区域外にいたる。東半部は幅約1mの整った壁縁をみせるが、徐々に壁線が拡縮にみだれて西半は溝幅2.5m程になる。深さ50~60cmで27号溝より浅く、底面はほぼ平坦をなす。

出土遺物は西寄りの底面にほど近く灯明具と考えられる土器(カワラケ)が多量集中して検出されている。遺物間には明瞭なほとんど土壌堆積が見られず、一括の投棄状態を示していた。底部換算による総個体数は470個にのぼる。この土器(カワラケ)群には油煙の付着する類と底部穿孔の類がある。そして2種類の土器(カワラケ)は両者の条件を共有することはないようである。形状の明らかな資料からの所見では、油煙の付着する個体には穿孔がなされず、穿孔されるものには油煙の付着が見られない。ただし、総個体数のうち油煙付着と底部穿孔の不明なものが大半を占め、油煙付着数100個、底部穿孔数49個である。

油煙付きと穿孔の土器(カワラケ)は灯明具として組み合わさって用いられたものである。燭台には台部に立てられた棹があり、棹の端部に小突起が作り出される。底部穿孔の土器(カワラケ)はここに据えられて油・灯心を入れた土器(カワラケ)を安定して受けたものであろう。油煙土器(カワラケ)に比べて穿孔のものは半数に過ぎないが、一個体に付く油煙は2箇所が多く、破片数から推定すれば両者はかなりの確率で現実的に組み合わせられていたものとできよう。また一括投棄の出土状況からは、少なくとも50以上の灯明を短時間に使用する場面が想起され、宗教的な行事・儀式がこの周辺において行われた可能性が高い。なお、遺跡内ではこれに関連する他の遺構・遺物を現時点では見いだすことはできない。土器(カワラケ)の形態および灯明具の形式から近世の所産であろう。

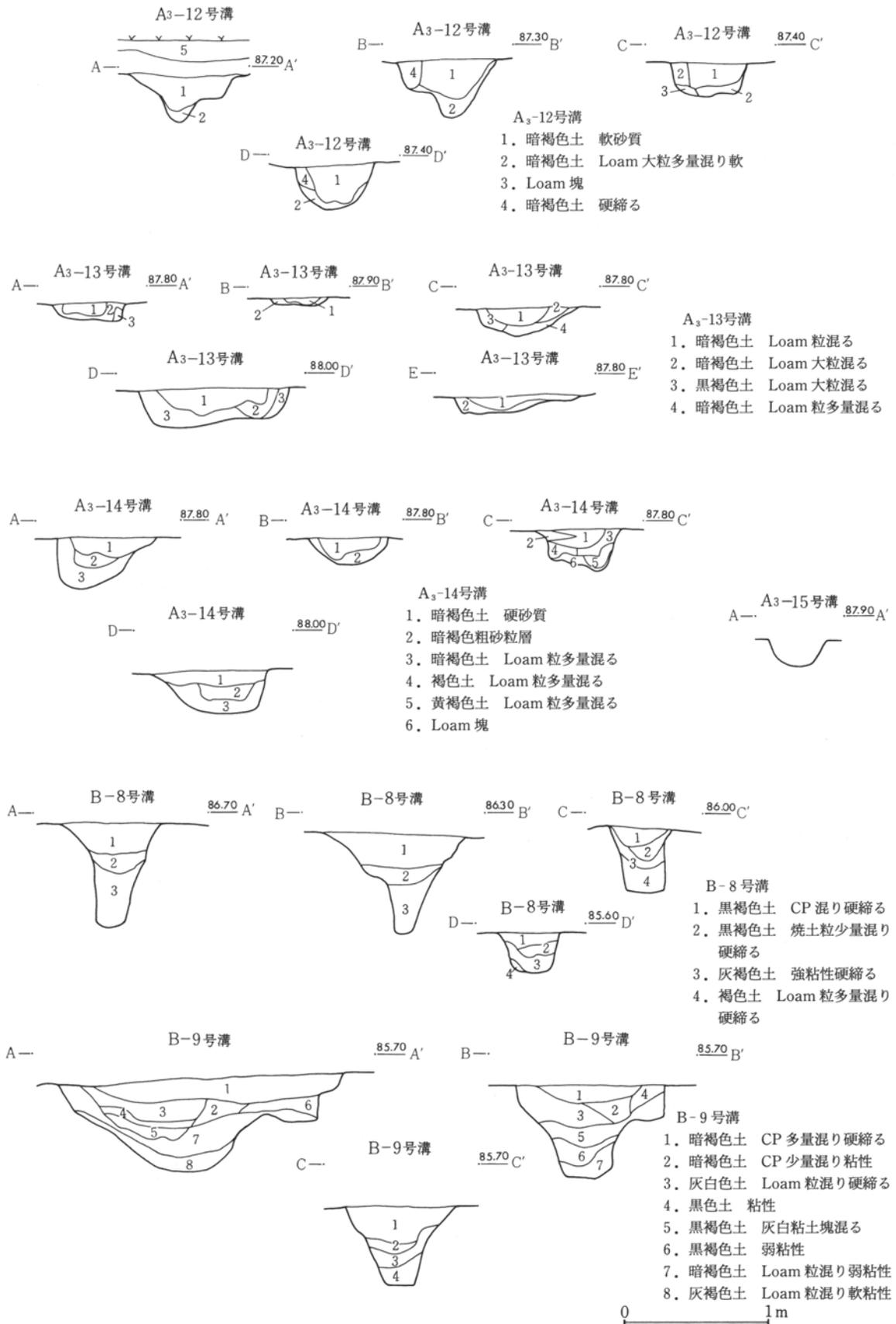


第259図 E<sub>2</sub>-38号溝

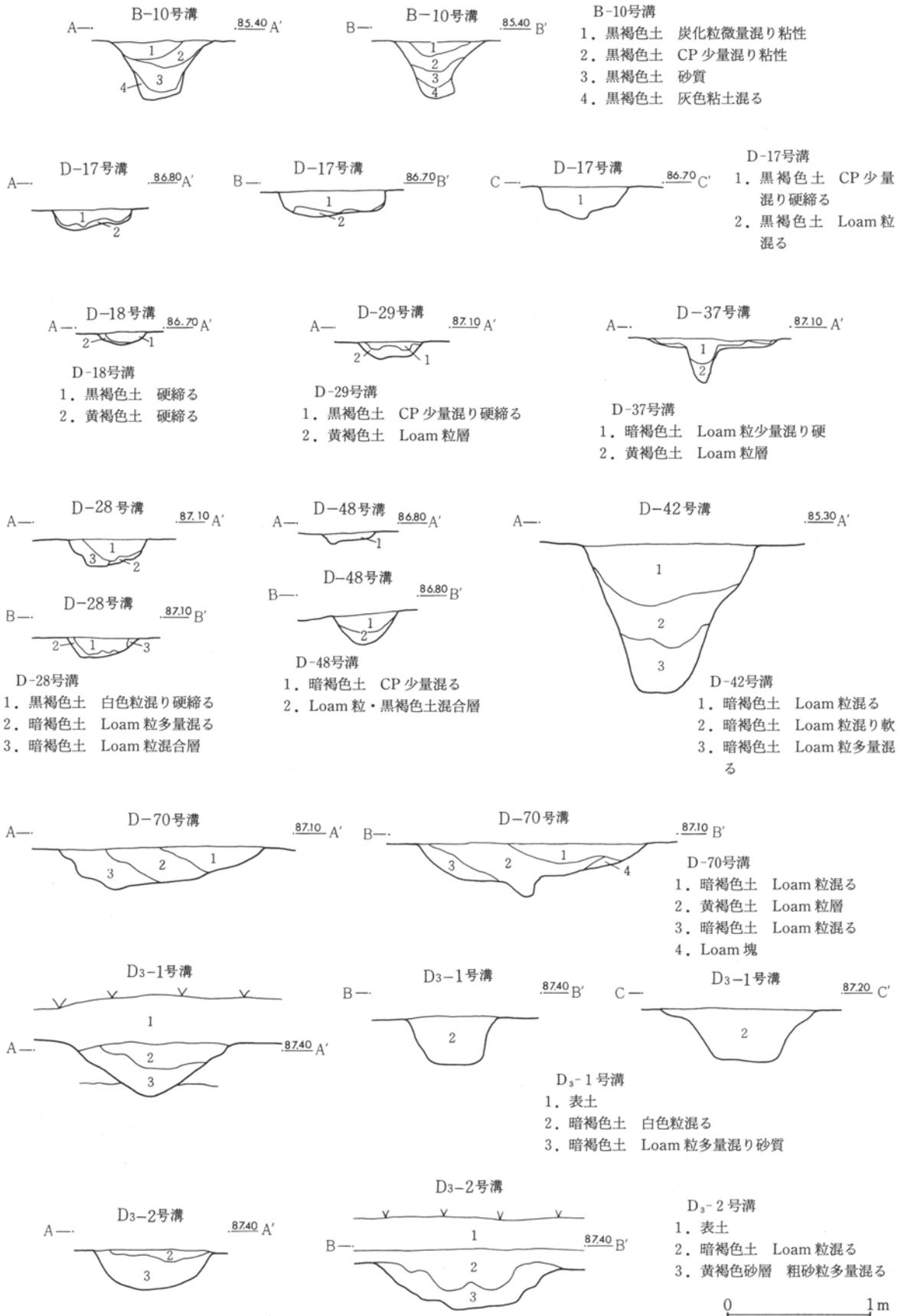


第260図 溝土層図(1)

第3章 検出された遺構と遺物

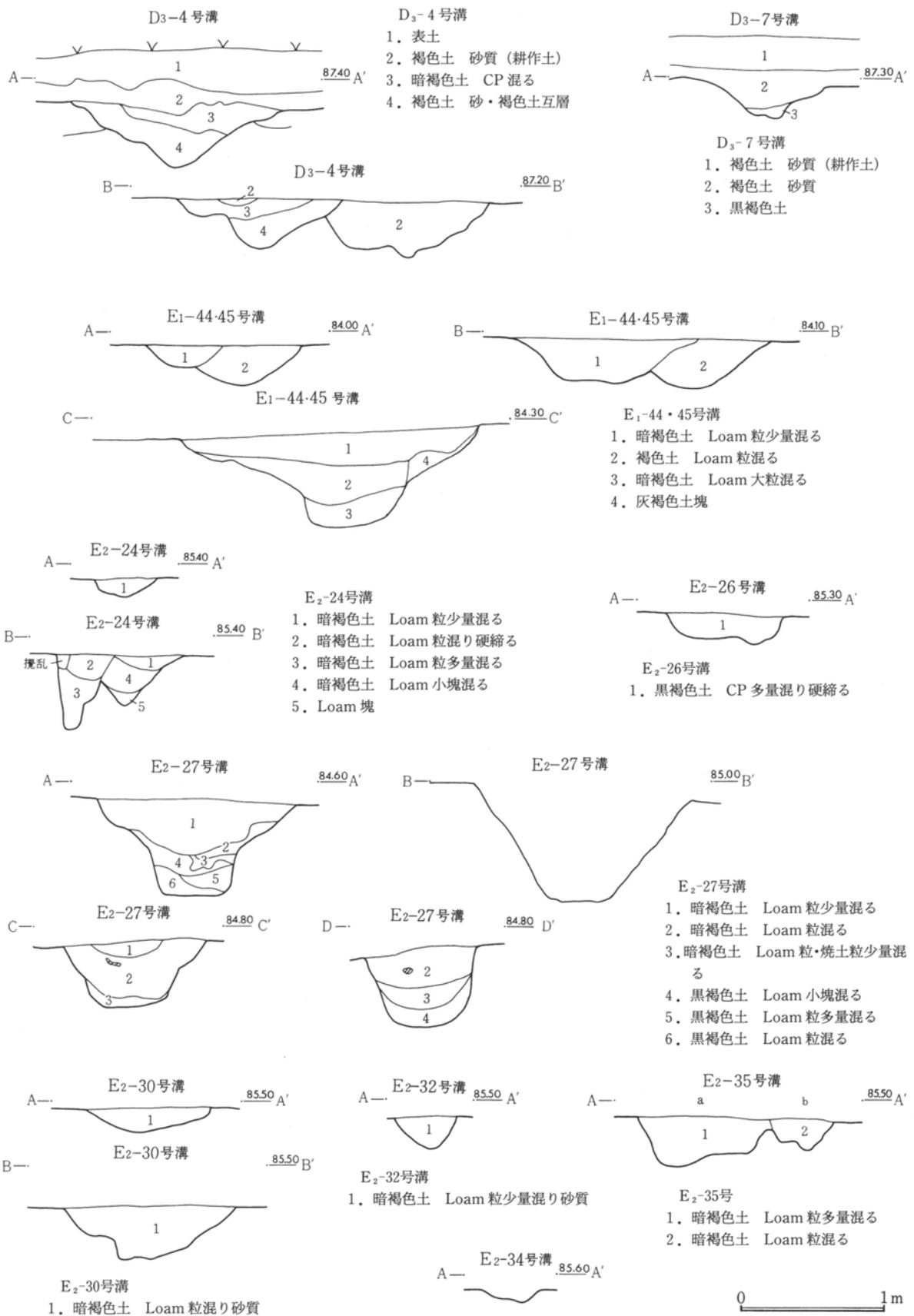


第261図 溝土層図(2)

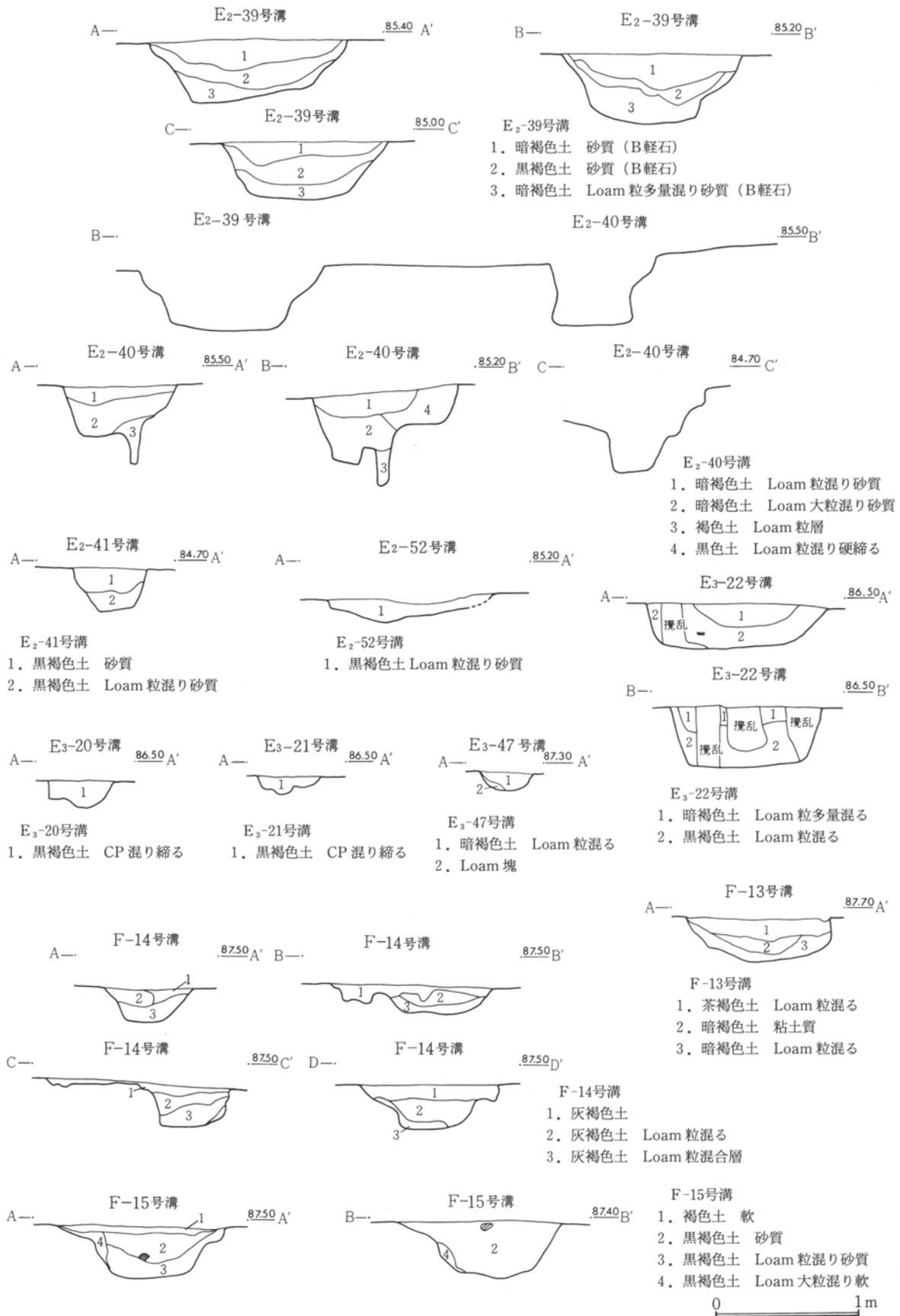


第262図 溝土層図(3)

第3章 検出された遺構と遺物

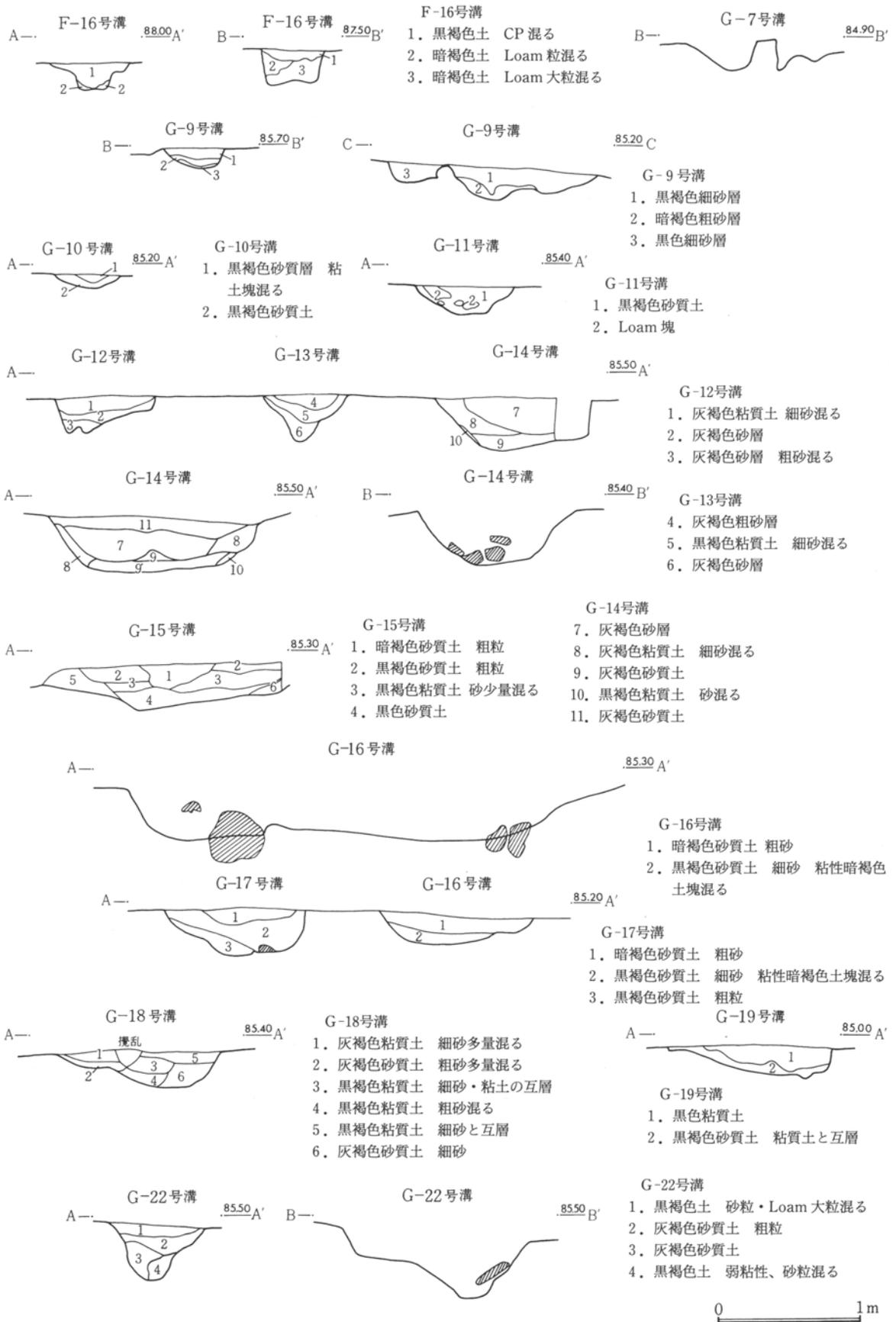


第263図 溝土層図(4)

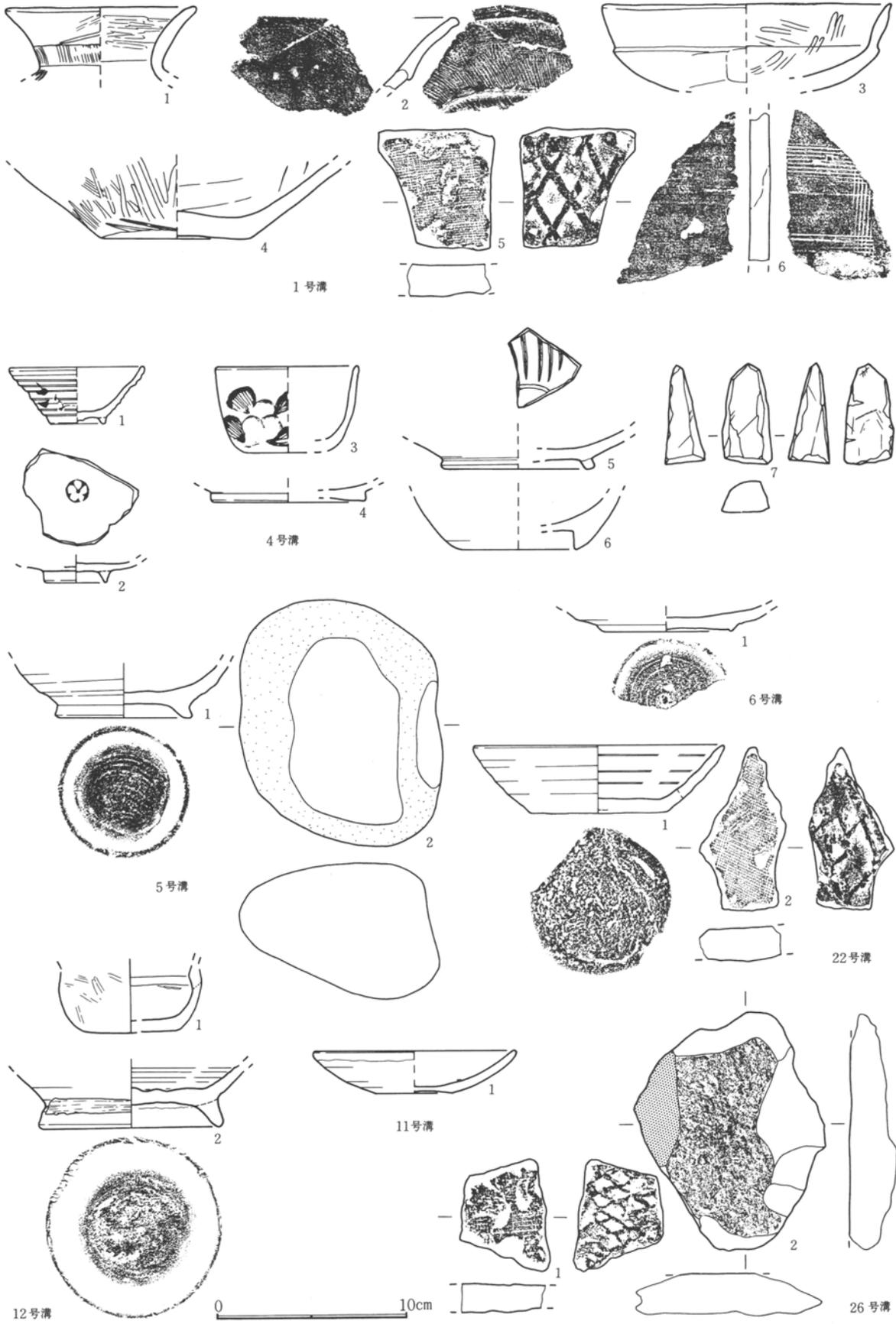


第264図 溝土層図(5)

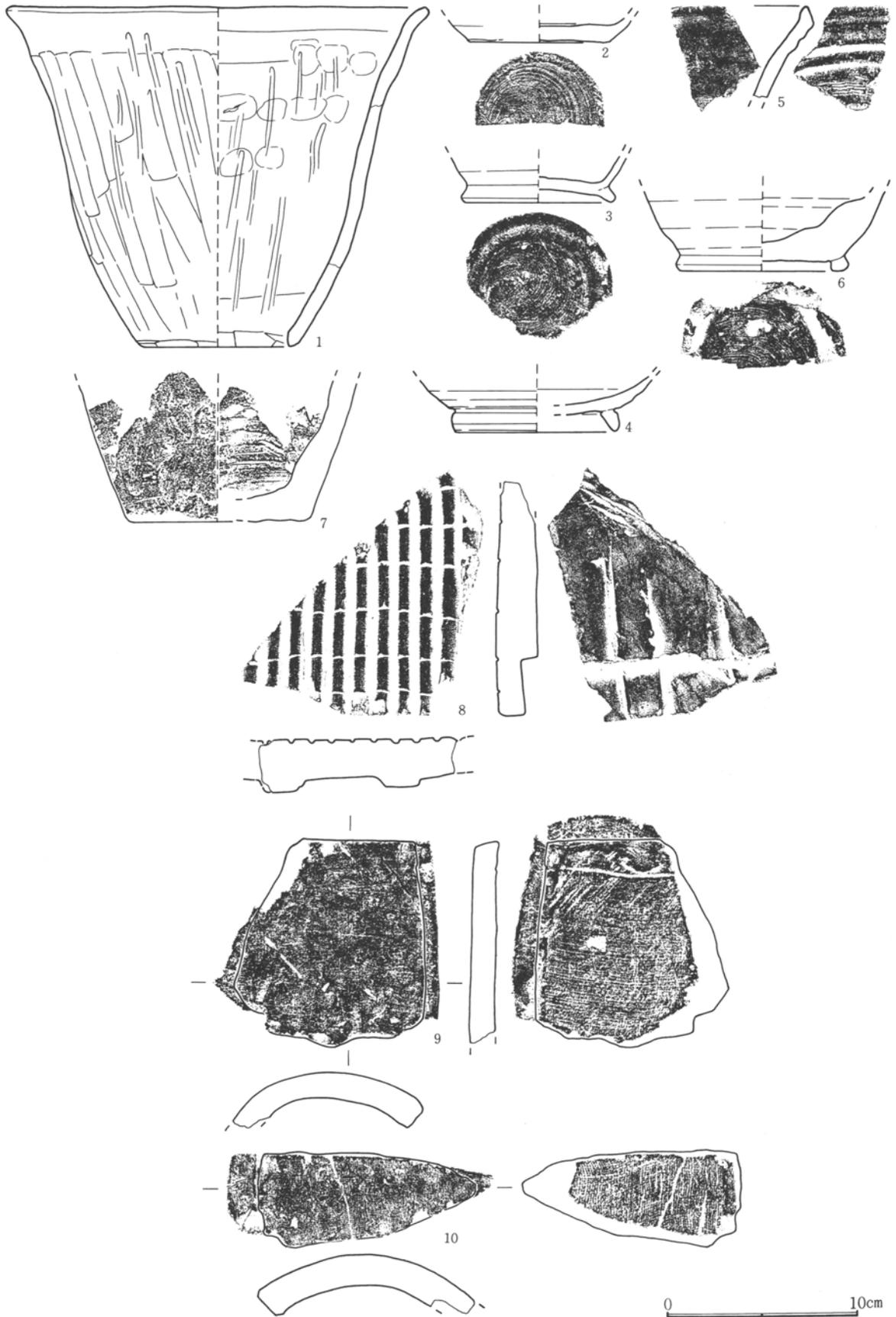
第3章 検出された遺構と遺物



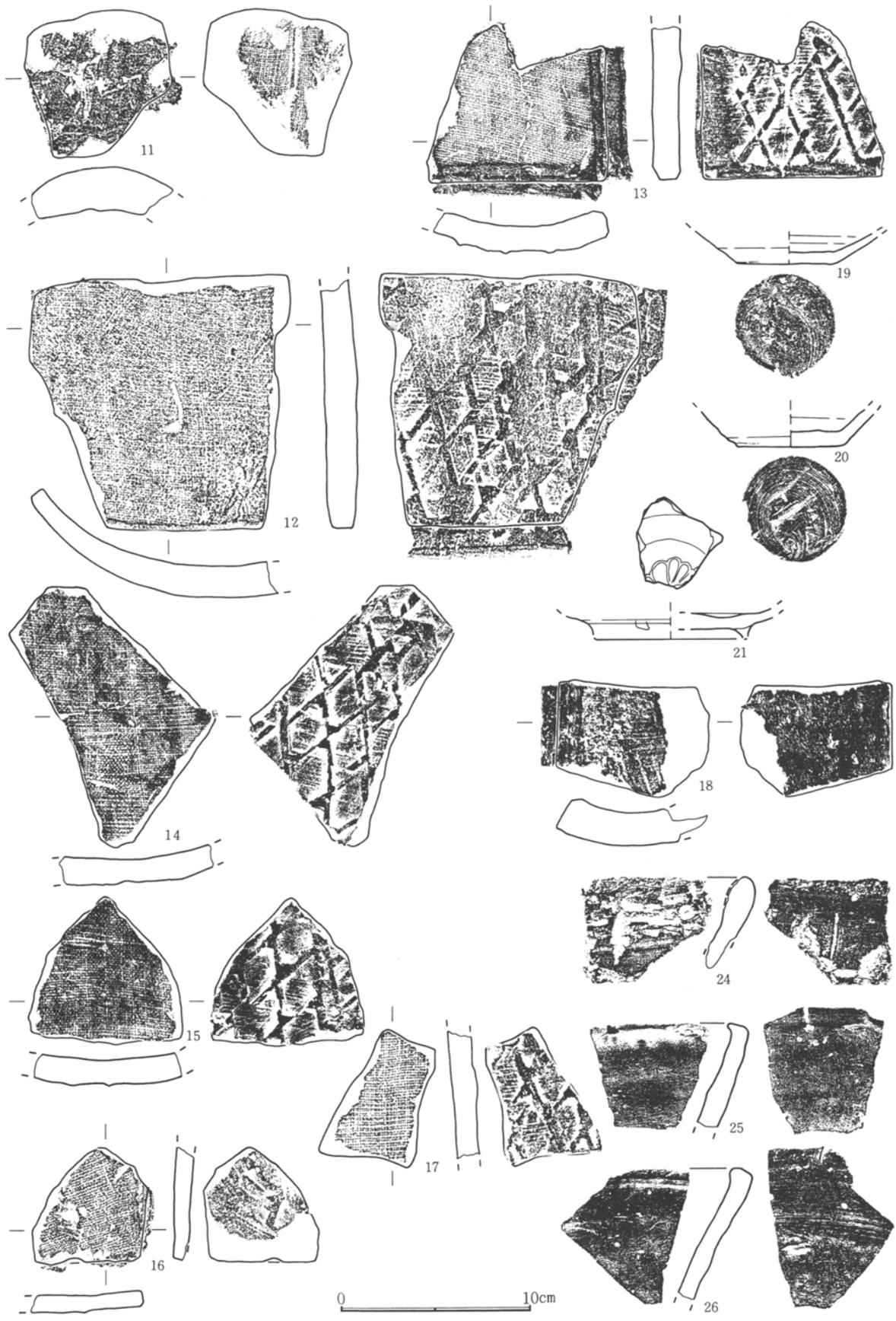
第265図 溝土層図(6)



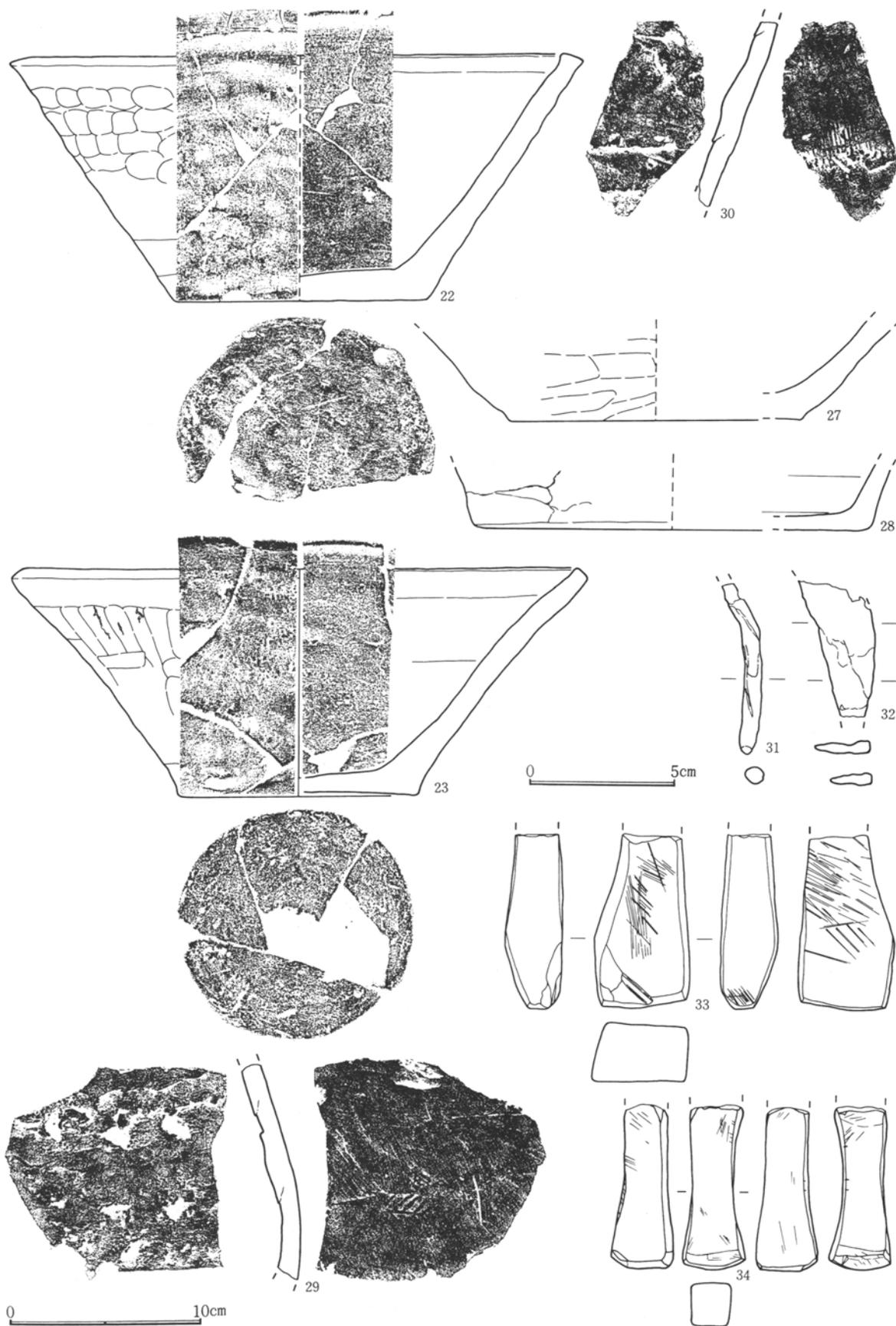
第266図 溝出土遺物 (1・4・5・6・11・12・22・26号)



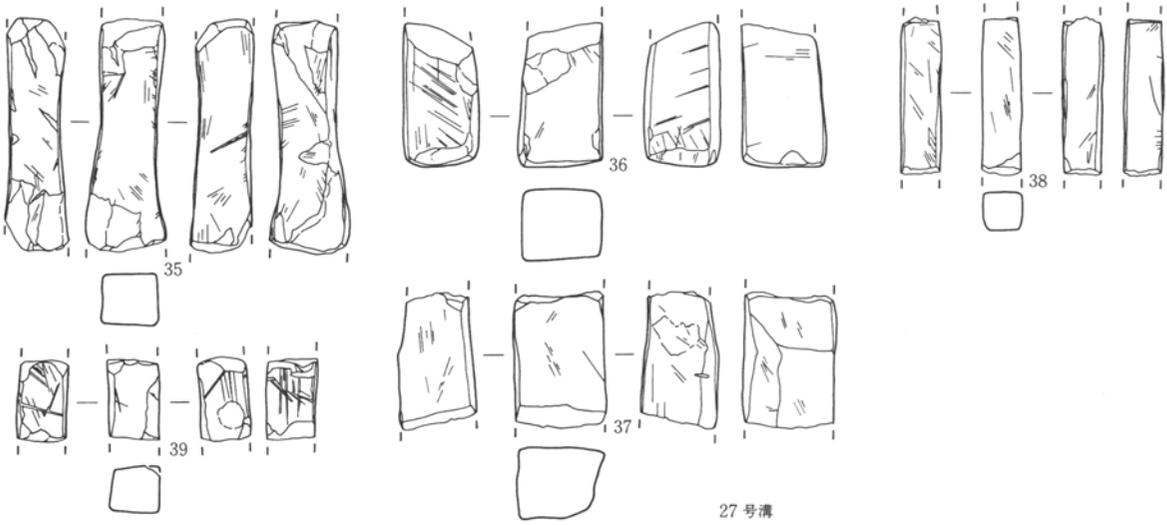
第267図 27号溝出土遺物(1)



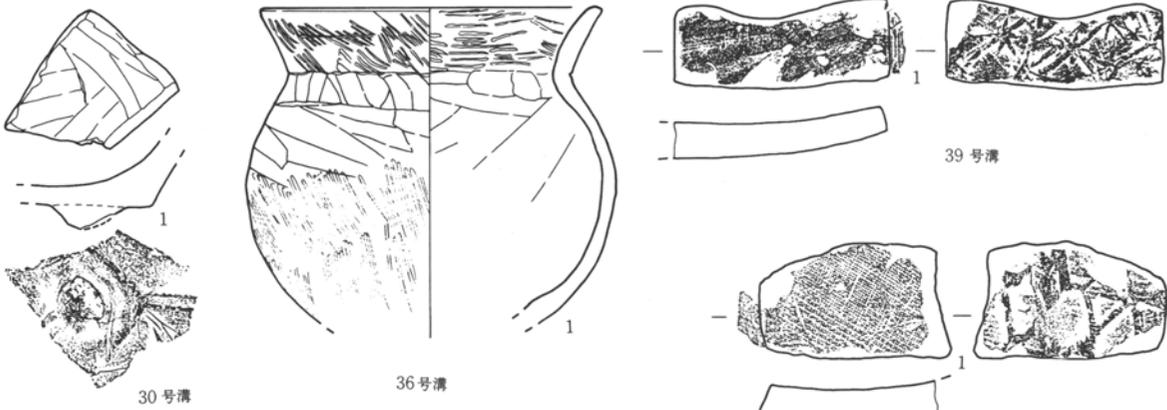
第268図 27号溝出土遺物(2)



第269図 27号溝出土遺物(3)



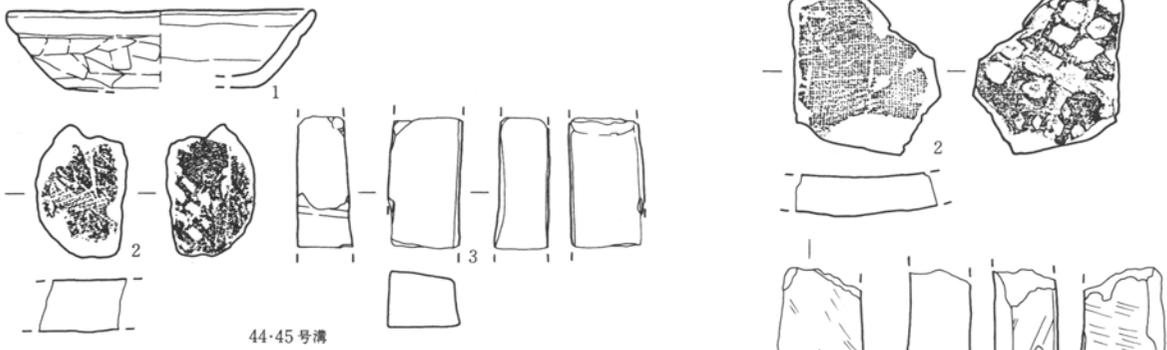
27号溝



30号溝

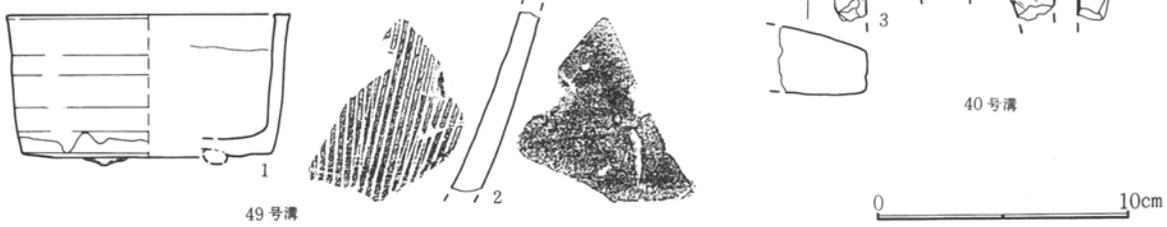
36号溝

39号溝



44-45号溝

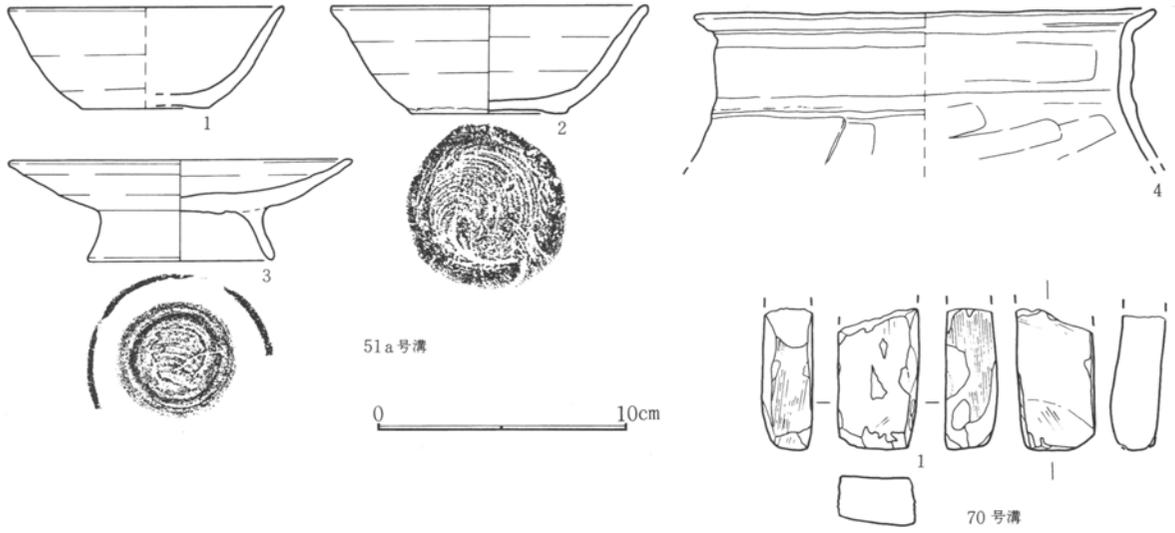
40号溝



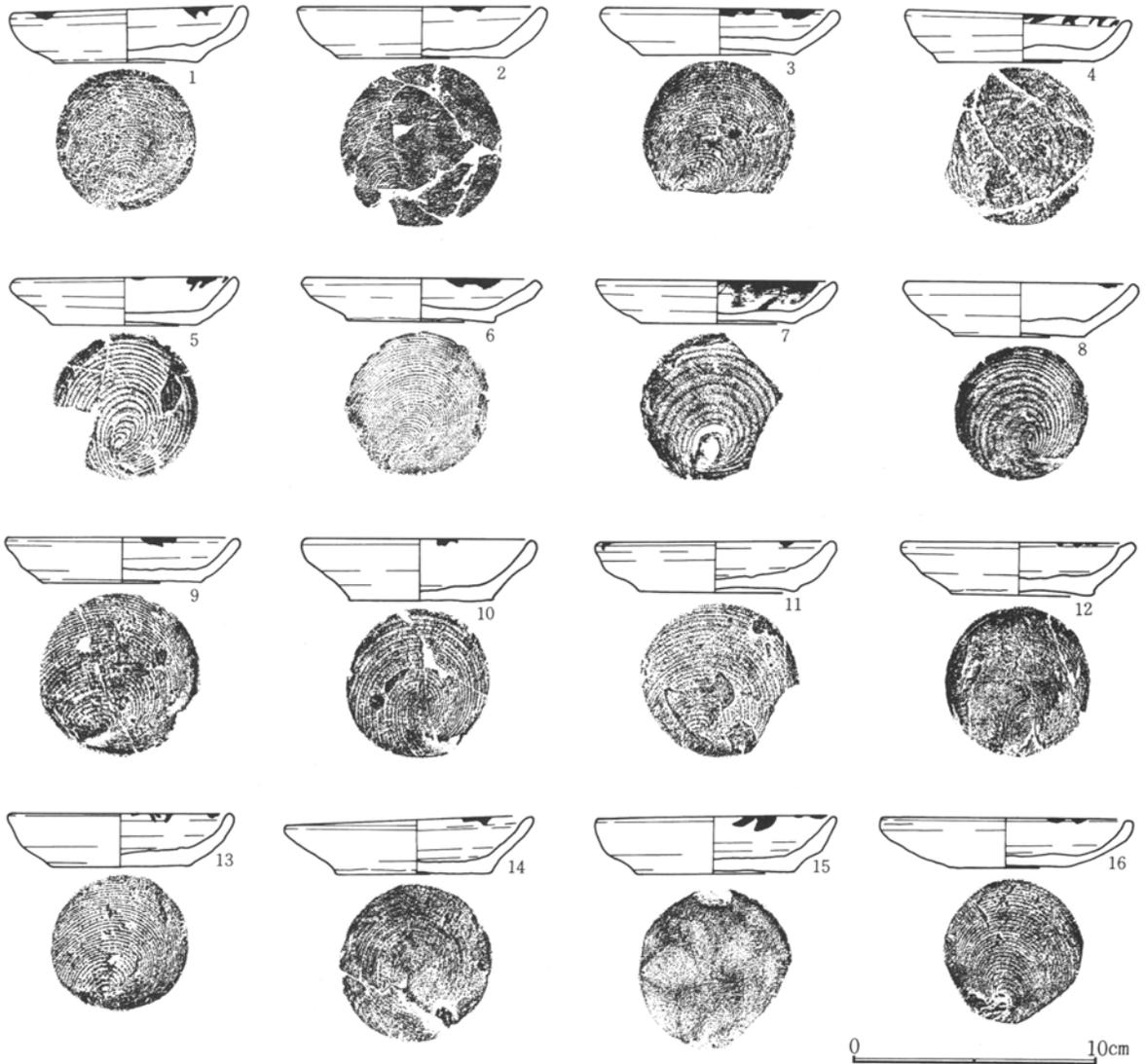
49号溝

0 10cm

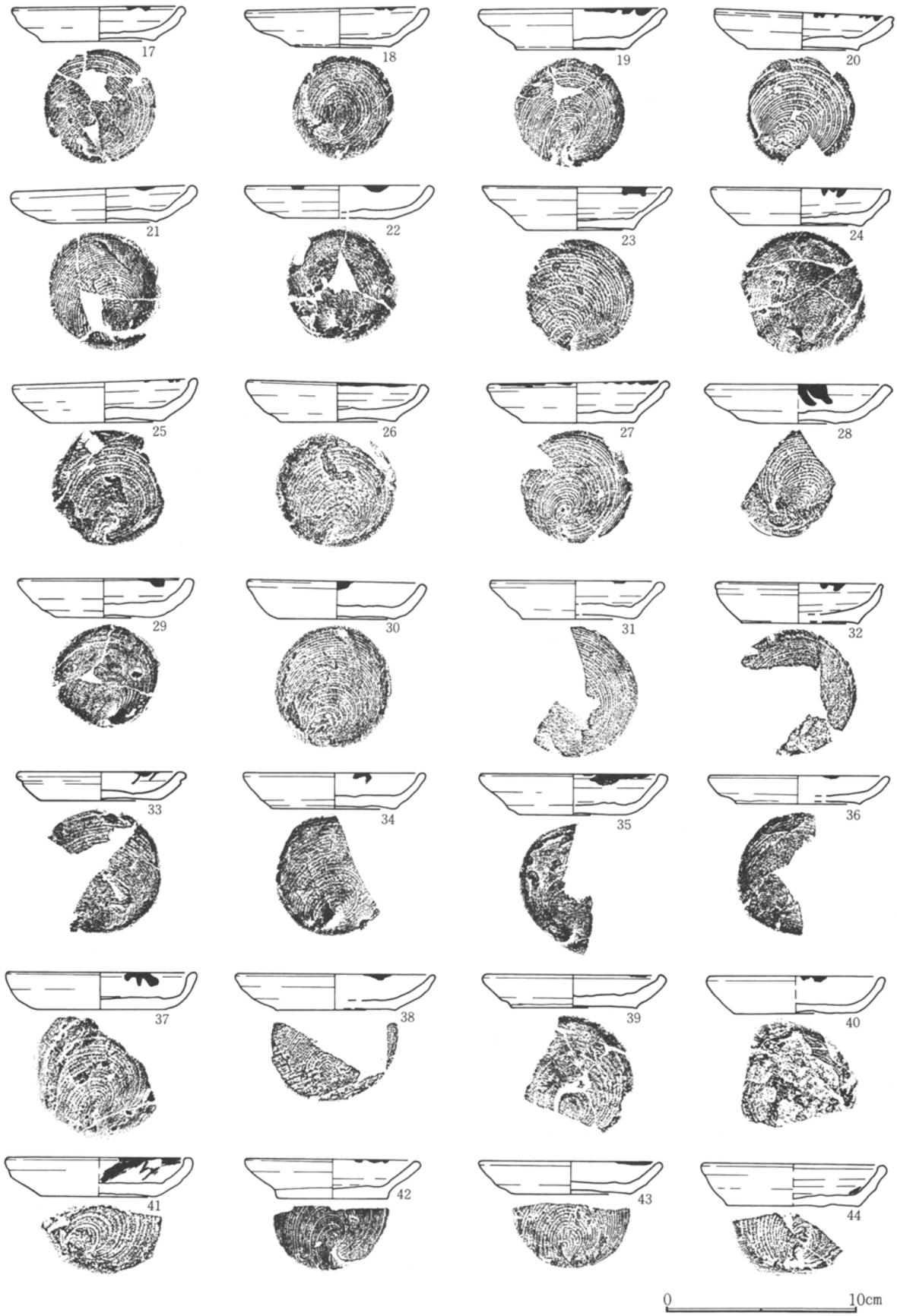
第270図 27号溝出土遺物(4) (30・36・39・40・44・45・49号)



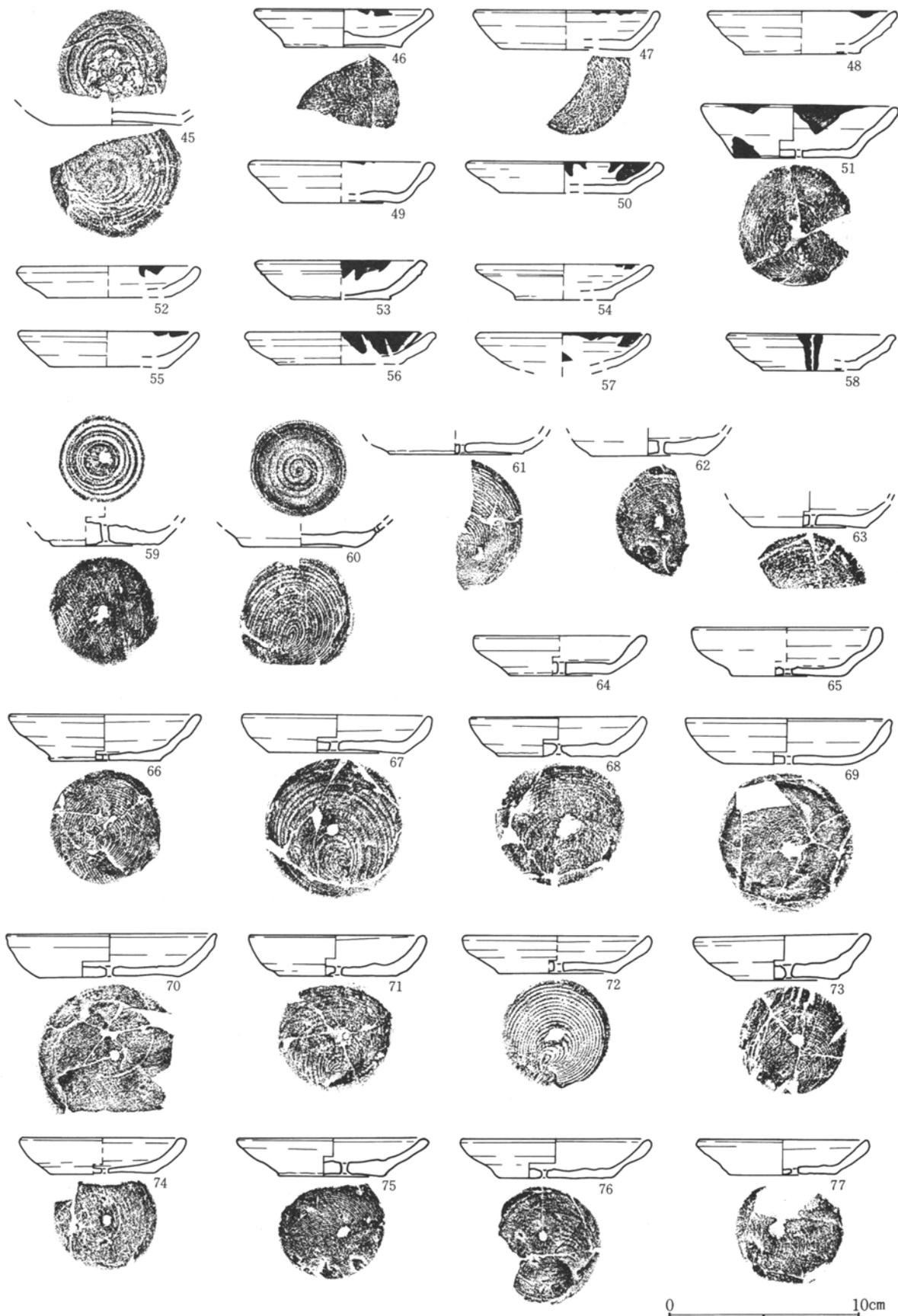
第271図 溝出土遺物 (51 a・70号)



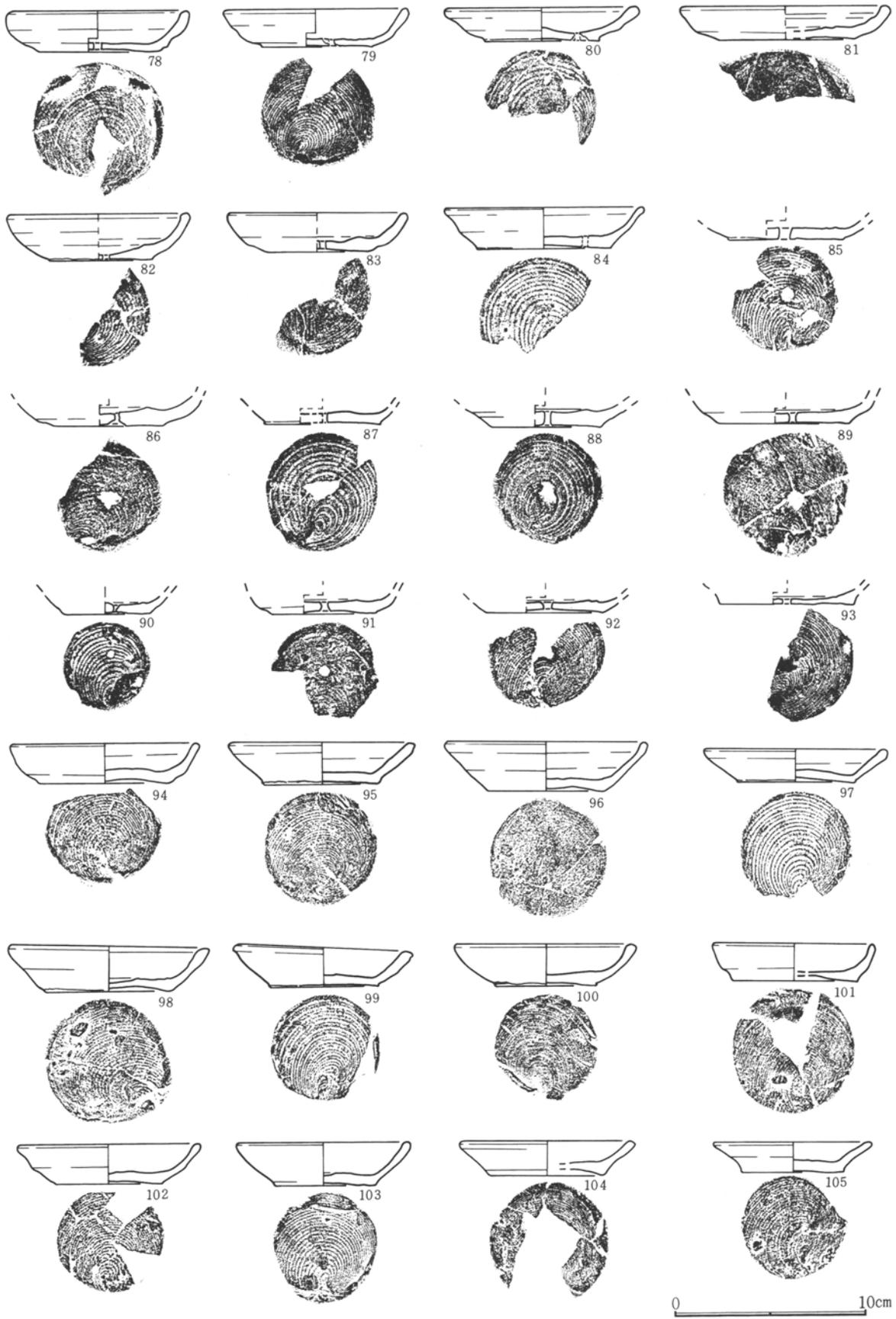
第272図 38号溝出土遺物(1)



第273図 38号溝出土遺物(2)

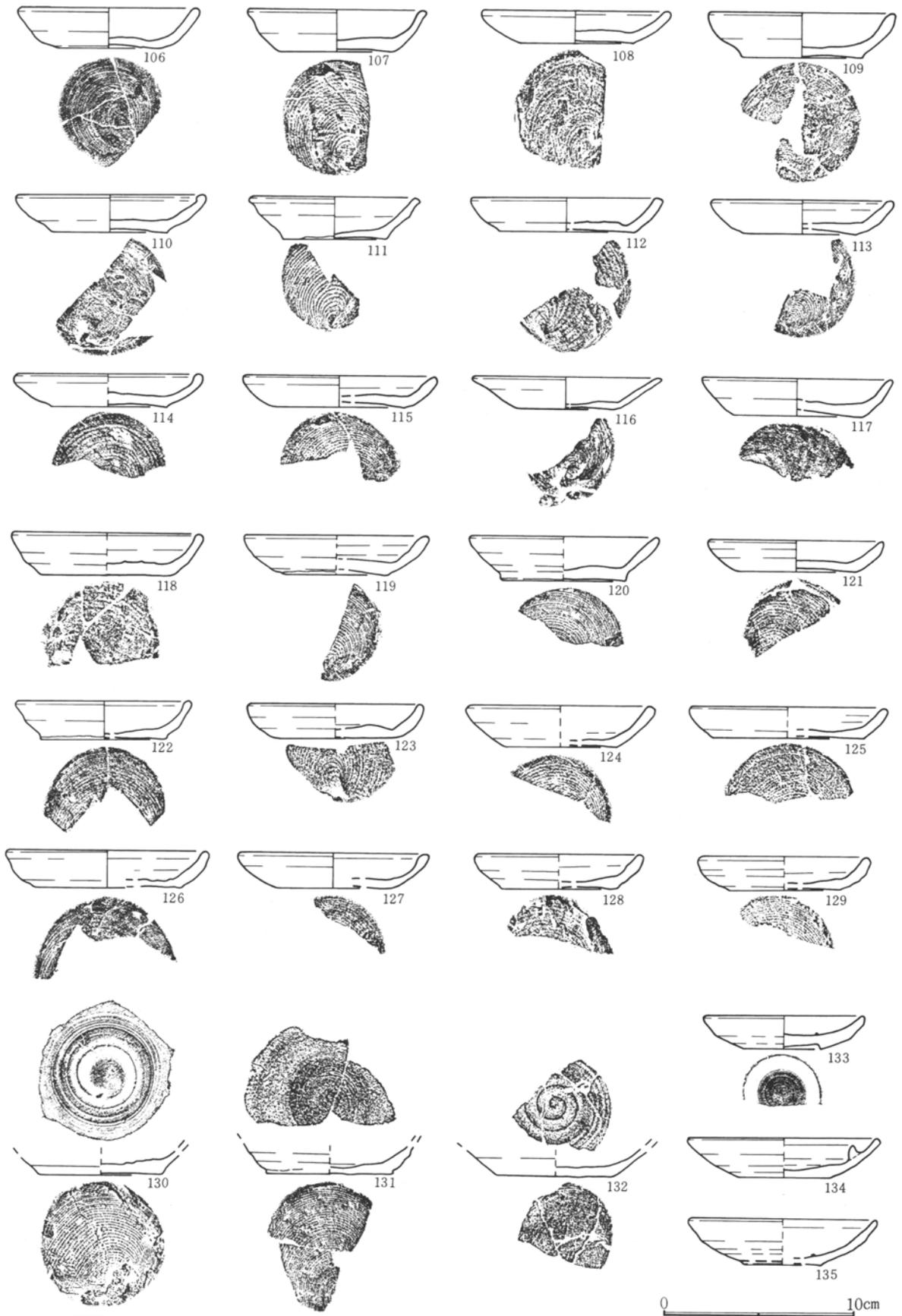


第274図 38号溝出土遺物(3)

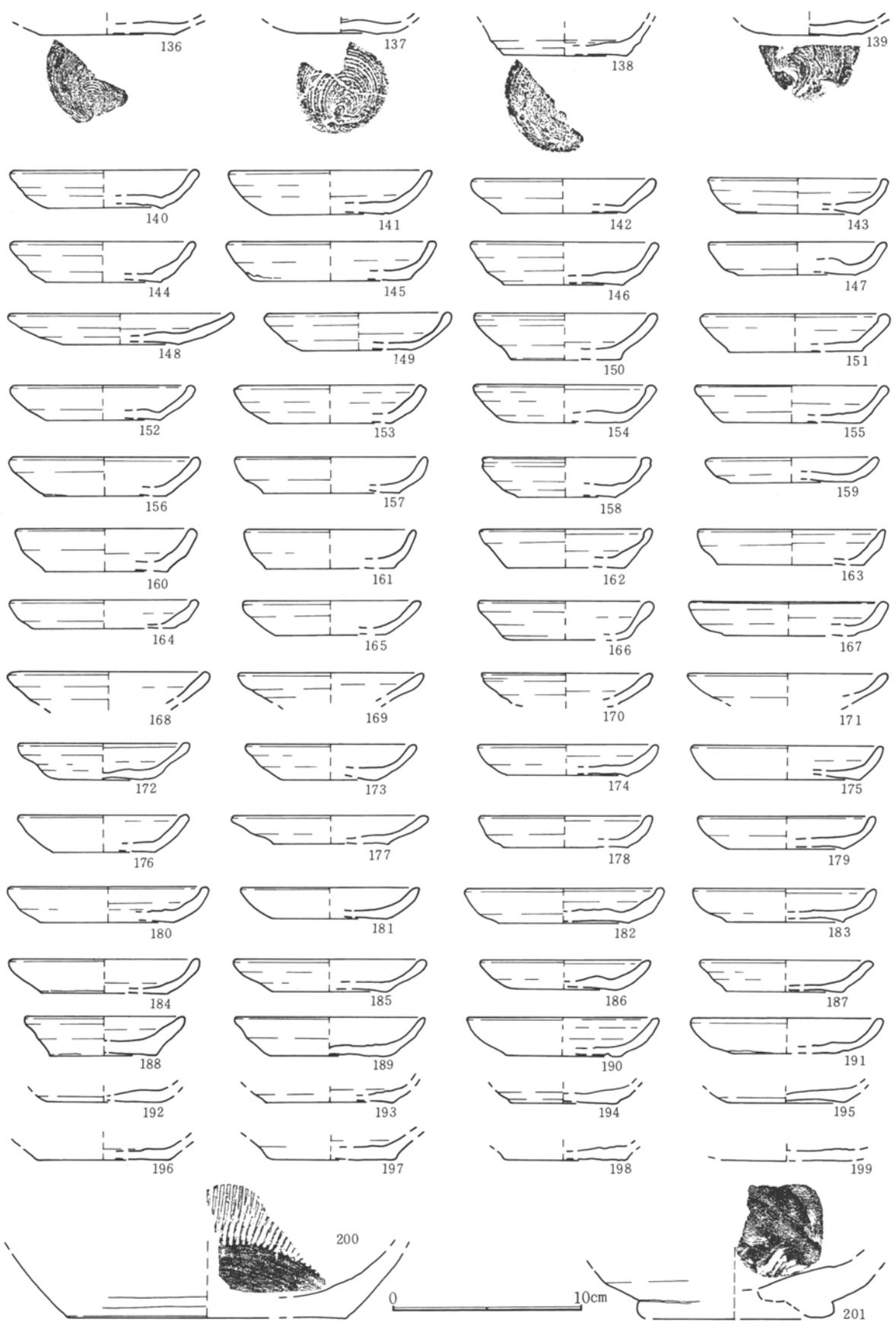


第275図 38号溝出土遺物(4)

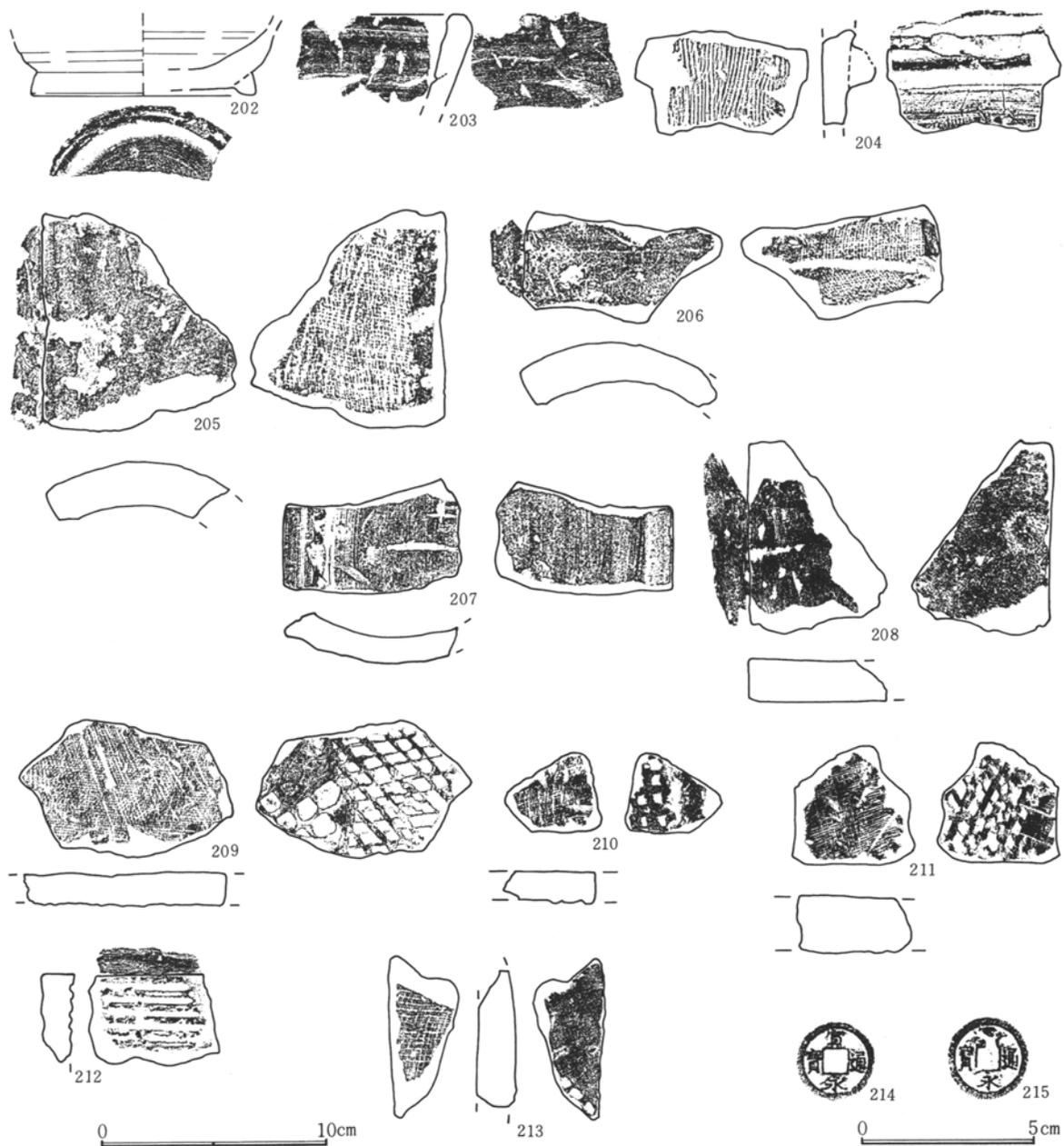
第3章 検出された遺構と遺物



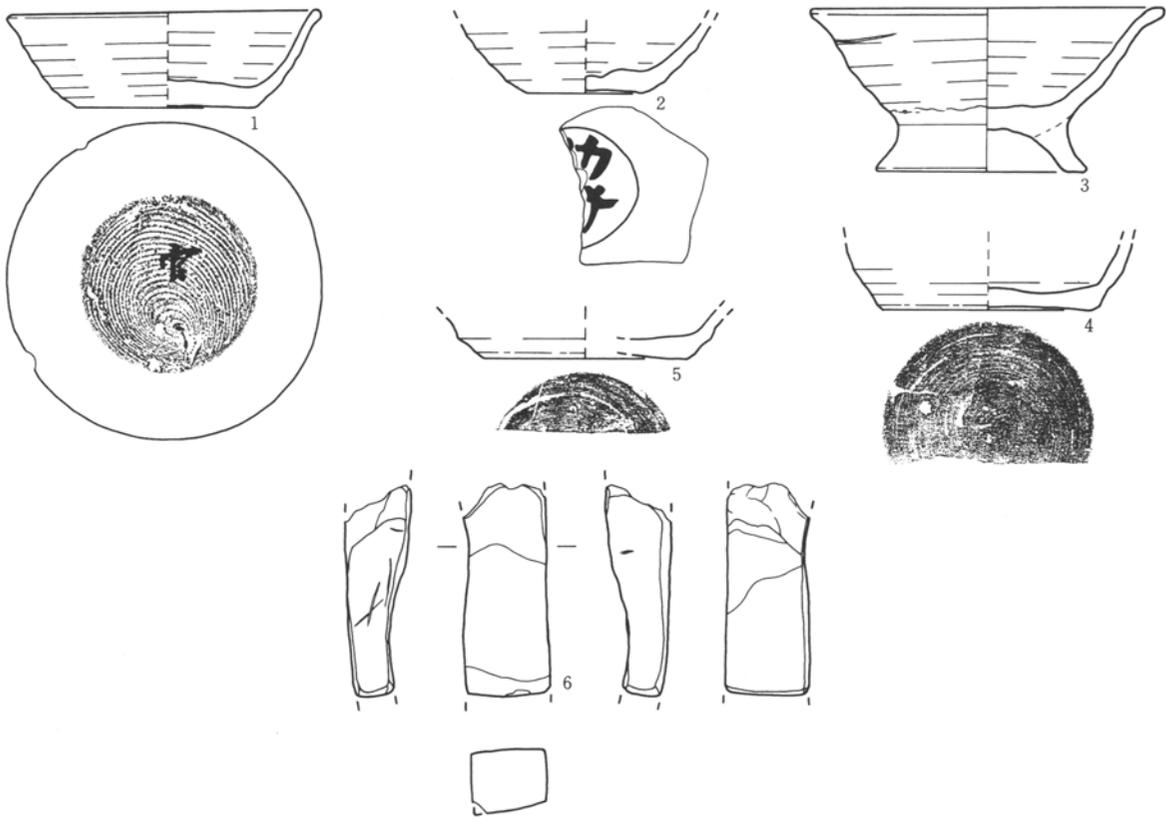
第276図 38号溝出土遺物(5)



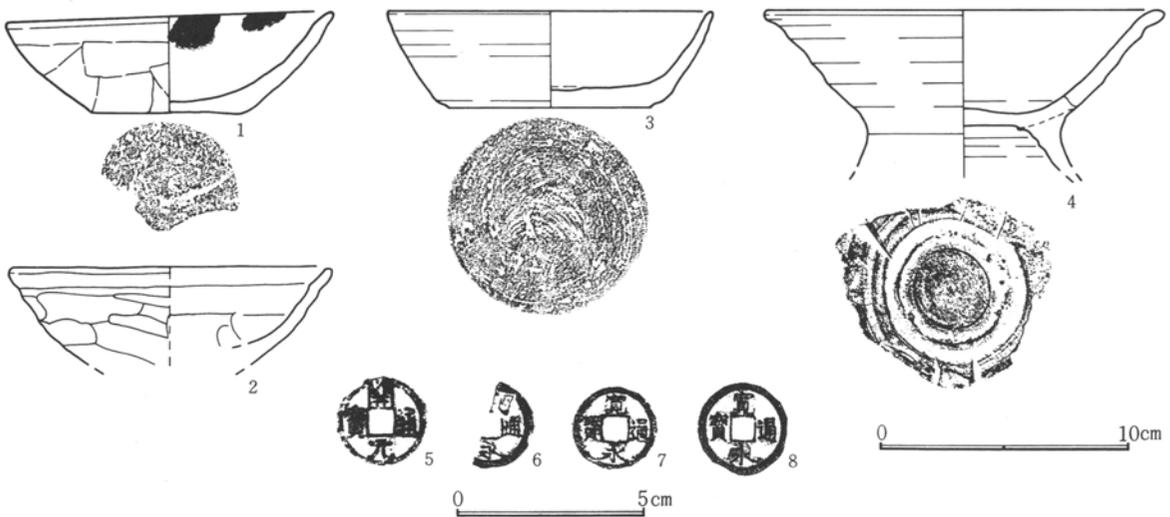
第277図 38号溝出土遺物(6)



第278図 38号溝出土遺物(7)



第279図 谷地出土遺物



第280図 その他の遺物

第3章 検出された遺構と遺物

溝出土遺物観察表(1)

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	土師器	壺	1号溝	10.0×—×—	明黄褐	良好	やや密	口縁下位 肩刷毛目 内面横位磨	小片	古墳前期
2	土師器	壺	〃		橙	良好	やや密	有段口縁 内外面刷毛目調整	小片	古墳前期
3	土師器	杯	〃	15.0×—×4.5	浅黄	良好	密	外体部篋削り 内面篋磨き	小片	古墳後期
4	土師器	甕	〃	—×8.0×	鈍黄橙	良好	やや粗	外面粗い篋磨き 内面篋撫で	底 $\frac{1}{2}$	古墳前期
5	女	瓦	〃	厚1.7	灰色	良好	粗砂粒	表布目 裏斜格子叩き	小片	平安
6	軟質	火鉢	〃		灰	良好	やや密	表裏面黒色 多条格子	小片	近世

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	磁器	盃	4号溝埋土	7.0×2.8×2.9				染付け 体部横位細段	$\frac{1}{2}$	近世
2	磁器	小杯	〃	—×3.3×—				見込部花卉染付	底部	近世
3	磁器	小椀	〃	7.4×—×—				染付	体部	近世
4	陶器	小皿	〃	—×8.0×—				削り出しベタ高台	底少	近世
5	陶器	小皿	〃	—×8.0×—				菊花文皿 灰釉	底少	近世
6	陶器	小鉢?	〃	—×6.0×—				白色刷毛塗りに透明釉 内面無釉	底少	近世
7	砥	石	〃	長5.2×幅2.6×厚2.1				仕上砥 4面使用	片	砥沢石

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	須恵器	椀	5号溝埋土	—×7.2×—	灰黄	やや斬	やや粗	回転糸切り付高台	底部	平安
2		石	〃	12.4×10.4×7.0				2面磨痕 粗粒輝石安山岩		

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	陶器	皿	6号溝埋土	—×6.6×—	浅黄			底部削り出し 灰釉施釉	底部	

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	陶器	皿	11号溝埋土	10.6×4.0×2.2	灰白			灯明皿		近世

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	土師器	小壺	12号溝埋土	—×5.0×—	鈍黄橙	良好	密	外面篋磨き	口欠	古墳前期
2	須恵器	椀	〃	—×9.6×—	灰白	やや軟	やや粗	回転糸切り付高台	下半	平安

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	須恵器	杯	22号溝埋土	13.2×7.4×3.8	鈍橙	酸化	やや粗	回転糸切り 右回転	$\frac{1}{2}$	平安
2	女	瓦	〃	厚1.8	鈍橙	酸化	粗	表布目 裏斜格子叩き	小片	平安

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	女	瓦	26号溝埋土	厚1.4				表布目 裏斜格子叩き	小片	平安
2	砥	石	〃	12.3×10.3×20.2				片面使用 緑色片岩		

No.	器種	器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	土師器	甕	27号溝埋土	22.0×8.0×17.5	淡黄	良好	やや密	外面縦位篋削り 内面縦位篋磨き	$\frac{1}{3}$	古墳後期
2	須恵器	杯	〃	—×7.0×—	鈍橙	やや軟	やや密	回転糸切り	底 $\frac{1}{2}$	平安
3	須恵器	椀	〃	—×8.0×—	暗灰	良好	粗	付高台 回転糸切り	底部	平安
4	灰釉陶器	椀	〃	—×8.4×—	灰白色	良好	密	三ヶ月高台	底 $\frac{1}{2}$	平安
5	須恵器	甕	〃		灰	良好	やや粗	口縁2条凹線 下位に波状文	小片	古墳後期
6	須恵器	瓶	〃	—×7.0×—	灰	良好	密	高台欠損 回転糸切り	底 $\frac{1}{2}$	平安
7	須恵器	瓶	〃	—×9.2×—	灰	良好	やや粗	腰部手持ち篋削り 無高台	底 $\frac{1}{2}$	平安
8	瓦塔 or 瓦堂		〃		灰	良好	密	男瓦半截竹管状工具で表現	小片	平安
9	男	瓦	〃	厚1.4	灰白	やや軟	やや密	裏布目	小片	平安
10	男	瓦	〃	厚1.6	灰白	やや軟	やや粗	裏布目	小片	平安
11	男	瓦	〃	厚2.2	灰	良好	やや粗	裏布目	小片	平安
12	女	瓦	〃	厚1.7	暗灰	良好	粗	表布目 裏斜格子叩き	小片	平安
13	女	瓦	〃	厚1.6	淡灰	やや軟	やや粗	表布目 裏斜格子目叩き	小片	平安
14	女	瓦	〃	厚1.4	淡橙	やや軟	やや粗	表布目 裏塊格子目叩き	小片	平安
15	女	瓦	〃	厚1.2	淡黄橙	やや軟	やや粗	表布目 裏斜格子目叩き	小片	平安
16	女	瓦?	〃	厚0.9	淡黄橙	やや軟	やや密	表布目 裏斜格子目叩き	小片	平安
17	女	瓦	〃	厚1.3	灰	やや軟	やや密	表布目 裏格子目叩き	小片	平安
18	男	瓦	〃	厚1.7	灰白	やや軟	やや密	裏布目	小片	平安
19	土器	小杯	〃	—×5.1×—	明橙	良好	やや密	右回転糸切り 見込部横位方撫で	底部	中世?
20	土器	小杯	〃	—×5.5×—	橙	やや軟	細土	右回転糸切り	底	中世?
21	施釉陶器	皿	〃	—×8.0×—	淡黄	良好	やや粗	白色釉輪禿 見込部菊花刻	底 $\frac{1}{2}$	近世?

第7節 溝

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
22	須恵質摺鉢	27号溝埋土	30.0×13.0×12.5	暗灰	堅緻	やや密	摺目無し 中位まで摺痕著しい	1/2	中世
23	軟質摺鉢	〃	30.0×12.0×11.6	灰黄	軟	やや密	摺目無し 中位まで摺痕著しい	1/2	中世
24	軟質摺鉢	〃		鈍橙	軟	やや密		口小	中世
25	軟質鉢	〃		鈍褐	軟	やや密	片口	小片	中世
26	軟質摺鉢	〃		橙	軟	やや密		口小	中世
27	軟質摺鉢	〃		灰	良好	やや密	摺目無し 摺痕著しい 回転糸切	底小	中世
28	軟質内耳鍋	〃		灰褐	やや軟	密	ホウロクか	底小	近世
29	常滑甕	〃		灰褐	堅緻	やや密	外面平行叩き	小片	中世
30	常滑甕	〃	厚1.4	褐	堅緻	やや密	外面平行叩き	小片	中世
31	鉄器	〃	長6.0 径0.7				釘状	小片	
32	鉄器	〃	長4.5 幅1.0~2.0				鉄鎌基部	小片	
33	砥石	〃	8.9×4.9×2.8				仕上砥 刃痕あり 四面使用	片	砥沢石
34	砥石	〃	9.4×3.4×2.3				仕上砥 四面・端面使用	片	砥沢石
35	砥石	〃	9.0×3.2×2.0				仕上砥 四面使用 被熱痕あり	片	砥沢石
36	砥石	〃	5.6×3.4×2.9				仕上砥 刃痕あり 四面使用	片	砥沢石
37	砥石	〃	5.4×3.5×2.8				仕上砥 四面使用	片	砥石
38	砥石	〃	6.2×1.5×1.5				仕上砥 小型品 四面使用	片	砥沢石
39	砥石	〃	3.2×2.2×1.9				仕上砥 刃痕あり 四面使用	片	砥沢石

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	軟質手焙り	30号溝		白灰	やや軟	やや密	角型 三足か	片	

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	土師器甕	36号溝	13.6×—×—	鈍淡橙	良好	砂粒多	単口縁刷毛目 内外面篋削り磨き	1/4	古墳前期

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	女瓦	39号溝	厚1.3	灰白	良好	やや密	表撫で 裏米印叩き	小片	平安

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	女瓦	40号溝	厚1.5	灰	型緻	砂粒多	表布目 裏斜格子目叩き	小片	平安
2	女瓦	〃	厚1.5	淡橙	良好	密	表布目 裏小格子目叩き	小片	平安
3	砥石	〃	6.1×3.5×2.5				仕上砥 刃痕あり 四面使用	片	砥沢石

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	土師器杯	44・45号溝	12.4×7.6×3.0	赤橙	良好	細土	平底 底・体部篋削	1/4	平安
2	瓦	〃	径5.0 厚2.0	灰	良好	やや粗	円板状に加工	1/2	
3	砥石	〃	4.7×2.0×2.5				中砥か 四面使用		砂岩

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	施釉陶器	49号溝	11.2×10.0×5.5	灰	良好	密	香炉 外面灰釉 三足	小片	近世
2	陶器摺鉢	〃		赤橙	良好	やや密	多条摺目	小片	近世

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	須恵器杯	51a号溝	11.0×5.0×4.0	浅黄橙	酸化	砂粒多	右回転糸切り	1/2	平安
2	須恵器杯	〃	12.6×6.0×3.7	灰白	やや軟	細砂粒	右回転糸切り	1/4	平安
3	須恵器皿	〃	13.8×7.4×4.0	灰白	やや軟	砂粒多	足高高台 回転糸切り	1/2	平安
4	土師器甕	〃	18.6×—×—	鈍淡橙	良好	やや密	コの字口縁 肩横位篋削り	小片	平安

No.	器種 器形	出土位置	口径×底径×高さ	色調	焼成	胎土	技法・特徴	残存	備考
1	砥石	70号溝	5.6×3.1×1.9				仕上砥 四面使用 被熱	片	砥沢石

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
1	カワラケ	9.7	5.8	2.2	油煙	9	カワラケ	9.6	6.4	1.8	油煙
2	〃	10.2	6.8	2.0	〃	10	〃	9.7	5.7	2.5	〃
3	〃	9.8	6.2	1.9	〃	11	〃	9.9	6.4	2.0	〃
4	〃	9.3	6.6	2.1	〃	12	〃	9.6	5.8	2.1	〃
5	〃	9.4	5.9	1.9	〃	13	〃	9.2	5.6	2.2	〃
6	〃	9.8	6.0	1.7	〃	14	〃	10.0	6.1	2.3	〃
7	〃	9.8	6.2	1.7	〃	15	〃	10.0	6.4	2.3	〃
8	〃	9.6	5.5	2.1	〃	16	〃	10.3	5.0	2.0	〃

第3章 検出された遺構と遺物

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
17	カラワケ	9.0	6.0	1.8	油煙	78	カラワケ	9.6	6.4	2.1	前穿孔
18	〃	9.6	5.1	2.0	〃	79	〃	9.8	5.8	1.9	後穿孔
19	〃	10.0	5.9	2.1	〃	80	〃	10.4	6.0	1.8	〃
20	〃	9.2	5.8	1.9	〃	81	〃	11.0	7.0	1.7	〃
21	〃	9.8	5.7	1.9	〃	82	〃	9.6	5.2	2.3	前穿孔
22	〃	10.0	6.0	1.7	〃	83	〃	9.4	5.7	2.0	後穿孔
23	〃	10.0	5.8	2.2	〃	84	〃	10.4	7.0	2.1	〃
24	〃	9.4	6.4	2.0	〃	85	〃	—	6.0	0.6	前穿孔
25	〃	9.6	6.0	2.0	〃	86	〃	—	5.6	1.2	後穿孔
26	〃	9.5	6.0	2.2	〃	87	〃	—	6.0	—	〃
27	〃	9.6	6.0	2.0	〃	88	〃	—	5.8	0.8	前穿孔
28	〃	9.7	6.6	2.0	〃	89	〃	—	7.0	—	後穿孔
29	〃	9.3	5.2	2.0	〃	90	〃	—	4.5	0.9	前穿孔
30	〃	9.5	6.0	2.0	〃	91	〃	—	5.4	1.0	〃
31	〃	9.2	6.0	2.0	〃	92	〃	—	6.0	0.8	〃
32	〃	8.8	6.0	2.1	〃	94	〃	9.8	6.8	2.0	〃
33	〃	9.0	6.2	1.6	〃	95	〃	9.8	6.0	2.2	〃
34	〃	9.6	6.4	1.9	〃	96	〃	10.5	6.0	2.5	〃
35	〃	9.9	5.8	2.0	〃	97	〃	9.6	—	1.6	〃
36	〃	10.6	7.6	1.4	〃	98	〃	10.4	6.2	2.2	〃
37	〃	10.0	6.5	2.0	〃	99	〃	9.3	5.3	2.2	〃
38	〃	10.5	6.4	1.9	〃	100	〃	9.6	5.4	2.2	〃
39	〃	9.6	6.6	1.7	〃	101	〃	8.4	6.6	1.9	〃
40	〃	9.3	6.2	1.9	〃	102	〃	9.6	5.6	2.1	〃
41	〃	9.8	6.0	2.0	〃	103	〃	9.2	5.4	2.2	〃
42	〃	9.2	5.9	2.0	〃	104	〃	9.2	6.0	1.7	〃
43	〃	9.6	6.0	1.7	〃	105	〃	8.2	5.2	1.6	〃
44	〃	9.6	6.7	2.1	〃	106	〃	9.6	5.2	2.1	〃
45	〃	—	6.6	—	〃	107	〃	9.4	6.0	2.2	〃
46	〃	9.4	6.0	1.9	〃	108	〃	10.0	6.0	1.6	〃
47	〃	9.7	6.5	2.0	〃	109	〃	9.9	6.3	2.3	〃
48	〃	10.0	6.0	2.1	〃	110	〃	10.0	6.0	1.9	〃
49	〃	9.8	6.0	2.2	〃	111	〃	9.0	5.8	2.2	〃
50	〃	10.4	6.8	1.7	〃	112	〃	10.2	7.0	1.7	〃
51	〃	10.2	6.2	2.7	〃・後穿孔	113	〃	9.6	6.0	1.7	〃
52	〃	9.6	6.6	1.6	〃	114	〃	10.0	6.0	1.7	〃
53	〃	9.0	5.0	2.0	〃	115	〃	10.2	6.6	1.6	〃
54	〃	9.8	7.0	1.8	〃	116	〃	10.2	5.0	1.6	〃
55	〃	9.6	6.0	1.8	〃	117	〃	10.0	6.6	1.9	〃
56	〃	9.8	6.2	1.6	〃	118	〃	10.0	6.6	2.2	〃
57	〃	9.1	—	1.8	〃	119	〃	9.8	5.4	2.0	〃
58	〃	8.8	5.0	1.9	〃	120	〃	10.0	6.6	2.3	〃
59	〃	—	5.6	0.8	前穿孔	121	〃	9.6	6.8	1.6	〃
60	〃	—	6.2	1.0	〃	122	〃	9.3	—	1.6	〃
61	〃	—	7.0	—	〃	123	〃	9.2	6.4	1.8	〃
62	〃	—	6.0	1.1	〃	124	〃	9.9	6.0	2.1	〃
63	〃	—	6.1	—	〃	125	〃	10.3	8.0	1.6	〃
64	〃	9.0	4.8	2.0	〃	126	〃	10.6	7.6	1.9	〃
65	〃	10.0	6.0	2.6	〃	127	〃	10.0	—	1.7	〃
66	〃	10.1	5.9	2.4	後穿孔	128	〃	8.9	6.1	1.8	〃
67	〃	10.0	7.0	1.9	〃	129	〃	9.0	5.8	1.7	〃
68	〃	9.2	6.2	2.0	〃	130	〃	—	6.4	1.2	〃
69	〃	10.6	6.4	2.3	前穿孔	131	〃	—	6.6	1.5	〃
70	〃	11.0	7.5	2.2	後穿孔	132	〃	—	6.0	1.4	〃
71	〃	9.3	6.0	2.1	〃	133	〃	8.4	3.9	1.8	〃
72	〃	9.9	6.0	1.9	〃	134	〃	9.8	4.0	2.4	〃
73	〃	9.3	5.6	2.4	〃	135	〃	10.0	4.6	2.1	〃
74	〃	8.8	5.2	1.9	前穿孔	136	〃	—	7.0	0.7	〃
75	〃	10.0	5.4	1.9	〃	137	〃	—	4.6	0.4	〃
76	〃	10.0	6.0	2.0	〃	138	〃	—	6.4	1.5	〃
77	〃	9.0	5.5	1.8	後穿孔	139	〃	—	5.6	0.8	〃

## 第7節 溝

番号	器種	口径	底径	器高	備考	番号	器種	口径	底径	器高	備考
140	カワラケ	10.0	6.0	2.0	前穿孔	177	カワラケ	10.4	6.0	1.5	前穿孔
141	〃	10.6	6.1	2.3	〃	178	〃	9.2	6.4	1.6	〃
142	〃	9.7	6.5	1.8	〃	179	〃	9.4	6.0	1.7	〃
143	〃	9.4	6.3	1.8	〃	180	〃	10.6	7.0	1.7	〃
144	〃	9.7	6.0	2.1	〃	181	〃	9.4	6.0	1.6	〃
145	〃	11.0	8.4	2.0	〃	182	〃	10.6	7.0	1.7	〃
146	〃	9.8	6.2	2.2	〃	183	〃	9.4	6.0	1.7	〃
147	〃	9.2	6.0	1.7	〃	184	〃	10.0	6.6	1.8	〃
148	〃	11.8	6.0	1.6	〃	185	〃	10.2	6.0	1.7	〃
149	〃	9.8	5.9	1.9	〃	186	〃	9.0	5.0	1.6	〃
150	〃	9.6	5.8	2.4	〃	187	〃	9.0	6.0	1.7	〃
151	〃	9.8	7.0	2.0	〃	188	〃	8.4	5.6	2.0	〃
152	〃	9.8	6.0	1.8	〃	189	〃	10.0	6.0	2.0	〃
153	〃	10.1	—	2.0	〃	190	〃	10.0	6.0	2.0	〃
154	〃	9.6	6.4	1.9	〃	191	〃	10.0	5.6	1.8	〃
155	〃	10.0	7.3	1.9	〃	192	〃	—	6.0	0.8	〃
156	〃	10.0	6.4	2.0	〃	193	〃	—	6.6	0.9	〃
157	〃	11.0	8.0	1.9	〃	194	〃	—	5.6	0.9	〃
158	〃	8.8	5.2	2.1	〃	195	〃	—	6.0	0.9	〃
159	〃	9.0	6.0	1.3	〃	196	〃	—	7.0	0.9	〃
160	〃	9.5	6.4	2.2	〃	197	〃	—	6.5	1.5	〃
161	〃	9.0	6.8	2.0	〃	198	〃	—	6.4	0.8	〃
162	〃	9.0	6.2	2.0	〃	199	〃	—	6.8	0.7	〃
163	〃	9.8	7.6	1.8	〃	200	すり鉢		14.5	3.5	内面櫛目
164	〃	10.0	7.6	1.4	〃	201	埴輪	—	—	—	
165	〃	9.4	5.8	1.9	〃	202	軟質すり鉢	—	10.2	2.8	見込み櫛目
166	〃	9.1	6.0	2.0	〃	203	陶器鉢	—	9.8	2.9	
167	〃	10.2	6.7	1.8	〃	204	陶器内耳	—	—	4.0	
168	〃	10.6	—	1.5	〃	205	男瓦	厚さ 1.8			裏布目
169	〃	9.8	—	1.5	〃	206	女瓦	厚さ 1.2			
170	〃	9.0	—	1.6	〃	207	女瓦	厚さ 1.9			
171	〃	10.4	—	1.4	〃	208	男瓦	厚さ 2.0			裏布目
172	〃	9.0	6.0	1.7	〃	209	女瓦	厚さ 1.5			表布目裏斜格子
173	〃	9.4	5.0	1.7	〃	210	女瓦	厚さ 1.3			表布目
174	〃	9.4	6.6	1.7	〃	211	女瓦	厚さ 2.5			表布目
175	〃	10.0	7.6	1.7	〃	212	女瓦	—			?
176	〃	9.0	5.4	1.9	〃	213	女瓦	厚さ 1.7			表布目

## 第4章 成果と課題

本報告は舞台遺跡において検出された膨大な遺構・遺物のうち、主に奈良・平安時代から中・近世に属するものを対象にした。これらのなかで特に注目されたのは、平安時代前半期の操業と考えられる11基の須恵器窯跡群である。舞台遺跡は平野部に立地し、ここでの窯跡群の発見は、それまで大規模な古窯跡群は県内の山寄りの丘陵地帯ないしは山間地に営まれたという漠然とした既成概念を覆すことになった。このことは、律令前期までの須恵器生産体制や流通機構などの変化と画期としての予兆を感じずにはいられない。しかし、この感触はひとり舞台遺跡だけで得られるものではない。周辺には三和工業団地・光仙房・上植木光仙房など広大な面積に遺跡地があり、その広がりには当遺跡と連続する空間的としてとらえなければならない。特に光仙房遺跡では舞台遺跡窯跡群の継続形態、あるいは発展形態とも思われる12基の窯跡が検出され、両者の関連追及が大きな課題の一つになっている。また、生産体制側だけでなく供給先との関係も大きな問題である。上植木光仙房遺跡など既報告を含め、周辺の様相が明らかにされるをまってこれらの課題に近かざくしたい。ここでは、舞台遺跡窯跡群について若干触れて今後への予察とする。

### 1. 須恵器窯跡について

群馬県内の古代窯跡群はおおよそ11の地域に存在が知られ通常、河川や県域の地勢から東・西・北毛の三地域に分けられ語られることが多い。東毛では太田金山古窯跡群・笠懸古窯群が、西毛には藤岡古窯群・吉井古窯跡群・秋間古窯跡群、北毛は月夜野古窯跡群等が認知されている代表的な古窯である。従来から知られるこれら窯跡群はいずれも、丘陵・山間地に展開しているのが通例である。

本報告の舞台遺跡において検出された窯跡は12基（内1基は構築途中と考えられる）は、伊勢崎市東北部の大間々扇状地形の末端平野部の平坦地にある。このような地勢に立地する窯跡あるいは窯跡群は、皆無ではないにしろ極めて特異な事例として受け止められた。しかしこれに前後して、隣接する光仙房遺跡・三和工業団地遺跡においても同様な窯跡が検出されるに及んで総数26基の存在が明らかになり、伊勢崎三和古窯跡群とも称すべき様相を呈するに至っている。いずれも、開窯・操業の時期は9世紀の前半から下つても中頃に想定される。

律令政治体制の確立にともなう東国の須恵器生産はその支配構造のなかで成立し、生産の組織構造や流通先・供給範囲は律令的な供膳具を中心に、限定的で目的的なものとして考えられている。その後、国分寺建立の創建から完成・修復など国家規模の政治的な契機（具体的には瓦生産）を経ることによって窯跡群の内的拡大や新規開窯による生産量の増大は須恵器に対する新たな需要層を生み出して行ったと考えられる。群馬県における窯業生産の在り方もおおよそ同様な動向としてとらえられよう。須恵器需要の変化と拡大は、8世紀後半頃から顕在化する傾向にあり、集落遺跡における須恵器と土師器坏類の出土量比率の逆転現象に示されている。しかし、群馬県における窯跡そのものは、東国でも最大級の一つに数えられる古代窯業生産地とされながらもその実態には不明な部分が多い。個別窯跡や須恵器資料の研究は少なからずなされているが、県内窯跡群の成立・動向など総括的な論考は大江正行氏による「群馬県における古代窯跡群の背景」1984「群馬文化」199号・『群馬県史通史編2「第二章 第六節 二 窯業」1991』を越える見解は論ぜられてはいないのが現状であろう。この原因には無論、正規の調査事例の少なさがあり、そして東・西・北毛と一見恣意的区分とも思われる各地域の須恵器が実際に複雑な様相をとっている事にもある。

当窯跡群の性格については、県内諸窯跡群の実態や年代観を含む推移・変遷が不明な時点ではやや明快さを欠くものにならざるを得ない。しかしなお、古墳時代後期に導入された須恵器生産を第一に、律令体制への照応、国分寺建立にかかわる瓦陶窯の開窯と、その後の需要層拡大など幾つかの画期を経て来たことは大過ない事実であろう。ここでは、立地・操業体制・窯構造・窯跡群の推移など現時点で考えられる特性の抽出を試みて、舞台遺跡窯跡が古代上野国の窯業史上でいかなる位置付けが可能か、その一端を考え今後への足掛かりとしたい。

### 窯跡群の立地

当窯跡の立地の意義を語る場合には、地理的視点と地形的視点から見る必要があると思われる。そして、このことは窯形態・構造・構築方法・生産体制・供給先などの多岐にわたる問題に多少とも抵触する。結論から言えば、舞台遺跡窯跡群の出現は前代の律令的須恵器生産からの転換であり、須恵器生産体制構造の変革を示す画期と考える。無論この画期は須恵器生産体制自らが生み出したものではなく、むしろ律令政治の変質に伴う社会的な要求によって達成されたものである。

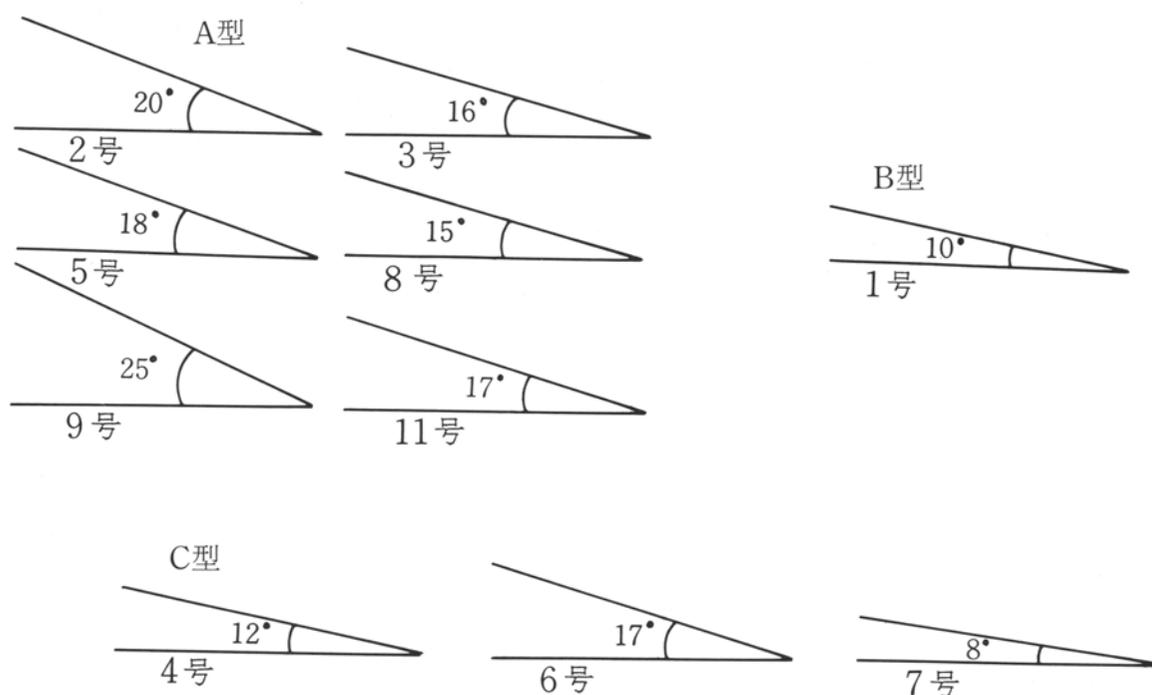
前述したように、窯跡群は扇状地末端の平坦地形の低台地にある。現象的に見れば、丘陵・山地を一般的占地にして来た継続的・伝統的な面の強い従来型窯業地からは異質である。遺跡周辺にはかつて窯跡の存在は知られず、どこまで、どの窯跡群（同系生産体制）の系譜をたどるかの問題はあるものの、その出現は突然で非伝統的であると考えられる。窯跡の立地に関しては、高温焼成を目指した窯構造・大量な燃料確保・須恵器原料土などの必要性からそれらの条件を満たす土地柄が選定されているであろうことは多くの窯跡群の在り方から容易に推測されるところである。しかし、古墳時代から平安期におよぶ須恵器の観察では品質の変化は著しく、窯構造・原料土などに地域差を考慮しても時代的な変遷が読み取れる。窯構造の変革と使用原料土質の選択幅に関係する現象であろう。ひとり、燃料については「陶山の争い」に至るような深刻な燃料不足から、伝統的・継続的な須恵器生産地の衰退原因と考えられている。ならば、平野部のただ中に突然現れた舞台遺跡の窯跡群は伝統的窯跡群衰退によって引き起こされた窯業地の分散・拡散の姿なのであろうか。しかし、8世紀後半から9世紀にかけては須恵器そのものに対する需要が膨張し、既存の窯跡群の生産動向は決して衰退の状況ではなく盛期の段階にある。舞台遺跡窯跡成立の背景には、須恵器への広範な社会的希求があったと考えられる。須恵器品質の変化は需要層の増大に答えるべく、原料土の選択緩和に即した焼成技術の革新を果しこれに対応したものと考えられる。遺物そのものの観察でも、古墳時代および律令期前半代の須恵器に比べて窯跡に放置された破損品とはいえその軟質化は著しく質的な面からは低下は免れない。製品の吸炭痕跡から重ね焼の方法を取っていたことは明白であるが、製品の熔着物を見いだすことは皆無に近い。これらのことは、一つに窯構造上の問題で高温発生に達しなかった。二つに乏しい燃料資源からくる低燃費焼成。そして原料粘土素材に合わせた低火熱焼成などが考えられる。製品の質はともあれ、なお11基の窯跡操業を継続した最も直接的な動機、ここに舞台遺跡窯跡群の存在する理由のひとつには当該地域の土地開発などの律令後半期の社会的動向に着目したい。

窯跡の構築にかかわる微視的地形の占地は、窯跡群の展開とともに変化しており舞台遺跡窯跡の特徴を際立たせている。窯跡は湧水によって形成された谷地の傾斜面を利用し、Loam層を掘り抜く地下式窯である。窯跡の重複関係から操業当初の姿は微地形で見れば、丘陵・山間地形の窯跡と何ら変わるところはない。しかし、1号窯に関しては谷地の縁辺部から約10mの距離を隔てたLoam平坦面にあり構造上および形態上で窯跡群中極めて特異な存在である。土地の改変による削平等を考慮しても往時の地形を大きく変更して

考える必要はないと思われる。しかし、異端的・突発的な出現にみえる1号窯は、出土遺物からみて他の窯跡とのさほどの時間差をもたず連続する操業期間の中におさまると考えられる。しかも、窯跡群としての形成過程では終焉に近く、改変されていく窯跡の構築方法と構造形態とが完成された姿としてとらえることができる。1号窯跡の出土遺物に限らないが遺物そのものの観察では、廃棄された不良品とはいえ、胎土の粗粒化や軟質化は著しい。高温度の発生を達し得ない窯構造上の問題。または、乏しい燃料資源即応した低燃費焼成技術。さらには、粗悪原料粘土を使用するための低火度焼成などが考えられる。窯跡構築方法・構造形態変化の原因をどこに求めるかは難しい問題である。窯跡構築の地形選択の労を解消するための技術的考案か、焼成効率や製品の品質比較の優劣は俄かには断じ難いが、須恵器をさらに希求する社会の大きなうねりは容易に推測される。須恵器製作集団・広範な社会需要の両者相乗が1号窯跡へと導いた可能性は高い。社会的な背景は周辺遺跡における消費地としての空間的・時間的な実相が明らかされなければならないが、本章ではそれに言及できる用意がない。少なくとも現時点では、本窯跡群を内包する舞台遺跡や近傍で視野にはいる三和工業団地I遺跡・上植木光仙房遺跡などに展開する平安時代集落跡が窯跡生産須恵器の年代よりやや遅れて成立する様相が窺われる。舞台遺跡窯跡群と指呼の間にある光仙房遺跡窯跡群との関連を明らかにすることはもとより、その成立契機や展開の解明には、より広範な地域を対象にした需給関係を探ることが必要であり、かつ大きな課題である。

#### 窯跡の構築と構造

舞台遺跡窯跡は前章で述べたように、地山掘り抜き地下式構造を基本にすると考えられる。その構築占地には、大別して3つの型が見られる。A型：傾斜面に構築。B型：平坦面に構築。両者の占地の違いは明瞭であるが、このほかに、C型：斜面・平坦面双方の要素をもって構築。そして、占地の型は各窯跡に構造や平面形態のうえで特徴を与えている。



第281図 窯跡焼成部床傾斜度

## 1. 須恵器窯跡について

A型は谷地縁辺の傾斜面を利用するいわば従来型の構築方法によるもので、稼働11基中で7基があり2・3・5・8・9・10・11号窯が該当する。弧状の窯尻部から緩く膨らみ気味の窯体で燃焼部がわずかに絞られる形状で前庭部が谷地部に向いハの字状に開放する。規模は底面最大幅はほぼ焼成部の中央にもち約1mである。全長は前庭部付近の削平により不明な窯が多く、全長の知れる9号窯の5.3mを最大に、前庭部を除いては4.0m前後の規模をもつ。床面の傾斜度は9号窯の25度が最も強く、他は16度～20度の範囲にある。

A型のうち9号窯は構造的に他とは異なっている。窯本体にあたる焼成部は傾斜面に構築されるが、燃焼部と前庭部は斜面下の平坦部にあり変換部はくの字状に強く折れる。前庭部の残存はよくないが、楕円形状に掘り窪めてある。後述するB型窯跡のように深い竪坑として存在したか否かは不明である。

B型は平坦面に構築される1号窯がある。竪坑を設けてその底面から地山Loamを掘り抜く地下式構造である。竪坑部分は前庭部に相当するが窯体平面形状は緩く膨らみのある長頭形で、焼成部・燃焼部などの区部は不明確である。全長は4.2mで焼成部については2.5m足らずの規模になっている。床面の傾斜度は10度と緩い。構造上の特徴としては、前庭部は竪坑のまま開放部がなく窯全体が閉塞状態にあり、狭小な作業空間となる。窯体外に灰原の形成がなされず前庭部にかさ上げされる。

C型としたものはすべてA型占地の窯跡に重複するもので、4・6・7号窯がある。A型ないしはC型窯跡廃棄後の窪み段差を前庭部として利用し窯体を掘り抜く方法である。規模は全長5m前後で、窯体平面形状ともA型の窯跡と類似する。前庭部は窯本体よりやや大きく膨らむみB型と同じ閉塞形をとるが、B型のように本来竪坑として掘られたものではなく、窯体を掘り抜いた土を後方に掻揚げた結果と考えられる。床面の傾斜度は8度～17度と緩・急の幅がある。灰原は前庭部外に多少排出されるがほとんどは前庭内にかさ上げされている。ただし、7号窯に関しては規模・平面形状とも特異な様相をとる。7号窯はC型6号窯の窯体右壁面を斜方向に掘り抜いて構築される。全長3.2mで窯跡群中最も小型で、平面形状は達磨形あるいは瓢箪形を呈する。前庭部は6号窯の左壁面を抉り大きく膨らむが、焼成部は僅か1m前後の長さである。床面の傾斜度は窯尻近くが28度の急傾斜となるが焼成部から燃焼部にかけては8度の緩い傾斜度である。

占地による窯跡のA・B・C型のうち、A型(3・10・11号)とC型(4・6・7号)の重複の事実によってA型からC型への構築の時間的前後関係は明らかである。また、構築方法や構造の理論的な観点からはC型からB型への移行もさほど違和感なくとらえられる。基本的にはA型窯跡にはじまりC型を経てB型へと変化したことが読み取れる。しかし、B型とした1号窯構築方法の創出によって、C型への応用がなされた可能性も高い。また、形状・構造が特徴的な7号・9号窯は築窯方法変遷過程の過渡的な産物とも受け取れる。

窯跡が存在するという既成の現象からは、構築にはそれほどの限定・制約的な地形とも考えられない。継続的・集約的に構築される窯跡群は幾つかの異なった形態・構造をもつ。開窯当初、伝統的な築窯地形に従った構築方法から占地選択からの解放とともに、より簡便な築窯方法の開発への動きとしてとらえ得るであろう。このような窯跡形態や構造の変化は須恵器生産体制に構造的変革をもたらし、あるいは須恵器生産体制の変化が遺構としての窯跡そのものに変革を促したかである。いずれにしても須恵器は献納品生産から、需要層にはより近くで、より多くの、より直接的な商品物資として供給されたことを可能にしたであろう。

### 窯跡群の形成過程

窯跡群としての形成過程は、重複関係によってある程度は追うことができる。また各窯跡の配置から数次に渡ったであろう作業単位のおおよその把握も可能と考える。各窯跡出土遺物の形態・計測値比など型的

#### 第4章 成果と課題

な検討を必要とするが、現時点では窯跡群の操業はかなり短期・集中型であると考えられる。

操業窯跡11基のうち重複関係にあるものは、総数6基で2群に分けられる。窯跡の位置からは灰原の遺存が良好であればかなり詳細な変遷を知ることができたと思われ、消失が惜しまれる。よって、新旧関係は直接に窯体が重なる事例に限られている。1つは3・4・10号窯が重複し、10号→3号→4号の順に新しくなる。他の重複する1群は6・7・11号窯で、11号→6号→7号の順に新しい。この単純とも見える重複によって少なくとも3次の操業が繰り返されたことがわかる。

操業で一回に稼働する窯跡の数が厳密な意味で1基か複数基か、また複数基の稼働ならば1単位は何基で構成されていたのか。さらには、複数1単位の窯跡それぞれの火入れの回数も問題になってくる。ここでは詳細な分析を行う用意も能力もないため、重複関係を加味して窯跡の主として平面的位置関係から操業体制の稼働単位を考えてみたい。

重複関係からは、10号・11号窯跡が比較的初期段階のものであることは明らかである。しかし、重複がなく構造・形態上同型と考えられる占地A型の窯跡は他に2・5・8号があり、いずれが窯跡群の成立初期に関係しているか俄かには決めがたい。このA型5基には位置間隔に極めて計画的な意図が読み取れ、2組の組み合わせを考えることができる。その1つは10号・11号窯の関係（I群）であり、他の組み合わせは2号と5号そして5号と8号窯の関係（II群）である。双方の組み合わせには各窯跡とも中心間に4mの間隔をもって築窯される共通点があり、それぞれの組み合わせで同時存在し、この単位群で操業が推移していった蓋然性は高いと思われる。極めて規格的である4mの間隔は10号・11号窯跡の形跡をたどって造られる4号・6号窯跡にも当然踏襲され、2基は1単位（III群）として認められよう。ここに、同時存在として3つの単位群が抽出されたが、残る窯跡（1・3・7・9号窯跡）については配置規範の存在は窺えない。これらは3単位群の操業手順の過程と窯跡群終焉との一場面を示すと考えられ、I・II・III群の変遷を考える中での位置付けを試みたい。

I群からIII群への変遷は重複によって明らかであり、問題はI群とII群との前後関係である。両群の新旧を示す直接の根拠は調査時においても見いだせていない。しかし、I・II群の間には3号窯が介在しており、間接的ではあるが何らかの手だてを与えてくれよう。3号窯は4・10号窯と重複関係にあり、4号窯の灰層が3号窯体上の一部にかかり、一方、10号窯の前庭部を切り込んで構築されている。このことは、I群からII群への変遷の過程に少なくとも別な操業段階が存在したことを示している。この3号窯の北側に接接するようにしてある2号窯はII群に属するが、谷地縁線の緩い変換部にあり同群の5・8号窯よりは窯体の軸線が僅か北へ振れる。3号窯はこの2号窯に近似した軸方向をもち平面形態・規模などが類似することから、II群3基（2・5・8号窯）で開始した操業途中（数回の火入れがある）に何らかの理由で操業を止めた2号窯から3号窯への築窯がおこなわれ、3号窯がII群に組み込まれたことが想定される。したがって、群単位での操業は、I群→II群→III群の順になると考えられる。

1・7・9号窯のうち7号窯はIII群6号窯との重複から、模式的には上述したI→II→III群の順に続くIV群の操業段階となる。しかし、1号・9号に関しては配置関係や形態・構造からは、どの操業段階に相当するは不明である。1号窯はその立地や構築方法などから、当窯跡群の最終段階にあたる蓋然性は高く、なお単体による操業も考えられる。また、9号窯は立地的にはI群に、構築方法ではIII群または1号窯にも通づる要素がある。III群から1号窯への過渡的な存在であろうか。1・7・9号窯跡の在り方からはこれらを1単位としてくり、I・II・III群に続くIV群としてとらえる根拠は乏しい。とくに7号窯に関しては、その形態や規模・構造・操業途中での放棄など、必ずしも1号窯跡に先行するとも思えない状況が見られる。

現在のところ、舞台遺跡窯跡群は極めて短期間にその形成がなされと考えられる。占地の型や構造・構築方法などあまり類例のない独自性と変遷に溢れ、外部からの工人参入や技術導入が図られたとは見なしがたく、当窯跡群の工人組織構成員による内なる技術考案によるものと推測する。1・7・9号窯跡はそのような試行錯誤によって生まれた窯跡の形態と考えられ、この彷徨こそが、古代後半期への須恵器生産技術や生産・供給体制への新たな変質を可能にしたと思われる。

## 2. 須恵器工人関連施設

舞台遺跡窯跡群にかかわる工人集団の組織構成や構造の在り方を関連施設の面から見てみたい。須恵器工人の関連施設には、居住施設・工房施設・原材料の粘土や製品の保管施設などが考えられ、各種複合的な施設で構成されていたと考えられる。舞台遺跡窯跡群での須恵器工人の関連施設としては、A<sub>3</sub>-63・A<sub>3</sub>-64・A<sub>3</sub>-67・A<sub>3</sub>-68・A<sub>3</sub>-69・A<sub>3</sub>-70号の6軒の堅穴住居跡が想定される。これらは窯跡群が構築される湧水谷地形で通称「角弥清水」の谷頭に位置する住居群である。窯跡群が存在するA3区は西半域の大半は谷地形、東半域はLoam台地になっているものの、遺跡地の他区に比べて遺構の存在が希薄である。6軒の住居群は、形状・規模・群としての配置・各戸の間隔・方向など極めて統一的な企画性をもって構成され、少なくとも視覚的な配置からは工人にかかわる施設として十分に説得的である。

住居群6軒の配置は、南北2軒の併置で東方向に3単位で縦列にした構成である。住居の形状は東西に長軸をもつ比較的整った長方形を呈し、揃って東壁に竈を付設する。各住居間隔は東西で最大4m、最短で3m。南北間では4.5～7.0mを有し、重複は無論のこと他の施設域を犯すような位置関係にはない。また、出土遺物からみてもほとんど時間的な差は見いだせず、同時に存在するものとして良いであろう。配置関係について強いて言及すれば、西端2軒の住居跡は東の4軒に対して長軸線を南へ若干平行移動した配置になる。これをもって、群を異にすると見えなくもないが、ここでは群としての成立・変遷に重大な時間差を認められない。住居跡の年代に関しては詳細な検討を経ていないが、おおよそ9世紀の前半を中心にし、窯跡群との齟齬はないと考えている。

各住居跡の内部施設や遺物には特種・特異なものを検出できていない。その点では一般的な居住空間としての要素が強く、むしろ工房跡的な性格は乏しい。唯一、A<sub>3</sub>-69号住居跡からは「ロクロピット」に類似する2段構造をもつ小穴が検出され、可能性は高いものの現時点では確証が得られない。この種の遺構や施設の検出には問題を認識した意識が必要とされることは言を待たないが遺構自体の遺存状態にもまた、それらの検出をままならないものになっていることも実態である。須恵器工人に関連する施設である可能性を前提としてではあるが、6軒の住居跡からは内部施設のみならず遺存する遺物も希少である。住居から退去する際の遺物遺棄あるいはその後の投棄の行為は皆無とは言えないまでも、その少なさは特徴的である。かなり徹底した施設の解体と器物の持ち出しが行われたかのようである。この現象からは、工人にとって移動を前提とした生活習慣があったことも思われる。

須恵器工人の施設に象徴的な「ロクロピット」をはじめ、原料粘土の痕跡や製作製品の欠如という実状では施設としての認定には躊躇をせざるを得ない。しかし、表層的な現象ではあるが住居跡群の窯跡群との近接した位置関係や、配置・形状などの画一性を積極的な、器物を残さない遺構の在り方を消極的な根拠としてなお、6軒の住居群を須恵器工人の関連施設である蓋然性は高いとしたい。

舞台遺跡の11基で構成される窯跡群の開窯からその形成に至る過程には、6軒を1単位とした集団が協業的な労働組織として機能していたと考える。また、製品製作の場面では各戸単位での作業が行われる家内完

結型（具体的には各戸に少なくとも一人の須恵器製作者がいる）の構造であったと思われる。はなはだ具体的な検証に欠ける推論に終始してしまっただが、古代後半期の在地的手工業生産体制の末端構造を探る端緒になればと思い敢えて記した。

蛇足ではあるが、A<sub>3</sub>-67号住居跡出土遺物数点の窯跡製品と思われる資料の他に、時期的にやや溯る完形須恵器坏が一点ある。口径12.7cmで底部調整には回転篋削りが施される。形状は体部が立ち気味で箱型に近い。内面の摩滅は著しく使用期間の長さを窺わせる遺物である。日常に使用する程度の須恵器など容易に入手可能と思われるが、当時の器物に対する意識に示唆的なものを感じとれる。

A<sub>3</sub>-63号住居跡に蛇紋岩製紡錘輪が出土する。自家消費的な布生産が行われていたことを示すものであろう。片面に陰刻で「小成」が刻書される。「小成」は人名を示すと考えられ、居住した須恵器工人の名前を表すものであろうか、興味深い。

### 3. 船形陶硯について

県内における陶硯は管見であるが1996年当時、その数80点・遺跡数38遺跡であった（「大屋敷遺跡IV」1996前橋市埋蔵文化財発掘調査団）。現在はおそらくそれに倍する資料数・遺跡数に上るのではないかと思われる。ここでは、平安時代前半期に操業したと考えられる舞台遺跡の5号窯跡（一部9号窯前庭部出土片と接合）出土の陶硯をもってその数・例に加えたい。

5号窯跡出土陶硯の特徴は船形と称してよい形状である。長さ12.6cm・最大幅は硯尻にあり7.4cmの小型品ながら、舳部には大きく凹む海（墨池）が作り出され実用品としての機能は十分備えている。陶硯の代表的な形態には、円面硯・風字硯・方形硯・その他の4群に大別される。この分類に従えば本資料はその他の分類になる（「陶硯関係文献目録」「埋蔵文化財ニース41」奈良国立文化財研究所 1938）。

以前には形象硯の種別も分類項目として立てられていたが（檜崎彰一「日本の陶硯 ―とくに分類について―」『考古学論考小林行雄博士古希記念・論文集』1981）、その種の資料が希少なためか今日では積極的な分類項目にはなっていないようである。しかし、本資料は明らかに船形でありまさに形象硯に相当するものであろう。ただ、形象硯には主に動物・鳥類を意匠したものが多く、本例のように器材（船）を模したものは群馬県に限らず全国的にもいまだその例を知らない。

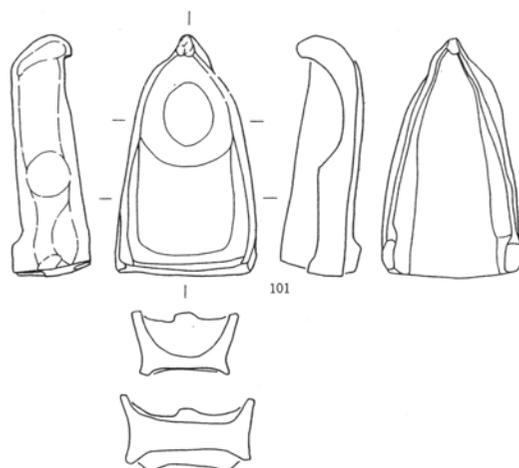
船形の陶硯が当時の船をどの程度の写実性をもって製作したかは不明である。形状は先細りの舳をなし上端が小さく突出する。舷は緩く弧を描くように広がって艫に至るが上縁は平坦で反りはない。艫部は箱形に立ち落とす。舷の高さは2cm程度でやや深目の船体の印象があるが、艫の縁は低い。船底面は平坦をなし舳の立ち上がりは丸く強い弧をなす。硯としての機能面では舳部に大きく深い海部を作り、陸部との割合はおよそ1:1になる。舳部は無脚で、艫部の硯尻左右に低い脚を作り出して硯面に緩い傾斜を持たせている。

船形の陶硯はどのような構造の船を模していたのであろうか。単材くり船は船体の長さの割に幅が狭くなっているとされる。なお、平安・鎌倉時代の絵画資料には川船などの小船はほとんどが単材のくり船（丸木船）として描かれているとされる（石井謙治 ものと人間の文化史『和船II』1995 法政大学出版局）。したがって、本資料は長さに比して船体幅が広い。船底と舷側の形状から当初、構造船ないしは準構造船とも考えた。しかし、硯としての機能を優先したための形状であり、単材くり船とするほうが妥当であろう。丸木船（単材くり船）は平面形から4つの形式に分類されている。1. 鯉節形（舳・艫がともに細まる形状）・2. 割竹形（舳・艫が断ち落とされた形状）・3. 折衷形（舳が鯉節形で艫が割竹形の形状）・4. 箱形（舳先が強く尖がってもちあがり、艫が箱形の形状）がある（須藤利一 ものと人間の文化史『船』1977 法政

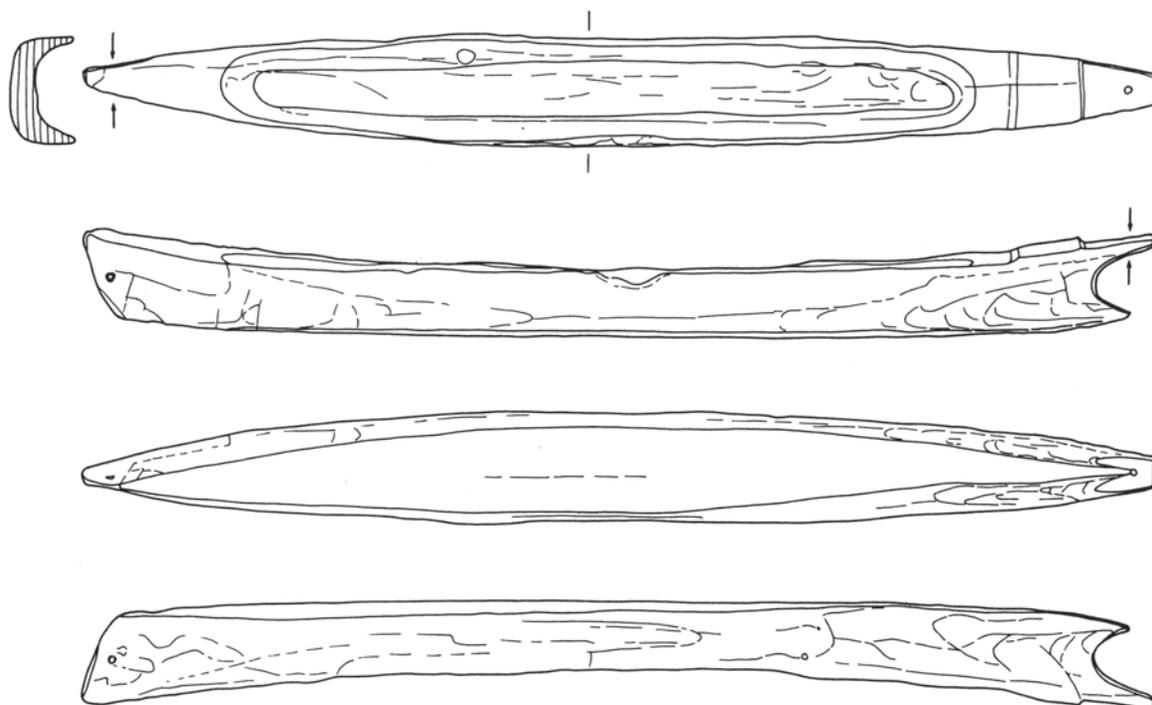
大学出版局) (各分類形の ( ) 部分は当文の執筆者による)。この分類に照らせば本資料は、4. 箱形 の丸木船に分類できると考える。

群馬県は“海なし県”であり、当然本資料の模範は川か湖・沼で使用された川船と考えると差し支えないであろう。県内での船に関する考古資料は少なく、模造品としての船形が3例知られている。時代を問わずにその例を上げれば、太田市米沢中遺跡・同下田遺跡・前橋市元総社寺田遺跡にある。前二者は土製の船形で、遺跡は河川ないしは河川近くに立地し、水上交通にまつわる祭祀遺物と考えられている(糸井雅之「下田遺跡」『群馬発掘最前線』群馬県教育委員会 1996)。

下田遺跡では古墳時代前期の竪穴住居跡から、元総社寺田遺跡例は木製で川中の古墳時代に属する土層からの出土である(『元総社寺田遺跡』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団)。それでは舞台遺跡窯跡の須恵器工人は陶硯に写すような船を見聞きすることができたのであろうか。現況ではあるが当窯跡もまた水に関する環境に縁がない訳ではない。西方約400mには赤城山に源を発する粕川が流れ、周辺には鯉沼。新沼・波志江沼・蟹沼・華蔵寺沼・



舞台遺跡5号窯跡出土船形陶硯



船形木製品：古墳時代

『元総社寺田遺跡Ⅲ』(財)群馬県埋蔵文化財調査事業団1996より転載

0 1 : 4 10cm

#### 第4章 成果と課題

小保方沼など大小の沼が散在する。しかし、即座には粕川や諸沼を船に結び付けることは早計に過ぎるかもしれない。粕川に関しては往時の姿は知ることはできないが、現在では水量にやや不足があり船を浮かべることが可能であったかは疑問が残る。沼もまた、唯一築沼時代の定かでない波志江沼を除き、他は江戸時代の新田開発に伴って築かれたものとされ、船形の陶硯が製作された平安時代前半期にはどのような地勢であったかは不明である。附会すれば、あまが池・男井戸・角弥清水・谷地清水など幾つかの湧水地は（現在はあまが池を除き埋められている）下流域に低湿地ないしは沼・沢を形成し、小舟程度は浮かべられたと考えられる。江戸時代に築かれた沼もまた、このような自然環境ゆえ遂行できた事業ではなかったであろうか。

推測に過ぎない自然・地勢環境をもって船形陶硯の存在理由を考えたが、模す船が彼ら須恵器工人たちの身近にあったとすることは強ち無謀とばかりはいえではないであろう。では、舞台遺跡周辺で見ることのできた船とは何のためのものだったのであろうか。以下は全くの想像にすぎない。現存する諸沼の来歴からはそれ以前に満々と水を湛える湖面を想定することはできず、せいぜい、よし・葦の生える沼・沢が相応である。行き交う船を駆る水運や船遊びをする平安貴族の姿も出てこない。加えて、船形の陶硯から推定される船が丸木船の可能性が高く、多少の利用はあったとしてもさほどの運送能力をもっていたとは思えない。考えられるのは、漁撈用の船である。朝靄に煙る沼で投網を打つ小舟。坏・椀など単純な器物製作を専らにしていた須恵器工人が一瞬の光景をモチーフに陶硯を作ったとしたら。さらに、須恵器工人に対しては純粹專業集団を想起させるような傍観者的な視点からではなく須恵器工人たちの生活・生業形態の中にもまた舟が存在した可能性も考えなければならない。この想像も、漁撈具を示す出土遺物でもあれば多少は真実味も帯びてこよう。

#### 4. まとめ

本章では窯跡出土資料には全く言及できなかった。出土資料における形態変遷の分析が、11基の窯跡群形成過程や出土須恵器の当該地域および県内における年代的な位置付けを明らかにするに最も有効かつ実証性の高い検討資料であることは心得ていたつもりであった。私もいわゆる法量・外傾度・浅深度などに関する分析を試みたが、不徹底な分析方法のためかここで記すべき明確な傾向を抽出できずに大きな課題として残してしまった。唯一、各窯跡や灰原からの出土資料を検討する中での類別を認識したが、数・量・統計などの客観的な根拠を提示できなかった。「第3章 第2節」に記した出土遺物の類別が妥当であるかは大方のご批判を受けようかとは思われるが、坏類はa～hの8類型・蓋はa～dの4類型・椀B類5類型などに類別化した。これら類別化が妥当であるという前提での観察であるが、主体的に生産されたと考えられる坏類はほぼ全窯跡に各類型の一部が複層的に存在することが認められた。ここから想定されることは、設定した各類型資料は現在の私たち（歴史時代の土器を研究対象にする者）が認識できる四半世紀とか15年単位に刻むような、時間的な推移による型式変化の所産ではないと思われることである。この類別化の類が意味するのは須恵器制作者個々の“くせ”からくる形態にあたる考えた。形態に表れる“くせ”には底円盤部に体部となる粘土紐を置く微妙な位置が大きくかわっているようで、腰部の丸みの有無や張り方、または口・底径の比に顕著である。窯跡群の形成過程の項で述べたように、I期からIV期にいたる操業の経過では各期とも2～3基が同時に稼働していた可能性を指摘した。そして、坏類をはじめ出土遺物の類別化から操業窯には常に複数の工人の手になる製品が窯積みされ、須恵器製作から窯焚きのほぼ全工程には多くみて8人程度の工人を中心とした協業的な参加が通常であったことが導き出される。そして、窯跡群の存続はその成立から終焉まで一系の工人組織のみが関与しており、土器の形態はその構成員各人の“くせ”が継続する期間

を越えず、明確な土器型式変遷がとらえられない時間幅であることが考えられた。

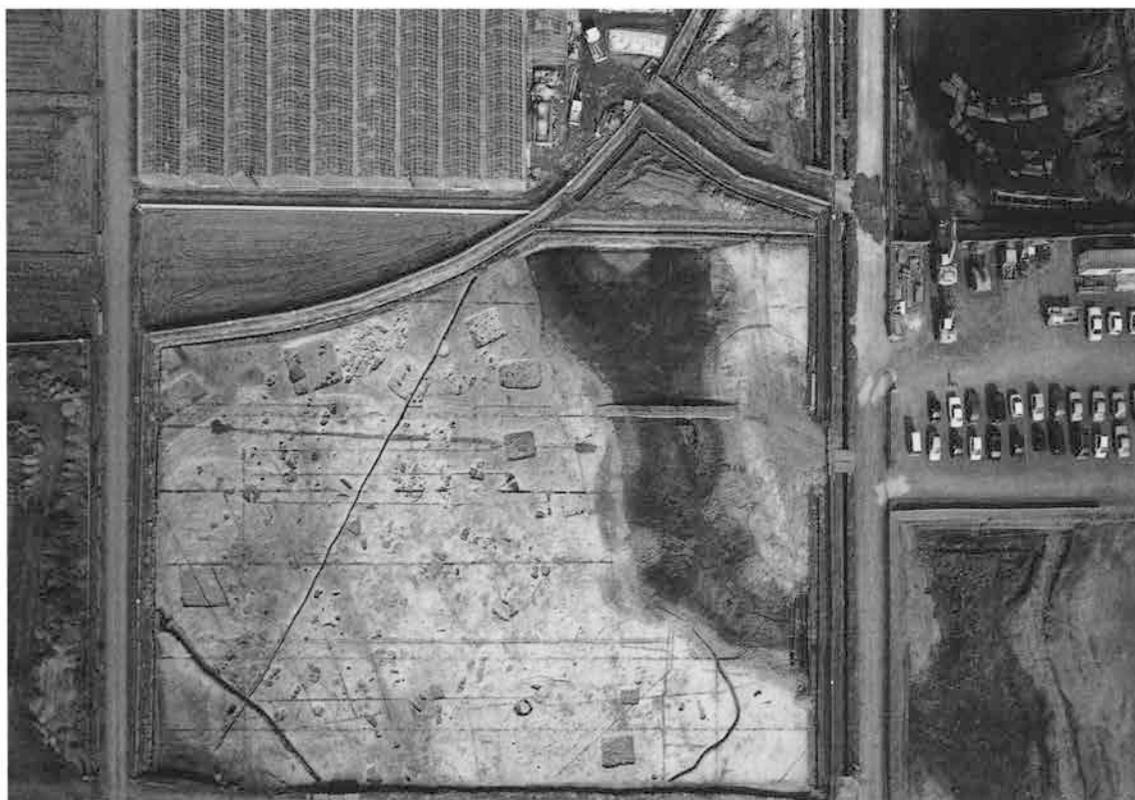
本報告になる出土遺物の類型の設定については、「……………単一焼成面の遺物でも個人別（間）変異、個人内に相当すると考えられる型式幅を保有しており、……………そのためには……………個体レベルの類型設定へと進む必要があり、最終的には同工品の峻別を可能にするような観察精度と分類体系が必要となろう。」犬木 努「4. 古墳時代 (1)土器・埴輪」『考古学雑誌』第82巻 第3号 日本考古學會 平成9年。）の指摘があり、今後の課題として重く受け止めなければならない。なお、当窯跡群の操業が協業的な体制をとっていた蓋然性は高いが、純粹に窯跡群の形成過程や出土資料の類別化の検討からのみの認識ではない。須恵器工人の関連施設とし想定した6軒の竪穴住居跡の存在が先入観としてあったことを断っておきたい。

出土土器の年代については、ここでは年代的な定点をもたない。また、県内の奈良・平安時代の土器編年研究が進んでいるとはいえ、当該地域との整合性が危惧され、これを積極的に位置付けるにやや不安が残る。今回検討の及ばなかった土器の年代および型式的編年や窯跡群内の土器変遷については、遺跡・遺構としての系統的な問題を含め、隣接する光仙房遺跡に検出された12基の須恵器窯跡が明らかにされるのを待って比較検討を行い残された多くの課題と共にその任を果すよう努めたい。



# 写 真 图 版





B区全景 (上が北)

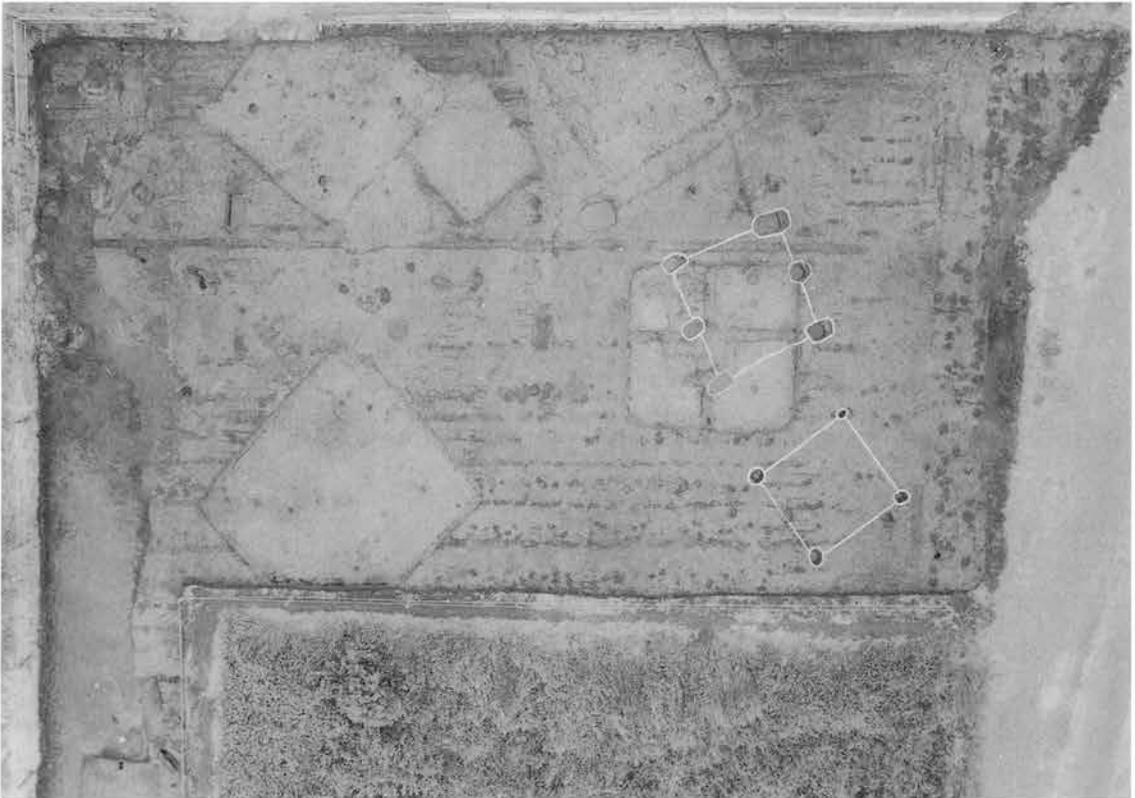


A区全景 (上が東)

PL2



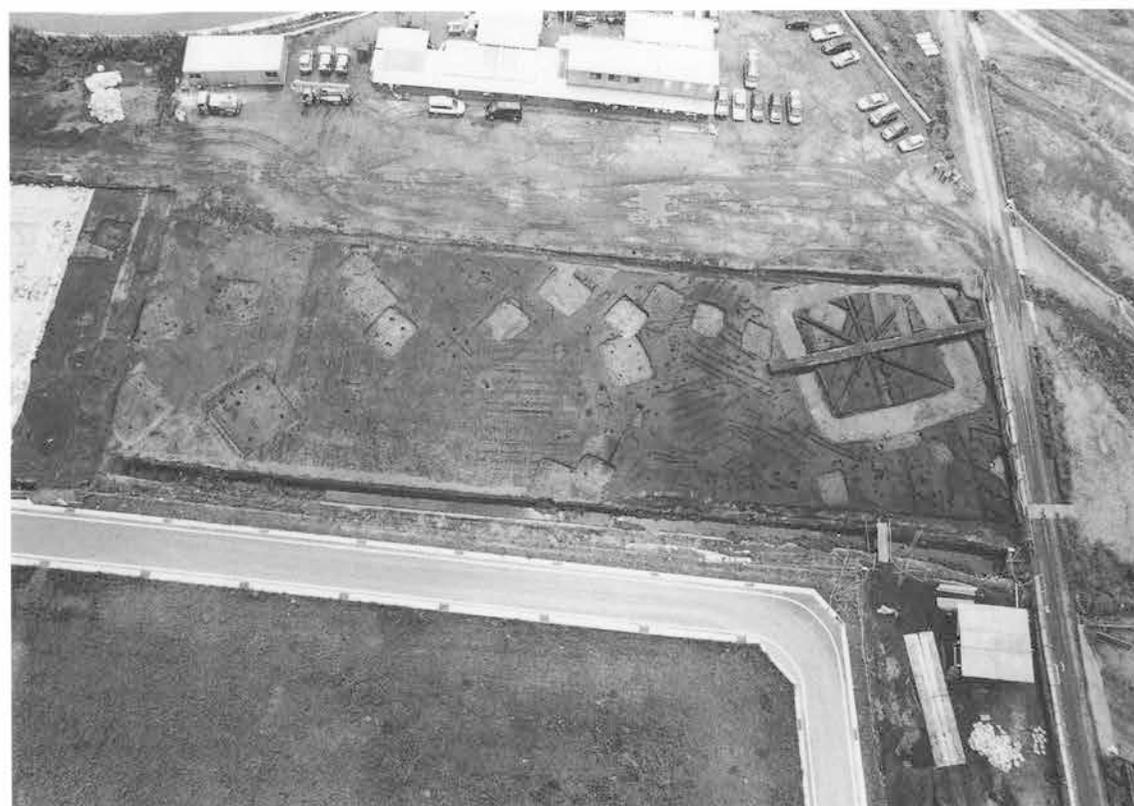
A区全景（上が北）



F区全景（上が北）



F区全景（上が東）



F区全景（上が南）

PL4



F区全景（上が南）



F区全景（上が北）



C区全景 (上が東)

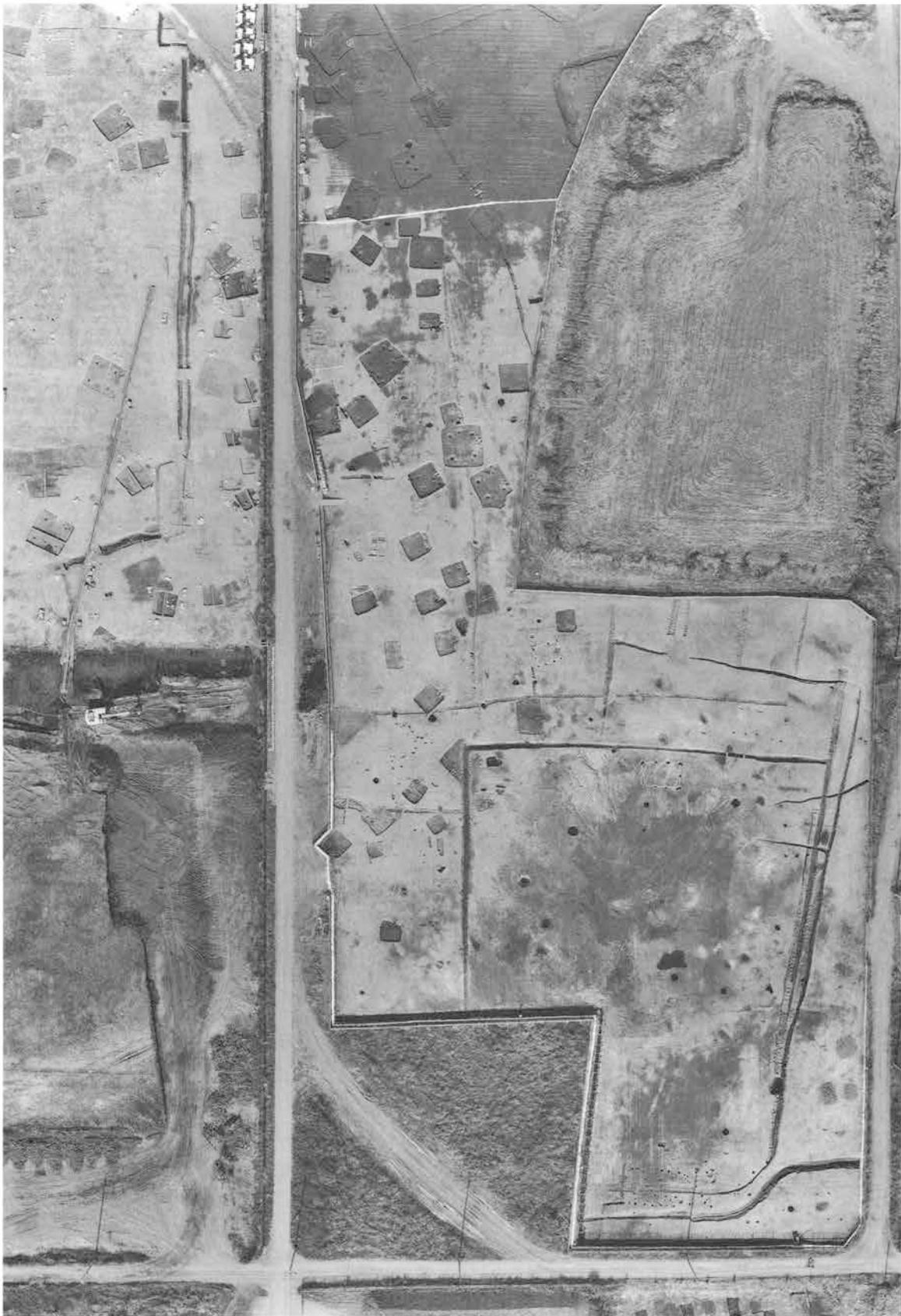


C区全景 (上が北)

PL6



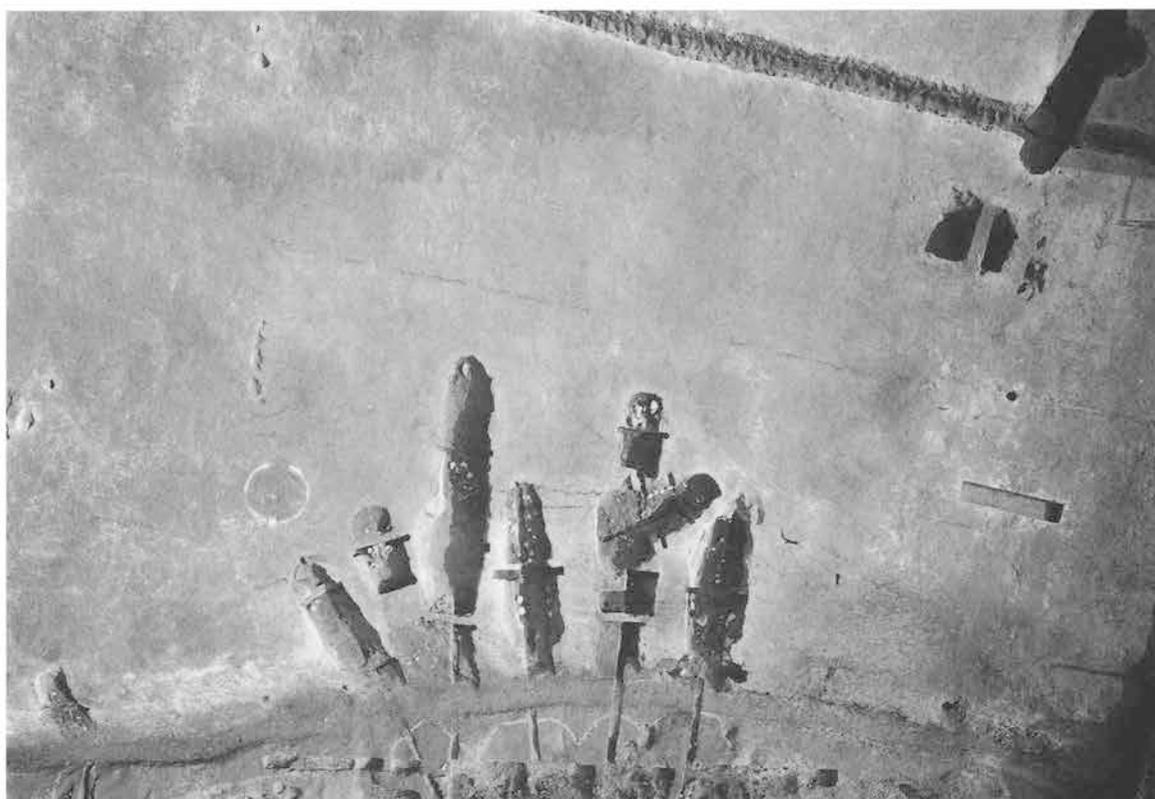
D・E3区全景（上が北）



E2・E3区全景（上が北）



A3区窯跡群全景（上が東）



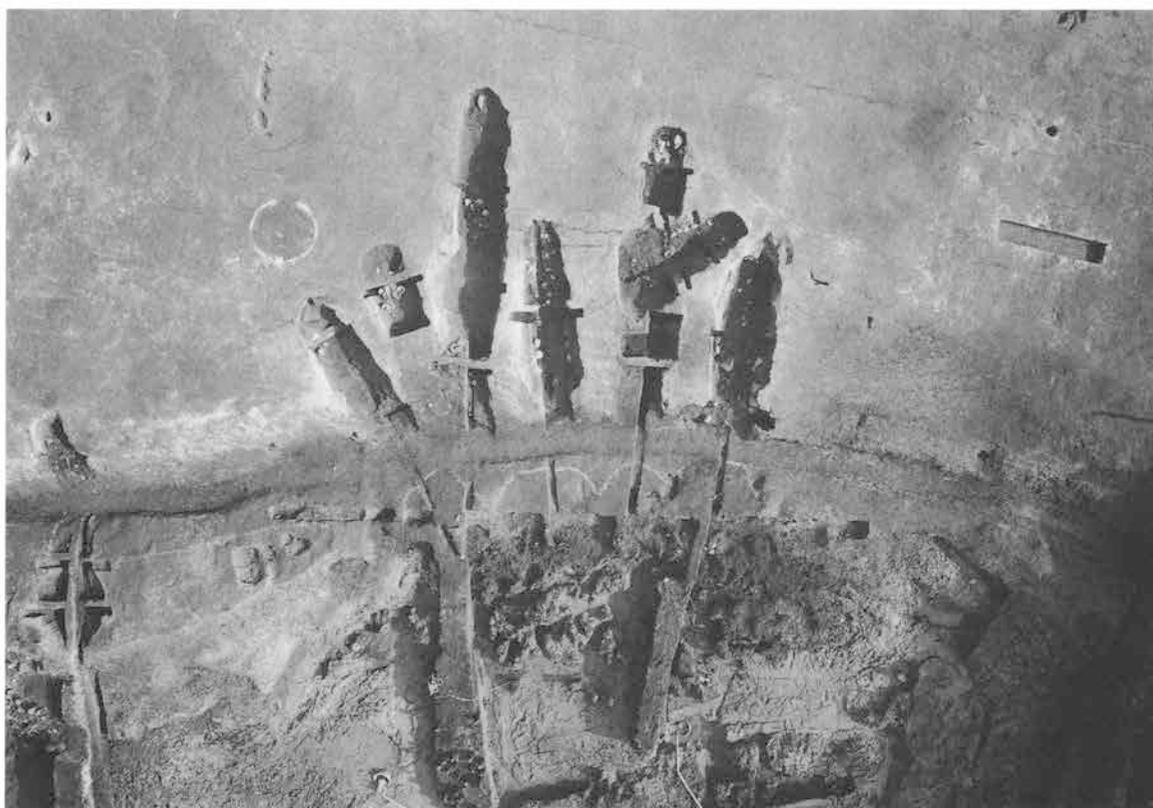
窯跡群全景（上が東）



窯跡群全景（上が北）



窯跡群全景（上が東）



窯跡群全景（上が東）



窯跡群全景（上が東）



1号窯跡全景（東から）



同 床面遺物出土状況（東から）



同 床面遺物出土状況（東から）



同 土層断面前庭部（南から）



2号窯跡全景（西から）



同 床面遺物出土状況（西から）



同 土層断面（南西から）



同 床面燃烧部焚口部付近（北西から）



同 土層断面（南西から）



3号窯跡全景（西から）



同 土層断面（西から）



同 土層断面 煙道部付近（南から）



同 煙道部遺物廃棄状況（西から）



4号窯跡全景（西から）



同 床面遺物出土状況（西から）



10号窯跡全景（西から）



同 床面遺物出土状況（西から）



4号窯跡遺物出土状況（西から）



同 遺物出土状況（西から）



同 土層断面（北西から）



同 土層断面（北西から）



5号窯跡全景（西から）



同 遺物出土状況（西から）



同 土層断面（南から）



同 土層断面（南から）



6・7号窯跡全景（西から）



6号窯跡土層断面（西から）



7号窯跡煙道部遺物出土状況（北から）



6・7・11号窯跡全景（西から）



7号窯跡煙道部遺物出土状況（北から）



同 土層断面（西から）



7号窯跡遺物出土状況（南から）



同 土層断面（北から）



8号窯跡全景（西から）



同 床面全景（西から）



同 土層断面 煙出部集石部分（南から）



同 床面全景（西から）



同 土層断面（北西から）



同 遺物出土状況（西から）



9号窯跡全景（北西から）



同 遺物出土状況（西から）



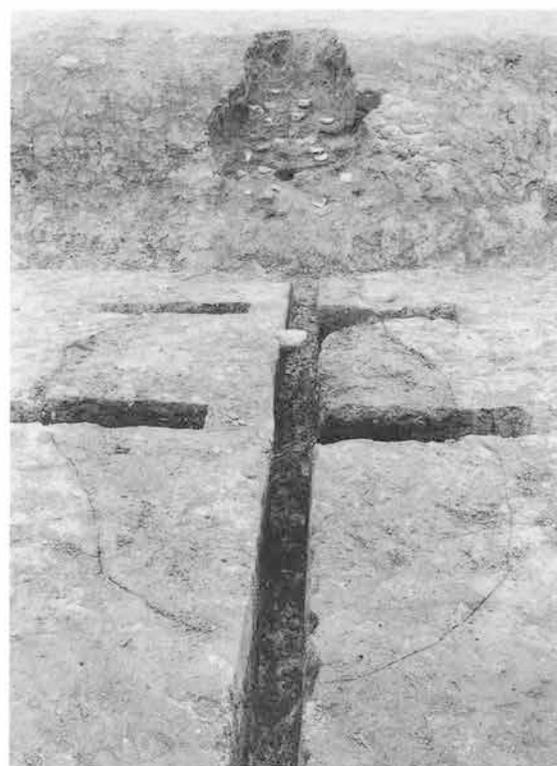
同 遺物出土状況（北西から）



同 遺物出土状況 前庭部（東から）



同 土層断面（南から）



同 前庭部（西から）



灰原全景



同 土層断面 (南から)



同 土層断面 (南から)



窯跡生産器種

PL20



1号窯跡出土遺物(1)



1号窯跡出土遺物 (2)



2号窯跡出土遺物

PL22



3号窯跡出土遺物 (1)



29



31



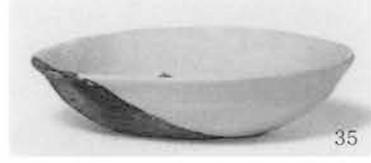
32



33



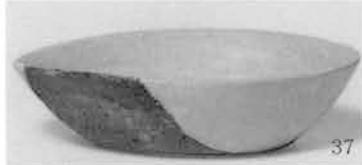
34



35



36



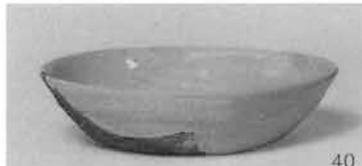
37



38



39



40



41



42



43



44



45



46



57



48



58

3号窯跡出土遺物 (2)



1



2



3

4号窯跡出土遺物 (1)

PL24



4号窯跡出土遺物(2)

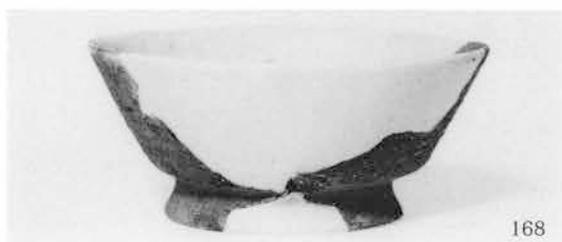
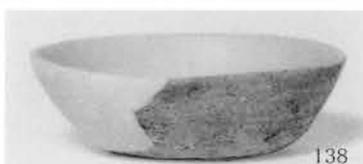
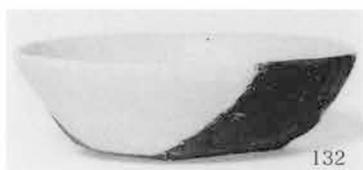


4号窯跡出土遺物(3)

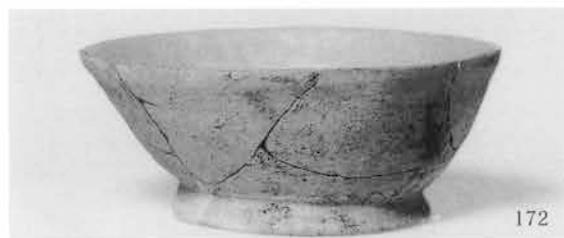




PL 28



4号窯跡出土遺物 (6)

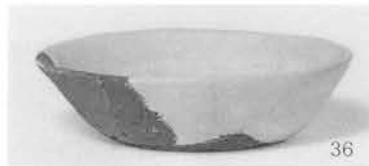


4号窯跡出土遺物 (7)



5号窯跡出土遺物 (1)

P L 30



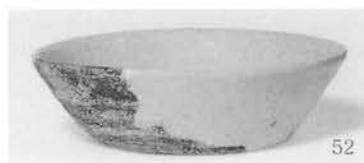
5号窯跡出土遺物 (2)



50



51



52



53



54



57



58



59



60



61



62



63



64



66



67



68



69



71



72



73



74



75



76



77



78



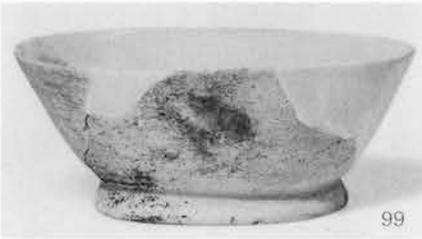
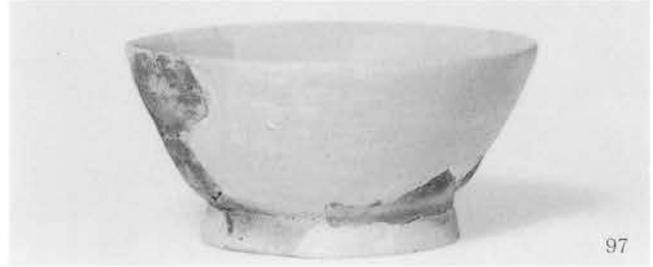
79



80

5号窯跡出土遺物 (3)

P L 32



5号窯跡出土遺物 (4)



6号窯跡出土遺物 (1)

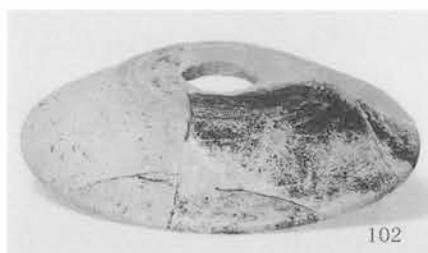




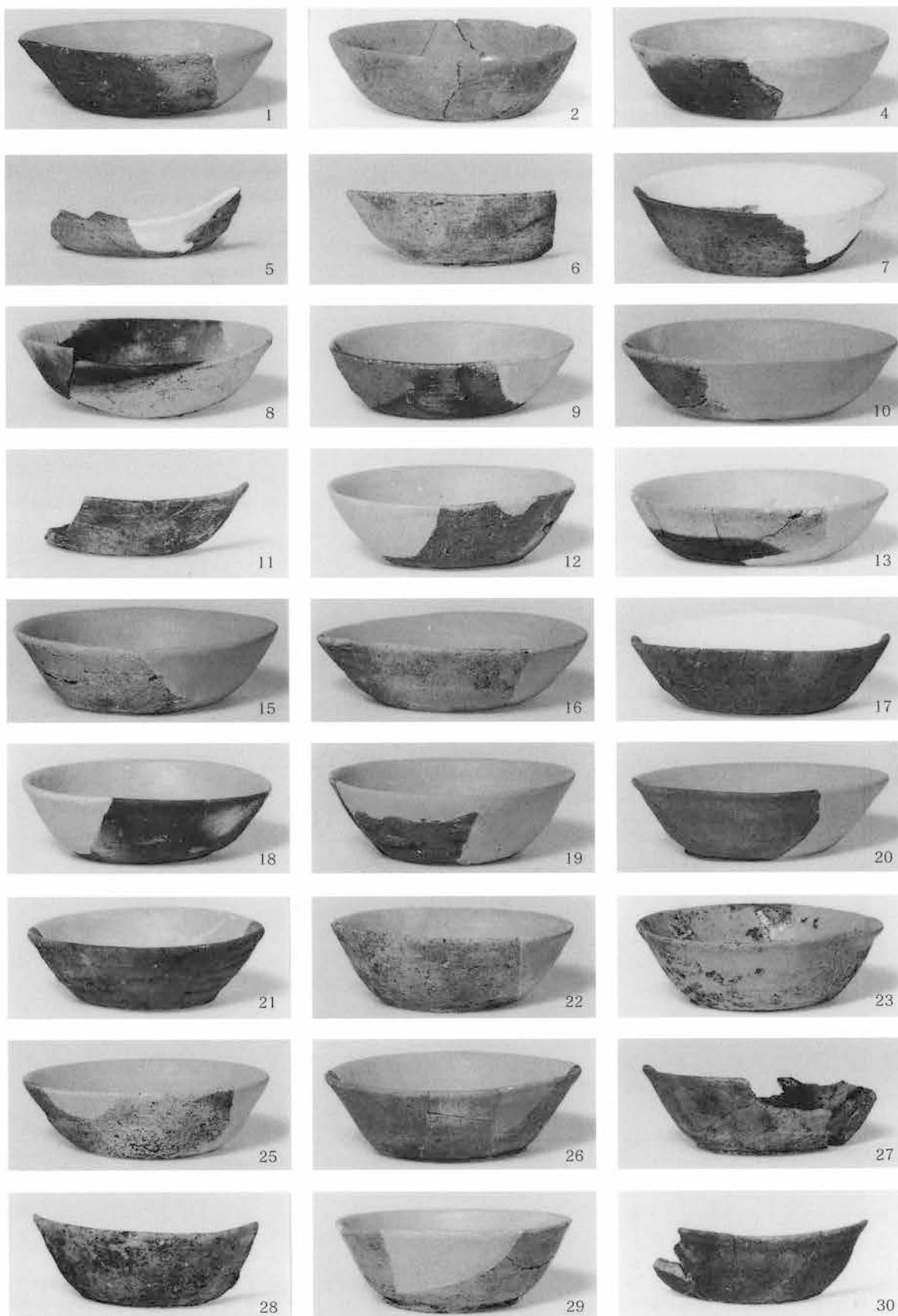


6号窯跡出土遺物 (4)

P L 36

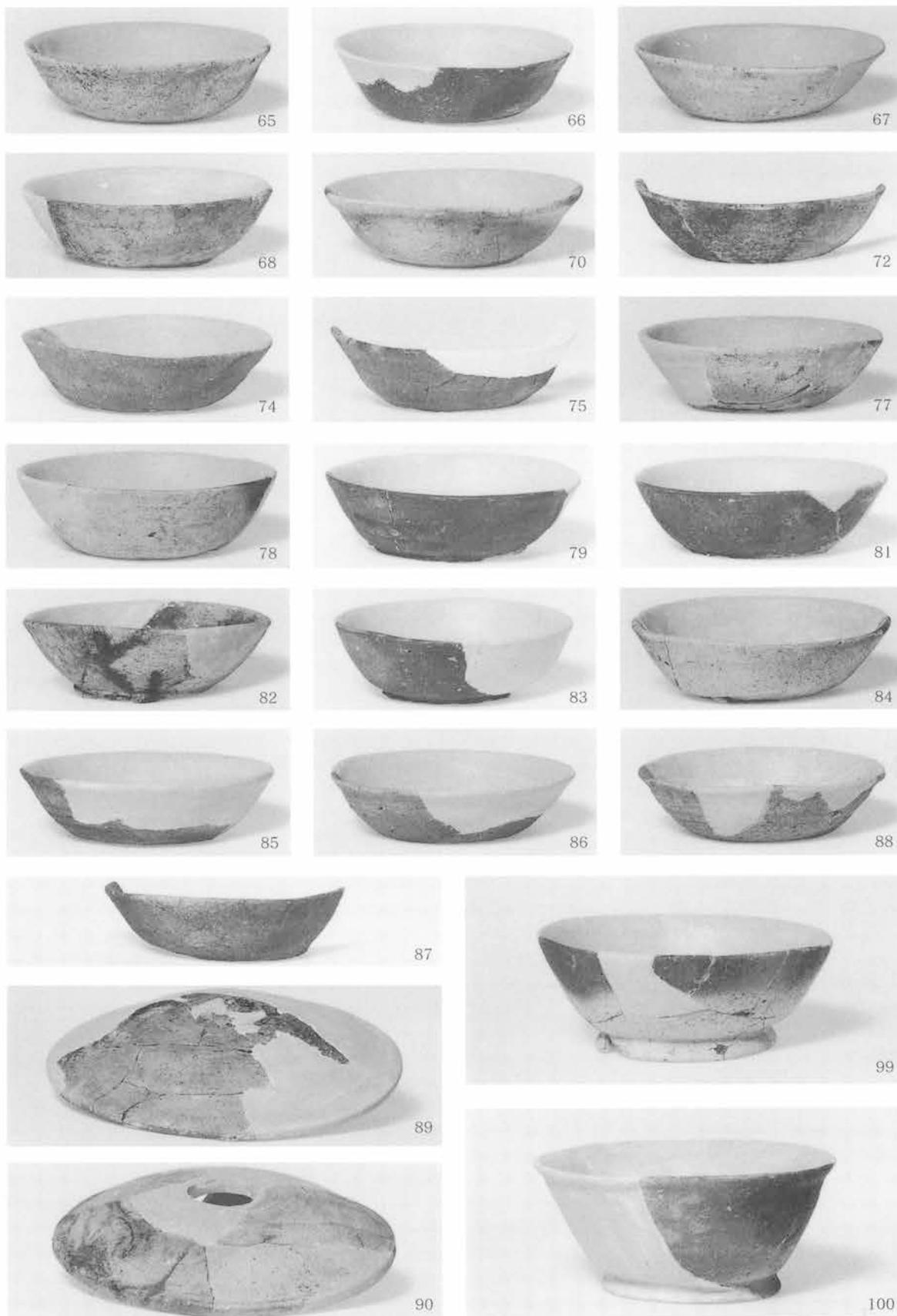


6号窯跡出土遺物 (5)



7号窯跡出土遺物(1)





7号窯跡出土遺物 (3)



7号窯跡出土遺物 (4)



8号窯跡出土遺物 (1)



23



24



25



27



28



31



32



35



36



38



39



40



41



42



43



44



45



47



48



49



50



51



53



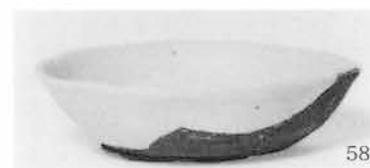
54



56



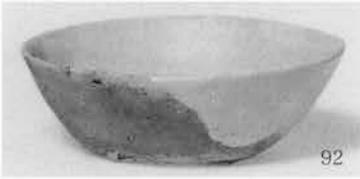
57



58

8号窯跡出土遺物(2)





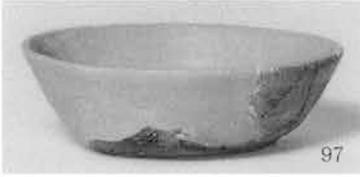
92



95



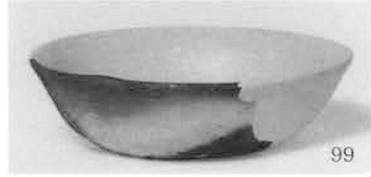
96



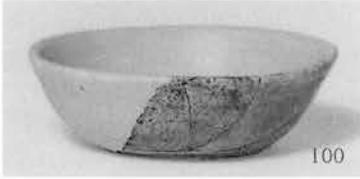
97



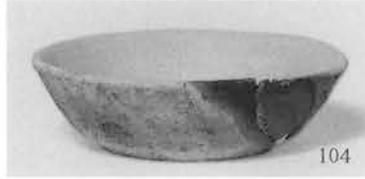
98



99



100



104



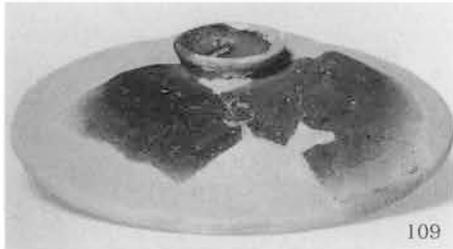
106



105



107



109

8号窯跡出土遺物(4)



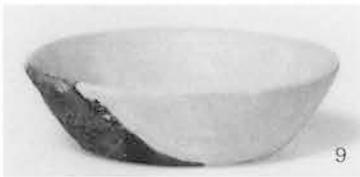
3



5



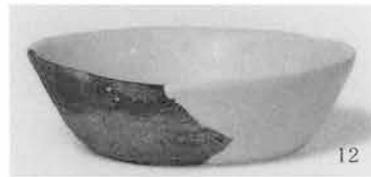
8



9



10



12



13



14



15



16



17



20

9号窯跡出土遺物(1)

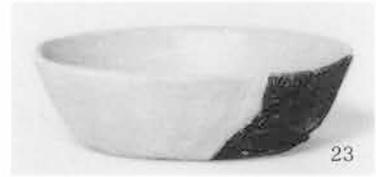
PL44



21



22



23



25



26



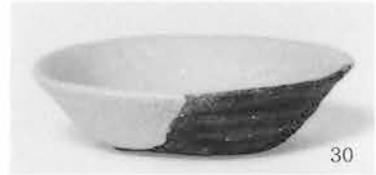
27



28



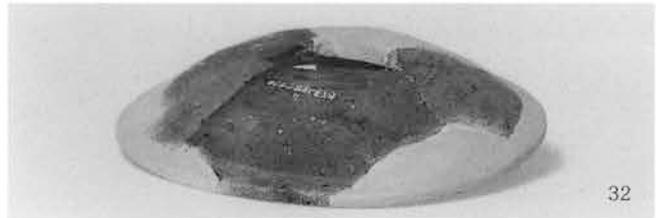
29



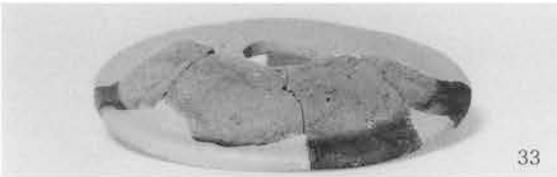
30



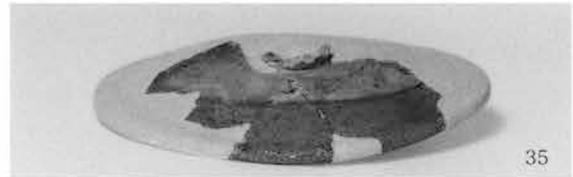
31



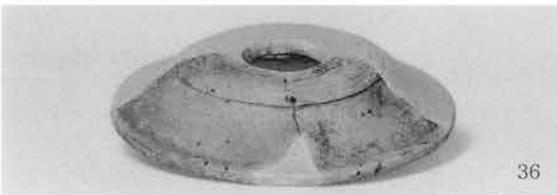
32



33



35



36



45

9号窯跡出土遺物 (2)



4



9



10



11

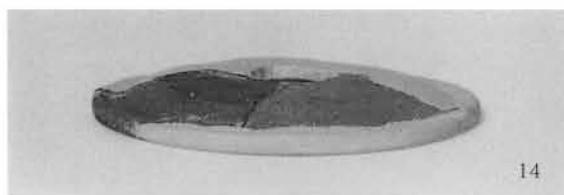


12



13

10号窯跡出土遺物 (1)



10号窯跡出土遺物 (2)



11号窯跡出土遺物

P L 46



1号窯跡焼台



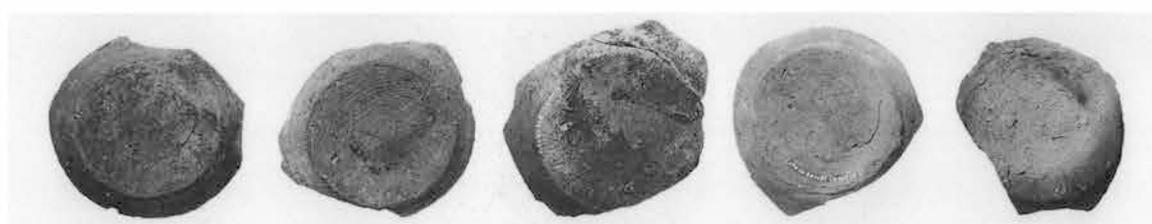
2号窯跡焼台



3号窯跡焼台 (1)



3号窯跡焼台 (2)



4号窯跡焼台



5号窯跡焼台 (1)



5号窯跡焼台 (2)



6号窯跡焼台 (1)



6号窯跡焼台 (2)



7号窯跡焼台



8号窯跡焼台



9号窯跡焼台 (1)

P L 50



9号窯跡焼台 (2)



10号窯跡焼台



11号窯跡焼台







灰原 出土遺物 (3)





灰原 出土遺物 (5)





301



302



303



305



308



309



310



312



313



315



316



317



318



320



321



322



325



326



329



336



337



339



340



341



342



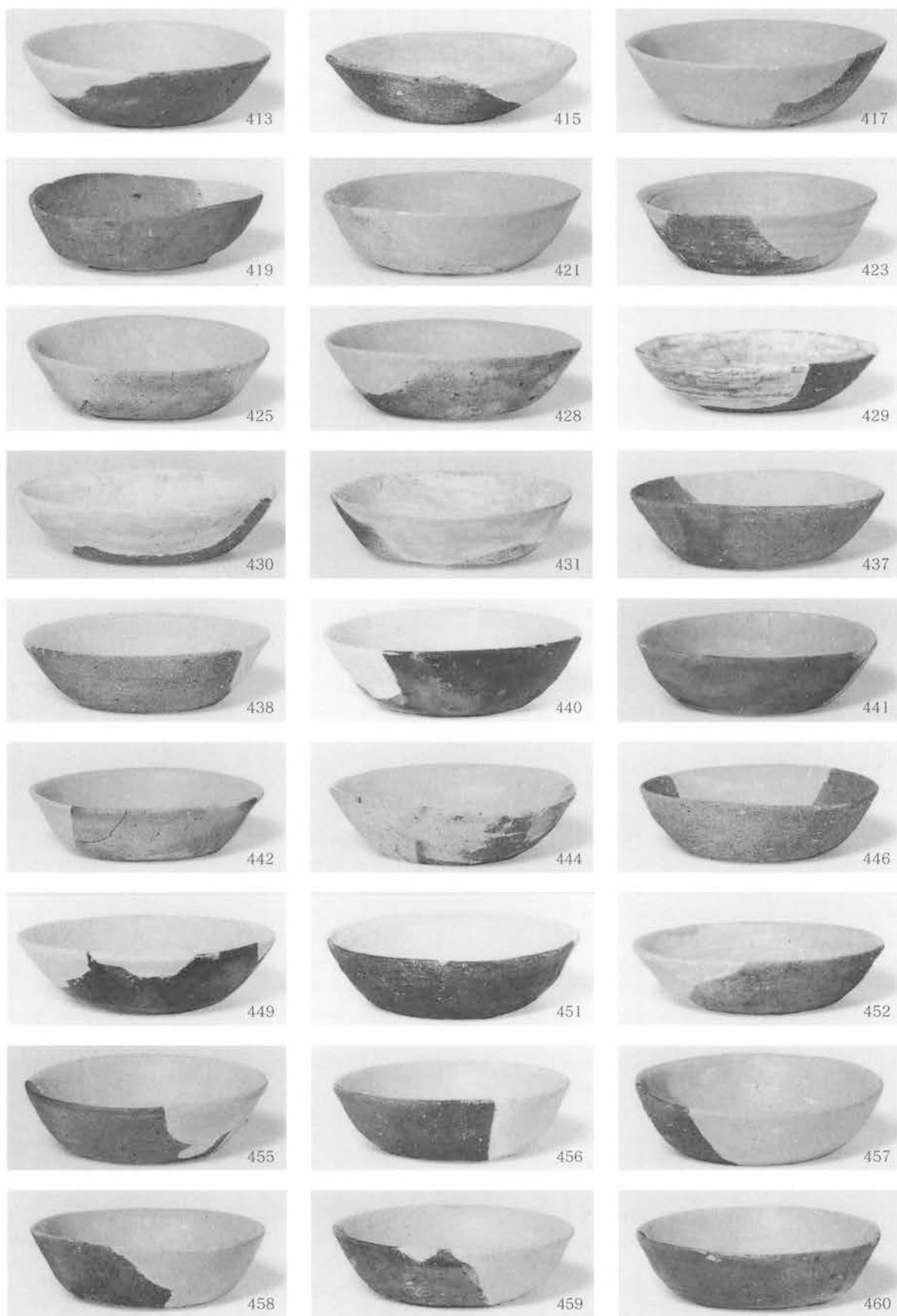
344



345

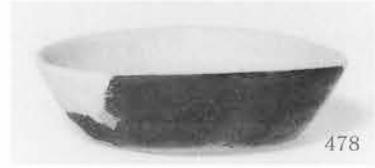
灰原 出土遺物 (7)





灰原 出土遺物 (9)

P L 60









638



640



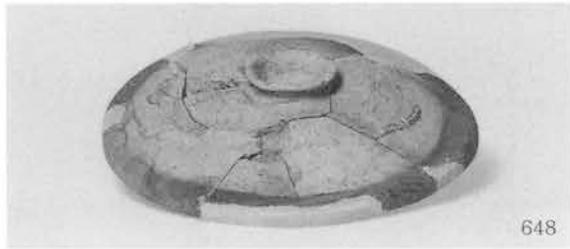
646



639



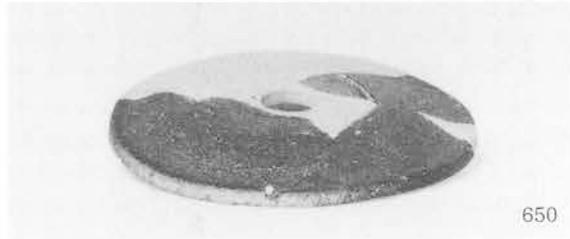
642



648



649



650



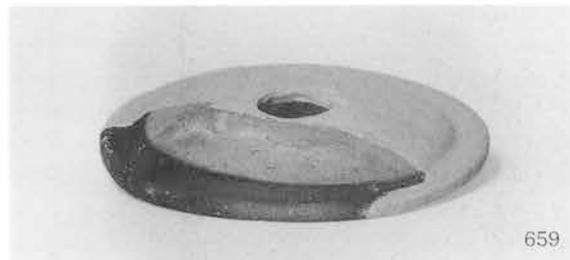
651



655



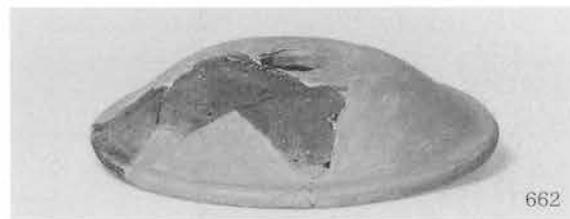
657



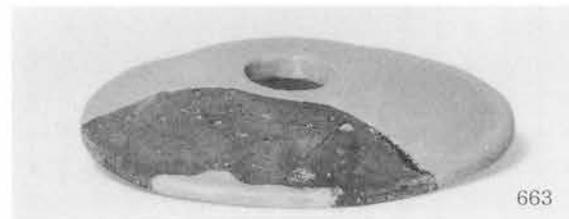
659



661

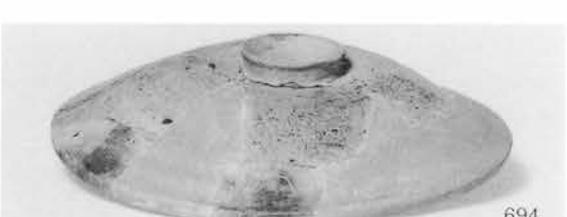
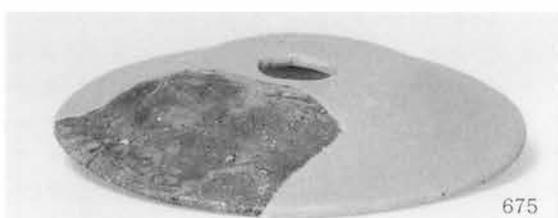
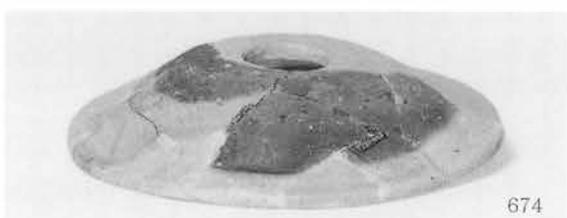


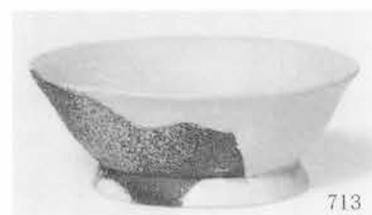
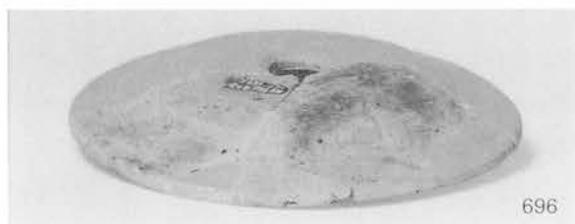
662



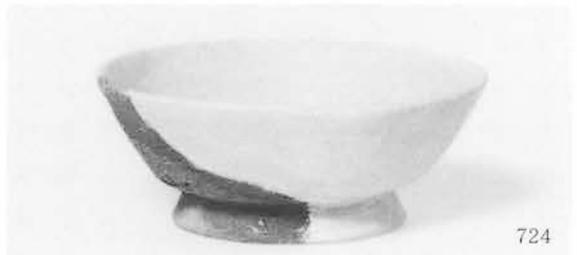
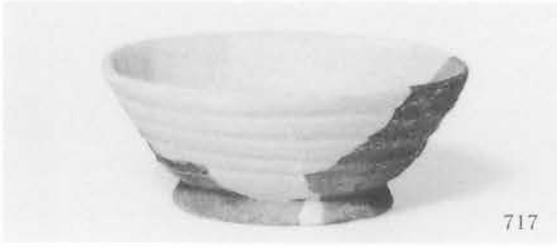
663

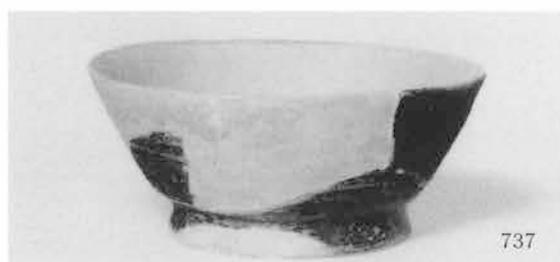
PL64



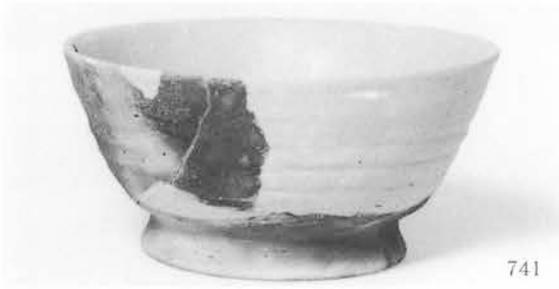


P L 66





P L 68





A1-16号住居跡 (西から)



A1-30号住居跡 (西から)



A1-35号住居跡遺物出土状況 (西から)



A1-38号住居跡 (西から)



C-51号住居跡 (西から)



C-52号住居跡 (北から)



C-58号住居跡 (南から)



A3-63号住居跡 (西から)



A3-64号住居跡（西から）



A3-66号住居跡（西から）



A3-67号住居跡遺物出土状況（西から）



A3-68号住居跡（西から）



A3-69号住居跡（西から）



A3-70号住居跡（東から）



E3-91号住居跡遺物出土状況（東から）



A3-70号住居跡竈（東から）



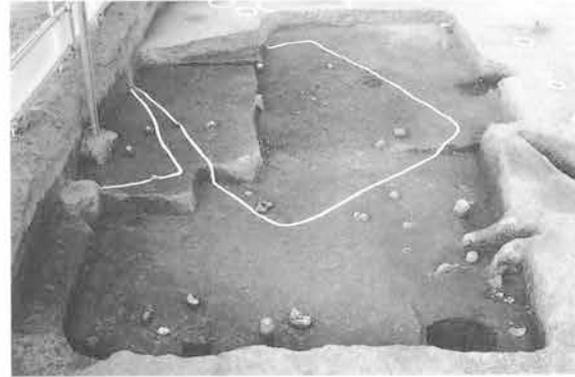
E3-92a号住居跡遺物出土状況（南から）



E3-97号住居跡遺物出土状況（北から）



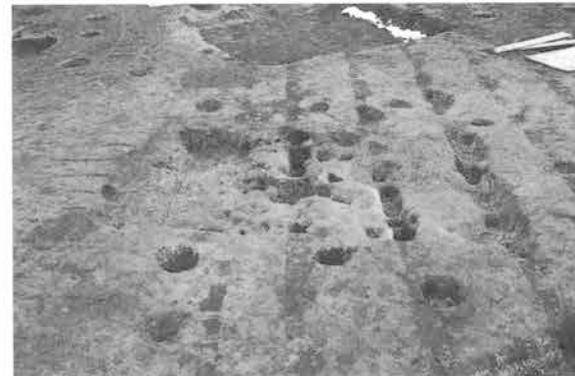
E3-103号住居跡



E3-106号住居跡（南から）



E3-107号住居跡遺物出土状況（西から）



E3-111号住居跡掘形（西から）



E2-113号住居跡（西から）



E2-117号住居跡掘形（西から）



E2-118号住居跡（西から）



E2-119号住居跡（西から）



E2-120号住居跡（西から）



E2-121号住居跡（西から）



E3-128号住居跡（西から）



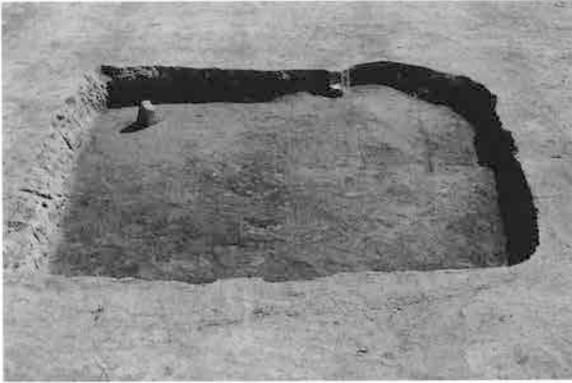
D-144号住居跡遺物出土状況（東から）



E3-150号住居跡遺物出土状況（西から）



D-144号住居跡竈（南から）



E2-151号住居跡（西から）



E2-155号住居跡（西から）



A2-161号住居跡（南から）



E2-168号住居跡（西から）



E2-172号住居跡（西から）



E2-172号住居跡竈遺物出土状況（西から）



E2-172号住居跡竈遺物出土状況（南から）



E3-174号住居跡（南から）



E2-191号住居跡（西から）



E2-192号住居跡（西から）



E2-194号住居跡（西から）



E2-198号住居跡（西から）



E2-199号住居跡（西から）



E2-200号住居跡（西から）



E2-201号住居跡（西から）



E2-205号住居跡（西から）



E2-206号住居跡（西から）



E2-208号住居跡（西から）



F-47号住居跡（西から）



F-70号住居跡（西から）



工境-6号住居跡（西から）



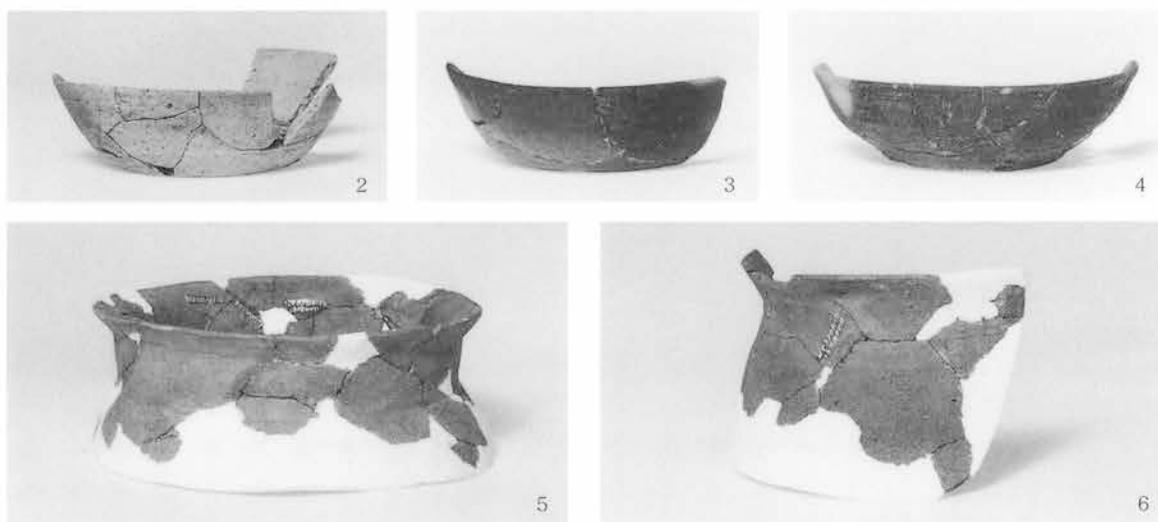
工境-13号住居跡（西から）



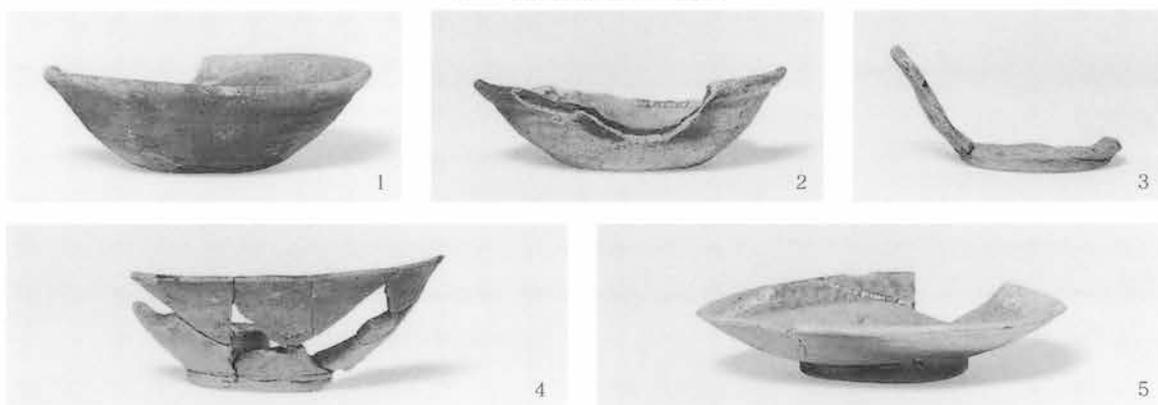
C区調査風景



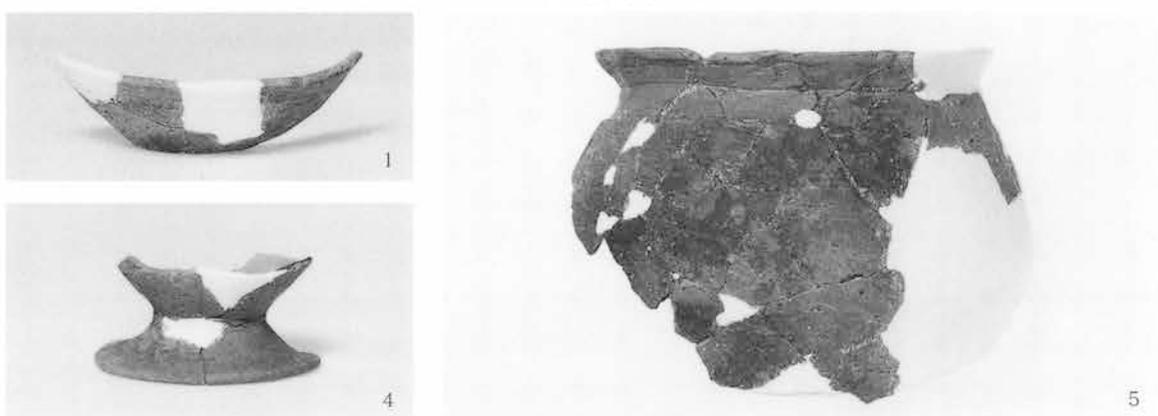
F区調査風景



A1-16号住居跡出土遺物



A1-30号住居跡出土遺物



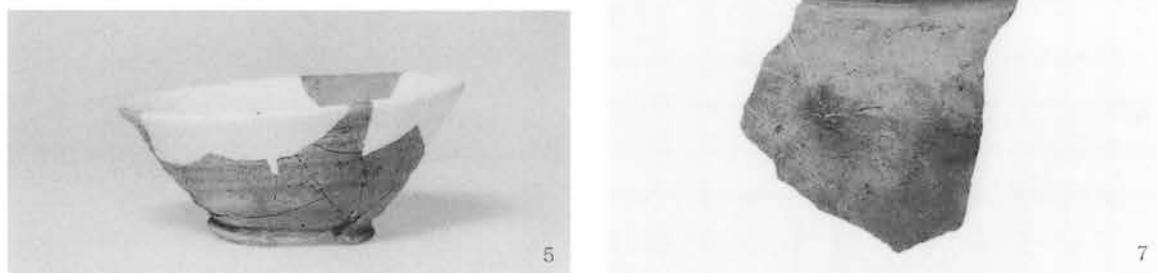
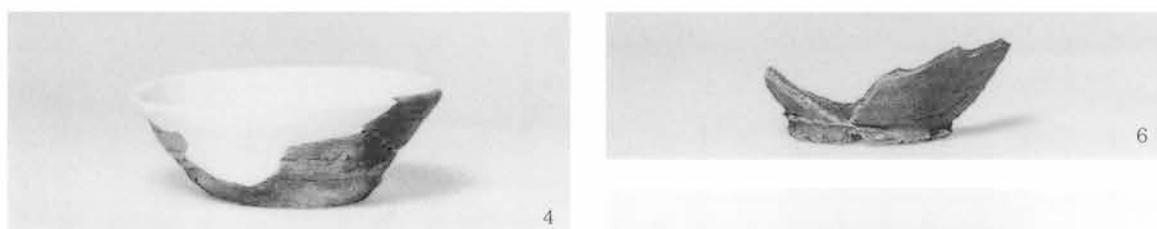
A1-35号住居跡出土遺物



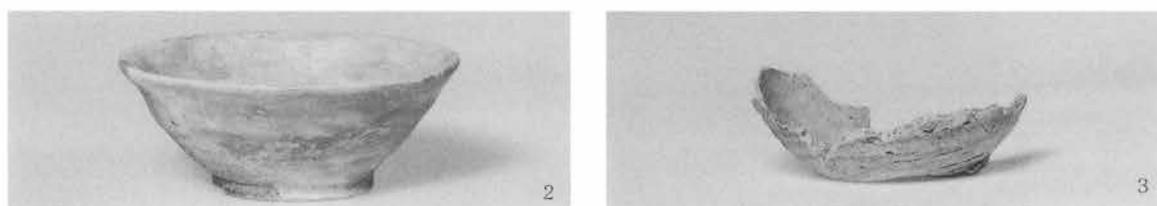
A1-38号住居跡出土遺物



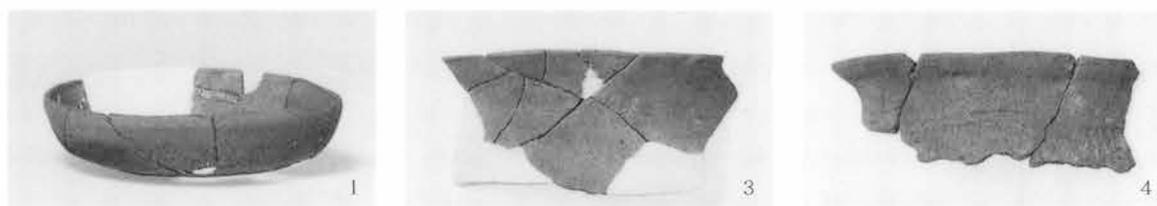
C-51号住居跡出土遺物



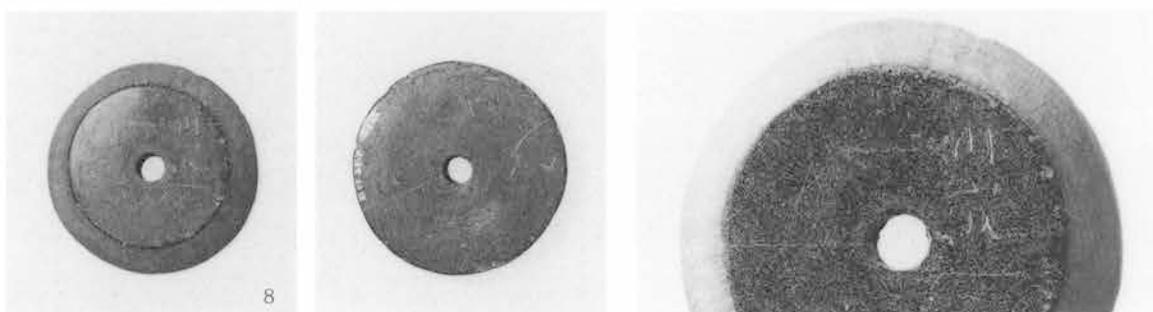
C-52号住居跡出土遺物



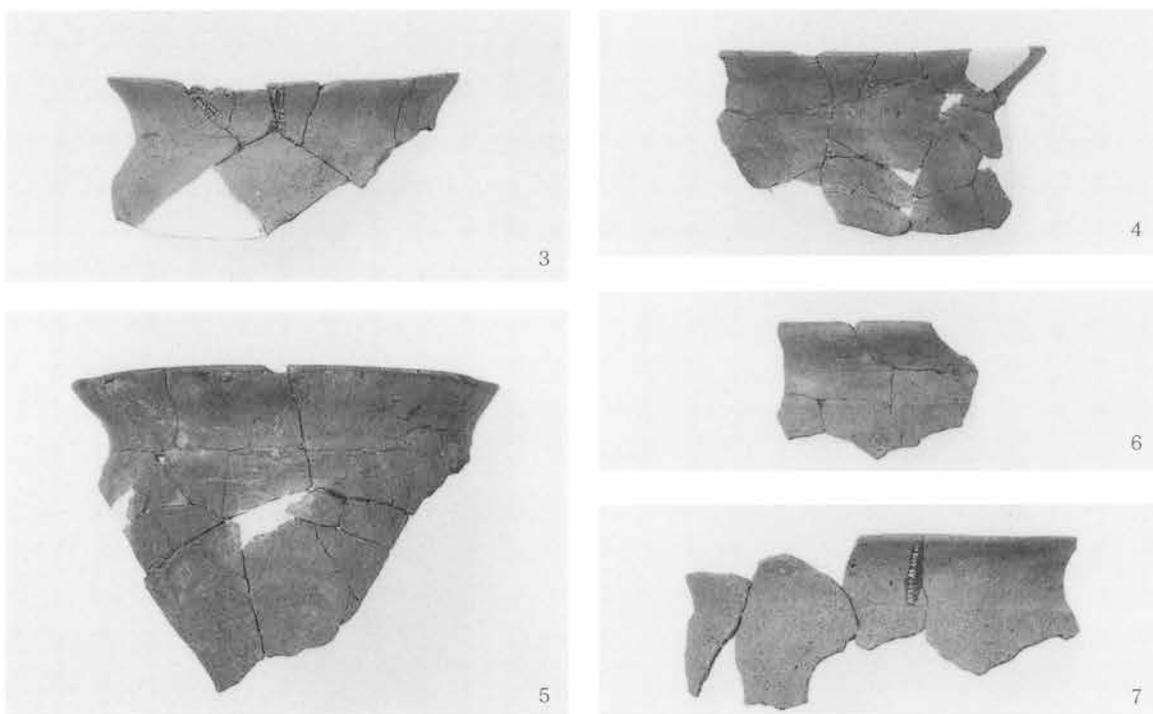
C-58号住居跡出土遺物



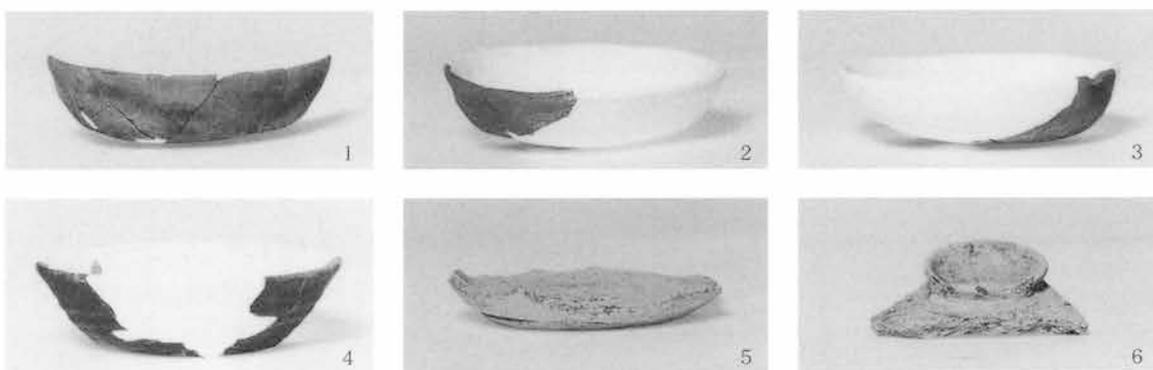
A3-63号住居跡出土遺物 (1)



A3-63号住居跡出土遺物(2)



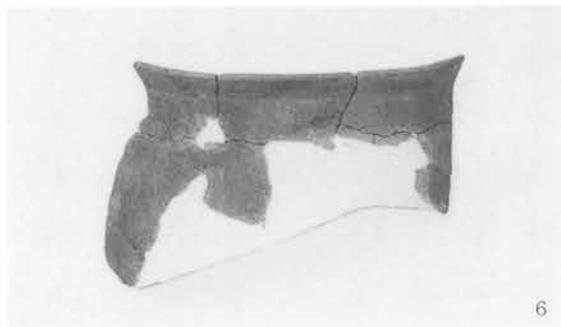
A3-64号住居跡出土遺物



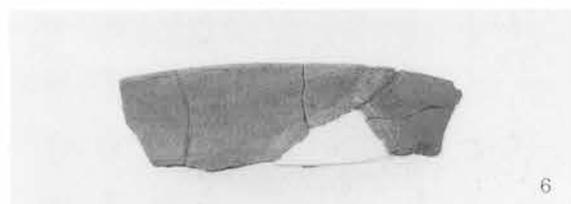
A3-66号住居跡出土遺物



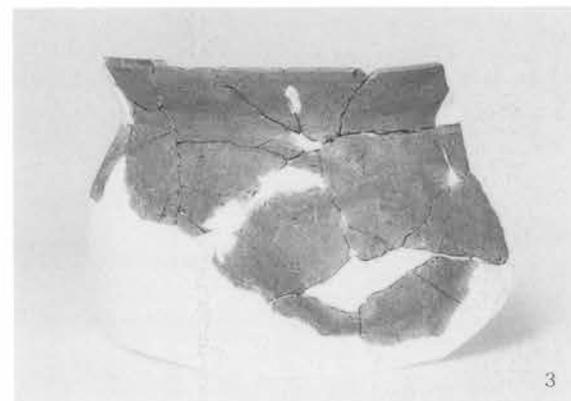
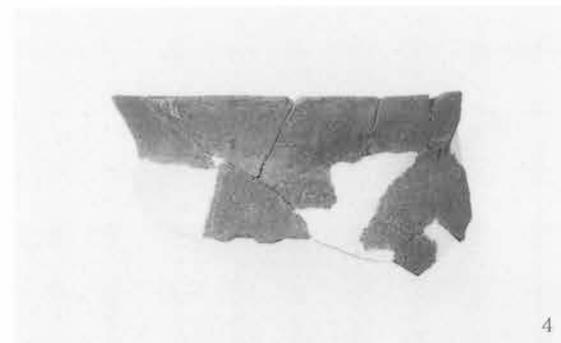
A3-67号住居跡出土遺物(1)



A3-67号住居跡出土遺物 (2)



A3-68号住居跡出土遺物



A3-69号住居跡出土遺物

P L 80



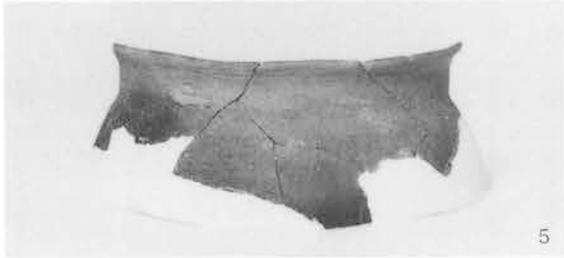
A3-70号住居跡出土遺物



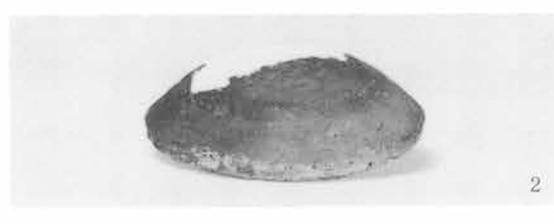
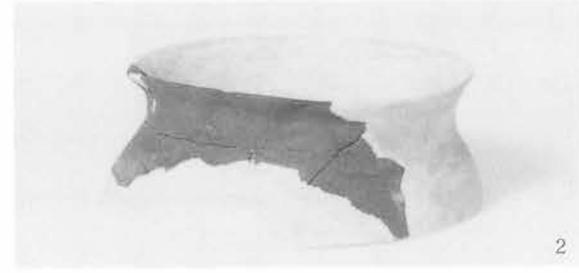
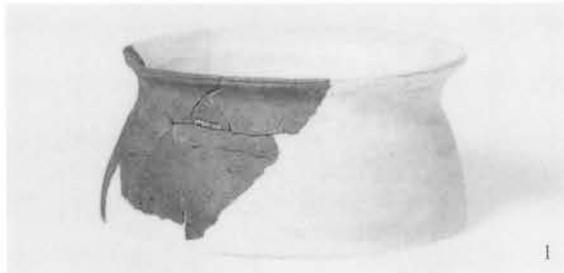
E3-91号住居跡出土遺物



E3-92a・b号住居跡出土遺物(1)



E3-92 a · b号住居跡出土遺物 (2)



E3-97号住居跡出土遺物



E3-103号住居跡出土遺物



E3-106号住居跡出土遺物 (1)



7



10

E3-106号住居跡出土遺物(2)



1



9



10



11



12



13

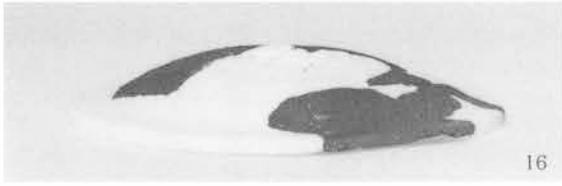


14



15

E3-107号住居跡出土遺物(1)



16



19



18

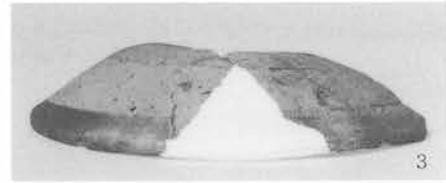
E 3-107号住居跡出土遺物 (2)



1

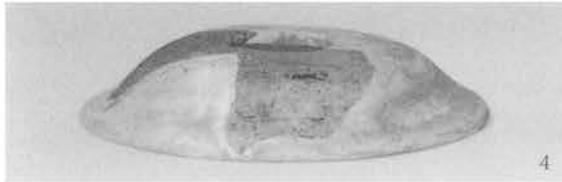


1



3

E 3-111号住居跡出土遺物



4



5

E 2-113号住居跡出土遺物



1



3



8



2



5



9



6



7

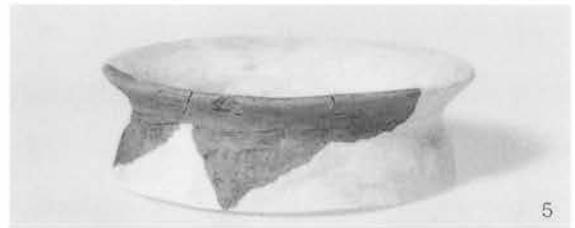
E 2-117号住居跡出土遺物



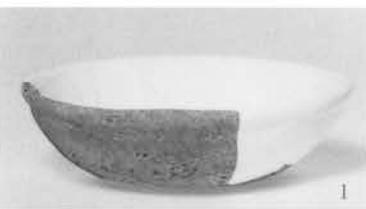
E 2-118号住居跡出土遺物



E 2-119号住居跡出土遺物



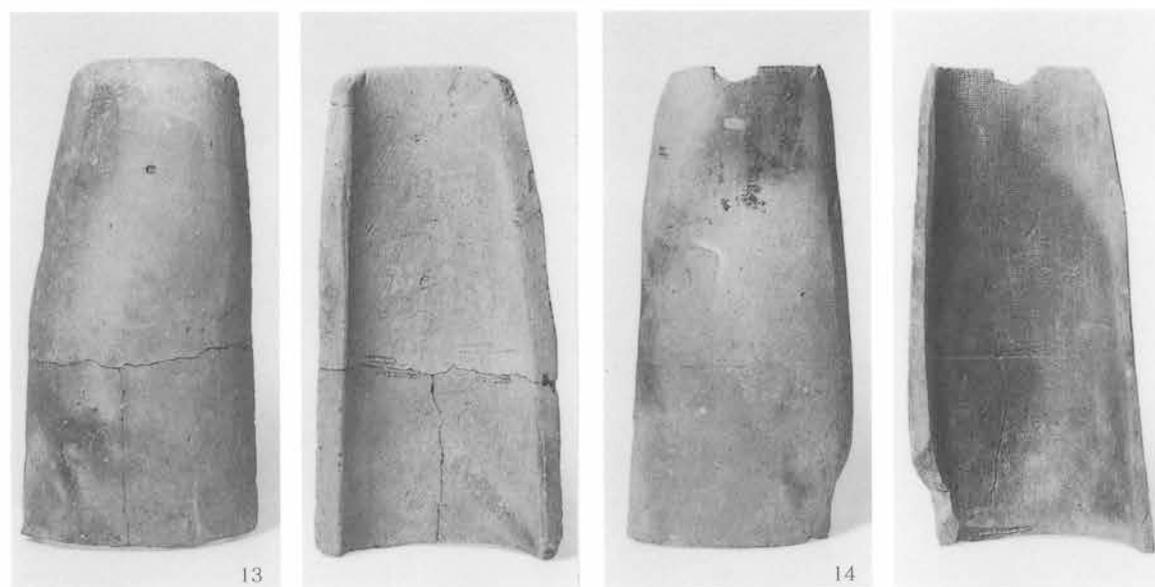
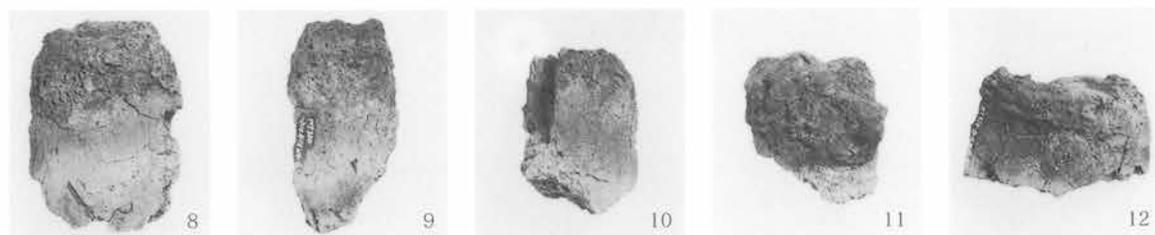
E 2-120号住居跡出土遺物



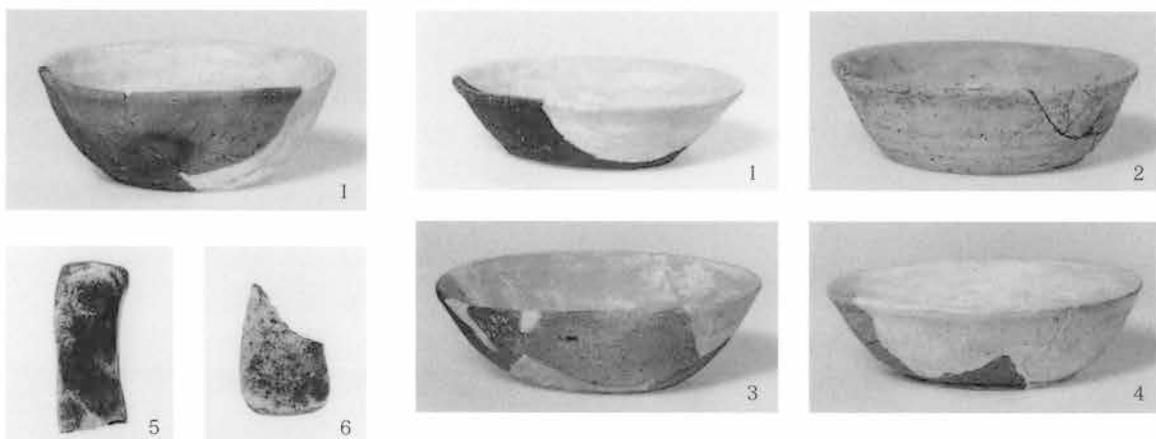
E 2-121号住居跡出土遺物



E3-128号住居跡出土遺物



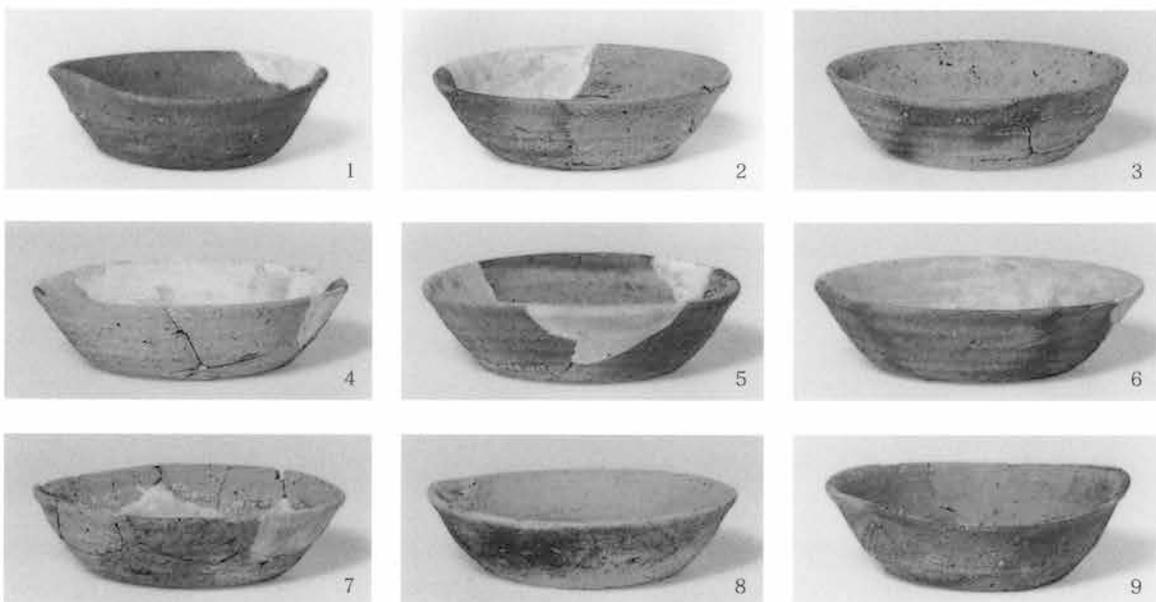
D-144号住居跡出土遺物



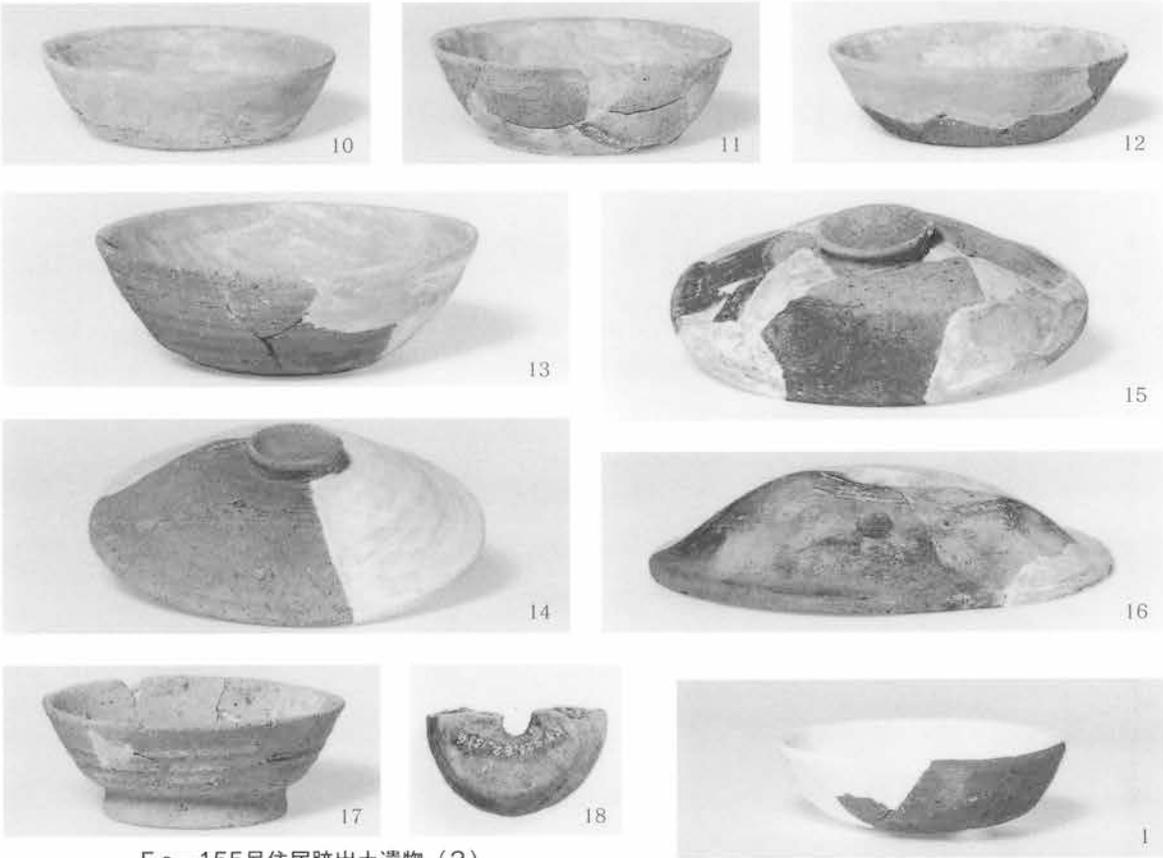
E 3-150号住居跡出土遺物



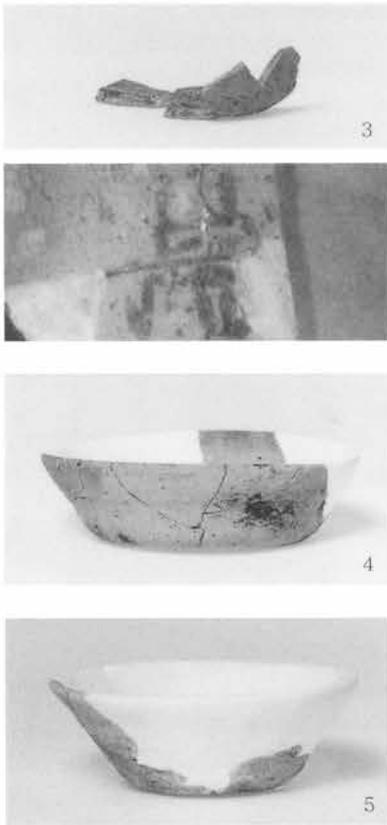
E 2-151号住居跡出土遺物



E 2-155号住居跡出土遺物 (1)



E 2-155号住居跡出土遺物 (2)



A 2-161号住居跡出土遺物

P L 88



E 2-168号住居跡出土遺物



E 2-172号住居跡出土遺物 (1)



25



26



27

E 2-172号住居跡出土遺物 (2)



2



5



6

E 3-174号住居跡出土遺物



1



2



3

E 2-192号住居跡出土遺物



2



3



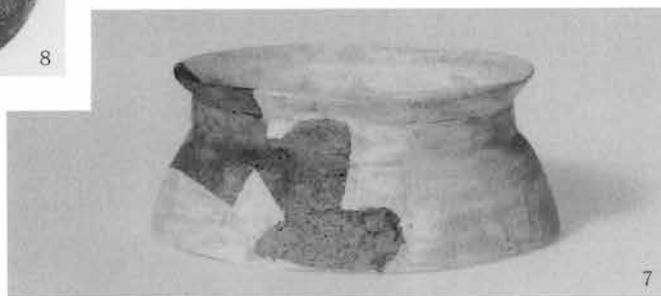
4



8



5



7

E 2-194号住居跡出土遺物

P L 90



E 2-198号住居跡出土遺物



E 2-199号住居跡出土遺物



E 2-200号住居跡出土遺物



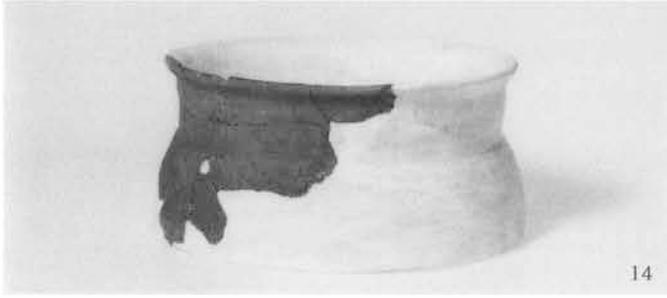
E 2-205号住居跡出土遺物



E 2-206号住居跡出土遺物



E 2-208号住居跡出土遺物 (1)

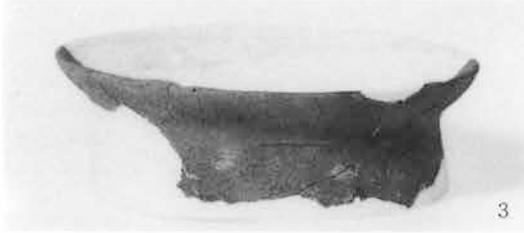


14

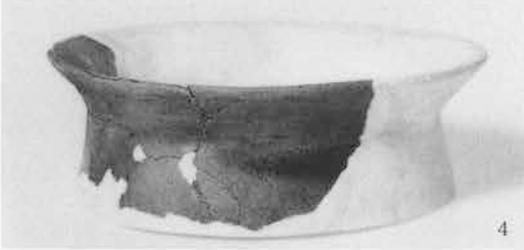


17

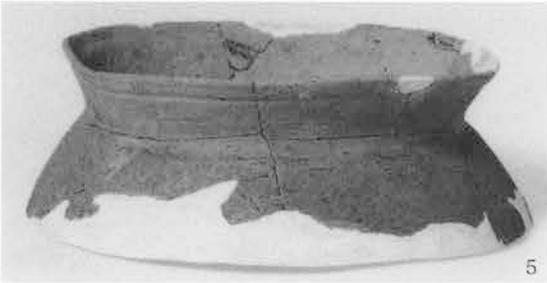
E 2-208号住居跡出土遺物 (2)



3



4



5



1



2

B-2号住居跡出土遺物

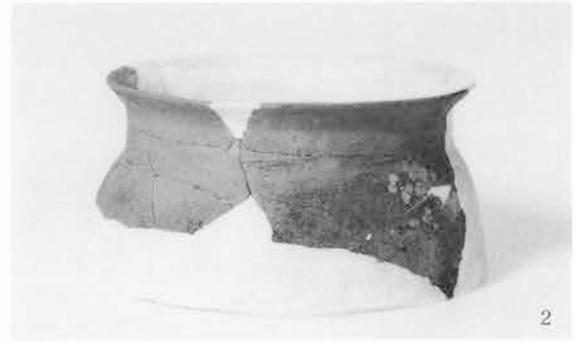


6

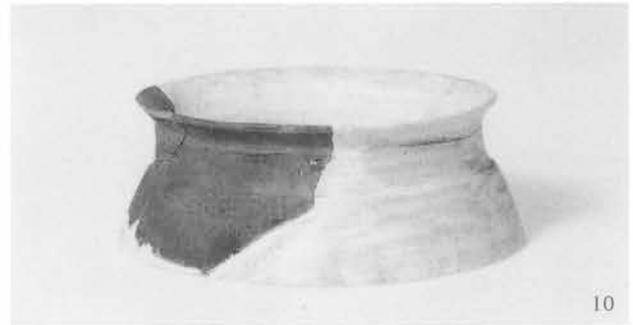
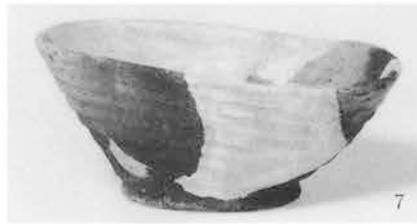
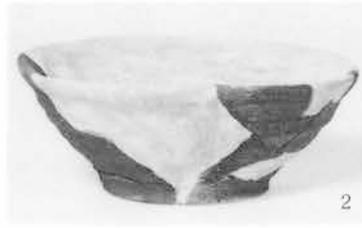


7

B-1号住居跡出土遺物



F-47号住居跡出土遺物



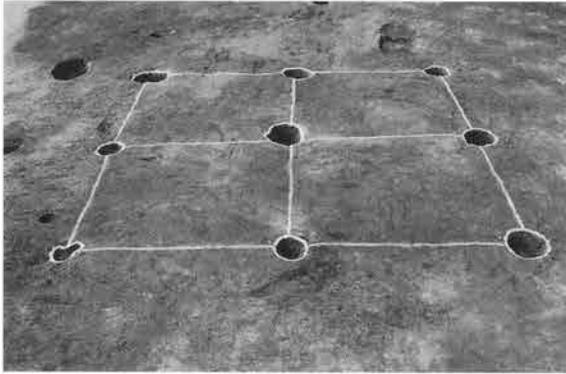
F-70号住居跡出土遺物



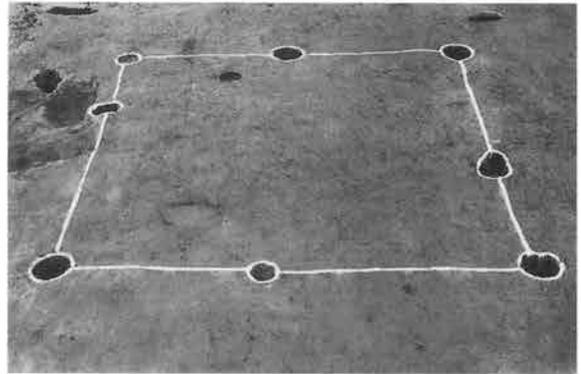
工境-6号住居跡出土遺物



工境-13号住居跡出土遺物



A1-1号掘立柱建物跡 (南から)



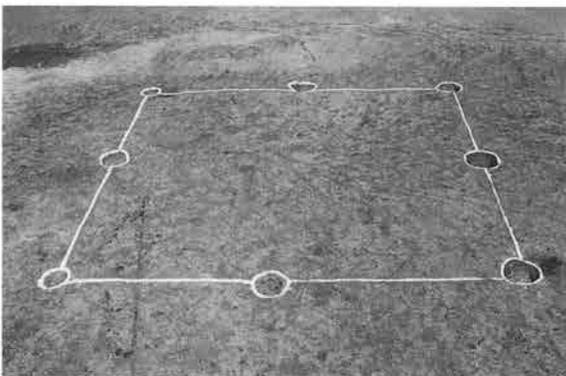
A1-2号掘立柱建物跡 (南から)



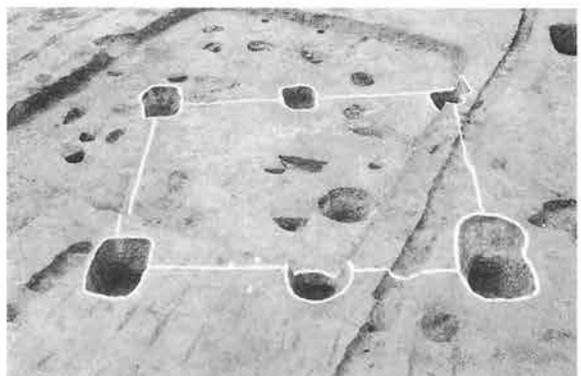
A1-3号掘立柱建物跡 (南から)



A1-4号掘立柱建物跡 (北から)



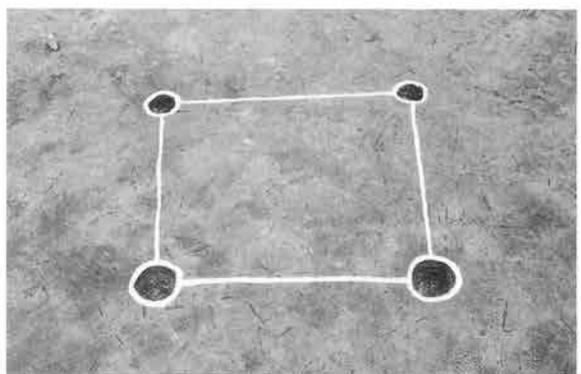
A3-7号掘立柱建物跡 (北から)



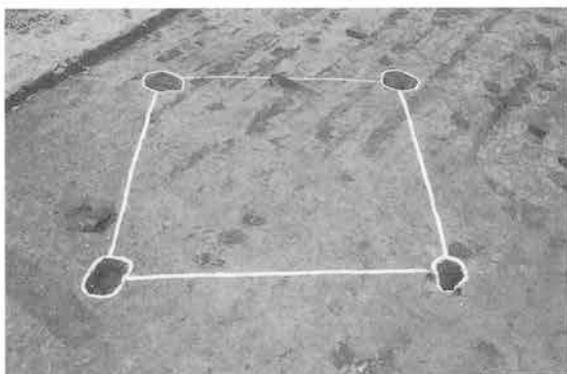
D3-2号掘立柱建物跡 (南から)



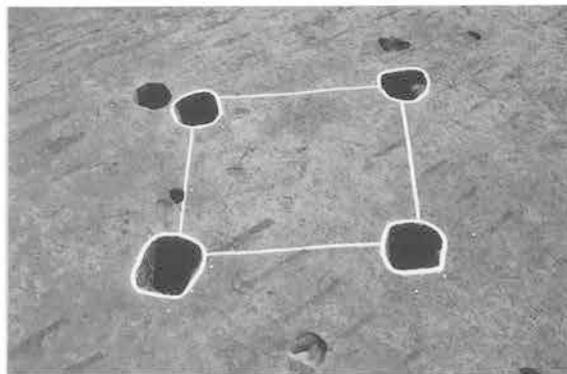
D3-3号掘立柱建物跡 (西から)



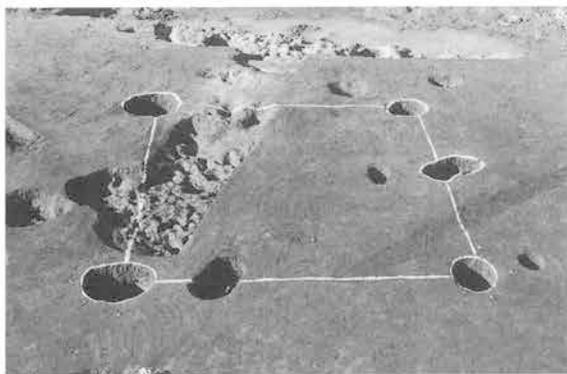
D3-4号掘立柱建物跡 (西から)



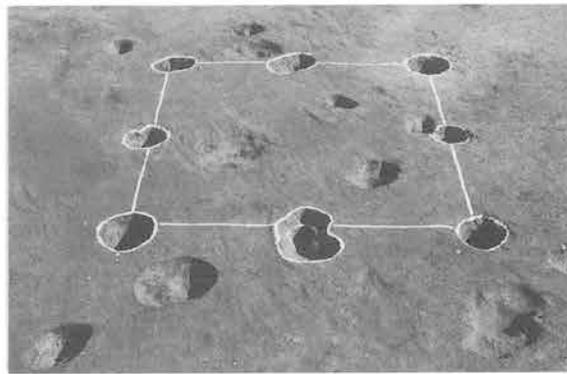
D3-5号掘立柱建物跡 (南から)



D3-6号掘立柱建物跡 (北から)



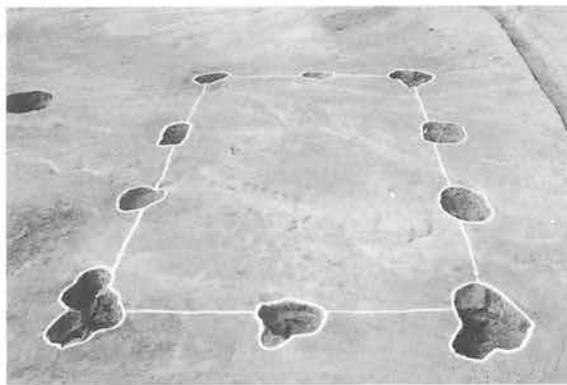
D3-7号掘立柱建物跡 (南から)



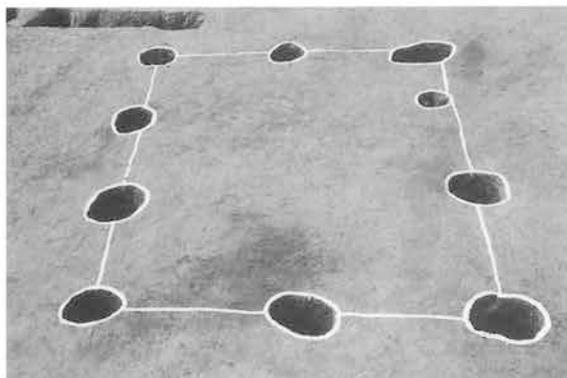
D3-8号掘立柱建物跡 (西から)



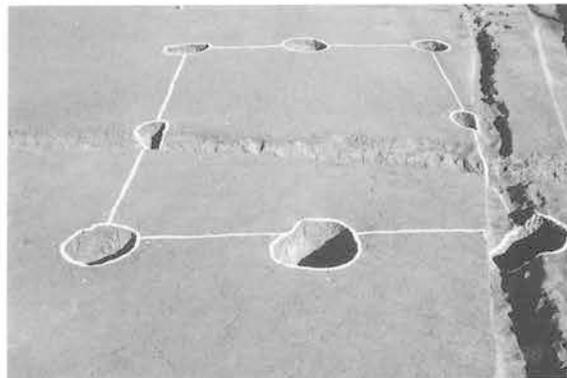
D3-11号掘立柱建物跡 (西から)



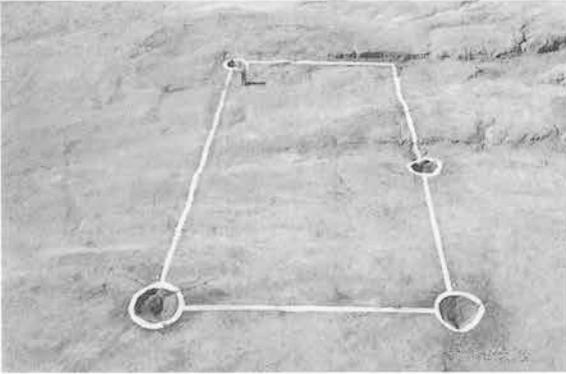
E2-1号掘立柱建物跡 (東から)



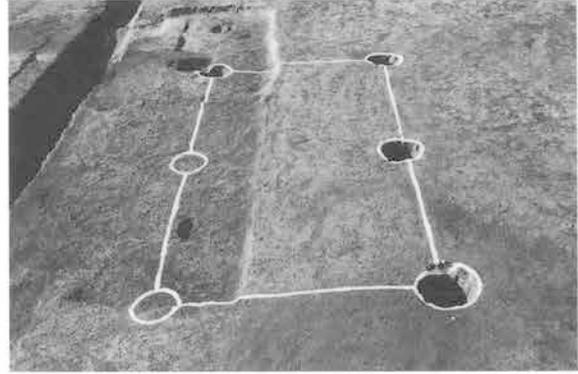
E2-2号掘立柱建物跡 (東から)



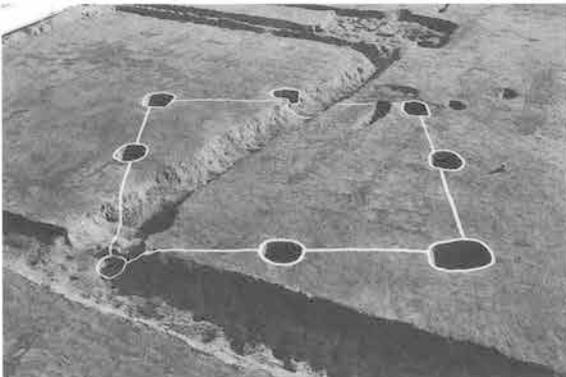
E2-4号掘立柱建物跡 (南から)



E2-5号掘立柱建物跡（東から）



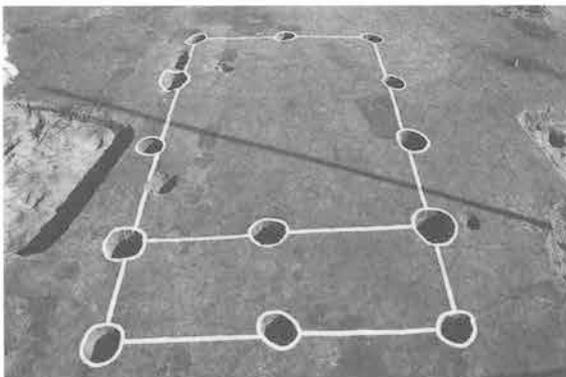
E2-6号掘立柱建物跡（東から）



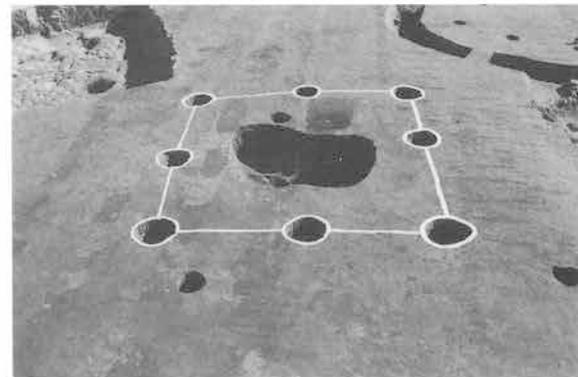
E2-9号掘立柱建物跡（西から）



E3-6号掘立柱建物跡（西から）



E3-7号掘立柱建物跡（西から）



E3-8号掘立柱建物跡（西から）



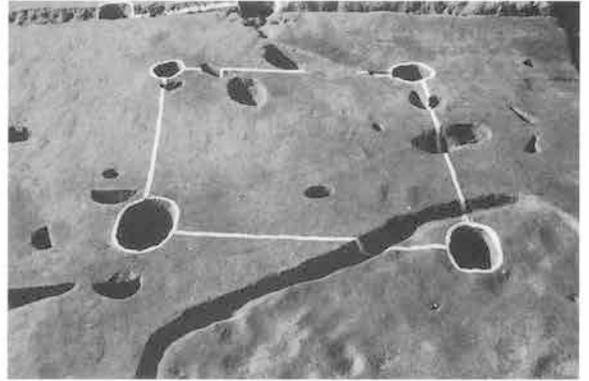
F-1号掘立柱建物跡（北から）



F-2号掘立柱建物跡（東から）



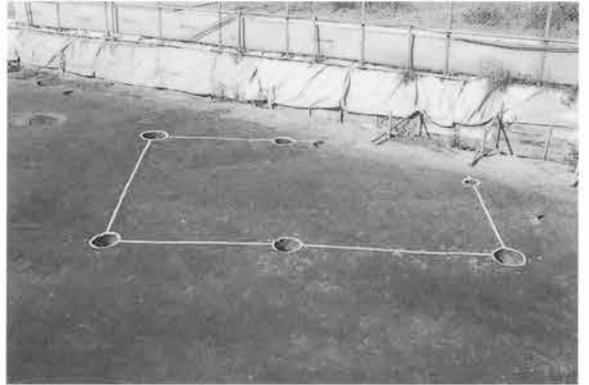
F-3号掘立柱建物跡（東から）



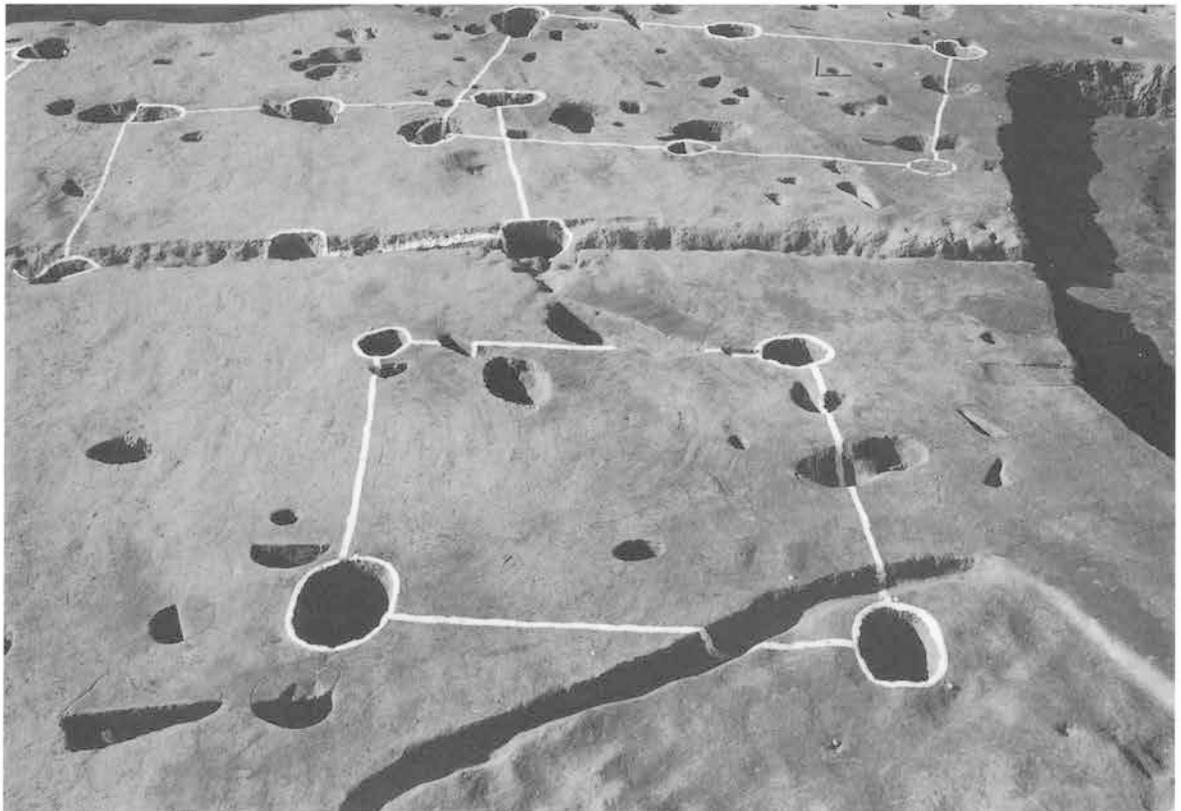
F-4号掘立柱建物跡（東から）



F-5号掘立柱建物跡（北西から）



G-1号掘立柱建物跡（南から）



F区掘立柱建物跡群（東から）



2号井戸跡 (東から)



3号井戸跡 (東から)



4号井戸跡 (東から)



4号井戸跡土層断面 (東から)



5号井戸跡 (北から)



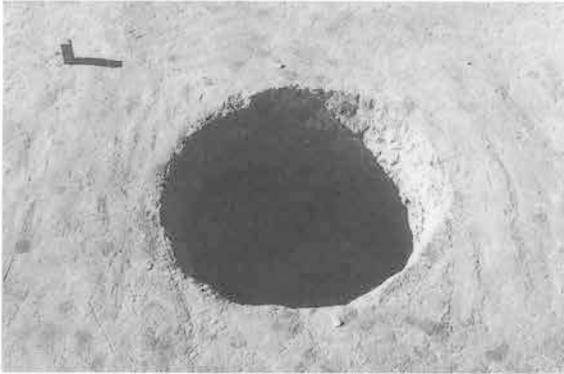
6号井戸跡 (西から)



7号井戸跡 (西から)



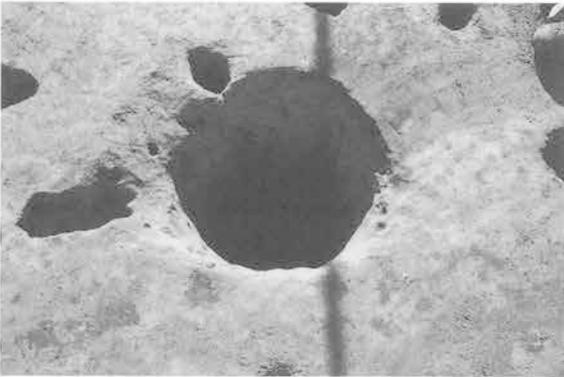
8号井戸跡 (南から)



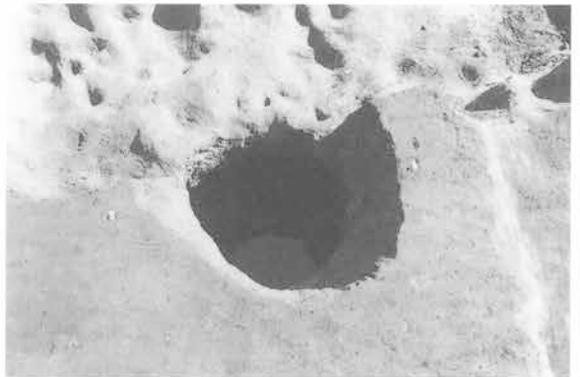
9号井戸跡 (東から)



10号井戸跡 (東から)



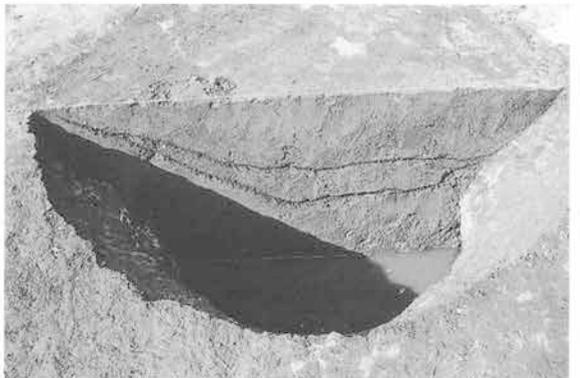
11号井戸跡 (北東から)



12号井戸跡 (西から)



13号井戸跡 (東から)



13号井戸跡土層断面 (南から)



14号井戸跡 (南から)



15号井戸跡 (南から)



16号井戸跡 (南から)



17号井戸跡 (東から)



18号井戸跡 (南から)



19号井戸跡 (東から)



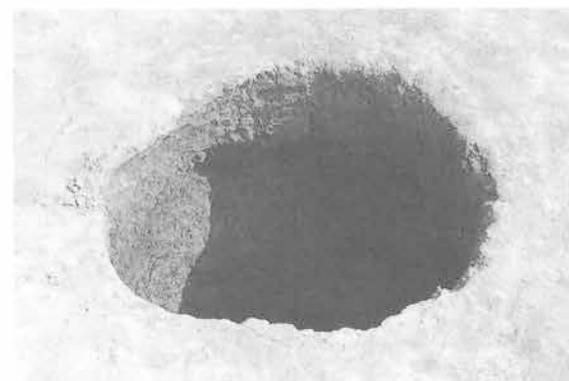
20号井戸跡 (西から)



21号井戸跡 (東から)



22号井戸跡 (東から)



23号井戸跡 (西から)



24号井戸跡 (西から)



24号井戸跡土層断面 (南から)



25 a号井戸跡 (西から)



25 b号井戸跡 (南から)



26号井戸跡 (西から)



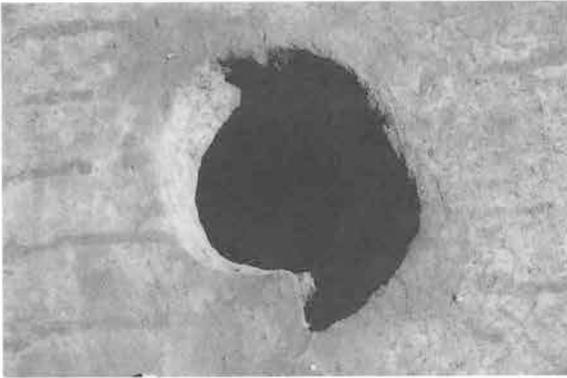
27号井戸跡 (東から)



28号井戸跡 (東から)



29 a号井戸跡 (西から)



30号井戸跡 (西から)



31号井戸跡 (南から)



32号井戸跡 (南から)



32号井戸跡土層断面 (南から)



33号井戸跡 (南から)



34号井戸跡 (南から)



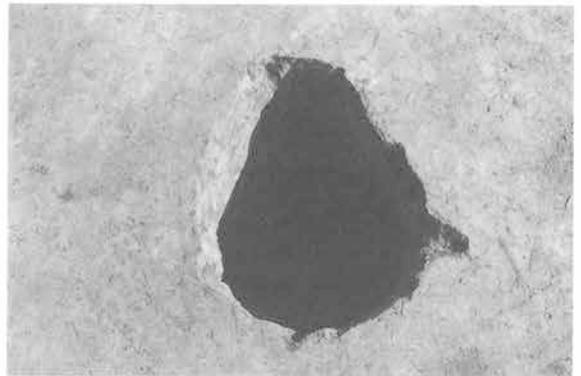
35号井戸跡 (東から)



36号井戸跡 (北から)



37号井戸跡 (西から)



38 a号井戸跡 (西から)



38 b号井戸跡 (西から)



41号井戸跡 (西から)



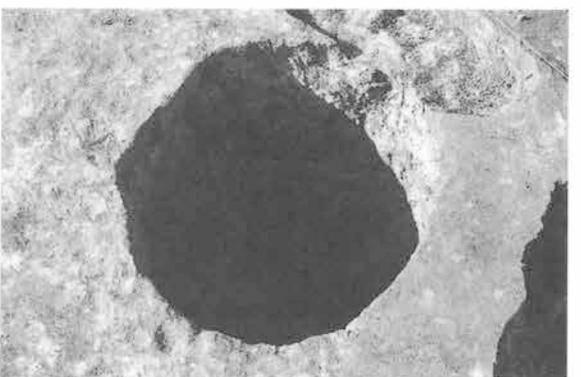
42号井戸跡 (東から)



43号井戸跡 (西から)



44号井戸跡 (北東から)



45号井戸跡 (北東から)



47号井戸跡遺物出土状況（西から）



47号井戸跡（北から）



48号井戸跡（北から）



49号井戸跡断割り（1）（北から）



49号井戸跡断割り（2）（北から）



49号井戸跡石組崩落状況（東から）



49号井戸跡石組（北から）



49号井戸跡掘形（南から）



1号地下式土坑 (東から)



2号地下式土坑 (西から)



1号土壙墓 (西から)



1号土壙墓遺物出土状況 (南から)



2号土壙墓 (西から)



3号土壙墓 (東から)



4号土壙墓 (北から)



4号土壙墓遺物出土状況 (北から)



4号溝 (北から)



5号溝 (東から)



9号溝 (北から)



12号溝 (南から)



16号溝 (北から)



13号溝 (東から)



15号溝 (南から)



17号溝 (南から)



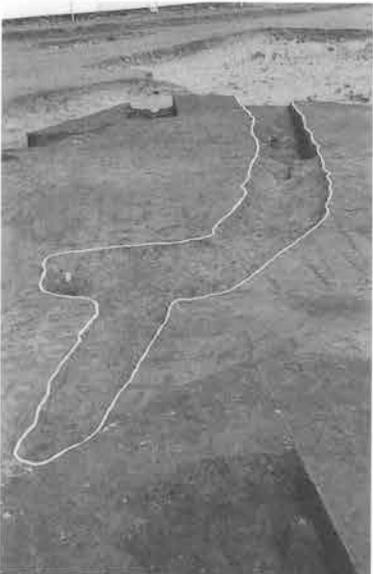
18号溝 (北から)



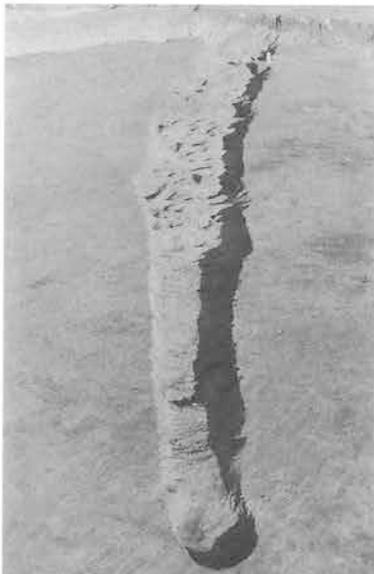
20・21号溝 (西から)



28・29号溝 (南から)



37号溝 (南から)



42号溝 (西から)



47号溝 (北から)



48号溝 (北から)



49号溝 (北から)



50号溝 (南から)



52号溝 (西から)



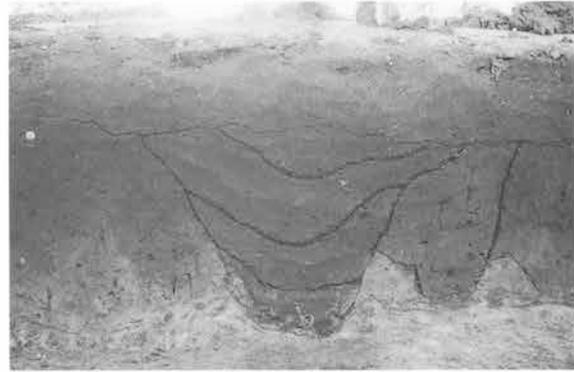
70号溝 (北から)



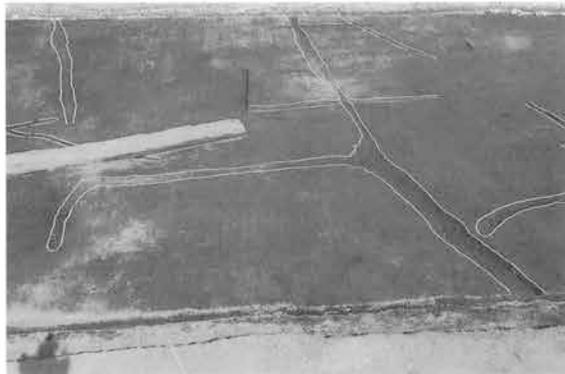
D3-2号溝 (南から)



D3-1・2・4号溝 (南から)



D3-1号溝土層断面 (東から)



D3-7・19・20号溝 (南から)



D3-2号溝土層断面 (東から)



D3-21・22・23・24・25・29号溝 (南から)



D3-4号溝土層断面 (南から)



D3-4号溝 (南から)



D3-18号溝 (北東から)



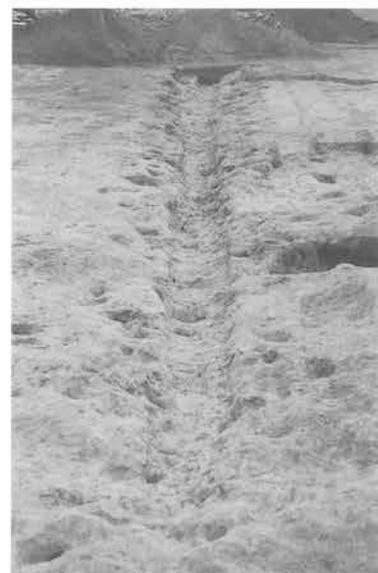
D3-20号溝 (東から)



F-13号溝 (南西から)



F-15号溝 (南から)



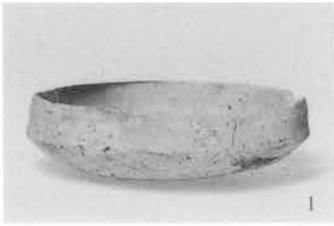
F-22号溝 (北から)



F-23号溝 (西から)



G-18号溝 (西から)



A3-7号掘立柱建物跡



E2-9号掘立柱建物跡



7号井戸跡



11号井戸跡



12号井戸跡

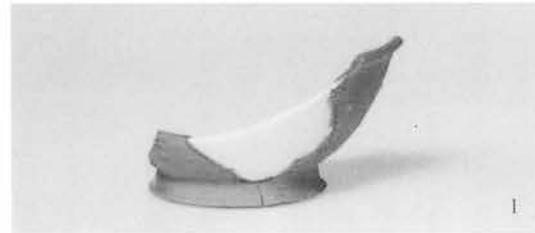


13号井戸跡

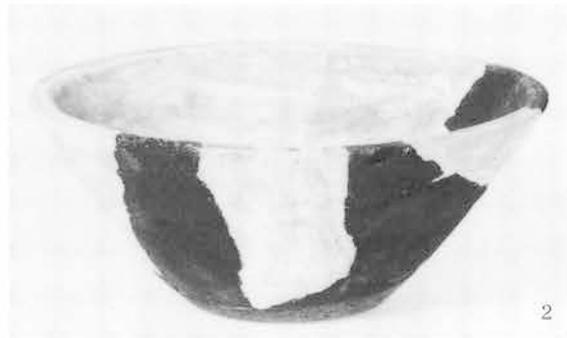


19号井戸跡

21号井戸跡



27号井戸跡



29a号井戸跡

掘立柱建物跡・井戸跡出土遺物

PL 110



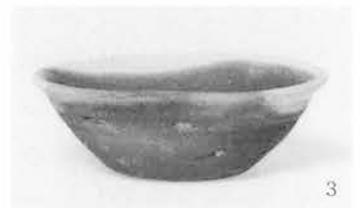
47号井戸跡



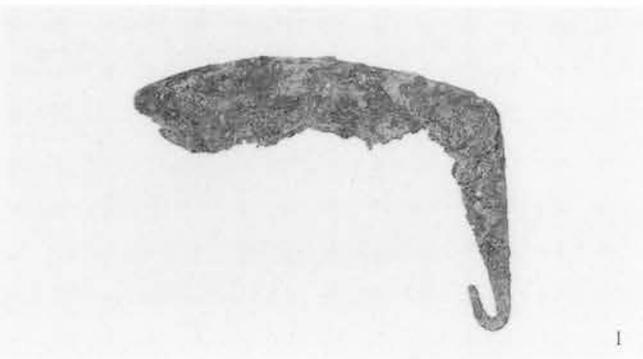
2号地下式土坑



1号墓



2号墓



3号墓



243号土坑

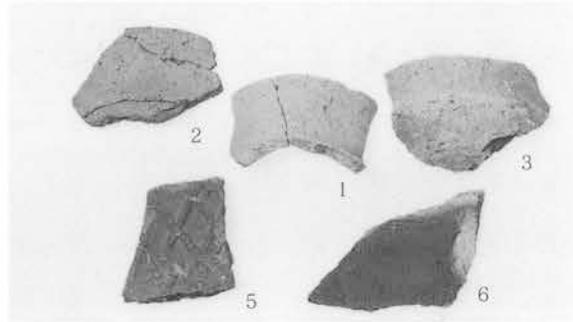
井戸跡・地下式土坑・土壙墓・土坑出土遺物



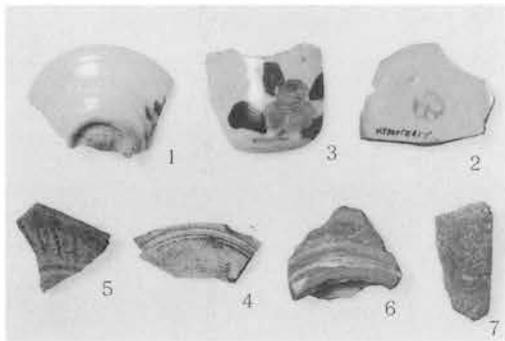
227号土坑



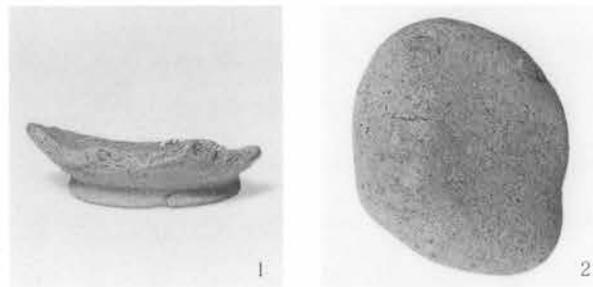
311号土坑



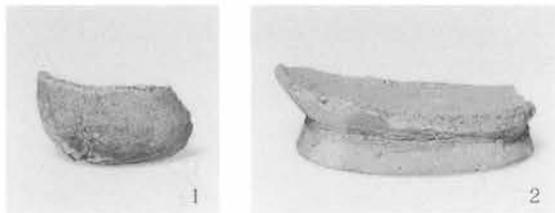
1号溝



4号溝



5号溝



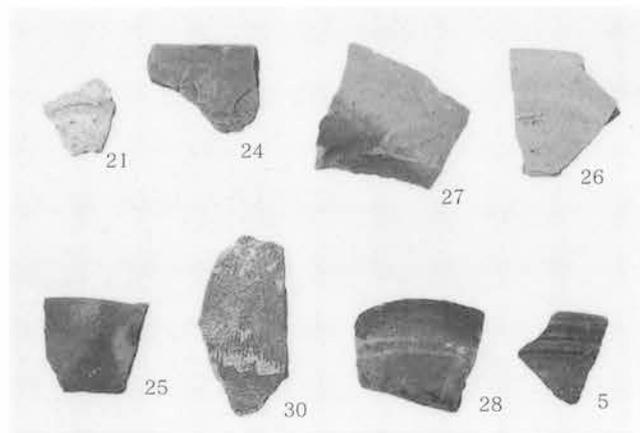
12号溝



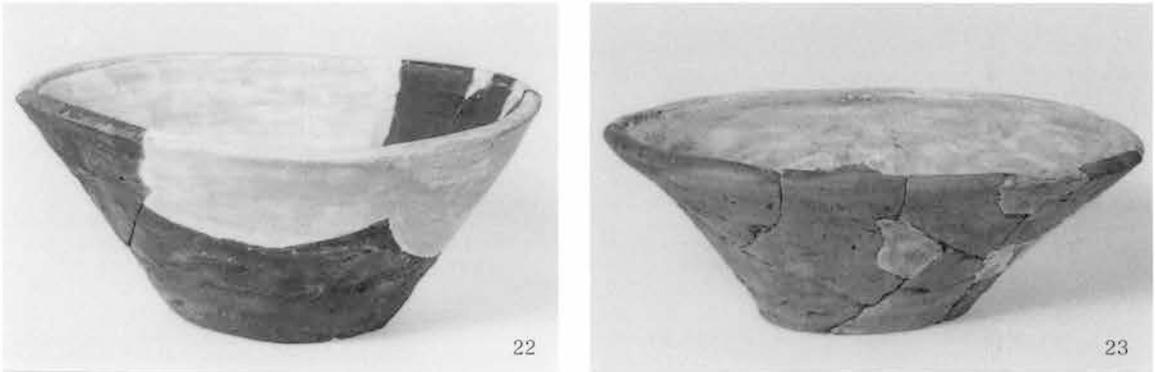
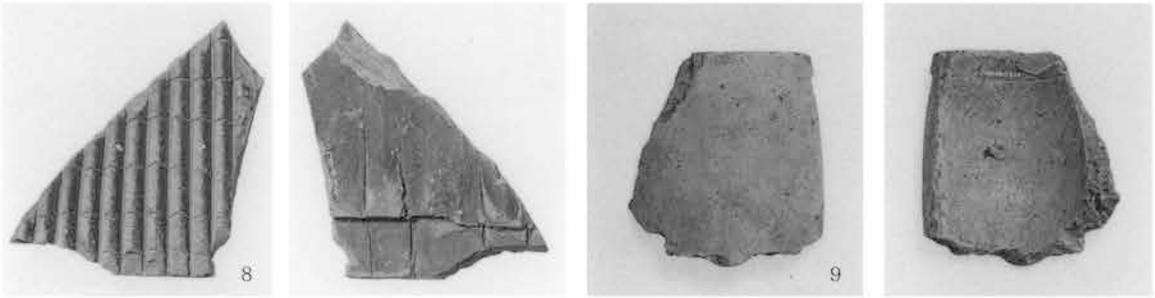
22号溝



27号溝 (1)



PL 112



27号溝 (2)



36号溝



40号溝



49号溝

溝出土遺物



2



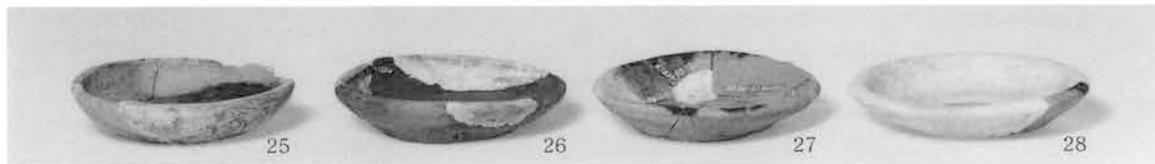
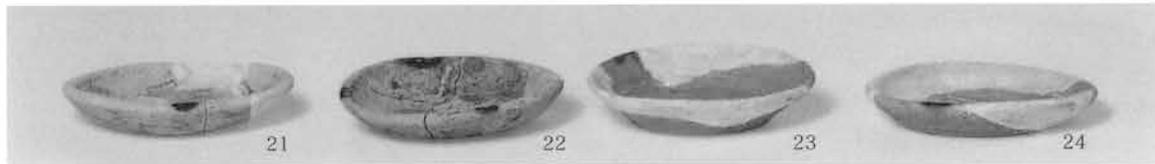
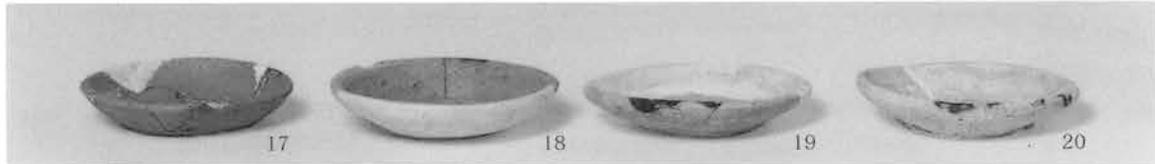
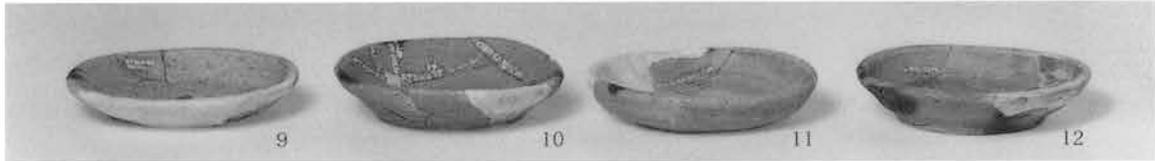
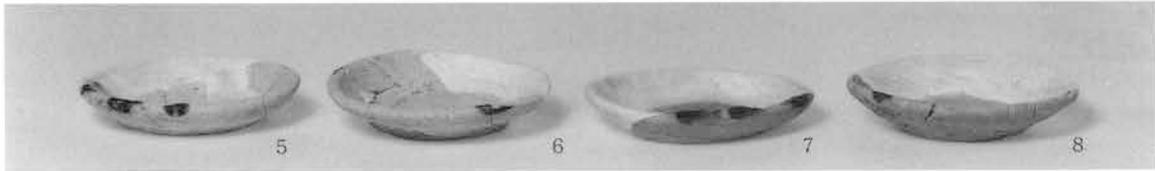
3



1

51号溝

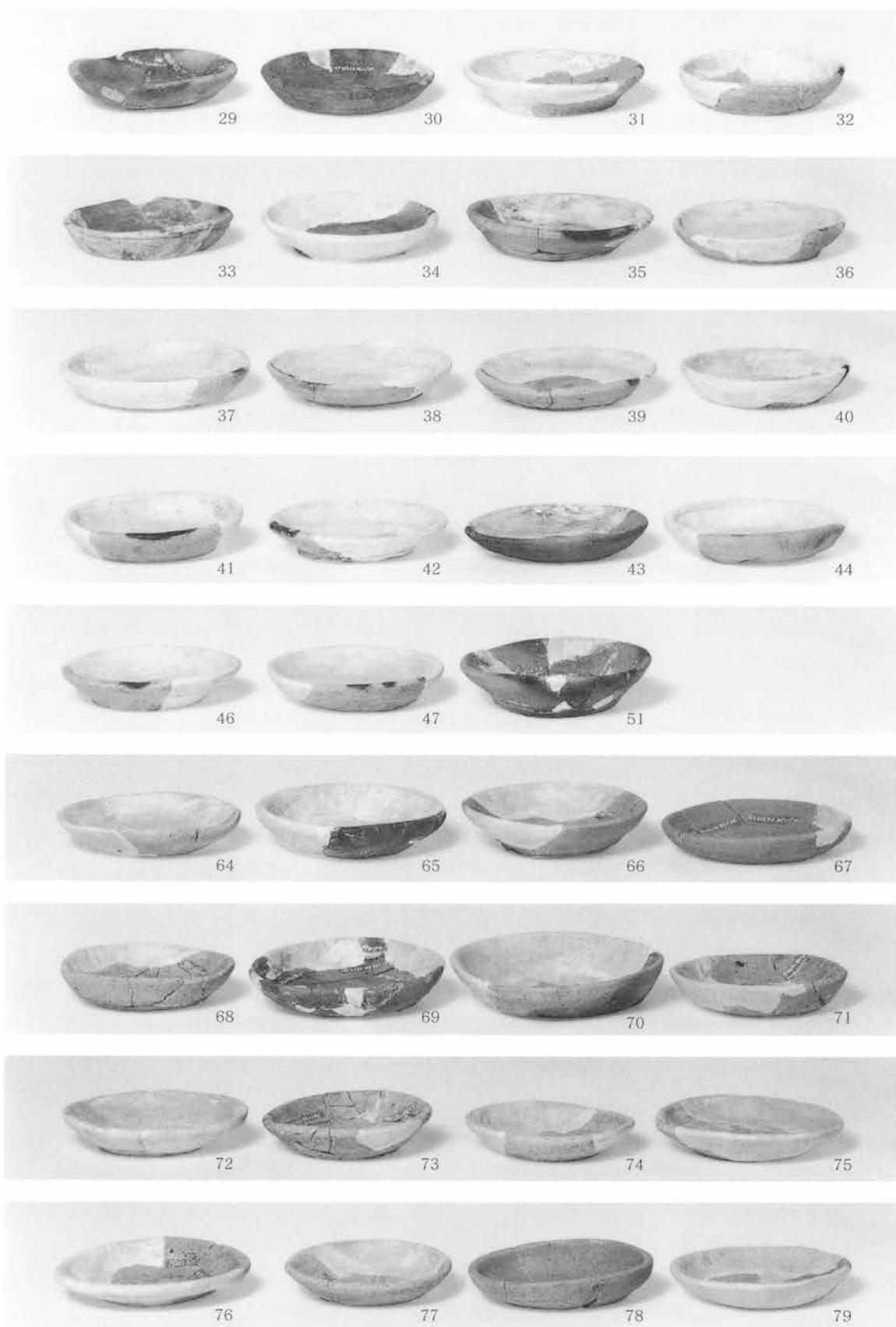
70号溝



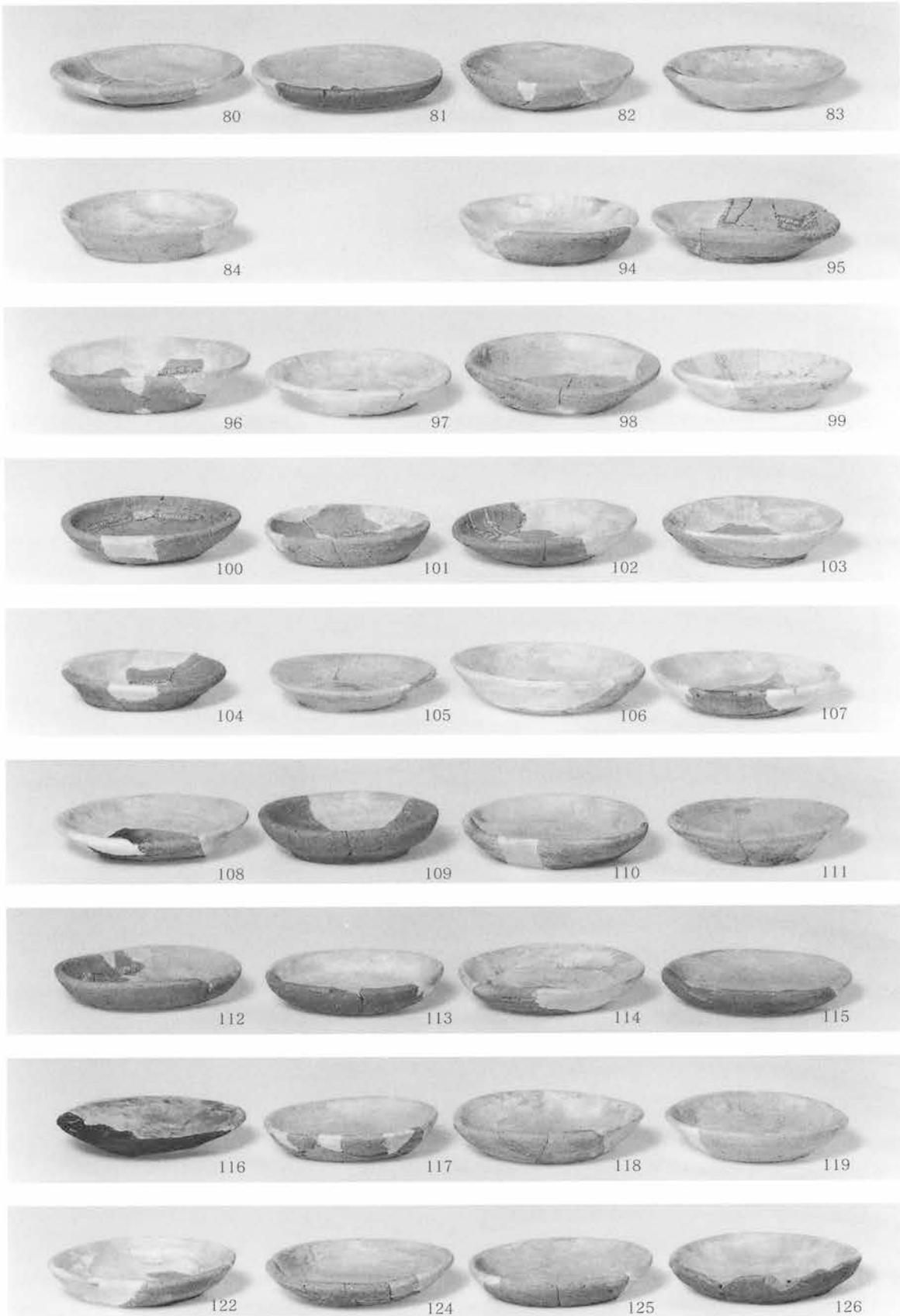
38号溝 (1)

溝出土遺物

PL114

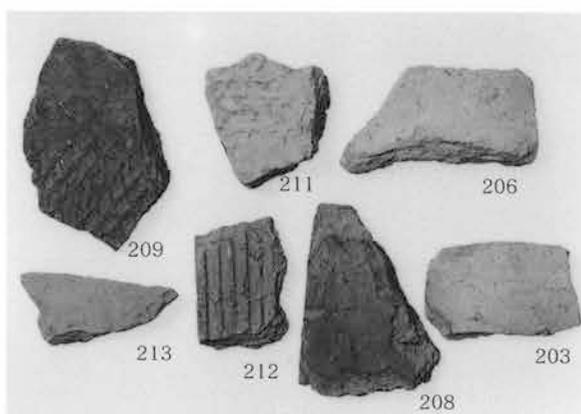
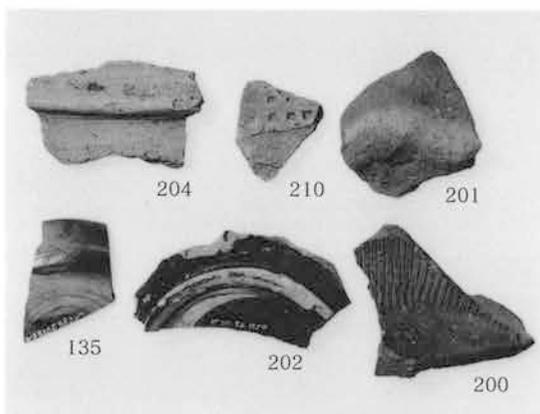


38号溝 出土遺物(2)



38号溝 出土遺物 (3)

PL116



38号溝出土遺物 (4)



谷地



その他

谷地・その他 出土遺物

群馬県埋蔵文化財調査事業団調査報告第282集

**舞台遺跡(1)** 北関東自動車道(高崎～伊勢崎)地域  
(奈良・平安時代他編) 埋蔵文化財発掘調査報告書第6集

---

平成13年3月19日 印刷  
平成13年3月26日 発行

編集／群馬県教育委員会  
〒371-0026 前橋市大手町1丁目1番1号  
電話 (027) 223-1111 (代表)

財団法人群馬県埋蔵文化財調査事業団  
〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511 (代表)

発行／群馬県考古資料普及会  
〒377-8555 勢多郡北橋村大字下箱田784番地の2  
電話 (0279) 52-2511 (代表)

印刷／朝日印刷工業株式会社

---



舞台遺跡全体図 (1/600)